
バカとテストと勤労少年

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと勤労少年

【NZコード】

N3785S

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の一次創作です。

2年前に事故で両親を亡くした少年『結城和真』。

その日から彼は人と一定の距離をとり生きています。そんな彼の心に歩み寄る女性は現れるんでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』にもリンクしています。

予稿題（前書き）

いつも、毎度おなじみのまあです。

書きかけのものをそのままに何本書くんだよ?
と言つシッコ!!は気にしない方向で行きましょ'う。

先日、活動報告に書いた部分はもう少し後での更新になります。

予習問題

2年前両親が事故で死んだ。

それまでは当たり前の幸せ（もの）が壊れた時、不思議と涙は出なかつた。

どうしてかは今でもわからない。

ただ、冷たく暗い病院の靈安室で2人の遺体を前に自分は1人なんだと思い知らされていた。

とうさんやかあさんの親戚は2人の死を悲しみ、1人になった俺を哀れんで泣いていた。

だけど、俺に手を伸ばす人は1人としていなかつた。

当然だ。不景氣な現代に親戚だからと言つても可哀想だからとは言え無駄な食いぶちを増やすような事をするようなモノ好きなんているわけはない。

推薦も決まっていた私立高校も両親が亡くなつたと言つ理由で推薦を取り消した。

学費を払えるかわからない生徒を推薦枠になんかもつたいないって事なんだと思う。

それまで、友達だと思っていた奴らもただ、俺を可哀想な人間とか見なくなつた。

そんなものを見て、たぶん、俺は絶望していたんだと思つ。

1人だけここに残されたと言う現実に……

でも、たった1人だけ手を伸ばしてくれた人がいた。

急いで駆け付けて来てくれたのだろう。いつもカツコよくビシッと
決めたスーツが乱れ、途中で転んだのか膝をすりむきながら、

「和くん、大丈夫？」

その場にいた誰よりも両親の死を悲しみ、涙を目に溢れさせながら
俺を抱きしめ、俺の事を気遣ってくれた。

その時、これまで抑えていたものが一気に溢れ出した。

オリキャラデータ

結城和真
ユウキカズマ

所属 2-C

性別 男

備考

中学3年の冬に両親を事故で亡くし、就職をしようと考えていたが従姉の『高橋洋子』の薦めで学費の安く洋子が勤務している文月学園に進学する事になる。現在は両親の残した家に洋子と2人暮らし、学年主任の洋子を補佐するために家事全般は1人でこなし、学園を終えるとバイト三昧と言う勤労少年。成績はそれなりだが、自分の置かれている立場を考えているため、他の生徒達より、学生と言つものを見下す目で見ている事も多い。自称『シスコン（従姉）』

第1問

「……姉さん、こつまで寝てるの？ 今日から新学期だから、朝からいろいろ準備があるって言つてなかつた？」

「……うーん？ う、うん、もうこんな時間ですか？」

『結城和真』は朝食の準備を終えると従姉であり、現在、自分の保護者代わりである『高橋洋子』の部屋をノックすると和真の声で洋子はよひやく田を見ましたようすで慌てている声が聞こえ、

「……姉さん、俺は下こいるからね。慌ててケガとかしないでよ」

「わ、わかりました。それに私はそこまで鈍くはありませんーー！」

和真はため息を吐くと部屋から聞こえる洋子の声を聞きながら、階段を下りて居間に戻る。

「おはよ。姉さん」

「和くん、おはようございます」

朝のやり取りから数十分後、洋子は先ほどの慌てた様子とはまるで違う、仕事先である文月学園に行くスースに着替えて居間に下りてくると和真と洋子は朝の挨拶を交わし、

「姉さん、学年主任になつて忙しいのはわかるけど、休める時はきちんと休みなよ。体を壊したら元も子もないんだからね」

「和くんに言われなくてもわかっています。それに姉さんは和くんに心配されるほど弱くないです」

和真是洋子の分のみそ汁を盛り、洋子が昨日の夜も遅くまで仕事をしていた事を注意すると洋子は苦笑いを浮かべながら無理はしないと言い、

「やうなら、良いんだけどわ」

和真是洋子の表情にくすりと笑つ。

「それで、和くん、今日から2年生になるわけですけど新しいクラスで、上手くやつてくださいよ。和くんは、学費とか気にしなくて良いんですから、バイトばかりではなくもう少し他の事にも目を向けるべきだと姉さんは思うんです。別にバイト自体をダメと言つているわけではありませんよ。早くから社会のルールに触れて自分を磨くと考えればそれは良い事なのかも知れませんが和くんは今は高校生なんですから、もう少し他にも比重を置いてください。またたく、和くんはやればAクラスにもなれるくらいの成績なんですから」

「ああ。姉さん、それは耳にタコだよ。俺はそんなに勉強が好きってわけじゃないし、就職希望なんだから、これで良いんだよ。それに何かの間違いでAクラスに入つたら、姉さんだって担任としてやりにくかつただろ」

「確かにそうかも知れませんけど、姉さんはおじさんとおばさんから和くんを預かったんですから言つ権利はあると思います」

洋子は和真に心配されているのが悔しいようで少し不満げに和真に言うが和真是いつもやっているやり取りのようで年の離れた従妹で

ある洋子の様子に苦笑いを浮かべながらも自分はあまり成績を重要視していないと言つと洋子はため息を吐き、

「ん？ 姉さん、 そろそろ、 時間じゃない？」

「そうですね。 この話は帰つてきてからこします」

「はいはい。俺は今田もバイトがあるからその後ね」

和真はこれ以上は洋子の小言には付き合えないと判断したようで洋子に時間だと言つと洋子はテーブルから立ち上がり、少し急いで玄関に向かおうとするが和真に話はまだ終わっていないと言つて居間を出て行き、和真はそんな洋子の様子を見て優しげな笑みを浮かべる。

第1問（後書き）

どうも、作者です。

まずは何から言ひべきでしょうか？

ひとまずは他をほつたらかしてゐるのに新作と言ひ謝罪？

謝罪は無駄ですね。基本的にやりたいことをやる自分勝手な人間なので。（爆笑）

一先ず、勤労少年の和真君です。

他とは違つてここに出してみよつかな？とかも思いますが彼もクールな子ですから、たぶん、相手をしてくれない。

Cクラスと言う設定的にも薄い状況で好き勝手やらうつかな？（悪笑）

第2問

(……忘れものって、時間通りに出た意味無いじゃないか。登校前に洗濯したかったんだけどな)

和真は家で登校時間までの時間があるため、ゆっくりと家事をしようと思っていたのだが、洋子から『重要な書類を忘れたから持ってきてほしい』と言つ電話があり、普段登校する時間より早く文月学園に向かい歩いていると、

「おはよう。結城、びっくりした？　ずいぶんと早いじゃないか？」

「おはよう。西村先生」

校門の前で生活指導をしてくる『西村宗一』教諭に声をかけられ、和真は頭を下げ、

「姉さ……高橋先生が家に書類を忘れて届けにきました」

「そりが。しかし、書類を忘れるなんて高橋先生にしては珍しい事だな」

「まあ、学年主任になつて仕事も増えているみたいで昨日も夜遅くまで何かやつていたみたいですから」

苦笑いを浮かべながら早く登校した理由を話すと西村教諭は驚いたような表情をするが和真は洋子が昨日の夜も遅くまで仕事をしていた事を話し、洋子を責めないと頭を下げる。

「別に責めるような事はせん。高橋先生にかかる負担も多い事は俺も知っているからな。俺も手伝えれば良いんだが、結城も知つていい通り、ウチには『バカ』がいるからな。俺はそれに対応しないといけないからな」

「……俺達の学年もFクラスは大変なんでしょうね。言い方は悪いんですけど、バカを集めるから絶対に問題が起きますよ」

「……そだらうな。特に今年のクラスは吉井と坂本の問題児の2枚看板がFクラスにいるからな。担任の福原先生も大変そうだ」

「えーと、確か、ふみつきがくえんのはい観察処分者と悪鬼羅刹」

西村教諭は和真に洋子の手助けができる事を申し訳なさそうに謝ると和真は洋子からFクラスの酷さは聞かされていたようでため息を吐くと西村教諭は必ず問題を起こすであろう問題児の『吉井明久』と『坂本雄一』の名前を出してため息を吐き、和真は直接、2人と関わった事がないようで苦笑いを浮かべるが、

「すいません。これ、届けないといけないんで、これで失礼します

「ん？ 待て。結城、お前にもこれを渡さないといけないんだ。立ち話をしていくつかり忘れてしまった。わるかつたな」

洋子に書類を渡すために早く登校してきた事を思い出し西村教諭に頭を下げるに西村教諭は慌てて和真を呼び止めて封筒を渡すが、

「俺、姉さんからクラスを聞いてるんが必要ないですよ」

「そりなんだが、一応はルールだからな。お前はCクラスだから間

違えないで行くんだぞ」

「はい。西村先生も生徒に封筒を渡すのにずっと立つてないといけないですから風邪に気を付けてくださいね」

和真はすでに洋子からすでに自分がどのクラスに振り分けられるか知っているため、封筒を渡される意味がわからずには首を傾げる西村教諭は苦笑いを浮かべてルールだと言うと和真はその封筒を受け取り校舎のなかに入つて行き、

「……あのバカどもも結城くらい状況を理解してくれると助かるんだがな」

自分の事を気遣つて言つた和真の背中を見送り、西村教諭はため息を吐く。

第2問（後書き）

どうも、作者です。

和真「作者さん、この話ってこれで良いの？ 原作メンバーと関わ
れる気がしないんだけど」

まあ、最初は仕方ないですよ。Cクラスだし、かかわってくるとし
たらF対Bが始まつた辺りですね。まあ、Fクラス以外とは人間関
係を見せて行こうと思つてます。

一先ずは、洋子先生の従弟として職員室に潜入です。

和真「遠藤先生とか竹内先生とか姉さんとかうちの教師陣も美人ぞ
ろいだよね」

中には例外もいますから、気をつけてくださいね。

和真「……船越先生ね」

第3問

「失礼します。2年Cクラス、結城です」

和真は職員室のドアをノックした後、所属クラスと名前を名乗り職員室に入るが、

(あれ？ 姉さんがいないな？ トイレかな？)

洋子の机を見るが彼女はそこにほいなく、首を傾げると、

「おはよひびきやれこます。結城君」

「福原先生、おはよひびきります」

先ほど西村教諭との話に出ていた2年Fクラスの担任である『福原慎』教諭が和真に挨拶をし、和真は頭を下げる。

「高橋先生なら、5分くらい前に学園長室に呼ばれましたよ

「そりなんですか？ 困ったな。西村先生と話をしなければ会えたか

「急ぎの用件ですか？」

福原教諭は和真が洋子を探していると思ったようで洋子が学園長室に言った事を教えてくれるが、流石に1生徒の和真が学園長室に乗り込むわけにはいかないため、ため息を吐くと福原教諭は和真に洋子の用件は急ぎかと聞くと、

「えーと、高橋先生が家に忘れた書類とお弁当を持ってきたんですね
けど、書類は重要なものと言っていたので」

「それなら、私が学園長室まで届けましょうか?」

「お願いできますか?」

「はい」

「よろしくお願ひします」

和真は職員室を訪れた理由を隠す事なく答え、福原教諭は洋子に頼まれた書類を預かつてくれると言い、和真は福原教諭に頭を下げる。
「いえいえ、気にしないでください……それと、できれば早く退散したほうがあなたのためですよ」

「……そうですね。ここは危険そうですね」

福原教諭は笑顔でこれくらいの事は当然だと言つと和真に向けられている婚期を逃し単位を盾に男子生徒に迫つて居ると言つて居るある『船越』教諭から逃げるように耳打ちをすると和真は苦笑いを浮かべて頷く。

「後、これ、昨日、バイト先で作ったクッキーなんですが、先生方でお茶受けにでもして貰いたい」

「わかりました。いつもありがとうございます」

和真は福原教諭に書類とバイト先で作ったあまりものをクッキーを手渡し、洋子の弁当を彼女の机に置くと職員室を出て行き、

『ふ、船越先生！？ 落ち着いてください！？ 結城君は高橋先生の弟さんです！！』

『今時、あんな良い子はいないんです。未来のある若人に手を出そうとしないでください！！』

『……そんな話は聞いてられないのよ。私だつて、私だつて、結婚をしたいのよ！！』

『誰か西村先生を呼んで来てくれ！！ それでもしないと止まらない！！』

職員室の中からは和真を狙う船越先生（ハンター）を力づくで押さえつける教師達の声が響き渡り、

（……早く、逃げよつ。ここは危険だ）

和真は全力で職員室から離れて行く。

「あれ？ 結城君、ずいぶんと早くない？」

「ん？ 中林か？ ……ジャージか。つまんないな。ここはサービスカットだろ」

和真は職員室から逃げるよう自分教室に向かっているとソフトテニス部に所属している去年のクラスメートの『中林宏美』が声をかけてくるが和真は宏美の姿を見てため息を吐き、

「……あつてすぐの挨拶がそれ？」

「仕方ないだろ。俺は健全な男だからな。中林のスコート姿やその時に見える生足は見たいぞ」

宏美は和真の様子にため息を吐くが、和真は男なら当然だと言い切る。

第3問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

和真、船越女史に目を付けられる。

和真「……職員室に行くと聞いた時から絶対にやられるとは思ったけどね。俺は熟女趣味はないからね」

洋子との関係もあるため、和真は教師陣には当たり障りないというか成績は中の中だけビ模範的な生徒と言つた感じです。

和真「教師陣に敵を作る理由つてないだろ。それに俺の態度が悪いと姉さんに迷惑がかかるからね」

そうですね。そして、職員室を脱出したところで宏美と出会う。現在、考へているヒロイン候補は『小山友香』、『中林宏美』の2人。『高橋洋子』先生はいろいろとまずいかな?と感じがありますし、和真にとつても洋子にとつてもお互いは家族なんだと思います。

和真「まあね。俺は姉さんが大切だけど、これは恋愛感情じゃないと思うな。どちらかと言えば、俺は高校卒業したら就職する予定だから、早いところ良い人を見つけてほしいと思ってる」

だそうです。

第4問

「……結城君、あなた、もう少し言葉を選べないの」

「口に出さないで犯罪に走つたり、クール面して、女に興味示さないって顔してるよりはずっと健全だと思つけどね。それで、中林は朝練か？ 朝から」苦労なこつた

宏美は和真の言葉にため息を吐くが和真是宏美が朝から部活に取り組んでいるのが信じられないようで苦笑いを浮かべながら言つと、

「良いでしょ。私は身体を動かすのが好きなんだから、そう言つ結城君はこんな時間から何をしてるの？ 遅刻はした事ないけど、いつもはもう少し遅いわよね？」

「ああ。姉さんの忘れものを届けに職員室に行つてきた帰りだ」

「高橋先生が忘れもの？ 珍しい事もあるのね」

宏美は運動部にも入つていない和真が早い時間から学園にきている理由を聞き、和真是洋子の忘れものを持つてきたと言うと宏美は学園では知的で落ち着いたイメージの洋子が忘れものをした事が信じられないようで驚いたような表情をするが、

「姉さんだつて人間だからな。忘れものくらいするさ……さてと、これ以上、話し込んで中林の邪魔をしてもなんだから、教室ででも寝てるかな」

「あつ！？ そう言えば、結城君はどのクラス？」

「ああ。言つてなかつたな。○クラス、相変わらず、可もなく不可もなくだ」

「○クラス？」

和真は忘れものくらいい誰でもすると言ひ、教室に戻ろつとすると宏美は和真を引き留めて彼の所属するクラスを聞き、和真は自分のクラスを○だと言つと宏美は怪訝そうな表情をする。

「どうかしたか？」

「結城君なら△は無理でも□くらうには行けたんじやない？」

「……お前も俺を過大評価するのかよ」

「お前も？」

「……姉さんにも言われたよ。眞面目にやれば△には行けたつてな

和真は宏美の表情に何かあったのかと思い、宏美に聞くと宏美は和真ならもつと上のクラスになれたと言い、和真は今朝、洋子にも同じような事を言われたせいかため息を吐くと、

「俺はそこまで優秀じゃないしな。だいたい、就職希望なんだ。成績をあげるお勉強をするよりはもつと他に役に立つ資格を勉強するよ」

「やつ言つて○。無駄に冷めてるわよね」

「仕方ないだろ。成績が良くてそんなもんは何の役に立たない事は経験済みなんでね。それなら、先もわからず無意味なお勉強をするよりは自分の手に残る資格もを取った方が効率も良いだろ」

「まあ、私も部活ばかりやつてるから、結城君の事は言えないか」

自分は勉強するなら自分で必要なものを探すと言い、そんな和真の様子に宏美はため息を吐くが直ぐに部活ばかりしている自分は和真の事を責められないと笑う。

「ん？ そうだ。中林は何クラスになつたんだ？ 部活ばかりしてたしFか？」

「そんなわけないでしょ！！ 失礼ない事を言わないでよ。私はEクラス。しかも代表よ」

和真は宏美の所属クラスを聞くと彼女はEクラスの代表になつたと言つと、

「……いや、Eクラスの代表じゃ、そんな強気に出れないだろ」

「へへー？」

和真は宏美の言葉に苦笑いを浮かべると宏美はバツが悪そうな表情をするが、

「まあ、頑張れ。お前は頭に血が昇りやすいけど、人をまとめる代表の資質はあると思うよ。一人で突っ走らずにクラスの奴らの話も聞けよ」

「わ、わかってるわよ」

和真は宏美の様子にくすりと笑い、彼女を激励すると宏美は和真の顔を直視できないようで和真から視線を逸らし、

「じゃあな。代表様」

「……ええ」

和真は宏美の様子など気にする事なく教室に向かって歩いて行く。

第4問（後書き）

「いつも、作者と

和真「主人公です」

今回は宏美との会話でした。前回、和真のヒロインは宏美か友香と言つ話をしましたが、どうにしよう?

和真「盛り上がってるけど、今のところは恋愛する気はないんだけど」「和真がそんなことを言つてもそつならないのが一次創作のお約束ですからね。

両方とも頭に血が昇りやすいタイプですし、冷静な和真が手綱を握れるのか引きずられていいくのかも見所ですかね?

和真「……いや、だから、俺の話も聞いてくれ」

2人がいやなら『船越先生』に?

和真「待つてくれ!？」

「冗談です。友香はあづまさんがやつてるし、宏美の方が新鮮かな?とか思いながらもう少し書いていきましょう。ヒロインはそのうちアンケートでもしましょう。」

和真「……やめる。これは船越先生の流れになる」

大丈夫ですよ。項目には入れませんから。(悪笑)

第5問

(……Cクラスでこれなら、BやAは凄いんだろうな。席は後ろだ
な。）（いつ言つ時は自分の名字に感謝だな）

和真はCクラスの教室に着いて設備を見ると一年時に使っていた教
室よりはかなり良い設備であり、自分の席に腰を下ろすと、

（寝よ）

欠伸をしてから机に突っ伏して眠りに付く。

『おい。起きるよ。自己紹介、お前の番だぞ』

「ん？ あ、さんきゅ」

和真が寝ているとすでに登校時間も過ぎ、HRが始まり、和真を起
こす声が聞こえ和真是欠伸をすると、

「結城和真です。得意教科も不得意教科も特にないです。特技は家
事全般。後は……」

「和、何か面白い事やれ」

「そうだ。何かボケる」

「…………うるせえぞ。トオル、へーた。俺はお前らと違つて笑いに生
きてないんだよ」

簡単な自己紹介をした時、去年のクラスメートである『黒崎トオル』と『遠山平太』が和真に何か面白い事をしろと言つが和真是ため息を吐き、

「他はAクラス担任の高橋先生は従姉になりますが、頭の出来は悪いので期待しないでください」

試合戦争はあまりやる気がないと暗に言つと席に座る。

「カズ、今年も同じクラスだね」

「ああ、今年もよろしくな。山下」

和真は同じクラスに知り合いがないかと周りを見ようとすると隣から『山下清美』が和真の手を突き、和真は挨拶をし、

「他に野口も同じクラスよ」

「……一心もいるのかよ。代りばえしないな

清美は他にも『野口一心』と言う友人がいると言つと一心は和真と清美に手を振つており、和真はため息を吐く。

「そうかも、ここに居ないのって宏美だけ？ まったく、部活ばかりしてるから」

「中林なら、Eクラスの代表だぞ」

「Eまで落ちてるの？ まったく、だから、あれほど勉強しろって言つたのに

清美は宏美がどこのクラスにいるかと首を傾げると和真は宏美がEクラスの代表だと言つと清美はため息を吐き、

「まあ、力ズがいるなら、Aは無理でもBの設備は取れるよね。いつ、仕掛ける気?」

「……俺は仕掛ける気はないって、俺は就職希望なの。これくらいの設備で十分」

「やる気ないね。そんな事を言つてると洋子先生が悲しむよ」

和真が居れば試合戦争を勝ちに行くことも可能だと言つが和真はやる気もなく、清美は苦笑いを浮かべながら洋子が悲しむと言つが、

「姉さんは姉さん、俺は俺、過大評価はいません」

和真はため息を吐き、自分にはそこまでの頭はないと言こときつた時、

「私が代表の『小山友香』よ」

「……あれがこのクラスの代表か? 気が強そうだな」

教壇の上にこのクラスの代表である『小山友香』が立ち、自己紹介とともにクラスの方針を話し始めるが、和真は興味がないため欠伸をすると、

「小山さんが代表か? あの入って頭に血が昇りやすいつて話よね」

「代表の器ではなさそうだな」

清美は友香の事を聞いた事があるようで和真を突きながら言つと和
真は興味無さそうに言い、

「それも噂なんだけれど、あの『根本恭一』と付き合つてゐるって話よ
根本？ ああ、あの小者。可愛いのに男の趣味は最悪か。持つた
いねえ」

清美は友香の彼氏が『根本恭一』だと話すと和真は恭一にあまり良
い印象がないようで友香を哀れむような視線を送る。

第5問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

今回はクラスメートとの会話？一応、Cクラスで友香以外の名前のある人間の友人として使わせて貰いました。

和真「適當だな」

仕方ないですよ。明久達Fクラスが中心の話なんですから他のクラスにスポットライトが当たるのなんて稀です。

和真「まあ、あまり無茶はするなよ」

そうですね。和真はCクラスですが洋子や博美、清美が言うようにAクラスになれる資質はありましたが本人が高校の勉強を必要としていないため、成績は普通です。

和真「得意教科くらいは決めてないのか？」

そうですね。Cクラスだから可もなく、不可もなくで良いかな？でも主人公だから『最強の槍』はいるかな？とも思いますが家庭科は深秋がいるから他の教科にしたいんですけど実用的で考えると、英語はそれなりに良いのかな？あとは洋子の得意教科の物理？

和真「得意教科にするならその3教科だな。まあ、腕輪とかもそのうち考えるんだろう？」

そうですね。主人公だし、腕輪の1つくらいは考えます。まだ、召喚獣の武器も決まってないんですけどね。

第6問

「……ん？ 清水、お前はロクラスか？」

「げつ！？ 結城」

和真はトイレに行つた帰りに廊下でバイト先の『ラ・ペディス』と店長の1人娘の『清水美春』を見つけると美春は和真の顔を見るなり威嚇し、

「……睨むなよ。俺はお前に睨まれる筋合いはない」

「あなたは美春の敵です。あの男の手先が！！」

「あの男って、お前の実の父親だらうが」

和真はため息を吐きながら威嚇するなと言うが美春は威嚇を止める気はなく、和真を怒鳴りつけ、和真は美春の様子に肩を落とす。

「美春はあんな男を父親なんて認めない」

「いや、誰がどう見たってお前と店長は血の繋がった親娘だろ。まさに今、俺はそれを実感している」

美春は和真を威嚇したまま、父親との繋がりを否定するが和真はそれを聞いてため息を吐くと、

「悪いな。そろそろ。俺は戻るぞ。人にわざわざケン力を売るような事をするなよ」

「結城に言われる筋合いはありませんわ！！」

和真はこれ以上、美春に関わるのが面倒だと思つたようで教室に入つて行く。

「FクラスがDクラスに宣戦布告をしたつてよ」

「おいおい。初日から仕掛けるかよ」

「……人の席を囲むな」

和真が教室に入り、自分の席に座りうとすると和真の席は一心、トオル、平太、清美が囲んでおり、和真はため息を吐くが、

「しかし、FクラスはEクラスを無視したか……中林、怒ってるだろうな」

「確かに、宏美なら青筋立ててるかもね」

一心はEクラスの代表になつた宏美が怒つていると言つと和真の周りに集まつた清美、トオル、平太の3人はその様子が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべる。

「まあ、大丈夫だろ。代表になつたんだから、それくらいは考えて行動するだろ。しかし、FとDの試召戦争か？ それで清水はいつも以上に殺氣だつてたわけか？」

「清水さん？ つて、清水美春さん？ ……カズに女の影？」

「おこおこ。どうからお前は女と繋がってるんだ？」

和真は宏美より美春の方が心配だと言つと清美は和真をからかうよう言つと一心がその言葉にのつかかるが、

「バイト先の店長の娘だ。だいたい、あんな意味のわからないのは遠慮する」

「意味？ 清水さん、良い娘よ」

「……」

和真は絶対にあり得ないと言つと清美は和真の持つている美春の印象と違う印象を持つていて首をかしげ、和真は清美の反応が信じられないようで眉間にしわが寄る。

「何？ その反応？」

「いや、意味が分かんないだろ。あいつ、俺を見るなり威嚇していくんだぞ。嫌われるほどまともに話した記憶もないのに」

清美は和真の反応に何かあつたかと聞くと和真は美春の行動はわけがわからないと言つが、

「奥さん、聞いてよ。あそこのが主人、おもてになるみたいよ」

「そりやそりや。恋愛に興味無いつて顔しながらも、無自覚でもてオーラを出していますもの」

「これだからって、鈍感は困るのよね」

一心、トオル、平太の3人は和真を鈍いと言い始め、「いや、意味がわからないし、だいたい、お前ら、それ、酷くイラつくんだが」

和真は3人の様子に肩を落として大きなため息を吐く。

第6問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

なんか、書いてたら美春フラグが立つてました。改めて、自分が美春好きだと言う事を思い知らされます。

和真「……何で、あの意味のわからないのが好きなんだ？」

美春、かわいいと思いますよ。好きなものに一直線でそこまでまっすぐに行けるのはつらやましこと云つのもあると思いますけどね。

和真「そうかな？」

ええ。さてと美春ヒロイン候補への昇格はあるのかしばらぐ書いてから考えます。

和真「いや、だから、俺は」

船越？

和真「清水の方が良いです！？」

第7問

「それで、F対Dはどちらが勝つと思つ?」

「普通に考えてDだろ」

「そうだな。振り分け試験の直後だし、点数差は変わらないだろ」

「そうだよな」

清美は4人の姿に苦笑いを浮かべると話を試合戦争に戻し、FクラスとDクラス、どちらが勝つかと聞くと一心、トオル、平太は当然、Dクラスが勝つと言つたが和真だけは何か引っかかる事があるようでも言わずにおり、

「カズはFが勝つと思つてるの?」

「……そうだな。Fが何となく勝ちそうな気がするんだよな」

清美は和真の様子に聞くと和真是苦笑いを浮かべると、

「何でだ? 普通に考えたら、Dの勝利は揺るがないだろ」

「普通はな。今朝、西村先生と話したんだけど、Fクラスには観察者と悪鬼羅刹がいるって話だからな」

「吉井に? 坂本? それじゃ、Dクラスが勝つんじゃない? カズ? 吉井なんて役立たずだろ?」

「確かに。学園初の観察処分者。バカの代名詞だぞ」

一心は和真に何が引っかかっているんだと聞くと和真是明久と雄一の2人が気になると言うがトオルと平太は和真的考えは杞憂だと言うが、

「だけどな。ただのバカなら、西村先生があんなに苦労しないと思うんだよな」

「ただのバカじゃなく大バカだから苦労してるんだろ」

和真是苦笑いを浮かべながら頭を搔くと一心は何も起きないと言う。

「カズ、何がそんなに引っかかるてるのよ。言つてみなさいよ」

「そうだな……さつきも言った通りなんだけど、ただ、設備が最悪だからって言うなら、最初は1つ上のEを狙うと思うんだ。だけど、FはDを狙ってきた」

「Eの設備じや、対して設備も良くならなかつたからだろ」

清美は和真に今度は引っかかっている場所を聞くと和真是対戦相手がおかしいと言うが和真以外は何もおかしくないと言う。

「いや、それなら良いんだけど、勝てる見込みが有つてDに仕掛けているんなら、相当の厄介だぞ。仮にも悪鬼羅刹（もじしらぢやく）だしな。勝てる見込みが有る可能性は十分にある。戦況をひっくり返す切り札がいるとかな」

「それが吉井だつて事か？」

「それも一つの要因だと思うけどな。それ以上に強力な駒がいる気がする……」

和真の言葉に平太は明久が重要な駒だと言つと和真は頷きながらも他にも強力な駒がいそうだと言つと、

「それと、初日から仕掛けてくるつて事は少なからず、既にFクラスの代表はFクラスの戦力を理解している可能性もあるんだよな。仮にそうだとしたら、代表の資質としてはCクラス（うち）の代表よりは確実に上だ。Cクラス（うち）の代表様はクラスメート（ひと）の上に立つたのがご満悦みたいだから、上にはまだ2クラスもいるのに自分が代表だつてな」

「カズ、あんた、相変わらず、きついわね」

「人を見下す奴が嫌いなんだよ」

和真は教室の中心で高圧的な態度をとつている友香を見て吐き捨てるよう言い、清美は和真の態度に苦笑いを浮かべる。

「そのわりには吉井の事は学校の恥扱いだけどな」

「まあな。人を見下す奴も嫌いだけどな。だらける奴はもつと嫌いだ。中林みたいに部活を頑張つてEなら良いが、何もしないでFなんて最悪だろ。何もしなくても世の中を生きていけると思ってるんだからな」

トオルは和真の態度になれているのかため息を吐きながら言うと和真是少しだけ冷静になつたようでため息を吐き、

「それなら、カズならどう動くのかな？そこまで言つて何もしないのは無しよね。FクラスがDクラスに勝つたら私達も狙われる可能性もあるわけだし」

「そこ」まで、考へてるんだ。反しての一つや二つあるんだろ」「

「仮にあつたとしても代表様は聞き入れないよ。それに俺は就職希望、試召戦争に興味なし」

清美はFクラスに仕掛けられた時に和真を頼りにすると言つが和真是やる気はない。

第7問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真の戦力分析でしょうか？

和真「Fクラスを警戒しそぎじゃないかな？」

まあ、Cクラスだとやることないですか？（苦笑）

和真「俺って今はFクラスのメンバーを知らないんだよね？」

鉄人から聞いて明久と雄一がいる事を知ってるだけですね。雄一が代表だと言う事は知りません。

和真「まあ、良いけど、と言うか相変わらず、原作キャラと絡んでないけど」

明久とはそのうちからませようと思つてます。明久が捕まらないため、教師陣の手伝いをしているところに鉄人が明久を連れてくるとかね。

ただ、友人やFクラスと試合戦争をする時に知り合つとかじゃない方向で考えています。

和真「確かに、俺は姉さんの手伝いしてある可能性もあるからね」

そういう事です。

アンケート

先日から言つてゐる『和真のヒロイン』を決めるアンケートです。

候補は『中林宏美』、『小山友香』、『清水美春』を考えています。
『高橋洋子』は今のところ家族としてしか考えていませんし、『船越教諭』はいくら票が入つても却下とさせていただきます。ネタには使うかも知れませんがさすがに和真が不憫ですから。

と言つた上でアンケートの項目は

- 1・中林宏美
- 2・小山友香
- 3・清水美春
- 4・その他（名前）

でお願いします。何となくでも理由があるとうれしいです。

期限はひとまず第25問あたり？

期限は延びる可能性はあります。

最後にしつこく言いますが『船越教諭』は却下です。ネタふりではあつませんのでよろしくお願いします。

第8問

(Fクラスが勝利したか? 悪鬼羅刹もじこらさいは伊達じやなかつたか? それにまさかあの姫路瑞希ひめじゆみがFクラスにいるとなんてな)

放課後になり、和真は教室の掃除を行つているとFクラス対Dクラスの試合戦争の結果が出たようで教室にはクラスメート達がその話題で盛り上がり始めるが、

「和、帰るのか? お前の予想通りなんだ。何か言えよ」

「予想つて言つたつて、姫路がいるなんて知らなかつたんだから、何も言う事はないよ。それに今日はバイトなんだ。遅れると迷惑がかかるだろ」

「そうなの? じゃあ、明日ね。カズ」

「ああ。お前らもいつまでも遊んでないで帰れよ」

和真は興味がないため、掃除用具を片付けると教室に残つていたトオルと清美に挨拶をして教室を出て行く。

「……睨むな」

「……」

「……DクラスがFクラスに負けたのは俺には関係ないんだ。睨む必要がないだろ」

和真はバイト先の『ラ・ペディス』へ行こうとすると校門で美春に見つかり、彼女は相変わらず、敵意の視線で和真を睨みつけており、和真は彼女の様子に肩を落としてため息を吐くが美春は和真を睨みつける事を止める事はなく、

(……先に行こう)

和真は美春の相手をする理由はないと考え先を急いでいると、「待ちなさい。あなたは美春の怒りを治めるために死んでもらいます」

「……いや、意味が全くわからないからな」

美春は和真を引き止め、和真は意味がわからないとため息を吐くが、

「問答無用です。美春のために死になさい……」

「おい！？ いきなり何をするんだよ！？」

美春は懐からナイフとフォークを取り出すと和真に向かい投げつけ、和真はその凶器を慌てながらも全てカバンで叩き落とす。

「往生際が悪いですわよ。美春のために死になさい……」

「断る！…俺にはお前のために死んでやるような義理はない！…」

美春は和真が大人しく自分の攻撃を喰らわぬのが腹立たしいようで更なる攻撃を繰り出し、和真に死ねと言うが和真は美春のストレス発散に付き合うほど仲がいいとは思っているため、美春の言葉を

却下するが、

「あなたがバイトしているお店は誰の家ですか？ うちで働いてい
ると言う事はあなたは美春の下僕……下僕なんて言葉ももつたいな
いですわ。あなたは美春にとつて家畜以下の人間ですわ！！ だか
らこそ、美春の手でハツ裂きにされても文句一つ言えないはずです
わ！！」

「そんなわけあるか！？」

美春は和真には自分にハツ裂きにされるのは当然だと叫び、和真は
そんな理不尽な言葉に声をあげると、

「だいたい、そんな風に周りも見ずに突っ込んだからお前らは負け
たんだ。誰もがFは下だとか思つてたんだろ。少なくとも人を舐め
ている人間は足元をすくわれるってわかつたんだろ。それなのに俺
に当たるなよ！」

和真はこれ以上、美春に付き合つ理由はないため、下位クラスに負
けたのは人を見下しているからだと言い切り、先を歩きだす。

「待ちなさい！？」

「……」

美春は和真の言葉に腹を立てているようで和真を呼ぶが、和真は美
春の相手をする気もなくなつたようで振り向く事なく先を進んで行
く。

第8問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

美春にからまれる和真。

和真「……何の恨みがあるんだよ」

まあ、和真に騒ぎを届けて欲しいと言つ声もありますしね。やっぱり、美春との絡みは押さえておかないといかないですからね。（苦笑）

和真「……俺は平和に生きたいんだけど」

無理ですね。

アンケート

- | | |
|----|---------|
| 1位 | 宏美 4票 |
| 2位 | 洋子 2票 |
| 3位 | 美春、葵 1票 |

となつてます。

和真「中林がトップみたいだね」

そうですね。宏美がヒロインってないから見たいと言つ意見が多いです。

第9問

「すまないな。結城、吉井のバカが、観察処分者の仕事を忘れて帰つてしまつてな」

「気にしないでください。今日はバイトも休みなんでタイムサービスまで時間もありますしね」

Fクラス対Dクラスの試合戦争の翌日の放課後に西村教諭に仕事を頼まれ、和真は西村教諭と隣に並び、プリントの入った段ボールを運んでいると、

「まったく、あのバカどものお前くらい教師に協力的だと俺達も助かるんだがな」

「いや、俺はまた違いますよ。高橋先生がいるから、先生達と関わる事が多いからですから、学生の本音で言えば先生達には関わり合いたくないですよ。呼び出しどかやつてもいのに悪い事を考えちゃいますし」

西村教諭は何か問題が起きているのか大きなため息を吐きながら和真を讃めるが和真は苦笑いを浮かべながらあまり呼び出しは嬉しくないと言つた時、

「和くん、西村先生の手伝いですか？ 忙しいですか？」

「ん？ 高橋先生、結城に何かようですか？ 急用なら、結城はお返ししますが」

「……高橋先生、学園内でその呼び方は止めてください」

洋子が和真と西村教諭を見つけて2人の元に駆け寄つてみると西村教諭は休養なのかと聞き返す隣で和真是洋子に学園内で分別は付けて欲しいとため息を吐く。

「ちょっと、出てしまっただけです。結城くん、西村先生、急用と言つわけではないんですけど、ちょっと一緒に来てほしいんですけど」

「それなら、これを職員室に運んでからでも良いですか？」

「はい。お願ひします」

「……俺の意見は聞かないんですね」

洋子は和真の言葉に一つ咳をすると教師用の言葉使いになり、洋子と西村教諭は和真のこの後の予定を和真に確認する事なく決め始め、和真是ため息を吐くと、

「急用じゃないなら、家に帰つてからじゃダメなんですか？ そろそろ、タイムサービスの時間なんだけど」

「はい。できれば、今日中に話しておきたい事なので」

和真是家に帰つてからにして欲しいと言つたが洋子にも彼女の都合があるようでこの後が良いと言つた。

「そうか。それなら、結城、早めに済ませるか？」

「そうですね。早いところ済ませましょう。……と、言つたが、観察処

分者つて、こう言つたのに関しては楽なんでしょうな。召喚獣は力が強いみたいだから、こんな重い物も簡単に運べるんでしょうから、俺は西村先生や召喚獣じゃないんであまりスピードは上がりませんよ

西村教諭は和真に手伝わせている仕事を早く終わらせようと先に進むが和真は西村教諭には付いて行けないと言つと、

「結城くん、ちょうど良かつたです。観察処分者になりませんか？」

「高橋先生、いきなり何を言い出すんですか！？」結城は確かに学校の授業に関しては学習意欲に欠けますが、それ以上に資格試験や就職に関しての勉強は他人より行っているはずです。それは姉である高橋先生が一番わかっている事でしょう！…」

洋子は突然、和真に観察処分者になるように言い、和真是いきなりの事で持っていた段ボールを落とし、西村教諭は洋子の言葉に和真是観察処分者にされる理由はないと言つ。

第9問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、割と鉄人のお気に入りかも知れません。

和真「結構、仕事手伝っている事もあるしね。まあ、ゴールポストとかは動かせないけど、手で持てる荷物運びくらいは手伝うよ」

そして、洋子からの観察処分者になれと言つ話に驚きの声を上げる鉄人に何があつたかわからない和真。

洋子は何が言いたいんでしょう？（苦笑）

アンケート

- | | | |
|----|----------|----|
| 1位 | 中林宏美 | 5票 |
| 2位 | 高橋洋子 | 2票 |
| 3位 | 清水美春、小暮葵 | 1票 |
| 5位 | 小山友香 | 0票 |

宏美が票を伸ばします。

第10問

「……高橋先生、確かに俺は授業にあまり興味はないけど、そこで落とされるような事をした覚えはないですよ」

「結城君も西村先生も何を言つてるんですか？ 私は結城君の努力は認めていますよ」

和真は落ち着こうとしたようで一度、大きく深呼吸をした後、洋子に向かい観察処分者になれと言われる事はしていないと言つと洋子は2人の反応の意味がわからないようで首を傾げると、

「それなら、どうして、結城が観察処分者なんかにならなければいけないんですか！！ しっかりと説明をお願いします」

「……西村先生、説明と言いますが、その話があるので私は結城君に来てほしいと言つたんですが」

「それなら、その話を俺も聞かせて貰います。問題ないですね」

「それは問題ありませんが、それなら、早く、西村先生の仕事を終わらせましょ」

西村教諭は洋子に説明を求めると言つてはいるが、洋子は未だに西村教諭がここまで言つている意味がわからぬようで首を傾げたまま、和真が落とした段ボールを持ち上げようとするが、

「……高橋先生、持ちあがらないんですから無理はしないでください」

「すいません。お願いします」

洋子では段ボールは持ちあがらず、和真は動搖しながらも段ボールを持ち上げる。

「結城、急ぐぞ」

「はい」

「待つてください」

和真と西村教諭は詳しい話を早く聞きたいようで先を急ぎ、その後を洋子が慌てて付いて行き、職員室に段ボールを運び終え、

「それで、高橋先生、詳しい話を教えていただけますか？」

「……西村先生、高橋先生、長くなるなら職員室はちょっと

西村教諭は洋子に和真に観察処分者になれと言った事に詳しい話を聞かせろと言うが和真は職員室内から感じのおかしな気配に職員室を出るよう言つと、

「はい。ここでは詳しい話はできませんので、付いてきてください

「……他の先生に聞かれるのは不味い話なんですか？」

洋子は場所を移動すると言つと二人についてくるように言い、和真と西村教諭は洋子の後に付いて職員室を出て行く。

『ですから、船越先生、落ち着いてください…?』

『放して!! 吉井くんが彼の近所の男性を紹介してくれたけど私が
だって若くて家事の万能なお嬢さんが欲しいのよ…』

「……結城、お前、いろいろと気を付けるんだぞ」

「……そう思うなら、職員室に呼び付けないでください」

「ああ。なるべく、お前に頼みたい事がある場合は生徒指導室に呼
ぼう」

職員室からは教師達が船越教諭を抑えつけている声が聞こえ、西村
教諭は和真の身の危険を察したようで和真に言い、和真は肩を落と
して職員室になるべく近づきたくないと言うと西村教諭は頷くと、

「それで、高橋先生、どこに行くつもりですか？ 他の先生達にも
聞かれたくないような事なんですか？」

「いえ、そういうわけではないのですが、この話は私だけではなく
学園長先生からの提案ですので学園長先生から詳しい話を聞いた方
が良いと思いますから」

「……学園長がですか？」

和真は洋子がどこに自分を連れて行くのか気になつたようで洋子に向
かい聞くと和真を觀察処分者にすると言つた話は文円学園の学園長
である『藤堂カヲル』から出た話だと言つ。

「学園長が？」

「はい。学園長、結城和真君を連れてきました」

「そりゃかい。入ってきな」

西村教諭はカヲルからの話と書つ事で首を傾げると3人は学園長室の前に着いており、洋子は学園長室のドアを叩くと、中から返事が返ってくると、

「「「失礼します」」」

「よく来たね。あんたが結城かい？……西村先生、あんたは呼んだ覚えはないんだけどね」

3人が学園長室に入ると中にはこの学園の最高権力者であるカヲルが高圧的な態度で和真を見るが隣に西村教諭がいるのを見て首を傾げる。

第10問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

和真にとつて職員室は危険な場所。（爆笑）

和真「爆笑じゃないからね。姉さんに用事があつても職員室に行けなくなるだろ。いい加減にしてくれよ」

いや、和真には騒ぎを届けないといけないので。

和真「……だから、騒ぎなんていらないからね」

何を言つてるんですか？ 騒ぎがなければバカテスではあります。

和真「かもしれないけど」

まあ、納得のいかない和真は置いておきましょう。和真への観察処分者要請は次回に続きます。妖怪ばああ長は何をいつんでしょうか？

和真「アンケートは変わらないから省略です」

第11問

「高橋先生から結城を觀察処分者にすると言つた話を聞きました」

「なんだい？ あんた、きちんと説明してないのかい？」

「学園長から説明の方が納得をしていただけたと思いまして」

西村教諭はカラルに向かい和真を觀察処分者にすると言つた事の説明を求めるがカラルはため息を吐きながら洋子に説明をしてないのかと聞くと洋子は頷き、

「それじゃあ、説明させて貰おうつかね。えーと、結城和真だね？」

「はい。それで」

「落ち着きなよ。別に取つて食おうつてわけじゃないだね」

「……」

カラルは和真の名前を呼ぶと和真は流石に学園長からの話と言つた事で緊張した面持ちで返事をするとカラルは緊張しなくて良こと言つたが、

「何で、下がるんだい？」

「いえ、ちょっといろいろとあって悪寒が」

「まあ、良じさね」

その言葉で和真は船越教諭の事を思い出したようで顔を引きつらせ、カヲルは意味がわからないため息を吐くと眞面目な表情になりました。

「まずは観察処分者と言つ話だけね。詳しくはあなたの召喚獣を教師仕様の召喚獣にしたいと思ってね」

「……はい？」

カヲルは和真の召喚獣を教師と同じ扱いにしたいと言い、和真は意味がわからず首を傾げる。

「……学園長、それはどう言つ事ですか？」

「簡単な事さね。元々、教師の召喚獣は観察処分者と同様に物体への干渉ができた。そのため、以前は雑用は各自、自分の召喚獣で行つていた。しかし、初めて観察処分者に任命された吉井明久の影響でそれは観察^{せいと}処分者の仕事と言つ空気が学園全体に広がつてしまつたからね。それにその吉井明久は仕事を忘れて家に帰る事も多々あると言うじゃないかい。そうなると手が足りないつて言葉も多く出ててね。それなら、生徒で手伝つてくれる人間を探そうと思つてね。それで高橋先生に良い人選はいなかと聞いたらあんたの名前が出たわけだよ。他の先生達の話でも良く手伝いをしてくれると評判もいいしね。おかしな事はしないと思ってね」

「はあ」

西村教諭はカヲルに詳しい説明を求めるに初の観察処分者を出した事で教師が雑用をしにくくなつたため、白刃の矢が和真に立つたと

「確かに、俺は西村先生の仕事を手伝っているんで召喚獣を作業に使えるのはありがたいんですが、生徒が召喚獣を使って作業をしていると俺の肩書つて」

「まあ、肩書は観察処分者になるね」「……お断りします」

和真はそれを受けた時の自分の肩書が気になつたようでカラルに聞くとカラルは肩書は『観察処分者』と言い切つたため、和真は笑顔で断ると、

「どうしてだい？」

「すいません。俺は就職希望なんですよ。うちで『観察処分者』とか言われたら就職先探すのに悪い印象しか『えないぢやないですか！』

カラルは眉間にしわを寄せて聞き返すが和真は就職希望なのに観察処分者のような不名誉な肩書はいらないと言い切る。

「なぜだい？ 便利だよ」

「便利とか言う問題じやありません」

「つむぎよ。あたしの決定は文月学園じや、絶対だよ。従いな」

和真は納得がいかないため、受けないと言うとカラルは権力で抑え

つけようとするため、

「……落ち着け、結城。学園長、その言い方はあまりに乱暴です。せめて、代わりの肩書きを用意してください」

「それじゃ、無駄じゃないか?」

「教師の雑用を押し付けるんです。それくらいは結城の意思も尊重するべきです」

「……作業を手伝わされるのは確定なんですね」

西村教諭は和真をカラルの間に割つて入り、カラルに向かい和真の意見も取り入れると囁く。

第1-2問

「……仕方ないね。まあ、直ぐに肩書きは思いつかないから、今はそのままつて事で頼むよ」

「……わかりました」

カヲルは西村教諭の言葉で面倒そつに何か肩書きを考えると言いつと和真は断ると洋子の印象も悪くなると思つてこるため頷くが、

「後、すいません。その任を受ける代わりにもう一つ、お願ひします」

「何だい？ これ以上、あたしに向をさせつつて言いつんだい？」

カヲルに向かいもう一つ頼みたい事があると言つとカヲルは眉間にしわを寄せて聞き、

「……船越先生の仕事だけは吉井に回してください」

「……どういつ事ですね？」

和真は船越教諭に近づくと危険と判断しているため、船越教諭の手伝いはしたくないと言つとカヲルは意味がわからず首を傾げる。

「……いろいろと危険なんですね」

「よくわからないけどね。まあ、基本的にあなたに仕事を頼む時の教師は高橋先生に頼んでる。そうだね。せっかくだ。西村先生、

あんたもやつな

「わかりました。私は元々、結城に良く仕事を手伝って貰っていたので一向に構いません」

和真は先ほどの職員室の件もあるため、真剣な表情をして言うとカヲルも何かあるとは察したよつて和真に仕事を頼む時は洋子か西村教諭が担当してくれると言つ。

「……わかりました」

「何だい？ 納得がいかなさそつな顔だね」

「そりや、いきなり、呼び出されてですからね」

和真は担当者を聞き、安心したようではあるが改めて自分が面倒な仕事を任せられたと思い肩を落とすとカヲルは和真の様子に聞き返し、和真はため息を吐くと、

「それで、教師仕様と同じ性能になるとは言っていますけど、俺は何か特別な事をしないといけないんでしょうか？」

「そうさね。システムの書き換えはあたしがやるから特にやる事はないんだけどね」

「そうですか」

「ただ……」

カヲルに何か特別な事をしないといけないと聞くとカヲルは初めは

何もないと言い、和真は安心して頷いた時、カヲルは何かあるのかニヤリと笑う。

「……すいません。わつきの言葉、取り消させて貰つても良いですか？」

「今更、何を言つんだい？ 当然、却下だよ」

「……」

和真はカヲルの様子に頷いた事を後悔し始めたようで撤回を要求するが当然、直ぐに却下され、和真は眉間にしわを寄せると、

「別に観察処分者とは違うからね。フィードバックがあるわけじゃないよ。ただ、教師仕様は特別だからね。ある程度の点数がないと機能しないようになつてるんだよ」

「……それって、俺に点数をあげるつて事ですか？」

「まあ、簡単に言えばそつ言つ事わね」

カヲルは和真に成績をあげるよつに言つて、

「……聞いて良いですか。どれくらいここまで上げる必要があるんですか？」

「一まずは総合点数で2500点くらいで機能するね

「……」

和真はカヲルにどれくらい成績を上げれば良いかと聞くとその点数は今の和真には手が届きそうもなく、和真はしばらく呆気に取られた後、

「ほほあ、いい加減にしろよ！－俺の今の成績を知っているのか！－1000点も上がるわけねえだろ！－」

「か、和くん、落ち着いて！？　田の前に立るのは学園長先生だから

「ら

「結城、落ち着け」

ついにブチ切れてカヲルの机を叩くと、普段、見る事のない和真の様子に洋子と西村教諭は慌てて和真を止める。

第1-2問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、妖怪の態度について「ブチぎれる。

和真「さすがにあれは仕方ないよな？ そうだよな？ 姉さんの印象、悪くならないよな？」

さあ？ わかりません。まあ、原作の明久や雄一の態度を見てれば特に問題もないでしょ？

和真「そうだと良いんだけど」

さあ、教師仕様に対応させるために成績を上げるように言われた和真はどうするんでしょうか？

和真「……1000点も無理だぞ」

確かにね。まあ、和真の今の点数は1600点くらいと考えてます。Cクラスの上位組と言うか友香の次と考えてますね。友香フラグも立てないといけないし

和真「1000点は無理だわ」

アンケートは変わらないため、省略します。

第1-3問

「……落ち着いたか?」

「……ええ、なかなか、良いのを貰らいましたから」

西村教諭の拳が和真の頭に振り下ろされ、和真は頭を押さえながら返事をすると、

「しかし、1000点あげるのは難しいのかい?……」

「……普通に考えていただけると無理と叫ぶのがわかると叫ぶんですけど」

「まあ、普通に考えるとね。だけど、あんたなりできるんじゃないのかい?」

「……いや、何を根拠にそんな事を言つたですか?」

カラルは和真を見てニヤリと笑うが和真は眉間にしわを寄せため息を吐く。

「ん。今回の件で、あんたの中学校時代の成績を調べさせて貰ったよ。ずいぶんと成績を落としてるじゃないか。基礎はできているはずだしね。ここまで戻せば、1000点くらい簡単だろ」

「……姉さん」

カラルは和真の今までの経験を調べていくよつて簡単にできるといふ

うと和真はすでに素を隠す事なくカヲルに自分の中学校の成績を教えたであろう洋子を睨みつけるが、

「和くんならでありますよ。西村先生もそういう想いますよね？」

「そうですね。結城の理解力は悪くはないですから、少し真面目に取り組めば成績をあげる事は不可能ではないと思います」

「……」

洋子は和真になら1000点上げる事は難しくないと思つて、この上で西村教諭に同意を求めるが西村教諭は頷き、和真はどうして自分の事をここまで過大評価しているのかわからないよう眉間にしわを寄せると、

「……」
「……今まで言われて何もしないのは男としてどうなんだい？」

「……そうですね。だからと言つても1000点も点数をあげるつて言つのは現実味がなさ過ぎてどうしたら良いかわかりません」

カヲルは和真が困つているのが面白いのか楽しそうに笑うと和真是現実味のない点数にため息を吐く。

「まあ、確かにそうだな」

「ええ、俺の成績は良くも悪くも可もなく不可もなくですかね？」

「その分、伸ばしよははあるんじゃないかい。一先ずは回復試験を受けて貰つよ。その時間は取れないから1日、授業が終わった後に1教科ずつだよ。一夜付けでも良いから勉強してきな」

西村教諭は和真に「どのように勉強させたらいいか」考え始めたようで眉間にしわを寄せ、和真是苦笑いを浮かべるがカヲルは具体的な事は言わずに和真にどんな手を使っても良いから成績を上げて来いと言い、

「大丈夫ですよ。一先ず、今日、家に帰つたら姉さんが和くんの勉強を見ますから」

「……いや、だとしても簡単に成績は上がらないから」

洋子は和真に勉強を見ると言つと和真是それでも直ぐに成績が上がるわけないと言うが、

「大丈夫。姉さんと一緒に頑張ろう。和くん」

「……わかったよ。やれるだけやるよ」

「はい。よろしくお願ひします。和くん」

洋子は和真ならできると信じているようであつすぐと和真を見て言うと和真は大きなため息を吐くと洋子は和真が頷いた事に嬉しそうに笑うと、

「なるほど、教師陣の噂では聞いてたけど、本当にパソコンみたいだね。これは良いね」

「……学園長、おかしな事を考へないで頂けますか？　ただでさえ、結城には大変な仕事を押し付けているんですから」

「なんだい？ 西村先生、あたしを疑つて いるのかい？」

「……学園長の笑い方は何かを企んで いるよつにしか見えません」

カヲルは和真と洋子の様子に何かを企んだように笑い、西村教諭はこれから和真に降りかかるであろう厄介事にため息を吐く。

第14問

「和、観察処分者になつたつて本当か?」

「おい。何をしでかしたんだよ」

和真は休み時間になり今日の回復試験のために物理の教科書と睨めっこをしている和真にトオルと平太が声をかけてくる。

「……なんで、もつ噂になつてるんだよ」

「つそ、カズ、あれって、本当なの?」

「……半分、本当かな?」

清美は噂自体は聞いていたようだが和真が観察処分者になるわけがないと思っていたようで驚きの声を上げると和真はため息を吐くと、

「半分? つてどう言つ事だ?」

「……ああ、話せば長くなるんだけどな」

一心が話しに食いついてきて和真是ため息を吐きながら、昨日、学園長室に呼ばれて自分が教師仕様の召喚獣を使えるようになると言う話をする。

「……なるほど、シスコンつてところを付け込まれたわけだな」

「……まったく、その通りで反論できない」

一心が苦笑いを浮かべながら和真がシスコンのせいでそんな面倒な事を押し付けられたんだと言うと和真は自分がシスコンだと認めているため、肩を落としてため息を吐くと、

「それで、カズは朝から物理の教科書をこらめっこしてるわけね」

「ああ。今日は放課後に物理の回復試験を受けないといけないんだよ。1教科ごとに3週間で1通り受けてから、2500点を超えるまで点数の上がりそうな教科を重点的に回復試験を受ける……やつてられるか？」

「た、大変だな」

清美は和真が朝から珍しく教科書を読んでいる事に納得がいったと頷き、和真はすでに限界がきていくようで乱暴に頭をかくと平太は苦笑いを浮かべ、

「でも、和が観察処分者級に召喚獣の扱い方が上手くなるってのは俺達にとつてはプラスだよな。この間の試召戦争の話じや、吉井は召喚獣の扱い方がめちゃくちゃ上手いって話だろ。点数が高くて同じように召喚獣の扱いが上手いなら、Aクラスだつて田じやないぞ」

「……何度も言わせるな。俺は試召戦争に興味はない。点数が高くなつたら、それでこんな生活とはおさらばだ。わざわざ点数を下げるわけがないだろ」

「……本当にやる気ないわね」

一心が和真が召喚獣の扱いに慣れればAクラスも田じやないと言う

が和真は相変わらず、試合戦争に興味は見せないため、清美はため息を吐くが、

「そりや、そりや。お前ら、仮に上手くやつてAクラスに勝てたつて、たかだか3力用だろ。それにまじ俺達が勝てたとしたつて小者が直ぐにしかけてくる」

「小者つて根本くん? 代表と付き合つてるんでしょ? それなら、そんな事しないでしょ」

「言つてるだろ。小者はどこまで行つても小者だ。変にプライドも高いだらうからな。自分ではAクラスに勝てないだらうけどな。仮に俺達がAと戦えばその時を狙つてくるよ」

「そんな事するか?」

和真はCクラスにAクラスと戦つまでの能力は言い切り、それ以外にBクラスの根本恭一が邪魔だと言つと清美と平太は首を傾げる。

「……するな。プライドだけの高い小者つてのはみんなそんな感じだ。うちの代表も一緒に、そのうち、悪鬼羅刹もといらせきに良いように使われるだけだな」

「お前にかかれれば代表も二下扱いかよ」

「別に二下扱いしてる気はないよ」

和真の口には恭一も友香も同じようになつかれていた。息を吐くとトオルはため息を吐くと和真是興味無さそうに言つと、

「そう言えれば知ってる。私、小山さんの総合成績を聞いたんだけど、和真と1点差で代表だって」

「そりなのか？ 和真、お前、頑張れよ。お前が後2点取つてればクラスはもっとまとまつただろ」

「いや、俺は人をまとめる才能はないから」

清美は和真と友香の総合点数を調べたようで和真の点数の事を言うとトオルは和真に振り分け試験の時にもう少しやれよと言うが和真是自分にはそこまでの才能はないと言い切り、教科書を睨みつける。

第15問

「ありがとうございます。西村先生」

「なに、点数をあげるのは俺はこれくらいしか協力できないからな

和真は西村教諭に呼び出されて生徒指導室に行くと西村教諭は和真の総合点数を上げるために各教科の要点をまとめたプリントを印刷してくれており、和真は西村教諭に頭を下げる

「それで、どうだ。行けそうなのか？」

「正直、わかりませんよ。物理は昨日、家に帰つてから高橋先生に叩き込まれたんでそれなりに取れるとは思いますけど、後は英語はたぶん、眞面目にやれば振り分け試験よりは取れると思いますけど……他はわかりません」

西村教諭は和真の勉強の進捗状況を聞き、和真是無理があるとため息を吐く。

「まあ、無理をしない程度に頑張れ。俺はお前なら直ぐに点数が上がると思つてゐるからな

「……そんな過大評価はいりません」

西村教諭は和真ならやれると言つが和真是自分の評価を余程、低くしているようであり、

「結城、お前はもつ少し、自分を評価したらどうだ?」

西村教諭は和真にもう少し自信を持ってと言つた時、

「失礼します」

「……遅いぞ。吉井」

生徒指導室に『吉井明久』が入つてくる。

(……吉井明久か？観察処分者の仕事か……)「いつのせいで、俺の仕事が増えてるんだよな)

「ねえ。君は何をしたの？ 鉄人は体罰何か気にしないから」

「……吉井、おかしな勘違いをするな。結城はお前達バカと違つて問題など起こさん」

和真は今の自分の状況の原因の一つである明久を見て少しだけイライラしてしまったようだが明久は自分が和真に迷惑をかけているなど思つていなため、和真を西村教諭に怒られていると思い勝手に仲間意識を持つて話しかけるが西村教諭は明久の言葉を一蹴し、

「吉井、今日の放課後、観察処分者の仕事があるからな。間違つても昨日のように帰るんじゃないぞ。後は昨日、お前が勝手に帰つたせいだ、結城に迷惑をかけたんだ。謝罪でもしておけ」

「そつなの？ 昨日は」

「……悪いな。話しかけるな。不愉快だ」

明久に礼を言つよつに言い、明久は和真に謝ろうとするが和真是明久を見て機嫌が悪くなつてきました。眉間にしわを寄せると、

「……西村先生、ありがとうございました。俺はこれで失礼します」

「ん？ ああ、すまないな。結城、頑張るんだぞ」

「はい」

西村教諭に頭を下げて生徒指導室を出て行く。

「ちよつと、待つてよーー。昨日の事は謝るよ。だけど、そんな態度を取る必要がある?」

「……話しかけるなつて言つてるだろ。観察処分者」

「何だよ。その言い方！！」

明久は和真の態度に自分が昨日、和真に迷惑をかけた事を悪いとは思つてゐるようで謝ろうとするが和真是明久と話す気はないと言つと明久は和真の態度が気に入らないようで和真を怒鳴りつけるが、

「……言われる事をしてるだろ。お前のせいで俺がどれだけ西村先生の手伝いをしてると思つてる。それにお前はバカを好きなだけやつてれば良いが、そのせいで泥をかぶつてゐる人間がいるんだ。俺はその1人なんだよ。それも知らないで良くそんな口が叩けるな」

和真是明久の胸倉をつかみ言つと明久は意味がわからないようでは惑つたような表情をすると、

「悪いな。俺はお前がFクラスとかより、人の迷惑を考える事もないお前が気に入らない。話しかけるな」

「……」

和真は明久にそう吐き捨てると言然と立ち去る明久を置いて自分の教室に戻つて行く。

第16問

(……らしくないな。これじゃあ、清水と変わらない)

和真は明久と別れた後、自分が明久に吐き捨てた言葉が自分らしくないと理解しているようだが割り切れない部分は多いようで眉間にしわを寄せながら教室に向かつて歩いていていると、

「結城君」

「……中林か？ チャンジだ。俺は体操服ならブルマの方が良い」

「……あなたはどうしていつもそういうの？ だいたい、うちの体操服は指定ですよ」

宏美が和真を見かけて声をかけ、和真は宏美の声に振り返ると宏美は次の授業は体育のようで体操服姿であり、和真は宏美の足をジッと見た後に「冗談交じりで返事をするが、和真の言葉に宏美はジト目で和真を見てため息を吐く。

「それで、何かようか？ 俺は忙しいんだ」

「忙しい？ いつもやる気のない結城君が？ 何かあったの？」

和真は宏美がため息を吐く様子など気にする事なく、忙しいから用があるなら早く話せと言つと宏美は和真が忙しいと言つのが信じられないよつて首を傾げると、

「……何だ？ その反応は？ 俺にだつていろいろとやる事がある

んだぞ」

「結城君が学校でやる事なんて資格試験か寝るだけでしょ。別にたいした用事じゃないでしょ」

「資格試験は十分にやる事だろ。まあ、今回は内職でも学校の勉強だけどな」

和真は首を傾げる宏美を見てため息を吐くが宏美は和真の用事などたいした事ではないと言つが和真是教室に戻るとまた物理の教科書と睨めっこになるためか肩を落とす。

「学校の勉強？ 何？ Cクラス、Bクラスに試召戦争でも仕掛けるの？ Fクラスにあてられた？」

「……仮に試召戦争だとしても俺が勉強する理由にはならないよ」

「確かにね。清美や野口君達から聞いたけど、そつそつに試召戦争不参加を表明したって話よね」

宏美は和真が勉強をすると聞いてCクラスが試召戦争を仕掛けると思つたようだが和真是首を振ると清美達から和真の試召戦争へのやる気の無さをすでに聞いているようで宏美はため息を吐ぐと、

「それなら、何があったの？」

「ん？ ああ……いや、俺の話は長くなるから、そつちの用件を先に話してくれ。休み時間は限られているからな」

宏美は和真に何かあつたかと聞くが、和真是少し考えると今、自分

が置かれている状況は直ぐに説明が付くものではないため、宏美に用件を先に言えと言つ。

「そう? 長くなるならどうするわ。あのせ……『ラ・ペティス』の期間限定の新作のクレープ、凄く美味しいって聞いたんだけど、美味しいの?」

「新作クレープか? 美味いぞ。俺は試作品を食わせて貰つただけだけどな。それがどうかしたか?」

「やつぱり、噂は本当なんだ。どうしよう。今月、ピンチだしなあ……期間限定」

宏美は和真のバイト先の期間限定メニューが気になるようだが今月は苦しいようであり、

「……なぜ、期待するような目で俺を見る?」

「別に奢れとは言つてないわよ。確か、バイトでも社員割り引きがあるつて言つてたよね。結城君と一緒に、結城君が支払いすれば安く食べれるかな? と思つて」

和真は嫌な予感しかしないようで一歩下がると宏美は奢れとは言わないと言いながらも和真の腕をつかみ、

「……わかった。今度の日曜日で良いか。バイトは午後からだから、午前中なら付き合つよ」

「ありがと。それじゃあ、日曜日ね。約束よ」

和真はため息を吐くと宏美は笑顔で礼を言つと自分の廊下を走つて
行く。

第1~6問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

反省和真に宏美が遭遇。そして、「デートの流れですが……」

和真「デート？ 違うだろ」

和真もたぶん、宏美も自覚しないでしょう。（苦笑）

宏美がアンケートのトップなのでひとまずは宏美イベントを増やしておこうかな？ って感じです。

アンケートは省略します。変わらないからです。

後、アンケートの締切ですが第1巻部終了（清涼祭前）までに変更します。相変わらず、歩みが遅いのでこのままだと何もフラグを立てないまま終了しそうだからです。

第17問

「……だから、俺の席を囲むな。邪魔だ」

「和、聞けよ。今度はFクラスはBクラスに仕掛けるんだってよ」

「……見りやわかるよ。うちの代表様は立腹みたいだからな」

和真が教室に戻るといつものメンバーが和真の席を囲つており、FクラスがBクラスに宣戦布告をしたと聞き、和真はDクラスを倒したFクラスがCクラスを無視してBクラスに宣戦布告をした事が気に入らないようでピリピリとした様子の友香を見てため息を吐くと、

「カズ、今度はどうなると思つ?」

「……知らないよ。それより、うちの代表様は小者と付き合つてゐるんだろ。巻き込まれなければ良いけどな」

「巻き込まれる? どうする事だ?」

清美は和真にFクラスとBクラスの試合戦争の予想を聞くと和真は自分の席に座り、これ以上、変な事に巻き込まれたくないため息を吐ぐが、その言葉はトオルの興味を引く、

「……考えればわかるだろ。小者で他人を見下してゐる。やるとしたらくだらない手段、それも自分の手が汚れないように手口マ、もしくはうちのクラスにやれつて言つてな」

「……それは面白くないな」

「……そつ考えると代表には悪いけどBクラスに勝つてほしいわね」

和真は物理の教科書を開きながら、吐き捨てるよつとトオルも恭一の話を聞いているためか眉間にしわを寄せると清美はため息を吐く。

「俺はウチの代表様がどう動くかは知らないけどな。少なくともBクラスと協定を組むとか言いだした場合はウチのクラスを売るぞ。当然だろ。汚い手で何かしたら高橋先生に迷惑がかかるからな」

「まあ、らしいな。そんな上からの協定なら俺も願い下げだな。それに試合戦争をやるつて言つてゐるのにBと協定結んだつて俺達に得はないからな」

「だな。和と違つて俺達の頭じや、Aには敵わないだらうからな。それでもBクラスの施設なら取れるだろ」

「そうね。私達は分くらいわきまえないと」

和真はBクラスが汚い手段を使つてきた場合は自分の思う通りに動くと言ふと和真を囲んでいる4人は苦笑いを浮かべて頷き、

「と、言つ事でウチの代表様が使えない時には下克上は任せんぞ」

「……だから、俺を巻き込むな」

「カズを巻き込む？ 違つでしょ。今回、巻き込まれているのは私達、カズの言葉には人をその気にさせる力があるのよ」

トオルは和真の背中を叩き、和真是ため息を吐くと清美は自分達は和真に巻き込まれていると笑うと、

「……ないよ。そんなものは俺は自分一人で精一杯だからな……何より、俺はこれをどうにかする事しか考えられないんだからな」

「……まあ、頑張れ」

和真はそんな事を言つより、邪魔をしないでくれと言つと一心は和真の肩に手を置き、

「応援だけじゃなく、邪魔をするな。時間がないんだよ」

「やうね。でも、そう言わると邪魔したくならない?」

「山下の言つて分もわかるな」

「……へーた、わかるな」

和真は解散しろと言つが清美はイタズラな笑みを浮かべると平太は清美の意見に賛成だと頷き、和真是大きく肩を落とす。

第1-8問

「和くん、少し手伝つて欲しい仕事があるんですけど」

「カズ、洋子先生からの呼び出しだよ」

FクラスとBクラスの試合戦争が始まり、血闘が始まればしばらくすると洋子が手伝つて欲しい仕事があると言つてCクラスの教室を訪れる。

「……高橋先生、学園では結城と言つてください」

「そ、そうですね。すいません。どうしてもなれなくて、気をつけます」

「……氣をつけるつてもう2年田なんだから」

和真はため息を吐きながら洋子に言つと洋子は少し慌てた様子で氣をつけないと言つた、

「前から思つてたんですけど、和はパソコンですけど、高橋先生はパソコンですよね？」

「……一心、いきなりわけのわからない事を言つた」

「いや、一心の言つ事もわかるな」

ぞろぞると一心、トオル、平太が集まつてくる。

「そ、そんな事はないと思つんですけど」

「……高橋先生、それで手伝つて欲しい仕事ってなんですか？」

「は、はい。えーとですね。教材室から旧校舎の空き教室に教材を運んでもらいたいんです。それで、結構な量があるので」

洋子も少し一心が言つた事に自覚があるようで慌てながら言つと和真は洋子に仕事の内容を聞くと洋子は和真に頼みたい仕事を話す、

「それなら、私達も手伝いましょうか？」

「そうだな。和は勉強しないといけないからな。早めに片づけようぜ」

一心、トオル、平太、清美は和真を手伝つと言つと、

「すいません。お願いできますか？」

「良いのか？」

「それくらいはな。ほら、やつと始めよ」

和真は一心達の提案に首を傾げるとトオルは和真の肩を叩き、教材を取りに行こうと叫ぶ。

「そうだな。行こう。姉さ……」

「カズも洋子先生と変わらないじゃない」

和真は教材のところまで洋子に案内してくれと言うが和真も気を抜くと洋子の事を『姉さん』と呼んでしまうようで清美は和真を見て苦笑いを浮かべると、

「…… 言つな」

和真はため息を吐く。

「…… これは多いな」

「すいません。お願いできますか？ 本当なら吉井くんに頼む予定だったのですけど、試召戦争になってしまいまして」

「…… また、あの観察処分者のせいかな」

「和、あんまり言つな。お前の価値を下げるだ

トオルは洋子に案内された教室の教材を見て苦笑いを浮かべると和真は苦々しく言つと一心は和真の肩を叩き、

「…… そつだな。悪い。氣をつけろ」

「もうしろ。あんまり、感情的になつて、吉井をバカにしてくるとウチの代表や根本と変わらなくなるからな」

和真は落ち着いて大きく深呼吸すると一心は笑顔を見せ、

「それじゃあ、早いところ、終わらせようぜ。和の自習時間も減らすわけにはいかないしな。せっかく、大出を振つて回復試験の勉強ができるんだ。和の強化は俺達にとってもプラスになる事だからな」

「そうね。それじゃあ、洋子先生、私達はこれを運びますから洋子先生はお仕事に戻ってください」

「そうですね。総合教科を承認出来るのは高橋先生だけだからいいとこまるだらうしき」

平太は早く終わらせて和真の自習時間にしようと言つと和真達は教材を持って教室を出て行く。

第1-8問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

話しが進みません。

和真「確かにね」

和真もやる気ないし、

和真「必要ないしね」

まったく、ここまでやる気のない主人公になるとは思いませんでしたよ。

和真「悪かったね」

まあ、完全に和真派が出来上がっている流れなんですが、Bクラスとの協定に和真はどう動くんでしょうか？

番宣

リトルバスターズ！の一次小説を投稿しました。

『～あの日の約束～』と言う作品です。

神北小毬の幼なじみが主人公な作品です。リトルバスターズ！もやつたよ。って人たちは見てくれると嬉しいです。

第19問

「……あれ?」

「和、どうかしたのか?」

「……いや、あこつらって、Bクラスだつたよな?」

和真達は旧校舎の空き教室に教材を運ぶ途中にFクラスの教室にBクラスの生徒5名が入つて行くのが目に映る。

「何で、Bクラスが? 決着つくの?」

「いや、決着がつくならそこで試召戦争はやつてないだろ」

清美はBクラスの生徒がFクラスの教室にいるFクラス代表である『坂本雄一』の首を獲りに行つたかと思うが周りではまだ試召戦争が行われており、

「……何かきな臭いな?」

「やつぱり、そう思つよな? 見に行くか?」

「……そうだな」

「危なくない?」

和真と一心は何となく何かを感じたようでFクラスの教室を覗きに行くかと言つと、

「まあ、危なかつたら逃げれば良いし、ウチには最強のシスコンがいる脅しには屈しない」

「……悪かつたな。なんなら、俺一人で行つてくるから

清美は自分一人だけ女子のため苦笑いを浮かべるがトオルはどうにかなると言いながら和真をシスコンと言い、和真は不機嫌そうな表情をすると一人でFクラスの教室を覗きに行くと言い、歩きだす。

「……ちっちゃいな」

「そうだな……山下、へーた、試召戦争のところで全員に聞こえるようにBクラスがFクラスの設備を破壊してるので言つて来てくれ和真達がFクラスの教室を覗くとBクラスの生徒がFクラスの教室の設備を壊したり、Fクラス生徒の私物の鞄を漁っている姿が見え、和真はため息を吐くと平太と清美に教師を呼んでくるように言つと、

「了解」

「3人で大丈夫?」

「別に取り押さえる気もないからな……証拠写真と状況が状況だから携帯は没収されないだろ」

平太は頷き、清美は首を傾げるが和真は気にする事なく、携帯電話で証拠写真を撮つて行き、

「熱くなつてるから、気づきもしないんだな」

「……小者の手のものは所詮、小者」

一心とトオルは和真が写真を撮っている事にも気付かないBクラスの生徒達の様子にため息を吐く。

「……結城、どう言つ事だ？」

「俺に聞かないで、直接、聞いてください」

平太と清美は途中で西村教諭に会つたようで西村教諭を連れてきて、和真に状況を聞くと和真是ため息を吐きながら、Fクラスの教室の中のBクラスの生徒達を指差し、

「それも、そうだな。お前ら、動くな！！　ここで何をしている！」

『げつ！？』に、西村先生

『な、何で！？』

西村教諭はFクラスの教室の中にはいるBクラス生徒を怒鳴りつけると突然のでき」と驚きの声を上げるが、

「詳しい話は生徒指導室で聞かせて貰う。結城、野口、遠山、黒崎、山下、よく知らせてくれた」

「当然の事でしたままでです」

「はい」

西村教諭はBクラスの生徒5名を抱きあげると一心と清美は頷き、「西村先生、緊急事態だったんで見逃してくださいね。証拠写真も撮つておきました」

「……そうだな。仕方ない」

和真は自分が携帯電話で撮つた写真を見せると西村教諭は領き、「お前ら、どうしてこんな事をしたか全て洗いざらい話して貰つた。その後は当然、補習だ」

『い、いやだああああ！－！－？？？』

西村教諭はBクラスの生徒を抱えて歩き出すると、

「……とりあえずは教材を運ぶか？」

「やつだな。さてと、和真、どうするつもりだ？」

「あ？一先ずは小者しだいかな？おかしな事をしてたらその時はその時、あまりやりたくないけど……小山には名前だけの代表になつて貰つしかないだろうな」

西村教諭の背中を見送つた後、トオルはCクラスの代表である『小山友香』の彼氏の手先を潰したため、和真達はBクラスを敵に回した事で自分達の立場が変わってきた事にため息を吐く。

第20問

「それじゃあ、行つてくるかな?」

「和、頑張れよ」

帰りのHRが終わり、和真が席を立とうとした時、

「失礼する。友香、悪いな。じクラスの生徒をまとめてくれ

「恭一、わかつてゐるわ。みんな試験戦争の事で話があるわ。席に戻つて

Bクラス代表の『根本恭一』がBクラスの生徒数名を引きつれて教室に入つてくると友香は帰宅を始めようとしていた生徒達を呼び止める。

「カズ、どうするつもり?」

「どうするつもりも興味なし、俺には関係ない

清美は立ち上がりついた和真に声をかけるが和真是興味無いと言ふと教室を出て行こうとする、

『おい。聞こえなかつた?』

「……あんたらが何をしようかなんて知らないし、興味もない。こつちは用事があるので失礼するよ

Bクラスの生徒は高圧的な態度で和真の肩をつかみ、和真是興味無さそうにその生徒の手を払い、

「だいたい。Fクラスの設備を壊せとか言う小者で卑怯な奴が代表のクラスが入ってきたんだ。ろくでもない事だろ。そんなのでとばつちり喰らう気はないね。俺は就職希望なんで試召戦争でも何でも勝手にやってくれ」

「ずいぶんと舐めた事を言うな。だいたい、俺がそんな指示を出したなんて事実はないぜ。そういう嘘を言わると迷惑なんだ」

Bクラスの指示を聞く気はないと言いつと恭一は自分はそんな指示を出した事はないと平気な面をして言ひ。

「そうか？ 僕だって、お前みたいな小者に興味はないから、勝手にやつてくれよ……ただ、それが真実なら、クラスもまとめられない代表様がFクラスに勝てるかどうかもわからないけどな」

『おい。Cクラスが上位クラスに逆らうんじゃねえよ！』

和真是恭一に興味などないと言うと恭一は自分が連れてきた生徒に目配せをし、Bクラスの生徒の一人が和真的首をつかむが、

「殴りたければ殴れば良いだろ。俺はそれを西村先生に報告するだけだからな。こつちは手を出していくない。口論のきっかけはそっちが人の腕を無理やりつかんだから、ここにいる全員が目撃者で証人。部が悪いのはそっちだろ。代表様がこんなところに連れて歩いてくるんだ。親衛隊と言われるクラスの成績上位者がここで退場しても良いならな」

和真は脅しに屈する気はないため、放せと言つと和真の首をつかんでいる生徒に言つと恭一は苦々しい表情をして生徒に目配せをすると和真の首をつかんでいた生徒は和真から手を放し、

「……根本、一つ、教えておいてやるよ。実力もないのに変なプライド持つても邪魔だぞ。プライドなんてものは何の役にもたたないからな」

「忠告、ありがたく受け取つておくよ」

和真は恭一に向かいアドバイスだと言つが恭一は和真を見下してい るため、和真程度に言われる筋合ひはないと言つ表情をして言つ。

「そりが……後、代表様。そっちの彼氏と事前に打ち合わせをして るなら、放課後、時間をくれくらいは言つておけよ。悪いけど、ち ょつと点数が高いだけで、信頼も得てない代表に従うお人好しつて のはなかなかないぞ。現に今のやり取りで俺以外にも帰りたい奴 は出てるからな」

「……」

和真は友香に向かいクラスをまとめたいなら考へると言つと友香は 和真が気に入らないようで和真を睨みつけるが、

「じゃあな。俺は行くぞ」

「和、待て。俺も行く。悪いね。代表、俺も今日は忙しいんだ」

「私も」

和真は気にする事なく教室を出て行き、和真の後ろに一心、トオル、平太、清美は続いて行くと教室の中は微妙な空気が広がり、数名の生徒が教室から和真達を追いかけるように出てくる。

第21問

「平太、お前は出てきたら不味くないか?」

「そうだな。女はめんどくさいだろ」

和真は自分達と一緒に教室を出てきた清美に面倒な事にならないかと言つと平太も和真と同意見のようで頷くが、

「気にしない。だいたい、小山さんの態度は限度を超えてるでしょ。私以外にも同じ考えの娘が多いよ。半々くらい、もしくは二つちが優勢」

「まあな。うちのクラス分けは完全に成績」と。言つてしまえば、実力的にはほとんど変わらないんだ。それを代表だと言われたつてな」

清美は自分以外にも友香の態度に腹を立てていると言うと和真は成績自体は大差がないと言つと、

「確かに成績」とだから仕方ないと言われたつてそれででかい態度されたら面白くないよな」

「Aクラス代表の『霧島翔子』みたいに頭一つでているわけでもない。言いたくないが根本みたいに汚い手を使ってでも人をまとめあげる才覚もない。Dクラスの『平賀源一』や中林のように先頭で周りを引っ張る力もない。Dクラス戦で上位クラスを出し抜いた悪鬼羅刹（ねとうしゃ）ほどの戦略眼もない。はっきりと言わせて貰えれば代表の資質で考えるとウチの代表様は代表の資質は最低だよ」

一心は和真の言葉に頷き、和真は冷静に各クラスの代表の資質を見定めているようで自分達のクラスの代表である友香に最低評価をつける。

「すいぶんとバッサリと切るよな」

「事実だろ。進級して1週間足らずだけどな。さつきのだつて事前に言つておけば帰る人間も減つただろ。他人の話も聞かないにしても、やり方つてあるだろ」

トオルは和真の友香に対する評価に苦笑いを浮かべるが和真は気にする事なく、

「それじゃあ、俺は西村先生のところに行くからな」

「ああ。頑張れよ。目指せ、腕輪持ち」

「いや。無理だから」

生徒指導室で回復試験を受けてくると平太は和真を激励し、和真がため息をついた時、

「吉井、アンタの返り血がこびりついて洗うの大変だつたじゃない

「それって、吉井が悪いのか?」

「……」

目の前にFクラスの生徒達が話している姿が目に映る。

「……和」

「わかつてゐよ。俺は冷静だよ」

一心は和真の目に明久が映つた事で和真の中に何か良くないものが出てきていると思つたようで和真の肩をつかむと和真は深呼吸して自分は冷静だと語つと、

「こ」の後にBクラスがFクラスの代表を討ち獲れなければウチのクラスの代表様はFクラスの策略にはまつてAクラスに試召戦争を仕掛けれる事になる」

「Aクラスと試召戦争？ ビーブリツ事？ 明日まで試召戦争は中断でしょ」

和真はこの後に起きた事にある程度の予想は付いていたのでため息を吐くと清美は首を傾げる。

「たぶん、CクラスがB対Fの決着が付いたら漁夫の利を狙つてくれると言う噂が出ているはずだ。Fクラスが動いたのはウチのクラスに同盟を求めるべくしてこうだ……そして、根本はそれを使って休戦協定違反を訴えてくる」

「おいおい。自分が協定を提案しといてそこから罷かよ」

「仕方ないだろ。小者なんだから……悪いな。そろそろ行かないと西村先生を待たせるから行くぞ」

「ああ」

和真は恭二がCクラスの教室で雄一に仕掛けると言つとトオルは恭二の汚さにため息を吐くと和真は眉間にしわをよせた後、表情を戻して生徒指導室に行くと言い、生徒指導室に向かつて歩き出す。

第22問

「和、どうだつた？」

「何？ 点数下がつたとかは無しにしてよ」

物理の回復試験を受けた翌日、H.R.前に和真は生徒指導室により、西村教諭から回復試験の返却があり、教室のドアを開けると和真を見つけたトオルと清美が和真に声をかけると、

「……これ、何だと思つ？」

和真は自分が取つた点数が信じられないようで顔を引きつらせながら437点と書かれた解答用紙を2人の前に出す。

「……冗談で腕輪持ちになれとは言つたが本当に取れるのかよ」

「……1夜付けてそんな点数を取られたらこの学園の生徒と言つかも学生のほとんどが勉強止めるわよ」

「……俺もそう思つ」

トオルと清美も見せられた現実に顔を引きつらせると和真も2人の言葉に賛成なようで大きく頷くと、

「……昨日、西村先生がくれたプリントや一昨日の夜に高橋先生から教わつたところがほとんど出た」

「それって、2人が手心を加えてくれたつて事？」

「……いや、基本的にあの2人がテストに関してそんな事はないと思うな。教え方が的確なんだと思う」

和真は顔を引きつらせたまま、西村教諭から渡されたプリントと洋子に教えて貰った時のノートを机に広げるとそこには和真の字でびっしりと2人から教わった事が記されており、

「……和、お前を俺は甘く見ていたよ。やればできる子だったんだね」

「……うん。洋子先生の和真を見る目はブランなだけじゃなかつたよ」

トオルと清美は和真の頑張りを讃めたいようで2人で和真の頭を撫でまわし、

「止める!？」

和真は2人から逃げようとするが、

「照れなくて良いんだよ……それとも洋子先生に撫でて貰いたい? シスコンだし」

「そんなわけあるか!？」

清美は和真を生温かい目で見て言い、和真は声を上げる。

「朝から、何、騒いでるんだ?」

「和、どうだつた？」

一心と平太が登校してきて和真達の様子を見て声をかけてくると、

「聞いてくれよ。一心、へーた。和の野郎、バカなふりをしてやがつたんだ」

「ん？ バカなふり？ ヤマでも当たつて300点台でも取つたか？」

「これ、これ」

トオルは芝居がかつた口調で和真が自分達をバカにしていると言つと平太が和真が大部点数を上げたと思って苦笑いを浮かべた時、清美は和真の机の上にある答案用紙を指さし、

「「何じゅうじゅう！？」」

「……そつなるよな。俺だつて、生徒指導室で初めてその解答用紙を見た時に同じ事を言つたよ」

一心と平太は異常に上がつた成績に驚きの声を上げ、和真はため息を吐く。

「そう言えば、この点数を見て鉄人は何も言わなかつたのか？」

「……西村先生は『頑張つたな。よくやつた』って言つてくれたよ

トオルは一心と平太の驚きように満足したように笑うと和真に西村教諭の反応が気になつたようで和真に聞くと和真は西村教諭なりの

最高の讃め言葉だと理解しているようすで苦笑いを浮かべると、

「一先ずは物理で点数を稼いだんだ。後、700点……無理だろ」

「どうにかなるだろ。これだけ、取れる頭があるんだ」

他の回復試験に向けて気合を入れようとすると、その壁は高すぎるようだため息を吐くが、一心は和真の肩を叩き、

「カズ、今日は何?」

「現代文……あんまり、得意じゃないんだよな。高橋先生も理系だから、教えて貰つてもあまりよくわからなかつた」

清美は今日の和真が受ける回復試験の事を聞くと和真は苦手教科なのかため息を吐くため、

「まあ、お前も理系の人間なんだ。現代文なら、山下はそれなりに取れているだろ。和に教えてやつたらどうだ?」

「そうだけど……これを見せつけられるとね」

平太は苦笑いを浮かべながら清美に和真のバックアップをするように言ふと清美はイタズラな笑みを浮かべながら和真の解答用紙を指差す。

第22問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、まさかの物理400点オーバー。

和真「やりすぎだろ」

最初から和真是物理を主力にしようと決めてました。洋子先生の担当教科ですね。瑞希は確かあまり得意じやなかつたからと言うのもありますけど、

後は平均的に上がるかほかに2、3教科特化させるかは考え中。

和真「腕輪の能力はどうするんだ？」

今、考えているのは2つ。

攻撃完全無効化と手加減

和真「試合戦争向きじゃなさそうだな」

そうですね。攻撃完全無効化はそのままです。一定時間、相手の攻撃を受けません。

和真「手加減は？」

名前は他の物を考えていましたが、範囲攻撃で対峙した召喚獣の点数を一桁にしますが和真の召喚獣ではとどめは刺せなくなる。部隊長として動かすなら有効な能力ですが和真一人で無双つてのはやめたいですからね。腕輪の能力には規制をかけたいと思ってます。

和真「まあ、腕輪＝チートって感じだからね」

はい。あまり好きじゃないんです。個人的には人を書きたいので。
(苦笑)

アンケートはあの後、投票がないため、宏美が1位のままです。

第23問

「手が穢れるのがすぐ嫌だけど、薄汚いあなた達に相応しい教室に送つてあげるわ。覚悟しておきなさい。近いしぐれに始末してあげるわー！」

（……ずいぶんと挑発的だな。まあ、進級したばかりで勝てるわけもないのに挑発に乗るようなバカはいないだろ）

朝のHRが終わり、1時間目の授業が始まるまでの休み時間に2-A所属の『木下優子』はそう言つてCクラスの生徒全員を挑発して教室を出て行くが和真は今日の回復試験の方が重要なようで西村教諭から渡されたプリントと睨みつけていると、

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！！ Aクラス戦の準備を始めるわよー！！」

「……和、これって不味くないか？」

クラス代表の友香はAクラスとの試験召喚戦争を始めると叫び、多くのクラスメート達は同意の声をあげ始めると一心は和真の肩を叩き、和真に何かした方が良いんじゃないかと言つ。

「……うちの代表は隣のクラスの小者と付き合つていると聞いて男の趣味は悪いとは思つてたが、ここまで単純だとは思わなかつた」

「そう言つ事を言わない。確かに私も根本くんはないと思つけど……主にあの髪形」

和真はため息を吐いて友香を小バカにすると清美は苦笑いを浮かべると、

「和、これを止めるよ。」のままだと、せっかくあげた点数、がつり下げられる。だいたい、回復試験も俺達は受けてないんだ。Aクラスに勝てるわけないぜ」

「……だよな

トオルは今の状況じゃ Aクラスに勝てるわけがないと言つと和真も同意見のため肩を落として頷き、

「山下、これ、貰うぞ」

「何？ 私と間接キスでもしたいの？」

「そうじやなくてな。それに間接は別に嬉しくないよ……当たらないよう

いよう

和真は清美の飲みかけの飲むヨーグルトを手に取ると清美は和真をからかうように言つたが和真是ため息を吐いて友香に当たらないよう投げつける。

「ちよっと、誰よー？ こんな事をするのはーー！」

「……ナイスコントロール。俺、美少女の顔が白濁の液体で汚れてる。良い絵だ」

「それについては賛成だけど良いのか？ 代表がお怒りだぞ」

飲むヨーグルトは綺麗な曲線を描いて友香が演説を始めていた教卓に当たつて飲むヨーグルトがはじけ、友香の顔には飲むヨーグルトがかかり、彼女の怒りはこんなくだらない事をやつた犯人を探す事に向かいだし、和真は笑いをかみ殺していると和真の様子に平太はため息を吐くと、

「そこ、これはあなたがやつたの!!　じつ言つつもりよー!!　また、私のやる事を邪魔するつもり?」

友香は笑つてゐる和真を見つけて怒りをあらわにしながら和真の前まで来て、和真を怒鳴りつける。

「どう言つつもり?　その言葉、そつくり返すよ。安い挑発に乗つた代表様」

「ちょっと、あなた、私をバカにしてるの?」

「勝ち目もないのに感情に任せてAクラスと試合戦争を始めるなんて十分にバカにされる状況だろ。それと代表になつたなら、せめてクラスメートの名前くらい一致させておけよ」

和真は友香を挑発するように笑うと友香は怒りに任せて和真の胸倉をつかむが和真は友香の手をつかみ、自分の胸倉から彼女の手を外すと、

「うつー?」

「へえ、少しは冷静になつたか?」

友香は和真の怒りでAクラスとの事を冷静に考えられるようになつ

たのか、自分が怒りに任せて無謀な事をしていたと気づき、和真はイタズラな笑みを浮かべ、

「少し冷静になつて考える。今の状況でAクラスに勝てると思う奴は何人いる？ 勝てないと思う奴は手を挙げてくれ」

「俺は勝てるとは思えない」

「私も」

クラスメート達に向かいAクラスに勝てると思つている人間がいるかと聞くとトオルと清美は手をあげ、続くよつに一心と平太が手をあげると冷静になればそのくらいの分別が点く人間は多いようで続くよつに手を上げ出す。

「代表様はどこに勝てる見込みを見つけたんだ？ 俺の名前も出でこないつて事はまだクラスメート全員の名前も顔も一致しないんだろ。Cクラス平均何人当てればAクラス1人に勝てるか？ 1教科でもAクラスと対等に戦える人間がいるのか？ それくらいは考え付いているんだろ？」

「……」

「……ぶっちゃけ。俺は就職組だからな。内申は自分のテストと生活態度で決まるからな。設備なんてどうでもいいから、勝手に試験戦争を始めても良いが、俺は補習を受ける気もないからな。やるなら、やりたい奴で勝手にやつてくれ」

友香に向かい勝てると思った理由を言えと言つが友香は何も答えず、和真は呆れたようなため息を吐くと自分は不参加を決め込むと言い、

友香を追い払つよつに手を振る。

第24問

「な、何よー！ 私は代表なのよー！ 私の指示に従いなさいよー！」

「断るよ。だいたい、代表だと言つなら資質を見せて欲しいね」

友香は和真の態度が気に入らなかつたようで感情を爆発させて和真に自分の指示に従えと怒鳴りつけるが和真は友香の話など聞く気もないようで自分の席に座り、

「それと昨日も言つたけどな。代表だつて言つなら、代表らしい事をしろよ。お前は何をしたいんだ？ はつきり言わせて貰うけど回復試験も受けてないんだ。点数はクラス分けの時のまま、たぶん、単体の教科で100点近い差があるぞ。それを超えられるような作戦をお前に立てられるのか？」はつきり、言わせて貰うぞ。根本はFクラスの代表と比べて明らかに格下だ。あいつが仮にFクラスに勝てたとしても俺はあいつが立てる計画や作戦では動かない。ここにいる奴らはどうだ？ 結局、昨日、斬り捨てた奴らは根本の指示だと西村教諭に白状したがあいつはしらを切つたぞ。そんな奴の指示で動きたい奴は何人いる？」

和真は友香に作戦を立てる能力はないと言い切ると西村教諭から昨日のFクラスの設備破壊の状況も聞いているようで恭一は人に罪を着せる事を何とも思わないと言い、クラスメートに意見を求めるところスマートからは恭一に従う事はできないと言つ。

「代表様、お前はどうするんだ？ ここで選べよ。クラスメートから信頼されてもいいお前が選ぶのは2つ。クラスの代表として根

本とは試召戦争で協力しないと言つ事、それでも根本と組んで代表としての威儀を失墜させる事」

「……」

和真は友香に2択を迫ると、

「俺達の中でお前は確かに成績は良いのかも知れない。だけど、お前はクラスのために動いたか？ 昨日は根本のために動いただろ。仮にお前が試召戦争であいつとの関係を割り切れないなら、俺達Cクラスは何を目指すんだ？ 俺はさつきも言つたが就職組だクラス設備になんか興味もないよ。だけど、お前が代表として割り切つていなければ、彼氏の牛耳つっているクラスに試召戦争を仕掛ける事はないだろ。さつきの言つた通り、Aクラスとの差は簡単には埋まらない。なら、クラス設備を目指している奴らは何を目標に動けば良いんだ？ この中で本気で勉強してもAクラスに届かないと思ってる奴は正直に手を挙げてくれ」

「……悪い。俺は届かないと思つてる」

「俺もだ。それに勉強ばかりしてたくないからな」

和真の質問にトオルと一心はAクラスには勝てないと手をあげるとクラスメートの多くが2人に続くように手を上げ、

「なら、Bクラスになら、どうだ？」

和真はBクラスになら勝てるかと言つとクラスメート達はBクラスになら何とか勝てると考えているものも多いよつて手は下がつて行く。

「代表様、あんたは1週間近くも代表の立場にいて、クラスが進む道を示したか？」ただ、自分が代表だと言う事に満足して何もやつていなideだ。クラスをまとめる事も、クラスの戦力を分析する事もFとDの試験戦争を考えてなぜ、あの結果になつたかを考える事も。確かに点数が高いとは言つたつて成績ごとでクラスを分けていりつて事はここにいる奴らの成績は大差ないはずだ。それなら、代表に必要なのはなんだ？人をまとめる能力だろ。それにも気付かない奴が偉そうに文句を言うな。少なくとも俺は沈む事が決まっている泥船の手伝いをする気はない」

「な、何よ。それ？」

和真ははつきりと友香の指示に従わないと言うと友香は和真の意見に多くのクラスメート達が賛同している様子にどうしたら良いかわからぬようであり、

「それなら、私はどうしたら良いのよー！あなたの言う事もわかるわよ。熱くなりすぎだつて言うのもー！でも、私達はAクラスにバカにされたのよー！確かにAクラスに比べたら私達は勉強している比重だつて少ないかも知れないわよー！でも、それで戦わずにしつぽを振れつて言つのー！いやよ。私は負けたく無いわ！」

「

「……カズ、ごめん。私もちょっと代表の気持ちもわかるかな」

友香は優子にバカにされたのが悔しかつたと叫ぶと清美は苦笑いを浮かべながら、和真に何かできないかと聞く。

第25問

「……いや、だから、俺は」

「「」まで騒ぎをでかくして何もしないはあり得ないぞ。和」

和真は友香の本音に面倒だといたげにため息を吐くが一心は和真の肩を叩くとクラスメート達は和真の次の言葉を待つており、

「……はあ。まずは状況の確認。なぜ、Aクラスの木下があんな事を言つたか」

「そこか？」

「ああ。もしかしたら、Aクラスにうちのクラスの生徒が何かやつた可能性もあるだろ」

「……なあ。和、俺、1つ重要かも知れない事を思い出した」

和真は状況を確認しようと言つと平太は何か思い出したようで和真に声をかける。

「何だ？」

「どのクラスにいるかわからないんだけど、木下優子には秀吉って言う双子の弟がいたよな？ 確か演劇部だつたはず」

平太は優子には弟の『木下秀吉』がいる事を思い出すと、

「……なるほどな

「カズ、何かあつたのか?」

「たぶん、これはFクラスから報復だ」

和真は秀吉の存在にある答えに行きついたようでため息を吐く。

「何かわかったの? エーと」

「クラス代表ならクラスメートの名前を合致させてくれ。結城和真
だ」

友香は和真の様子に首を傾げると和真はもう一度、ため息を吐くと、

「さっきの木下の挑発はFクラスの謀略の一つだ。大方、根本に協力したCクラスへの報復。無謀にAクラスに挑んで設備を落とされるようになつてな。代表の性格も見透かされてるぞ」

「それって、どういつ事だ?」

先ほどの挑発はFクラスの謀略だといつと一心は和真の言葉の意味がわからぬいよつで首をかしげ、

「よく考える。本当にAクラスが試召戦争を仕掛けたいなら、ここで宣戦布告をして行くはずだろ。それなのに木下は宣戦布告を先延ばしにした」

「……まるで私達から試召戦争を仕掛けようつ?」

「そう言つ事だ。」この試合戦争は無意味だ

和真はため息を吐くと友香も和真の説明で和真と同じ意見に行きついたようで悔しそうな表情をすると和真は話をここで追わらせようとするが、

「それじゃあ、私達の相手はFクラスね」

「……いや、何で好戦的なんだ？」

友香はFクラス相手に試合戦争を仕掛けようと言い始め、和真は肩を落としてため息を吐く。

「そうでしょう？」

「……いや、FクラスはCクラスがBクラスと同盟を組んで自分達を嵌めたからだろ。それで仕掛けるのは違うだろ」

「なら、結城君、この怒りはどうにじぶつければ良いのよ？」

「いや、知らないよ」

友香は自分達の怒りの矛先をどこに向けたら良いかと和真に聞くと和真はため息を吐くがクラスメート達は怒りの矛先を探しているようであり、

「和、何かないのか？」

「なんもないけどな。ここから先はFクラスしだいだからな」

トオルは真っ直ぐと和真を見て作戦はないかと聞くと和真は次の手はFクラスしだいだと言い、

「それじゃあ、そのFクラスしだって言う作戦を教えて」
友香は大部熱くなっているようで勢よく和真の首をつかみ顔を近づけながら言うと、

「……代表様、近いから」

「！」、「めん！？」

和真は友香の顔が目の前に来た事で友香から視線を逸らすと友香は慌てて和真から距離をとり、

「……また、和の毒牙にかかった人間が増えた」

「天然の良い男はこれだから」

平太は2人の様子にため息を吐くと清美は和真をからかうように言う。

第26問

「違うわよー?」

「……からかうな

友香は平太と清美の言葉を全力で否定し、和真はため息を吐くと、「さつきも言つたけど、これは報復なんだ。気づいたのにのつてやつたら、それこそ、相手の思うつぼ。これだけは絶対に言える事、理解できるか?」

「ええ」

和真にまずはFクラスの仕掛けた罠にのつてはいけないと言つと友香はまだ、納得はいかないようだが頷き、

「仮に報復として試召戦争を起こすなら、俺達がやる事はFとBクラスの勝者……違うな。決着がつきしだいBクラスの設備を手にしているクラスに試召戦争を仕掛けるのが有効な手段だよ」

「待てよ。Bクラスの設備を持つているクラスってどう言つ事がだ?
勝者がじやないのか?」

和真はFクラスとBクラスの試召戦争の勝敗が決まりしだい試召戦争をBクラスの設備を持っているクラスに仕掛けると言つと一心思和真の言いたい事がわからないようで首を傾げる。

「FクラスはDクラスに勝つた時に何をした? 設備交換はしたか

? 」この目的って誰かわかるか?「

「してないわ……それが今回も起きたって言つの? それなら、Fクラスは何のために試召戦争をしてるって言つのよ?」

和真はFクラスがDクラスに勝った時に設備交換をしなかった事が気になつていて、クラスメート達に設備交換がなかつた理由を聞くと誰もFクラスの考えている事が理解できないようであり、友香はFクラスの真意がわからないと首を振ると、

「……今朝、用事があつて、生徒指導室に行つてきたんだけど、Bクラスの生徒から室外機が壊れたから修理してくれつて言つ申請が出てるつて聞いたんだけど、誰が何の目的で壊したと思つ?」

「ちょっと待てよ。それがFクラスの作戦だつて言つのか?」

和真は西村教諭からBクラスの室外機が壊された事が引っかかると言つとトオルは聞かされた事実に声を上げ、

「……カズ、西村先生の手伝い。頑張つてね」

「……ああ」

清美は西村教諭が和真に修理を手伝つよつて言われたと思ったようで和真の肩を叩くと和真はため息を吐き、

「少なからず、これはFクラスとBクラスの試召戦争に関わっているはずだ。タイミングも良すぎるからな。FクラスがBクラスの設備で試召戦争を止めるなら、相手はFクラス。FクラスがAクラスを狙つているなら、Bクラスに勝つたとしても設備交換はしないで

何か交換条件を出すはずだわ」

「待て。それじゃあ……」

和真は暗に試召戦争の相手はBクラスだと言い、クラスメート達の視線は友香に集まる。

「ここで最初の話に戻る。代表様はどうするんだ？ 彼氏に気を使うか？ クラスの意思に答えるか？」

「……考える時間はないわよね？」

「そうだな。今回の報復は代表様がBクラスの代表とFクラスを嵌めたから、原因はBクラスにあるんだ。仮にBクラスとは戦えないと言うなら、はつきりと言わせて貰うが、ウチのクラスでの代表つてのは飾りになる。誰も代表様の言葉は聞かなくなるよ。室外機の修理は今日の放課後だから、たぶん、今日中に決着がつくだろ」

和真は友香にしてクラスの進む道を決めろと言つと、

「……悪いんだけど1時間だけ、答えを出すのを待つて貰つて良いかしら」

「好きにすれば良いだろ。元々、俺は試召戦争をする気はないしな」

友香は少し考えたいと言つと和真是勝手にしろと言い、西村教諭がくれた回復試験用のプリントに向かう。

第27問

「……カズ、大丈夫?」

「……無理」

FクラスとBクラスの試合戦争が続いているため、自習時間のなか和真に現代文を教えていた清美が和真の様子に苦笑いを浮かべると和真は現代文は向かないようで魂が抜けかけており、

「和、お前、文系ダメなのか?」

「……現代文や古文は必要性を感じないから、やる気が」

「いや、普通に生活する上で物理の方が必要性ないだろ」

トオルは和真に文系がダメのかのと聞くと和真はやる気がでないと言い、平太は和真の言葉に苦笑いを浮かべると、

「そこは、ほら、和だから」

「まあ、カズだからね」

一心は和真だから物理はできると言い、清美は一心の言葉の意味が理解できるようで苦笑いを浮かべ、トオルと平太は納得したようで大きく頷き、

「……悪かったな」

和真は4人が何を考えているかわかるようで不機嫌そうな表情をする。

「英語ならある程度、できるんだけどな

「そりなの？」

「役に立つだろ」

「……まあ、そうだろうけどな

和真は文系なら英語の方が役に立つからやる気が出ると一時はため息を吐き、

「いや、日本人だし、現代文は必要だろ？」

「今の時代、パソコンや携帯がある。字など書かなくても生きていける。だいたい、作者の考えなんて知るか。読む人間はそんなとこまで考えねえよ

「……学生の本分から全否定だな。おい」

トオルは現代文はそれなりに使うと言つが和真是余程、現代文が嫌いなようで乱暴に頭をかき、平太は和真的様子に苦笑いを浮かべた時、

「あなた達、少し静かにできないの？」

「ん？ 代表様、何かよつか？」

「……結城君、その代表様つて止めてくれない？」

友香は先ほどのクラスの進む道を決めたのか和真達に声をかけると和真是友香を見て何の用かと聞き、友香は和真が自分の事を『代表様』と言つのがバカにされていると感じているようで眉間にしわを寄せる。

「別に良いだろ。代表様は代表様なんだし」

「小山さん、私達に声をかけてきたって事は決まったの？」

「……ええ」

和真是友香の言葉を気にする事なく、現代文のプリントを見て眉間にしわを寄せていると清美は友香に答えは出たのかと聞くと友香は納得がいかなさそうだが頷き、

「それじゃあ、俺達のどこより、前で話した方がよくないか？」

「そう言つわけにもいかないでしょ。少なくとも、今の状況を作り出したのは結城君なんだから、最初に話をするのが筋でしょ」

「そんなの勝手にしろよ」

トオルはここでなく、教壇に立て宣言した方が良いと言つが友香は和真に話をしてから次の行動に移すのが正当な順序だと言つが、和真是興味がないのか、自分の事で手一杯なのか、友香を追い払うように手を振り、

「結城君、私の話を聞く気はあるの？」

「いや、ずっと言つてゐるけど、俺は試合戦争に興味無いから、聞く気はない。だから、決意表明なら、教壇の前で勝手にやつてくれ」

「そう。勝手にやつてくれって言つたわね。それなら、勝手にやらせて貰おうかしら」

友香は和真の態度に額に青筋を浮かべるが和真は友香の答えはあまり興味がないと言つと友香は和真の態度に少し腹を立てているのかくすりと笑うと、

「みんな、話を聞いて、さつきの答えだけど、私なりに考えさせて貰つたわ」

教壇に移動するとクラスメート達に注目するよつと声をかける。

第28問

「結果から言わせて貰うわ。私はCクラスの代表としてBクラスと戦うわ」

「代表、彼氏の事は良いの?」

友香は教壇でBクラスとの試験戦争に踏み切ると、清美は友香に恭一との事は良いのかと聞くと、

「ええ。それで文句を言つようなら、私から振つてやるわ」

「だ、代表、男前だな」

「そー」、おかしな事を言わない

友香は恭一の態度で自分から振つてやると言い、一心が友香の言葉に苦笑いを浮かべると友香は一心を睨みつけ、

「……イエス。ボス」

「弱いな。一心」

友香の眼力に一心は静かになり、トオルは苦笑いを浮かべる。

「それで、私なりに考えさせて貰つたんだけど、私は自分で言うのも悔しいんだけど頭に血が昇りやすいのよ。だから、感情に任せてしまう事が多い……」

「……何か嫌な予感がするんだけど」

友香は一度、深呼吸をした後、自分の性格の事を話し始め、和真はその言葉に何か感じたようで顔を引きつらせると、

「それで男子と女子で1人ずつ、私を補佐してくれる人を置きたいと思つのよ」

「頑張れよ。和」

友香は自分の補佐を置きたいと言つと平太は友香の考えが理解出来たようで和真の肩を叩き、

「男子は結城君、女子は山下さんに頼もうと思つただけでお願いできるかしら」

「私？ カズはわかるけど、私は人をまとめる力はないよ」

友香は補佐を和真と清美に頼みたいと言つが清美は首を傾げる。

「ええ。山下さんは言いたい事ははつきりと言えるし、結城君の扱いにも慣れてるしね」

「確かに、山下は和の扱いにはなれてる」

友香は清美を選んだ理由を話すとトオルは頷き、

「……その前になぜ、俺を巻き込む？ 俺は試合戦争をやる気は」

「何？ 私にだけはクラス代表だからと言つ理由で選択を押し付け

て自分は逃げる気？」

和真は自分を巻き込むと言いつと友香は和真を挑発するように笑い、

「……和、諦めろ」

「……」

一心は和真の肩を叩く。

「決まったわね。それじゃあ、結城君、私達は次はどうしたら良いのかしら?..」

「いや、その前に俺が補佐つて立場で良いのか？ 他にやりたいってヤツがいるかも知れないだろ」

友香は和真に次にCクラスが起こす行動の説明をして欲しいと言つが、和真は納得していないためクラスメートに確認をしてくれと言うと、

「結城君と山下さんが補佐で問題があると思う人は手を挙げて」

「……和、良かつたな。満場一致だぞ」

「……嬉しくないよ」

友香はクラスメートに和真と清美を補佐として認めるかと質問をするとクラスメート達から反対意見は出る事なく、一心は和真の肩を叩き、和真はため息を吐く。

「それじゃあ、改めて、結城君、お願ひできるかしら」

「……代表、楽しそうだな」

「初めて、カズを言い負かしたからね」

友香はくすりと笑うとトオルと清美は友香の様子に苦笑いを浮かべ、「……やっぱ良いんだろ。その代わり、文句を言つなんよ」

「文句？ おかしな事だったら、止めさせて貰うわよ」

和真は諦めたようだため息を吐くが友香は和真に向かい挑発的に言い、

「……何か、不穏な空気だな？」

「と言うか、あの2人は相性が悪い気がする」

「カズはクールに見えてキレやすいからね」

和真と友香の様子にトオル、平太、一心、清美は苦笑いを浮かべる。

第29問

「カズ、代表、遊んでないで始めよ!」

「そうね。結城君、始めて」

「……ああ」

清美は不穏な空気を漂わせている和真と友香に声をかけると2人は一先ず、矛を収め、

「……このクラスの支配者に山下が座った」

「確かに」

「そこ、おかしな事を言わない

清美が場を収めたのを見て、一心と平太が言つと清美はため息を吐き、

「それじゃあ、カズ、代表。後は任せろよ。私は戦術とか戦略つてわからないからね」

「ええ。私もそれは結城君に任せらるつもりだから」

「……いきなり丸投げかよ」

清美は和真と宏美に丸投げすると友香も清美の言葉に同意し、和真は肩を落としてため息を吐く。

「……それじゃあ、始めるか。その前に誰かAクラスと当たりをつけられる人間つているか?」

「Aクラスと?」

和真はクラスメート達にAクラスに知り合いはないかと聞くと友香は意味がわからぬようで首を傾げ、

「一応、今朝、ここにきた方が弟の方か確認していた方が何かあつた時に次の行動に移りやすいからな。木下さんが噂通りの人なら今朝にここにきたのは弟だろうから、念のためだけだな」

『……』

和真は念のために確認しておきたいと言つが誰もAクラスに知り合ひはないようであり、

「……仕方ない。工藤を頼るか」

「……カズ、あんたに知り合いがいるんじゃない」

和真はため息を吐きながら頭をかくと清美はため息を吐ぐ。

「えーと、一応、代表はいた方が良いとは思つんだけど……」

「何?」

「……木下さんにケンカ売るなよ。話がややこしくなるから」

「……」

和真は友香を連れて行つた方が良いとは思いはするが友香が優子と揉めないか心配なようで苦笑いを浮かべると友香は和真を睨みつけるが、

「……それじゃあ、私と代表とカズで行つてこようか」

「……任せたぞ。山下」

清美は見ていられなくなつたようで和真と友香の間に割つて入るとトオルは苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、ちょっと行つてくれるか。話はそれから

「ええ」

和真はAクラスに行くと言うと友香は和真を睨みつけたまま和真の後を追い、清美はため息を吐きながら2人の後を追いかけて行く。

「……えーと、工藤」

「あれ？ 結城君、どうかしたの？」

和真は試験戦争が始まっているため、自分達と同じように自習になつているAクラスの教室を覗くと目的の生徒である『工藤愛子』を見つけて声をかけると愛子は和真を見つけて駆け寄つてくると、

「カズ、やっぱり、あんた無自覚でしょ？」

「何、わけのわからない事を言つてるんだ？」

清美は和真の知り合いが女子生徒だつた事にため息を吐くが和真是意味がわからぬいために首をかしげるが、

「何々？ デートのお誘い？」

「違う。ちょっと相談に乗つて貰いたい事と確認したい事があつてな」

愛子は和真をからかいつぱに「デートの誘い」と言い、和真は直ぐに愛子の言葉を否定し、

「ふー、つまんない」

愛子は口ではつまらないと言つが和真以外の友香や清美の反応を見たいようでくすくすと笑つており、

「工藤、話を進めて良いか？」

「うん。それで、結城君がボクを訪ねてくるつて事はバイト先の新作クレープを奢ってくれるとか？」

「……いや、そうじやなくて」

和真は愛子に話を聞いて欲しいと言つと愛子は和真にクレープを奢つてくれるのかと言つが和真は話が進まない事にため息を吐き、

「……カズが工藤さんに頼みたくなかつた理由がわかつたわ」

「……そうね」

和真と愛子の様子に友香と清美は苦笑いを浮かべる。

第29問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、動くと言うか立場的に清美政権。（爆笑）

和真「完全にキャラが立つてきてるよな」

そうですね。トオル、一心、平太は完全に3バカの位置にはまっていますしね。

和真「このクラスはどうなる事やら」

さあ？

アンケート

ヒロイン決定アンケートの現在の状況？

- 1位 宏美 5票
- 2位 洋子 3票
- 3位 美春、友香、葵 1票

……なぜ、洋子先生に入る？

和真「わからないって」

基本的に美女教師と男子生徒は萌える展開ですが、ここではアウ

トです。

そういうのは妄想で、反論は認めません。文句がある方はよつマニアックな性癖を暴露してください。

和真「……違うから」

第30問

「それで……どっちが結城君の彼女?」

「違う。えーと、こっちがうちのクラスの代表様」

「Cクラス代表小山友香よ」

「それで、こっちが」

「山下清美です。よろしく、工藤さん」

愛子は和真をからかうように友香と清美の事を聞くと和真是ため息を吐きながら、友香と清美を紹介すると2人は愛子に向かい頭を下げ、

「工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「……工藤、その自己紹介はどうにかならないのか?」

愛子は2人に向かい自己紹介をすると和真是愛子の自己紹介に頭を押さえる。

「良いじゃない。それとも結城君はボクの特技は見たくないの?」

「……見たくないって答えるのは嘘になるけどな。俺達は用事があつてきたんだから、話を進めさせてくれ

愛子はイタズラな笑みを浮かべながら、スカートのすそを少し上げると和真はすでに愛子の相手をする事に疲れ始めていたのでため息を吐くと、

「んー、そうだね。Cクラスの代表の小山さんが来るって事は試合戦争の宣戦布告?」

「いや、そうならなによつに確認にきたんだよ」

「確認?」

愛子は友香がいる事でCクラスとAクラスの試合戦争になると思つたようで少し眼光を鋭くすると和真は苦笑いを浮かべ、和真の様子に愛子は首を傾げ、

「ああ。今朝の事なんだけど、ウチのクラスにAクラスの木下さんが来てな。ウチのクラスをバカにして帰つて行つた」

「優子が? それはないよ。HRが終わつた後だと優子はボクと一緒にいたから、Cクラスには行つてないよ」

和真は簡単に優子がCクラスに来て挑発して行つたと言つが愛子はその時間は優子と一緒にだつたようで直ぐに優子はCクラスを挑発している事はないと答える。

「ああ。俺もそう思つ。それで、Fクラスにいる木下さんの弟の仕業だと思つただけど」

「それで、確認にきたわけだね。優子、ちょっと来て

「愛子？ どうかした？」

和真は秀吉の仕業かどうか確認したいと言つと愛子は頷き、教室にいる優子に声をかけると優子は愛子が自分を呼んでいる理由がわからぬようで首を傾げながら和真達の元に歩いてくると、

「えーと、愛子、この方達は？」

「……」

「……代表様、変な敵意を見せるな。えーと、木下さんだね……」

優子は和真達に見覚えがないようで首を傾げ、友香は優子に敵意の視線を向けようとすると和真は友香をいさめた後、改めて、Cクラスの今朝の出来事を優子に説明し、

「……やつ」

「それで、一応、確認をしにね。Eクラスに確認に行つてもしらばつくれられると思ったし、木下さんには迷惑だろうと思つたんだけど、俺達もいろいろとはつきりさせたいからね。流石にあれだけの事を言わるとAクラスに試合戦争を仕掛けると言つ人間も出てきてるから」

優子は和真の説明に眉間にしわを寄せ、和真は優子がイラついてる事に気づいてこるようで困ったように笑いながら言つ。

「あたしはCクラスには行つてないわ。信じてくれると助かるんだけど」

「ああ。その言葉が貰えれば俺は良いんだよ。不快な思いをさせてしまつて『めん』

「ええ。ひつひつひや、ウチの弟が迷惑をかけたようだ『めんなさい。帰つたら、きつく言つておくわ』

優子はこめかみに青筋を浮かべながら、このクラスに言つたのは自分ではないと言うと和真は優子に不快な思いをさせた事を謝り、優子も秀吉がこのクラスにした事を謝り、

「いや、まあ、試合戦争での事だから、仕方ないよ。わざわざ、時間割いてくれてありがと」

「気にしないでよ。このお礼は結城君がバイト先でボクと優子に奢つてくれるんだから」

和真は試合戦争での事だから、優子が秀吉に何かをする事ではないと言い、優子と優子に改めてお礼を言つと優子はどうしても和真に奢らせたつよいで笑顔で言つと、

「……あまり、無茶な注文は止めてくれよ」

「それくらいの常識はあるよ」

和真はため息を吐くと優子は笑顔のまま頷く。

第31問

「と言つ事でAクラスとの試召戦争は回避した」

和真、友香、清美は教室に戻ると優子からCクラスを挑発したのは自分ではないと言つ言質を取つた事を話すとクラスメート達は安堵のため息を漏らす。

「それで、結城君、私達が次に起こす行動は？」

「……少し落ち着けよ。取りあえず、現状で補給試験を受けた場合に振り分け試験より、点数が取れる自信がある奴は何人いる？」

「いや、テストは水物だからわからん」

友香は和真に次の行動を示せと言つと和真はため息を吐きながら、クラスメート達に補給試験を受けた時の自信を聞くとトオルはどうなるかわからないと答え、多くのクラスメート達は頷くと、

「和、そんな事を聞いてどうするんだ？」

「いや、今はFクラスとBクラスの試召戦争中だから自習時間だろ。その間に俺達は自習をしていても点数は変わらない。このまま振り分け試験のまま戦つか、どこかで補給試験を受けて試召戦争に臨むかつてところだ」

一心は和真の質問の意味がわからなく手をあげると和真は今の点数で戦えるか疑問のようである。

『ちょっと待てよ。たかだかFクラス相手だろ。補給試験をする意味なんてないだろ?』

「まだ、Fクラスと戦うとは決まってないだろ。俺達が戦うのはFクラスとBクラスの試召戦争が終わつた時にBクラスの設備を持っているクラスと戦うつて言つていいんだ。Bクラスが居座つている場合は俺達より点数が高いはずだろ。回復試験をしている途中だとしても戦争に使つた教科以外は俺達より上だ」

「……確かにそうね」

クラスメートの1人はFクラスに報復したいため、F相手に必要などないと言つが和真はその言葉を斬り捨てるにBクラスと勝負することを考えるように言つと和真の単純にBクラスの方が地力が上だと言つと友香は頷き、

「後はFクラスと戦うにしても

「……姫路瑞希の存在か?」

「ああ。尊じや、腕輪を持つていいらし!」

和真是Fクラスと戦う場合にも注意しないといけない人間がいると言おうとすると平太は瑞希の名前を出し、和真は瑞希が腕輪を持つていると言つと教室はざわざわとし始める。

「後は、これは尊でしかないんだけどな。Fクラスには『寡黙なる性職者』がいるらしい」

「ム、ムツツリーーだと!? まさか、本当に存在していたのか!」

？」

和真はFクラスには『寡黙なる性職者』と呼ばれている生徒がいると言つとトオルはその名前に何かあるのか驚きの声を上げ、

『だ、代表、Fクラスとは戦うのは避けるべきだ。いや、俺はFクラスとの同盟を望む……』

『そりだ。俺達の幸せのためにFクラスとは同盟するべきだ……』

「……」

「な、何？ 結城君、そのムツツリー二つて何なの？」

男子生徒達はFクラスと同盟するように言い始め、和真は頭が痛くなってきたようで頭を押さえ、友香は男子生徒の盛り上がりに何があつたのかと和真に聞くと、

「……学内に盗撮カメラや盗聴器を設置して、盗撮した写真を売りさばいてる問題児。噂じや、保険体育の成績は担当教師に並ぶと言つ」

「カズ、あんた、写真とか買つてないよね？」

「ないよ」

和真は自分の知つている情報を話すと清美はジト目で和真を疑つが和真はため息を吐いて否定する。

第3-1問（後書き）

いつも、作者です。

感想の話です。今まで、感想の返信は更新時に行っていたのですが
感想を読んだときに変更させていただきます。ご了承ください。

第32問

「これだから、良い男は」

「和、お前、それでも男か！？」

和真の「写真を買つていないと言つ一言にトオルと一心は和真を敵と判断し、

『そうだ。それでいて、洋子先生と同棲だと、許せん！？』

『そうだ。俺達は写真でしか眺める事しかできない。洋子せー！？』

男子生徒が和真と洋子が一緒に暮らしている事を非難し始め、1人の男子生徒が洋子の「写真」と言つた瞬間、教室に大きな音が響き、

「力、カズ？」

「結城君」

その音は和真の右腕が黒板を勢いよく叩いた音であり、友香と清美が何があつたかわからずに和真の名前を呼ぶと、

「……お前ら、人の姉さんをなんだと思ってるんだ？」

「ま、不味い。和がブチ切れるぞ。誰だよ。洋子先生の写真の事を話した奴」

和真の額にはくつきりと青筋が浮かんでおり、平太は和真が何にご

立腹なのか理解したようで顔を引きつらせる。

『な、何だよ』

「……お前らが持っている姉さんの写真を俺の前に持つてこい」

「カズ、写真、集めてどうするつもり?」

男子生徒達は和真の様子に気落とされたようで声を震わせながら聞くと和真是洋子の写真を回収すると言いつづいて始め、清美は和真が集めた写真をどうするか予想は付いているようだが和真に聞くと、

「燃やす」

『ふ、ふざけるな。お前に何の権利があつてー?』

和真是一言だけ燃やすと言いつづが本気なようでは笑つておらず、男子生徒の一人は洋子のファンなのかそんな事はさせないと言おうとするが、

「……止めておけ。こうなつた和は手が付けられん。死にたくなかつたら素直に従え」

「……最強のシスコンだからな」

トオルと一心は男子生徒の肩を叩き、平太と清美が頷く姿に教壇にいる和真的元に数名の男子生徒が泣く泣く洋子の写真を持って行き、

「あ、あの。山下さん、結城君はどうしたの?」

「……見ての通り、カズはシスコンだから、洋子先生に近づく男には敵意の視線を向けるもう行きすぎたくらいにね」

「山下、おかしな事を言つた。俺は姉さんに相応しい男性が見極める義務があるんだ」

友香は和真の変化に顔を引きつらせて聞くと清美は苦笑いを浮かべて和真是シスコンだと言つと和真是表情を変える事なく、当然の事だと言い切り、

「今更だけど、小舅だな」

「ホントよ。まあ、当面のカズの敵は現国の寺井先生だけね」

「嘘！？ 寺井先生って、高橋先生の事が好きなの？」

一心は和真の言葉にため息を吐くと清美は苦笑いを浮かべながら、洋子に密かに憧れていると言つ噂の現代文の担当教師である寺井教諭の名前をあげると友香は驚きの声を上げる。

「まあ、洋子先生もカズと一緒に鈍いから、気づいてないだろうけどね。しかし、本当に姉弟そろって鈍いって言つのはあるんだね」

「……と言つたが、従姉弟よね。それにあの姿を見て、結城君を好きって言う人いるの？」

「うーん。難しいところかな？ でも、恋愛感情あるなしかは微妙なんだけど、カズの周りには女の影が多い」

清美は友香の驚きの声に苦笑いを浮かべたまま、和真と洋子は鈍い

と言つと友香は和真の変わりようにため息を吐くと清美は和真の周辺には女の子が多いと言つと、

「山下、おかしな事を言つたな」

「はいはい。それより、カズ、続き」

「ああ

和真は洋子の写真を集め終えた事で冷静になつたようで平常時に戻り。清美は和真の言葉に空返事をすると和真に説明に戻るよつた言い、和真は頷く。

第33問

「補給試験をしないとなると悪いけど、各人、自分の振り分け試験の各教科の点数を記入して提出して欲しい。それでどの教科で戦うかを考えるから、それで何人かまとめるのを手伝って欲しい」

「それって必要あるの?」

和真はクラスメート全員にテストの点数を教えて欲しいと言うと友香は首を傾げるが、

「今朝、話しただろ。今朝はAクラス1人なら俺達は何人で当たらぬといけないかと言う話をしたがBクラス相手でも一緒だ。上位クラスなんだ。1対1じゃ、分が悪いだろ。後はさつきの土屋の話じゃないが、ウチのクラスには1教科でもAクラスと対等に戦える人間はいないかが知りたい」

「なるほど、カズの物理みたいなものね」

和真はBクラスと戦う上で有利な状況に落ち込むために各人の得意教科、不得意教科を知つておきたい事だと言うと清美は和真が昨日の回復試験で桁外れの点数をからかうように言つと、

「結城君つて物理が得意なの?」

「得意と言つか……これ?」

友香は和真が物理を得意と聞いて感心したように聞くと一心が和真の机を漁り、西村教諭から返却された物理の答案をクラスメートに

見せる。

「な、何よ。これー?」

「……一心、余計な事をするな」

友香が和真の物理の点数に驚きの声をあげると友香の言葉を皮切りにクラスメート達から驚きの声が上がり始め、和真は一心の行動にため息を吐ぐが、

「俺達の点数は知れ渡るのにお前の点数が知られないのは卑怯だろ?
?」

「それもそつだな」

一心は苦笑いを浮かべながら和真の点数もクラスメート達には知る権利があると言つとトオルは頷くと、

「ちょ、ちょっと、結城君、何で、あなた、物理がこんな点数なのにこのクラスにいるのよ!?」

「待て、代表様、これにはいろいろとわけがあるんだ。とりあえずは落ち着いてくれ」

友香はこのクラスで400点オーバーは見られないと思つていたようで和真に勢いよくつかみかかると和真はため息を吐いて友香に落ち着くように言つ。

「代表、簡単な理由よ。だってカズだから」

「山下さん、だつてつてそんな理由で400点なんて、取れるわけがないでしょ！！」

清美は友香の慌てよつて苦笑いを浮かべるが友香は清美の落ち着きよつが理解できないよつであるが、

「代表、よく考える。洋子先生の担当教科はなんだ？」

「高橋先生の担当教科？ 物理よ。それがどうしたの？ ……結城君、そんな理由なの？」

平太は苦笑いを浮かべながら洋子の担当教科は何か聞くと友香は少し考えた後、何かが繋がったようで和真を見てため息を吐くと、

「最強のパソコンだからな」

「……わけのわからない事を言つな

トオルは和真をパソコンだと言い切り、和真はその言葉にため息を吐き、

「俺がこの点数を取つたのは高橋先生と西村先生を通じて学園長先生から学園の手伝いをするためにAクラス並みの点数を取つて欲しいと頼まれたからだ。そのために現在は授業後に1教科ずつ回復試験を受けさせられるからだ。本来なら単体教科は120～150点くらいだよ。物理は今回はヤマが当たつただけだ。今日は現代文なんだけど」

「120点、取れるか微妙よね？」

「…… 言つな」

今の和真が置かれている状況を話すと清美は先ほどから和真の勉強を見ているためか苦笑いを浮かべ、和真も現代文は点数が下がりそうだとわかっているようで肩を落とす。

第33問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

今回は『バカとテストと勤労少年』で投稿キャラを募集したいと思います。

理由としてはCクラスだと主要キャラがないから現在レギュラ化しているトオル、一心、平太、清美と和真と友香だけですから、書くのになんか面白みがないかな?と思いました。ぶっちゃけ、気紛れです。

それで投稿キャラを募集しようと思つてます。

募集人数は2人。できれば男女1人ずつにしたいと思つています。

募集事項

名前

性別

所属クラス：Cクラス。

得意教科：1教科〇り2教科（200～300点）

苦手教科：得意教科の数と合わせてください。（1教科200点だとしたら苦手教科は1教科で50点くらい、1教科300点だとしたら苦手教科は3教科で50点くらいと平均的に）

総合得点

1451～1586点（話の中でありましたが和真是友香とわずかな点数差で代表ではありません。総合得点を決める時は下の和真的

点数より低く設定させていただきます）

総合得点や得意、苦手教科はスタート時です。話が進むにつれて成長すると考えて総合得点だけでも良いです。その時は得意教科は伸ばしたい教科と考えて教科のみの記入でも構いません。Cクラスなので得意教科を特化型にしなければ全教科平均的と考えさせていただきます。

備考（性格等）

召喚獣装備（武器、防具簡単なもので良いです）

禁止事項

本当はAクラスの成績。

原作キャラの兄弟。

観察処分者。

例

名前 結城和真ユウキカズマ

性別 男

所属クラス：C

得意教科：英語、家庭科（140～160点）、成長後：物理（437点）、英語（289点）、家庭科（345点）

苦手教科：現代文、古文（100～120点）

総合得点：1587点、成長後：2678点

備考：中学3年の冬に両親を事故で亡くし、就職をしようと考えていたが従姉の『高橋洋子』の薦めで学費の安く洋子が勤務している文月学園に進学する事になる。現在は両親の残した家に洋子と2人暮らし、学年主任の洋子を補佐するために家事全般は1人でこなし、学園を終えるとバイト三昧と言つ勤労少年。成績はそれなりだが、自分の置かれている立場を考えているため、他の生徒達より、学生と言つものを見下す目で見ている事も多い。自称『シスコン』（従姉）

』

召喚獣装備

武器・大剣

防具・白いプレートアーマー

割と面倒な募集事項ですが、興味が湧いたら投稿してみてください。募集期間は面白そうなキャラクターを選んだ時点で終了させていただきます。

もし、投稿キャラ同士で恋愛イベントが起きても怒らないでください。

投稿キャラは感想板、作者のメッセージボックス、活動報告にお願いします。

また、投稿キャラは和真達と一緒に成長させて行く予定です。その過程で投稿者さんに作者から連絡させていただく事もあるかも知れません。

第3・4問

「へえ、結城君って文系苦手なの？」

「苦手ってよりは必要性を感じない。言葉なんて伝われば良い」

友香は所々に見える和真の弱点に楽しそうに笑うと和真是文系を勉強する意味がわからないとため息を吐くと、

「そう言えば、和つて実用的な教科の方が点数良いよな。英語はできむよな」

「ああ、英語は使つからな。単語の意味がわかれば話せるし、後は家庭科」

「……男の子なのに？」

一心は相変わらず、現代文などやつてられるかと言つてはいる和真を見て苦笑いを浮かべると和真は英語と家庭科はそれなりにできると言つが友香は男の和真が家庭科ができると聞いて眉間にしわを寄せるが、

「代表、カズは料理も掃除も完璧よ。喫茶店でバイトもしてるつてのもあるけど、家の家事もしてるし、もはや、そのレベルは『主夫』よ」

「……誉められてはいないよな？」

「でしょうね」

清美は和真の家事能力を認めていると、いつがその言葉に和真はため息を吐き、友香は苦笑いを浮かべる。

「まあ、とりあえずはさつき言つた通り、悪いんだけど振り分け試験の点数を教えてくれ。それで何とか試召戦争に勝てる算段を付ける。たぶん、相手はBクラスになると思うから、今回、Fクラスは数学や物理と言つた理数系で仕掛けているみたいだしな。理数系が得意な人間を中心に攻めると考えていて欲しい」

「理数系なら和がいるから、余裕だな」

和真は先ほど洋子の手伝いで廊下でFクラスとBクラスの試召戦争を覗いたため、点数が削れているはずの教科を中心に攻めようと、トオルは和真が居れば余裕だと言つと、

「いや、俺は試召戦争で点数を減らす気はないから」

「……結城君、1-1までクラスを煽つておいてそういう事を言つた？」

和真は作戦を立てても試召戦争に参加するつもりはないと言い切り、友香は和真の態度にため息を吐くが、

「だから、ちゃんと道筋を立てただる。そこから先は知らない。それに俺は最初に試召戦争に参加しないって言つただろ。せつかくあげた点数をどうして削らないといけないんだ。400点だぞ。250点も稼いだんだ。俺は次にこの点数を取れる自信はない」

「1-1まで言い切ると清々しいな」

「そうだな。俺達から見れば最強の矛だけど、和真から見たら誰にも奪われたくない宝物だからな」

和真は物理の点数にしがみつきたいと言い、和真の様子に一心と平太は苦笑いを浮かべる。

「はいはい。とりあえずは物理と数学中心に攻めるって考えてその2教科が得意な人間は今の自習時間に苦手な人間に教えてあげて、ここから1夜付けでも良いから試召戦争が開始された時点での2教科が得意な人間がカズの指揮で戦う。その間に苦手な人間はその2教科で回復試験を行う事。教科を2教科に絞る事で効率的にBクラスを攻める事」

「……やっぱり、山下がこのクラスの支配者だろ」

清美は自習時間中にやれる事をやるひつと言つとトオルは清美の様子に苦笑いを浮かべ、

「トオル、おかしな事を言わない。カズも遊んでないで、物理が苦手な人間に教える。今はカズ以上に物理ができる人間はいないんだからね。現代文の勉強に時間を割くより、こっちの方が物理の点数を守れるでしょ」

「ああ」

「それじゃあ、今、山下さんが言つた通りにまとめて自習をして

清美はトオルの言葉にため息を吐くと和真に効率が良い方を選べと言い、和真が頷くと友香は2人の様子に苦笑いを浮かべながらクラ

スメートに表示を出す。

第3・4問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

相変わらず、やる気のない主人公です。

和真「しがみつぐだろ。完全なまぐれだぞ。それを削って回復試験を受けていつもの点数になつたらどうするつもりだ？」

まあ、確かにそうかも知れませんけど。（苦笑）

投稿キャラの話

多くの投稿をいただきありがとうございます。現在は選考中でしょ
うか？

和真「何を基準に選ぶつもりだ？」

そうですね。今更言うのもなんですが、キャラクターの背景が見えるのは選びやすいですね。今いるメンバーと友人とかクラスがCですし、Fクラスにどういう感情があるかとかもあるとキャラクターがつかみやすいです。

和真「まあ、後は男女1ずつを選ぶから、1人ずつより、1人に絞つて書いてくれた方が選びやすいな」

そうですね。2人採用はしたくないので投稿キャラ2人の関係とか

もうくつづけてくれと言わるのは俺が書かなくてもよくねえ？とか思いますから、恋愛系に持つて行くなら別の投稿者さんのキャラをくつつけた方が楽しい。

和真「まあ、そうだろうな

作者の考えはこんな感じです。

メールボックスに連絡をくれれば個人的にこうした方がいいキャラになりませんか？って話もしますがダメだしにもなるかも知れませんから傷ついても良い人だけそつとメールをください。

和真「傷つけること前提かい」

まあ、他の作品を読んでいただければわかると思いますが作者、どうで。

後はたぶん、出るのはBクラスとの試合戦争が終わった後、清涼祭からだと思いますが『これ』ってキャラが出来たら即採用かも知れません。

和真「投稿はまだまだ、募集しています」

後は活動報告にバカとテストと召喚獣一次創作の原案を書きました。今回の主人公はDクラスの女の子です。

第35問

「……決まったみたいね」

「ああ、相手はやっぱりBクラスか」

FクラスとBクラスの試合戦争が終結し、BクラスはFクラスからの条件を飲んで設備を守つたと噂が休み時間に流れ始めるなか、

「……カズ、生きてる?」

「和は本当に現代文ダメみたいだな」

和真は西村教諭に自習の時間だしせつかくだからこの時間に回復試験を受けるように言われて現代文の試験を受けてきたのだがどうやらできなかつたようで魂が抜けかけており、清美と一心は白くなっている和真を指で突き反応があるか確認するが、

「……山下さん、結城君は大丈夫なの?」

「ああ?」

和真に反応はなく、友香は頭を押さえてため息を吐きながら清美に聞くと清美は苦笑いを浮かべながらも、

「山下、一心、突いてやるなよ

清美と一心は和真を突くのを止めずにいるためトオルはため息を吐く。

「それで、結城君がこの状態だと次はどうしたら良いのかしら?」

「うーん。一先ずはFクラスがBクラスにどんな条件を出したかだよね」

友香は和真の様子にため息を吐きながら、次をビリするかと言い清楚が苦笑いを浮かべた時、

「……はい」

和真の携帯電話がなり、和真は白くなつた状態ではあるが電話に出ると、

「やつほー、結城君、結城君の予想通り、Bクラスの代表の根本くんがAクラスに試合戦争の準備ができるって言ひにきたよ」

「……そつか。なあ、工藤、どうして笑いをこじらえてるんだ?」

電話の相手は愛子であり、愛子は和真に頼まれていたようでBクラス代表の『根本恭一』がAクラスに来たと言うが彼女は必死に笑いをかみ殺しており、和真は愛子に笑いをかみ殺している理由を聞き、

「えーとね。今からメールを送るからそれで確認して」

「ああ……ふほつー?」

愛子は楽しそうに和真にメールを出すと言い、電話を切ると直ぐに愛子から写真が添付されているメールが送られてきてメールを確認した和真は添付されてきた写真があまりに笑劇的だったようで見た

瞬間に吹き出し、

「和、何が送られてき……なんだ、これ！？　き、きたねえ」

「！」、これは「

和真の反応に一心、トオル、平太は和真の携帯電話を覗き込むと和真と同様に笑い始める。

「何があつたの？……代表は見ない方が良いかな」

「何？　そんな事を言われると見たくなるわよ……」

清美は4人の反応に和真の携帯電話を覗くと携帯電話の画面には恭二の女装写真が映つており、清美は笑いをこらえながらも友香に見ない方が良いと言うがその言葉は友香の興味を引き、友香も和真の携帯電話を覗き込むと彼氏の女装姿に友香は固まり、

「えーと、今度は代表が白くなつたぞ」

「まあ、こんなものを見せられればな」

平太は友香をかわいそうな人を見る目で言つと平太は仕方ないとため息を吐き、

「さてと、それじゃあ、Bクラスは試合戦争の準備ができるいるらしいから、明日の朝から試合戦争に付き合つて貰いますか？」

「やうだな。宣戦布告の使者はどうするんだ？」

「まあ、俺が行くんだろうな」

和真是愛子から教えて貰った情報を有効に使いたいようでBクラスへ宣戦布告をしに行くと立ち上ると、

「……結城君、私も行くわ」

「だ、代表様？　だ、誰か他にも付いてきてくれ」

「和、頑張れよ」

「いつてらっしゃい」

友香は笑顔で和真と一緒にBクラスに行くと言うがその目は笑つておらず、和真是背中に冷たい汗が伝い始め、友香と2人でBクラスに行くのは危険だと判断して助けを求めるがクラスメート達は良い笑顔で和真と友香を見送り、

「う、裏切り者！？？」

「……結城君、行くわよ」

友香は和真を引きずつてBクラスの教室に歩いて行き、和真的声が廊下に響く。

第36問

「……失礼するわ」

「……お邪魔します」

友香に引きずられたまま、和真がBクラスの教室の前に着くと友香は勢いよく教室のドアを開け、和真は今の状況にため息を吐きながら友香の後ろからBクラスの教室に入ると、

「ゆ、友香！？」

「……」

恭一は女装させられたままFクラスの『土屋康太』に写真を撮られており、友香はその姿に眉間にしわを寄せ、額にはぴくぴくと青筋が浮かんでいる。

「あ、あのな。代表、落ち着けよ」

「……落ち着く？ 結城君は何を言つているのかしら」

和真は目の前に映る光景に顔を引きつらせながらも友香に近づくのは恐ろしいのか友香から手が届かない距離を取り、友香に声をかけるが友香の声には周りを怯ませる怒氣が含まれており、

「結城君、私達がここに来た理由」

「い。イエッサー、ボス！？」

友香は和真にBクラスに宣戦布告をするよつて言つて和真は友香の勢いに敬礼し、

「Cクラスの結城和真と代表の……」

「小山友香よ」

「CクラスはBクラスに試召戦争を仕掛ける。開戦は明日の朝からだ」

和真はBクラスに試召戦争の宣戦布告をするとBクラスせざわつき始め、

「ゆ、友香、いきなり何を言つんだ？」

恭一は慌てて友香に声をかけるが、

「恭一、あなたがそんな趣味を持つていてるなんて知らなかつたわ」

「ま、待つてくれ。友香！？」 こ、これは俺の趣味なんかじゃない……」

友香は笑顔で恭一の服装の事を言つと恭一は誤解だと叫ぶ。

「恭一、私は女装趣味の変態と付き合つていられないわ。別れましょつ……結城君、帰るわよ」

「お、おひ」

しかし、友香は恭一の言葉など聞きいれるつもりはない、直ぐに振り返ると和真に教室に帰ると言い歩きだし、和真は今の友香には逆らう事はできないようで直ぐに頷くと彼女の後を追いかけて行くと、

「ゆ、友香、待ってくれ……」「これは誤解なんだ……」

後ろからは恭一の声が響くが友香が振り返る事はなく、友香のお怒りの様子にBクラスの生徒達も下位クラスの宣戦布告の使者に制裁を加えるような事は出来ずに立ちつくしている。

「……根本、日頃の行いが帰ってきたんだな」

「結城君、その名前、私の前で出さないでくれる?」

和真は流石に恭一が哀れに思えてきたようで小さく声を漏らすがその言葉に友香の顔はさらに不機嫌になるが、

「だとしても良いのか? あれはFクラスがさせた事だろ。あんな形で別れても」

「良いのよ。それに結城君が言つてた通り、恭一は卑怯だし、クラスメートを駒としか扱わなかつたんでしょ。だから、クラスメート達も恭一が生き恥をさらすような事になつても誰も助けに入らなかつた……恭一と居れば、私もそうなりかねないから、うちのクラスは代表である私が暴走してもちゃんと止めてくれる人もいたしね」

「……まあ、俺の場合は面倒な試召戦争をしたくなかっただけなんだけどな」

和真はそれでも友香に別れなくとも良いんじやないかと言つと友香

は恭一が女装をしていた事以外にも別れたいと思つた要因はなると
言つと自分が代表と言う立場と思い知らせてくれたのは和真だと笑
顔を見せると、和真是友香の笑顔に少しだけ照れたようで彼女から
視線を逸らすと指で自分の首筋を搔き、

「それじゃあ、宣戦布告は終わつたって言つて解散しようぜ。俺は
これから……」

「ボクと優子とデートだからね 」

バイトもあるため友香にクラスに戻つて解散しようとしたとする
と愛子が自分の腕を和真の腕にからめて和真に声をかける。

第36問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

根本、振られる。

和真「さすがに酷くないか？」

まあ、友香にも友香で考える事があつたと言ひ事で……それより、和真はモテますね。

和真「いや、意味がわからないからな。工藤は俺をからかつて遊んでるだけだし」

アンケートも投票がない状態に進んでいますが投稿キャラ募集をともにヒロイン決定アンケートも引き続き募集していますのでよろしくお願いします。

和真「そつ言えば投稿キャラって使いたいのは出でてるのか？」

そうですね。女の子の方は今の状態ならこの子かな？ と言つキャラがいますが名前の発表は控えます。『もう発表しろや』って声があれば名前出して使っちゃうかも知れません。男の子はまだ決まつてないです。

和真「そうか」

番宣？

活動報告にバカとテストと召喚獣一次創作の原案を書きました。『僕と私の共同生活?』と言う題名です。

今回の主人公は明久の従妹の女の子です。父親の海外赴任により、明久とともに暮らすように言われた女の子は明久に襲われてしまうのか？

和真「……煽るな」

第37問

「……工藤、ひつくな

「えー、その反応はないんじゃない?」

和真は愛子の行動にため息を吐くが愛子は不満そうに口を尖らせる
と和真の腕に抱きついている腕に力を込め、

「他に反応はないのかな?」

「……」

愛子は和真を挑発するように言つと和真は自分の腕に当たる愛子の
胸の感触に集中しようとすると、

「……愛子、止めなさい」

「結城君も鼻の下を伸ばさない」

友香と優子がため息を吐きながら、愛子を和真の腕から引き離し、

「……」

「……結城君、残念そうな顔をしない」

和真はもつたいたい事をしたと言つのが表情に出で、友香はもつて
度、ため息を吐くと、

「カズ、代表、戻ってきたなら遊んでないで早く状況を説明してよ……修羅場？」

清美は廊下から聞こえる和真と友香の声が聞こえたため、廊下に顔を出すと和真の周りに3人の女生徒がいるのを見て首をかしげた後、

「カズが修羅……」

「……違うからな」

教室に戻つて和真を落としいれるような発言をしようとするのを和真は清美の首をつかんでため息を吐くと、

「工藤、木下さん、ちょっと待つててくれるか？ 試召戦争が明日の朝からだつて伝えてクラスを解散させるから」

「ええ」

和真は愛子と優子に謝り、友香と教室に入つて行く。

「和、代表、山下はどうしたんだ？」

「みんな、聞いてよ。さつき廊下で……」

「山下さん、話が進まないから黙つてくれるかしら」

一心は和真に首を捕まれて教室に戻つてきた清美の様子に首を傾げると清美は廊下で和真を囮んで女の戦いが繰り広げられようとしていたと話を誇張して言おつとするが友香は清美を笑顔で静止すると、

「……代表、目が笑つてないな」

「……ああ」

トオルと平太が友香の様子に顔を引きつらせ、クラスメート達は同意のようで頷き、

「結城君、Bクラスでの事を話して」

「ああ」

友香は和真に試召戦争の開始時間を話すように言つたが、

「……良いか。よく聞け、代表様がクズを振った」

和真にとつては試召戦争の開始時間より、友香が恭一を振った事が重要のように友香が恭一と別れたと言つ。

『な、何だと！？』

『代表、フリーだと！？ 今がチャンスか？ 傷心中ならどうにかなるか？』

男子生徒達は友香がフリーになつたという事実に歓喜の声を上げ始め、

「代表様、人気あつたんだな。まあ、確かに可愛いからな」

「まあ、多少、性格はきついが、気の強い女の子が好きな奴はいるからな」

「……結城君、他に言ひ事はないのかしり?」

和真是歓喜の声を上げてゐるクラスメートの様子を見て頷くと一心は和真的言葉に同意するが友香は額に青筋を浮かべて和真的肩をつかむと、

「いや、やっぱ全員が知つてた方が戦いやすいだろ」

「確実に試召戦争に巻き込まれた腹いせね」

「だらうつな」

和真是笑顔で事實を知つていた方がクラスメート達はBクラスと戦いやすいと言うが清美とトオルは和真が友香に仕返しをしているようこしか見えないと云い、

「と言つ事で、我らが代表様は現在フリーだ。試召戦争は明日の朝から、良いとこを見せて好印象を貰えるんだーー！」

和真是友香を餌として男子生徒達の前にぶら下げてみると男子生徒のやる気はつなぎ上りに上がつて行き、

「……あれだよな。和つてやる時には手段とか選ばないよな

「……まあ、戦略を考える人間としては良いんじゃない

「よ、良くないわよー!？」

トオルと清美は盛り上がつてゐる男子生徒の様子に苦笑いを浮かべ

ると友香はこの状況に付いて行けないよりで顔を引きつりせぬと、

「それじゃあ、各自解散、明日はよろしくな。そうだな。せっかくだから、これも使つか？」

和真は気にする事無く教室を出て行こうとするが何か考え付いたようでのクラス以外の自分の他の学年を含めた知り合いに根本の女装写真を送信し、

「お、鬼だな」

「そうか？ あいつのせいで姉さんや西村先生はBクラスの生徒でFクラスの教室に設備破壊に入った生徒の停学にするとか仕事が増えてるんだ。制裁は必要だ」

「……違ったわ。シスコンね」

「……それでひとまとめにして良いのかしら」

トオルは和真の行動に顔を引きつらせると和真は全て恭一が悪いと言い切り、友香と清美は顔を引きつらせながら和真の背中を見送る。

第37問（後書き）

どうも、作者です。

和真「今日はなんだ？」

えーと、アンケートに投票があつたから途中経過の報告です。

1位	宏美	5票
2位	洋子、愛子	3票
4位	友香、葵	2票
6位	美春、優子	1票

となります。

和真「何で、工藤が追い上げてるんだ？」

愛子のファンって結構いると思うんですね。普通に可愛いですし、今回はFクラスとながりも薄いから康太との関わりも薄くなるでしょうしね。

和真「そんものか？」

たぶん、アンケートは試召戦争編（第1巻部）が終わるまで受け付けています。投票お願いしますけど……さすがに話を作るのは無理そうだな。と思った場合は次点のヒロインで話を書かせていただきます。

和真「ご了承ください」

第38問

「お待たせ」

「遅いよ」

「別にそこまで待つてないわよ。それにあたしゃひつちかと四つと
奢つて貰つ立場じやない氣がするし」

和真が廊下に出て愛子と優子に声をかけると愛子は待ちくたびれた
と言いたげに言うが優子は元々、秀吉がこのクラスに来た事が原因の
ため、奢つて貰つるのは悪いと言つが、

「まあ、木下さんも気にしないで良いよ。それにかわいい女の子と
知り合いになれるなら喜んでクレープくらい奢らせていただきます」

「そうそう。優子も気にしない。それに結城君の事だから、他にも
考えがありそうだしね」

和真は優子の様子に「冗談交じりでそれくらいこは何ともなこと四つと
愛子は和真が何かを企んでいると言つた時、

「結城」

「はい。西村先生、どうかしましたか?」

西村教諭が和真を呼ぶ。

「ああ、Bクラスの室外機の件なんだが……」藤に木下?」

「えーと、西村先生、ぼくと優子は席を外した方が良いですか？」

西村教諭は破損しているBクラスの室外機の話をしようとするが愛子と優子がいる事に首を傾げ、愛子は西村教諭に自分達は聞かない方が良い話かと聞くと、

「いや、別にそういうわけではない。結城、回復試験の時に話した続きなんだが」

「えーと、今日は高橋先生と西村先生がBクラスの停学者の件で忙しくなったから室外機の修理と言つたが故障個所の確認は明日の放課後になるって話ですよね？」

西村教諭は愛子と優子が居てもかまわないと言つて和真に話の内容を確認し、和真は何かあったのかと思いながら現代文の回復試験が終わつた時に西村教諭から言られた事を思い出しながら言つが何か嫌な予感がしているようで顔を引きつらせる。

「……すまん。業者が明日の午前中にしかこれないんだ。それで明日の朝にいつもより早く登校しててくれ」

「……了解しました」

西村教諭は申し訳なさそうに和真に頭を下げるが和真は文句を西村教諭に言つわけにもいかないため、肩を落しながら頷き、

「すまんな。破損個所が外部からではなく、中の配線にも言つているようでな。俺では何もできなかつたんだ」

「……良いですよ。何かあつた時のための資格ですから、できる限りの事はします」

西村教諭はもう一度、和真に謝ると和真は力なく笑うと、

「それじゃあ、俺は帰ります」

「ああ、すまないな」

「「西村先生、さよなら」「」

和真、愛子、優子の3人は西村教諭に頭を下げて歩き出す。

「結城君、西村先生の話だけど……」

「優子、気にしちゃダメだよ。結城君は巻き込まれ体质だから」

「……その一言でまとめないでくれ。これでもかなり大変なんだから」

優子が校門を出たあたりで先ほど西村教諭が和真にしていた話が気になるようで和真に聞こうとすると愛子は優子が気にする事じやないと言うが和真は肩を落として言うと、

「えーと、結城君って何をしているの?」

「……木下さん、質問が大雑把過ぎるけど、えーと、木下さんって、俺と高橋先生が従姉弟だって事は知ってる?」

優子は和真の様子に苦笑いを浮かべながら改めて、和真が何をして

いるのかと聞き、和真はどこから話し始めるのが一番説明しやすいかと考えて自分と洋子の関係を知っているかと聞く。

第38問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

とりあえず、Fクラスのせいと和真是明日の朝は早くから登校です。

和真「……何で、俺が」

まあ、和真が瑞希のラブレターが盗まれるイベントを潰したから壁に穴がないんまだ楽だと思つてください。

和真「だけど、朝早くからくると……船越先生が出てこないか？」

……ナーフライツ テルンデスカ。ソンナワケナイジャナイデスカ。

和真「おい！？ 何で片言なんだ！！」

さてとアンケートですが、

- | | | |
|----|-------|----|
| 1位 | 宏美、愛子 | 5票 |
| 3位 | 友香 | 4票 |
| 4位 | 洋子、優子 | 3票 |
| 6位 | 美春、葵 | 2票 |

愛子と友香の追い上げ中です。さて、どうなるんでしょうか？

第39問

「そうなの？」

「ああ、それで今は高橋先生と一緒に暮らしてるんだけど、仕事が忙しいせいが家でも仕事をしててさ。家での仕事で手伝える事なんてないだろ。そんな時に学校で書類をひっくり返してくる高橋先生がいて、書類を拾つて生徒指導室の西村先生まで運んだら、今度は西村先生から職員室に書類を届けてくれと言われて……気が付いたら、何かある度に呼び出される」

優子は初めて和真と洋子が従兄妹だと知ったようで驚いたような表情をすると和真は少しだけ後悔しているのか何でここまで学園の手伝いに駆り出されるようになつたのか後悔しているようなため息を吐くと、

「な、なんか観察処分者みたいね」

「……それは言わないでくれるかい。吉井明久ほんものを殺したくなるから」

「ええ、わかつたわ」

優子は教師の雑用を手伝つている和真の事を聞いて『観察処分者みたい』と言うと和真の目つきは鋭くなり、優子は和真の変わりように驚いたようで顔を引きつらせると、

「ぼくと知り合つたのは水泳部の顧問の先生に結城君が捕まつてプールのシャワーの水漏れを直してた時だよ」

「……そんな」とまでしてゐるの?」

愛子は空気を読まずに和真と知り合つた時の話をするとき優子は和真の仕事内容に苦笑いを浮かべる。

「ああ、まあ、元々、手先は器用だし、Aクラスの2人に言う事じやないと思うんだけど個人的な考へで学校の勉強は必要ないと思つてゐるから、何かあつた時に使える資格を取ろうと思つてそつちの勉強をしているうちにね。資格試験を受けに行くと実技とか凄い人がいるし、コツを聞いたりもしてゐる」

「……あたし達とは違う勉強の仕方ね」

和真は少し冷静になつたようで苦笑いを浮かべて言つと優子は感心しているようではあるがそれ以外にも何か考へる事があるようで頷き、

「まあ、後は……資格試験を受けるのつて結構、金額がかかるんだよ。それで基本的に放課後はバイト三昧で……働いてるところを工藤に見つかつた」

「だつて、新作が出てるのにお小遣いはピンチ、そこに人の良さそうな結城君が働いてるんだよ。まずは交渉してみる余地はあるでしょ」

和真は自分がバイトしている理由には洋子に学費を返そうと思つてゐる事もあるがそれを話して両親が亡くなつてると知られて『かわいそうな人』を見るような視線は受けたくないため、その部分を伏せてバイトをしている理由を話すと愛子は和真にたかるきっかけになつた時の事を話し、

「……愛子、少しは遠慮したら」

「……木下さん、もつと言ひてやつてくれ」

優子は愛子に捕まつた時の事を思い浮かべたよつでため息を吐いて愛子に遠慮するよつに言ひつと和真は優子を応援すると、

「優子、気にしなくて良いんだよ。結城君はこいつ言つてるけど、ぼく以外にもソフトテニス部の中林さんとかにも捕まつてるから」

「……それこそ、遠慮してあげなきことよ」

愛子は和真が宏美にも捕まつてゐるから気にする必要はないと言つが優子は学園では教師達に捕まり、それ以外にも宏美や愛子に捕まつてゐる和真が哀れに思えてきたよつでため息を吐く。

第39問（後書き）

どうも、作者です。

アンケート

1位	愛子	6票
2位	友香	5票
3位	宏美、優子	4票
4位	洋子	3票
5位	葵	2票
6位	美春、 清美	1票
7位		

愛子がトップに躍り出ましたが、愛子かあ。
そして、宏美から清美への乗り換えが1人。
(苦笑)

第40問

「それじゃあ、俺は着替えてくるから」

「うん」

和真達は和真のバイト先であり、清水美春の父親が経営している喫茶店『ラ・ペディス』に着くと和真は他のバイトスタッフに愛子と優子を任せると着替えるために奥に入つて行く。

「……結構、大きなお店ね」

「あれ？ 優子ってここにきた事ないの？ 結構、美味しいって有名だよ」

「そうなんだ……お、美味しいそう

優子はこの喫茶店にきた事がなかつたようで喫茶店の内部をきょろきょろと見回していると愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべると優子はテーブルに置いてあるメニューを開き、写真付きで見えるケーキやクレープを見て小さな声でつぶやくと、

「優子、美味しいぞうじゃないよ。どれも美味しいんだよ。季節限定の新作も結構出るし、だから、どうにかしないとおじづかいが足りなくなっちゃうんだよ」

「……それでも結城君にたかるのは違つでしょ」

愛子は和真にたかる理由は正当だと呟つが優子は愛子の言い分は間

違つてゐるため息を吐くが、

「優子、そりは言つてもね。食べれば、結城君にたかりたくなるが
気持ちわかるよ」

「……工藤、頼むから木下さんまで、おかしな道に引き込まないで
くれ」

愛子は優子も和真にたかりたくなると言つた時、着替え終えた和真
が2人の元に戻ってきてため息を吐く。

「あ、お帰り」

「……ウエイター服？」

愛子は和真の主張を無視すると優子は和真の姿に何かあるのか拳を
強く握り締め、

「木下さん、どうかした？」

「な、何もないわよ！」？

和真是優子の様子に首を傾げると優子は慌てて首を振り、

「それで、何にする？」

「あれ？ 座るのバイトは？」

和真是空いている愛子の隣に座り、愛子は和真の行動に首を傾げる
が、

「ああ、まだ混むまで時間があるしな。店長も混むまではゆっくりしていい良いって、それにAクラスの2人に聞いておいて欲しい事もあるからね」

「やうなの？」

和真は苦笑いを浮かべて愛子と優子に話したい事があると言い、優子は首を傾げる。

「いや、俺達CクラスがBクラスに試合戦争を仕掛ける事になっただろ。たぶん、FクラスはBクラスとFクラスを天秤に掛けさせてFクラスとの試合戦争を選ばせる計画だったと思うから、それを俺達が潰したから、それに乗る必要はないって事を教えておこうと思つてね。後はもしかしたら、何か他の手を使って同じように条件を持つてくる可能性もある」

「Fクラスがそんな事を考えていたって言ひつの？」

和真はこの次にFクラスが何かしてくる可能性があると言つと優子は最低学力のクラスであるFクラスがそんな事を考えていろと言つ事が信じられないようで眉間にしわを寄せるが、

「充分に考えられる事だよ。やうじやなきや、FクラスとDクラスの同盟もCクラスへの挑発もBクラスを行かせる事もなかつたからね」

「確かにそうかも」

和真はFクラスには成績とは違う頭の使いができる人間がいると

言い、愛子はFクラスが仕掛けてきた事に苦笑いを浮かべると、

「それで、まだ代表様には話をしてないんだけど、1学期の間、CクラスとAクラスの正式な同盟を提案させて欲しい」

「同盟？ 今更？ それも今学期だけ？」

和真は優子と愛子に同盟を持ちかけ、優子は首を傾げる。

「ああ、基本的に現時点で俺達CクラスはAクラスには勝てないと思つている」

「そんな事をほつきと言ひやうんだ」

和真はCクラスではAクラスに勝つ事はできないと言ひ、愛子は苦笑いを浮かべるが、

「まあね。うちには姫路さんのようにAクラスとともに戦える人間もどれか一つでもAクラスに届く人間もいない。木下さんや工藤の相手だとうちのクラスは3人で戦わないといけないし、策によつてAクラスと戦えるのつてFクラスだけなんだよ」

「……結城君は戦う方法を考え付きましたけど」

和真はFクラスを評価はしているようで自分達にはない武器をFクラスは持つていると言つと優子は和真が自分達をはめる事を考えているのではないかと視線を鋭くする。

「俺は試合戦争はする気無いよ。就職希望だし、自分の点数を下げるような事はしたくない」

「……相変わらず、やる気ないね」

和真是優子の視線に苦笑いを浮かべると愛子は和真の様子にため息を吐き、

「俺達がBクラスに勝てばFクラスは俺達を策に巻き込んでくる可能性もあるからね。CクラスがAクラスを狙っているとか偽情報を流したりね。同盟は秘密裏に進めてCクラスとAクラスしか知らないように学外でまとめる方が良いだろ」

「……確かにね。でも、結城君があたし達にそこまで協力する意図が見えないんだけど」

和真是同盟は他のクラスにばれない方が良いと言つと優子は和真の考えに納得する事もあるようで頷き、

「それは簡単だよ。結城くんはシスコンだから、高橋先生がAクラス以外の設備に行かせるわけにはいかないんだよ」

「……そう。一先ずは有益な提案だし、代表に話をしてみるわ」

愛子は和真がシスコンだと言い、優子は眉間にしわを寄せたまま頷き、

「まあ、よひしく。それじゃあ、俺はバイトに戻るから」

「うふ。そういう、結城くん、ほくまーれとこ。優子は

「それじゃあ、あたしはこれとこ」

和真は混んできた店を見てバイトに戻ると言いつ、愛子と優子は2品ずつメニューを選び、

「……何で2品に増えてるんだ?」

和真はため息を吐くが愛子と優子は口論を始めたためと黙り切られる。

第40問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

広がる和真のシスコンと言つ尊。

和真「……広めるな」

まあ、事実ですしね。そして、和真が勝手に進めるCクラスとAクラスの同盟。

それも全部、洋子のため。（爆笑）

和真「まあ、一応は今学期にしたしな。クラスもAには届かないって認めてるんだ。害はないだろ」

そうかも知れませんが友香が怒りますよ。

和真「その時はその時」

投稿キャラの話。

一先ず、落ち着いたのかな？って感じです。

和真「きまつたのか？」

悩みどころです。現在は女子生徒は2人にしほつてますが、このま

ま2人採用にしちゃう?って感じです。

男子生徒は今のままだと当確。

和真「ここからの追い上げキャラがいるかだな」

そうですね。

アンケート

1位	愛子、友香	7票
3位	宏美	5票
4位	優子	4票
5位	洋子	3票
6位	美春、葵	2票
7位	清美	1票

友香が追い付きました。

最後に番宣です。

今まで他の作品で特別問題として書いてきた他の小説家さんとのラボ小説を『繋ぐ絆と境界破壊』と言つ題名で投稿しました。

第1問に新作として和真を登場させましたので、ご覧ください。

和真「よろしくお願ひします」

第41問

(……これなら、業者を呼ばなくてもどうにかなるかな?)

和真は授業が始まる前にBクラスの室外機の破損状況を確認していると、

「どうだ? どうにかなりそうか?」

「ええ、適当に配線を切つただけみたいなんで、それを繋げばどうにかなると思いますけど……燃えなくて良かつたですね」

西村教諭は和真に室外機の破損状況を聞き、和真は自分の見立てでは自分でも修理はできそだと言うが、破損状況から最悪の状況にならなくて済んで良かつたとため息を吐き、

「……そうだな。確かに最悪の場合はそう言つ事も考えられたんだ」

「……室外機を壊して、平然としているバカがいる事が信じられませんね。下手したら大事故ですよ。それで誰か死んだら、責任どれるのかよ。大島先生もそんな状況で協力しないで欲しいですね」

西村教諭は頭を抑えると和真は試合戦争でFクラスが窓から侵入して勝利を収めたと聞いていて設備を壊してまで勝利をつかもうとしたFクラスも設備を守るためにFクラスと同盟を組んだDクラスにも嫌悪感を抱いているようであり、最後にBクラス代表を倒した教科である保健体育の担当教師である『大島教諭』にも考えて欲しいと言つ。

「……まつたくだ。しかし、やつてしまつた事はビリよつもないだろ。試召戦争が一段落したら坂本と吉井にはきつたり指導をしてやる」

「せうじて、一度とこんな事を起しかねによつて

「ちよつと待て!？」結城、ビルに行くつもつだ!？

西村教諭はFクラスの吉井明久と坂本雄一にきつちつと指導すると言つと和真は平然とBクラスの窓から学園に入りますとし、西村教諭は驚きの声をあげると、

「必要な道具を持つてくるんですよ。まあ、直ぐに直るわけでもないから応急処置くらいはしないといけないでしょ。後、俺はこのまま修理に入るんで、出席確認は誤魔化して置いてください」

「……あのな。そんなわけに行くか

和真は家から修理道具を持ってきて授業をさぼつて修理すると言つと西村教諭はため息を吐くが、

「どうせ、今日の朝から試召戦争なんですから自習だし良いでしょ

「……それをサボる理由にするな

和真は試召戦争をやる気はないよつて苦笑いを浮かべ、西村教諭は和真の言葉に頭を押されてため息を吐く。

「そんな事を言つても俺だつてヒマじやないんですよ。今週は学校終わつたら直ぐにバイトなんで今からやらないうなら、業者を入れな

いなら来週まで室外機はこのままです」

「……わかった」

和真はそれなら修理は業者を呼んでくれと言つと西村教諭は納得はいかないようだが頷き、

「それじゃあ、ちょっと着替えてきますよ」

「……着替え？ そこまで本格的にやるのか？」

和真は勝つたと言いたげにくすりと笑い着替えてくると言つと西村教諭は和真がずいぶんと本格的にやるつもりだと驚きの表情をするが、

「いや、工具とか入れないといけないんで制服のままじゃ、いちいち脚立を上り下りしないといけないじゃないですか。下手にこのままやつて制服を破いても嫌ですね」

「……なるほどな。確かにその通りだな」

和真は着替える意味はあると言つと西村教諭は納得が言つたようで頷く。

第41問（後書き）

「どうも作者と

和真「主人公です」

和真、試合戦争ボイコット。（爆笑）

和真「点数、減らしたくないからな」

まあ、良いのかな？ と言う感じですが、察しの良い人は和真が何をするつもりかはわかると思います。（悪笑）

和真「さあ、どうなるんだろうね」

アンケート

1位	友香	8票
2位	愛子	7票
3位	優子	6票
4位	宏美	5票
5位	洋子	3票
6位	美春、葵	2票
7位	清美	1票

友香が単独首位の立ちました。

和真「代表様か？」

まあ、本来、作者が考えていたのが友香と宏美なんでこのままが良

いですね。

愛子も優子も他で書いてるから個人的に同じヒロインで話を書きたくない。

和真「ぶつちやけるな」

なんか同じものにならそつたな気がしてね。（苦笑）

第42問

「……山下さん、結城君はどこに行つたのかしら？」

「さあ？」

友香は朝のHRが終わっても和真が教室に来ないため、こめかみに青筋を浮かべていると清美は友香の様子にどうしたら良いかわからぬいため、

「ちょ、ちょっと、誰か、カズを見てないの？」

「いや、今日は見てないな。カバンは置いてあるから、來てるとは思つんだけど……逃げたか？」

「逃げたんだろうな」

清美は一心、トオル、平太を捕まえて和真の居所を聞くが3人は和真が逃げたと言い、

「あ、あいつは何をしてるのよ……」

「だ、代表、少しだけ、落ち着くよ。はい、深呼吸、大きく吸つてゆっくり吐いて」

「……」

友香は怒りをあらわにして叫ぶと清美は友香に落ち着くように言つて友香に深呼吸をするように言つと友香は大きく深呼吸をすると、

「良い？ 結城君になんて任せられないわ……」こんな状況に巻き込んでおいて逃げるなんて良い。意地でも勝つわよ……」

「熱くなってるな。代表様」

「……普通なるでしょ」

友香はそれでも和真に対する怒りがおさまらないため、クラスメート達にげきを飛ばすがトオルは友香の様子に苦笑いを浮かべ、清美は大きく肩を落とす。

「……なあ、山下、今、携帯を見たら、和からメールがきてたんだけど、今、見せると逆効果だと思つか？」

「……どんな内容？」

「……こんな内容」

一心は試合戦争が始まる前に携帯電話の電源を切らうと思った上で携帯電話を開くと和真からメールがきてこる事に気づいて清美、トオル、平太に和真からのメールを見せると、

「……あいつは何がやりたいんだろうな

「……わからないけど、確実に代表がこれを見たら火に油を注ぐよね？」

「……油で済むか？ むしろ、ガソリンだろ。確実にケンカを売つてるぞ」

清美と平太は制服から作業着に着替えて完全に業者の人間な和真と大島教諭の写メが添付されており、友香にだけは見せられないと意見が合致したようで大きく頷き、

「和は根に持つタイプだからな。代表様への仕返しだろ?」

「……と言つたか、自分に仕事を押し付けたクラスへ対する嫌がらせじゃないの?」

「あり得るな。つて何で、大島先生も一緒になんだ?」

4人は和真の目的が友香を始めとしたクラスメートへの嫌がらせだと言つた時、

「そこ、遊んでないで準備、もつすぐ始まるわよ……」

「　　イエス、ボス!!--」

友香から4人に遊んでるヒマはないと言つ怒声が響き、4人は慌てて返事をする。

「見返してやるわ。結城君、私をバカにした事を後悔させてあげるわ

「……カズ、帰つても命あるかな?」

「ど、どうだらうな。ま、まあ、こんなメールを送つてきたんだ。何かあるつて信じよつぜ。」

友香は和真に対する怒りが背後から溢れ出させながら笑つており、4人は結果はどうであれ試召戦争が終わった時の和真の身の安全を心配していると

「行くわよーー！」

CクラスとBクラスの試召戦争の開始を告げるチャイムが鳴り響き、友香はクラスメート達に指示を出すとクラスメート達は当初の予定通り、数学と物理を中心に召喚フィールドを広げてBクラスの生徒と戦い始める。

第42問（後書き）

アンケート

7位	6位	5位	4位	2位	1位	
清美	美春、	洋子	宏美	愛子、	友香	10票
1票		葵	3票	優子	7票	

第43問

「なあ、結城」

「どうかしましたか？」

「どうして、俺がこんな事をしないといけないんだ？　お前は俺に試合戦争の事を頼みに来たんじゃないのか？」

Cクラス対Bクラスの試合戦争が開始されて10分ほど経った時、和真は脚立の上で室外機の修理をしており、一心に写メを送った時に和真の隣に写っていた大島教諭は意味がわからず首を傾げるが、

「何事にもタイミングってのがあるんですよ。それにこいつを直さないと俺達がBクラスに勝つた時に教室の居心地が悪いでしょ」

「勝てるのか？」

「自分達を過大評価して周りを見下している奴らへの対処ならしくらいでも方法は見つかりますよ」

和真はBクラスに負けるつもりもないようで当たり前のようくなどいくらでもあると囁つと、

「こんなものかな？　ちょっと、大島先生、上にあがってきて貰つて良いですか？」

「上に？　2人で脚立に乗るなんて危ないだろ」

「いや、俺は脚立からおりますんで」

和真は室外機の修理にめどが付いたようで大島教諭に上にあがつて
きて欲しいと言うが大島教諭は2人で脚立に乗るのはバランスが悪
いと言うと和真は被つている日差し避け用の帽子を深々と被ると平
然とBクラスの窓を開けて、

「すいません。ちょっと室外機の確認を取りたいんで失礼します。
後、代表の方、すいませんが立ち会いお願ひします」

「ああ……」

業者の人間を装いながらBクラスの教室に入り込み、代表の『根本
恭一』を呼ぶと恭一は和真の格好が完全に修理業者に見えるため、
警戒する事なく近づいてくる。

「それじゃあ、すいませんね。Cクラス結城和真がBクラス代表根
本恭一に保健体育勝負を挑みます。試験召喚」^{サモン}

「へつ？」

「承認する」

和真は恭一が目の前にくるのを確認すると保健体育で恭一に試験戦
争を仕掛けるが恭一だけではなく、Bクラスの教室にいた生徒達が
固まるが大島教諭の『承認』と言つ言葉に2人の周りには保健体育
の召喚フィールドが形成され、和真を2頭身にしたような召喚獣が
手には巨大な両手持ちようの大剣をして真っ白な鎧を装備して
おり、

「早く召喚してくれ。それとも戦意無しと判断して良いのかな？」

「な、何を言つてゐるんだ？」

「いや、だから、今は試召戦争中だ。代表の根本恭一君」

「お、お前は！？ 結城和真！？」

和真是恭一に早く召喚するよつて言つたが恭一は今、何が起きたか理解できていなかつようであり、和真是くすりと笑うと被つていた帽子を取つてニヤリと笑い、恭一はその時初めて田の前にいる業者の格好をした男が和真だと気づき驚きの声をあげるが、

「だから、やつて召喚つただろ」

「へ？ ！？」

「で、召喚はなしか？ まあ、今は回復試験の最中だしな。採点前見たいだから保健体育の点数はないか」

和真是恭一の様子など気にする事なく、恭一の今の保健体育の点数がない事を言つてると恭一は苦虫を噛み潰すような表情をすると、

「……結城、教育者としてこのやり方はどうかと思つんだが」

「せうかも知れませんがこれが試召戦争のルールですしね。それになんかこの卑怯な小者は自分を策士とか勘違いしているんで思い知らせてやううと、あれですよ。人間は負けた後に顔をあげれるかどうかでその後の成長が決まつてくるんですよ」

「お前は……決着、勝者Cクラス」

大島教諭は召喚フィールドを張ったが試召戦争が起こる事なく決着が付いた事にため息を吐くが和真は気にする事なくはひょうひょうと答えると大島教諭は頭を押さえながら和真がBクラス代表の恭二を倒したと認め、Cクラス対Bクラスの試召戦争は開始15分と言う未だかつてない速さで終結する。

第43問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、奇襲。

和真「自分で言つのもなんだけど卑怯だ」

卑怯、汚いは敗者の戯言です。それは今までの歴史が証明しています。

それに和真が一番にやらないといけないのは省エネですから。

和真「確かに。点数削らないで勝てる方法だし」

和真が作業着を持つてきている事で気づいている人たちはいると思
いますがどうなんでしょうかね？

和真「さあね」

戦術等を考える上で和真はやっぱり一人で動く姿が見えました。

和真「と言つたか、代表様を激怒させてる姿」

そうですね。（苦笑）

アンケート

1位 友香 11票

7位	6位	5位	4位	3位	2位
清美	美春	洋子	宏美	愛子	優子
1票	葵	3票	5票	7票	8票
		2票			

第44問

「えつ！？ どいつ言いつ事？」

友香は自ら指揮を執り、代表がそばにいる事でCクラスの戦意は高かつたのだが友香達Cクラスの生徒の知らないところで和真が恭二を倒し、召喚フィールドは四散され廊下にも大島教諭の声でCクラスの勝利が宣言され、友香は意味がわからないため呆然と立ち尽くすが、

「……カズだね」

「……和だな。間違いなく」

友香と一緒にいたトオルと清美は和真が何かやつた事だけは理解したようで苦笑いを浮かべると、

「代表様、遊んでないで早く入ってきてくれよ。俺はヒマじゃないんだから戦後処理は任せるぞ」

「ゆ、結城君？ 何、その格好？」

和真がBクラスの教室から顔を出して友香に戦後処理をしてくれと言つと友香は和真の作業着姿に意味がわからないようではあるがそれより、和真が教室にいなかつた事に腹を立ててているようでこめかみに青筋をぴくぴくさせながら和真に聞く。

「見ての通り、作業着だ。そんな事より、戦後処理してくれよ。俺は忙しいんだからな」

「だから、何で、そんなものを着てるのよ！… そして、何でBクラスから出でてくるのよ… ちゃんと説明しなさいよ…。」

「だ、代表、一先ず、落ち着いて。カズも代表の怒りに油を注がない。何人か代表を押さえるのを手伝つて！…。」

和真は友香の質問にただ一言答えると友香は和真の胸倉をつかみ、清美は友香を和真から引き離し、女子生徒数名で友香を押さえつけるが、

「放しなさい！…あの男には思い知らしてやらないといけないのよ！…この間から私をバカにして」

友香の怒りは加熱されており、女子生徒達を引きずりながら和真につかみかかりそうであり、

「……一先ず、和、説明をしてくれ。そうしないと代表様がお前に襲いかかるぞ」

「襲いかかるのか？ それなら、保健室のベットの上が

一心は和真に一先ず、どのようにして恭一を倒したか、そして、何より、和真がどうして作業服を着ているか教えてくれと言つが和真是一心の言葉に下ネタに走り始め、

「……カズ、こんな状況でおかしな事を言わない。本当に殺されるわよ」

「殺されるなら腹上死希望で」

「結城君！！ あなたは何を言つてゐるのよー。」

清美は和真の下ネタにため息を吐くが和真が止まるわけもなく、友香は顔を真っ赤にして和真を怒鳴りつけると、

「はいはい。反省しますよ。説明もしてやりたいけど、その前に俺も少しある事があるんだ。代表様は戦後処理させといてくれよ」

「やる事？ …… また、ろくでもない事？」

和真は他にもやる事があるから少し開けると言つと清美は和真がまだ何かおかしな事を企んでいるかと思ったよつてため息を吐く。

「まあ、ろくでもない事かは想像に任せると…… 仕返しつてのは最後までしつかりとやらないといけないだろ」

「……ろくでもない事だな」

「…………そうね」

和真は笑顔で『仕返し』と言い切り、トオルと清美は和真の言葉に頭を押さえるが和真のその笑顔になれないクラスメート達は寒気を感じたようで息を飲むと、

「それじゃあ、ちょっと行つてくるから、代表様、よろしく

「え、ええ」

和真は改めて友香に戦後処理を任せると言つと友香も和真の笑顔に

威圧されたようで顔を引きつらせて頷き、

「……あ、あの。結城君って何なの？」

友香は和真の背中を見送った後、顔を引きつらせたまま和真と仲の良い一心、トオル、平太、清美の4人に聞くが、

「カズはカズ」

「システムで根に持つタイプ」

「……それもかなり根深く」

「……ケンカは売らない方が幸せだと思つぞ」

4人は友香から視線を逸らす。

第45問

「戦後処理って言つてもね……何がある?」

「うーん。Fクラスにされたみたいに女装させてみるとか?」

友香は和真の奇襲により、討ち取られた恭一を前に戦後処理をどうしようかと首を傾げると清美は楽しそうに笑いながら、恭一に女装させでみようかと言つが、

「止めてよ。そんな気持ち悪いものは見たくないわ」

「……代表、一応、昨日まで付き合つてたんだよな」

友香は恭一の女装など気持ち悪いと言い切るとトオルは流石に恭一が哀れに思えて、いよいよ苦笑いを浮かべると、

「ま、待つてくれ。友香、昨日のは間違いなんだ!?　あれはFクラスの奴らに無理やり」

「そのわりにはずいぶんと楽しそうだな」

「カズ、それ何?」

恭一は友香に女装はFクラスにはめられたからだけだった時、和真が1冊の本を持って戻ってきて、清美は和真の持っていた本を覗き込む。

「……汚いね」

「汚いけど、楽しそうだろ」

「……そう見えるのがキモいな」

和真の持ってきた本には恭一が女装した姿の「写真集」であり、清美は流石に気持ち悪いようで口元を手で押さえると和真の周りに「クラスの生徒が集まっている」と写真集を覗くと全員に意見は一致し、

「……恭一、一度と話しかけないで、早く出でてくれる」

「ま、待ってくれ。友香あああ……？」

友香は眉間にしわを寄せて恭一に早く教室から出て行けと言つと恭一は友香に弁明したいようだが、

「こや、出るのはお前らだからな」

「……和、お前、冷たいな」

和真は恭一の叫びに冷静にシシ「//」をすり、「心は苦笑」を浮かべると、

「いや、冷たいも何も負けた奴が言い訳するなんて見苦しいだろ。それに俺の仕事を増やした罰はこんなものじゃ終わらない……な。平賀、清水」

「まあ……僕達にも責任があるわけだしね」

「……ええ」

和真はまだ恭一への罰は終わっていないと笑うとDクラス代表の『平賀源一』と『清水美春』の名前を呼ぶと2人は和真に何か抑えられているようで納得いかなさそうに教室に入ってきて、

「Dクラス代表の平賀源一」

「同じく、清水美春ですね。私達はBクラスへ試召戦争を仕掛けます。開始は今から30分後です」

Cクラスに負けたばかりのBクラスに宣戦布告をする。

「な、何を言つてゐんだ！？」

「別に連戦はルール違反じゃないだろ。お前だつて、そんな噂を流してFクラスを騙したんだ。他のクラスが漁夫の利を狙つてくるのは当然だろ」

恭一はDクラスからの宣戦布告に驚きの声をあげるが和真は当然の事だと笑い、

「ゴメンね。根本くん、僕達にもいろいろとあつてね」

「……不本意ですか。何で、美春が結城和真の口車なんかに乗せられないといけないのですか」

源一と美春は室外機を壊した件で和真から何かを言われたよつてBクラスに宣戦布告をする意味を言つと、

「それじゃあ、よろしくね

「……」

源一と美春は自分達の教室に戻つて行き、

「まあ、頑張れよ。ちなみにDクラスとの勝負がついたら次はEクラスが攻めてくる事になつてるから」

「……カズ、あんた、鬼ね」

頭が状況を整理するのを拒絶している恭一の肩を叩き、和真は心底楽しそうに笑い、清美は和真の表情を見てため息を吐くが、

「言つただろ。俺は仕返しは最後まできつちりやるつてな」

和真は笑顔で言い切り、教室にいるCクラス、Bクラスの生徒は和真は敵に回さない方が身のためだと理解する。

第45問（後書き）

いつも、作者です。

『繋ぐ絆と境界破壊』に和真を出演させました。
お相手は由里さんの『バカとテストと本屋さん』より『永瀬夏樹
くんとの共演です。

興味が湧いたら『覗ください』。

第46問

「……結城君、あなたは何をしてるの?」

「見てわからないか。バカクラスがBクラスを倒すためだけにDクラスに壊させた室外機の修理だ」

Bクラスを追い出した後、和真は窓から脚立の上に戻ろうとすると友香は和真が何をするのか理解できないよう眉間にしわを寄せてしまうと和真は見ればわかるだろうと言い、修理を再開し、

「カズ、これが作業着なわけ?」

「だから、見ればわかるだろ。わざわざ、下まで工具とかを取りに行けって言うのか? ただでさえ、面倒な事を押し付けられてるのに時間がかかる事をしてられるか」

清美は和真が作業着を着ている理由を聞くと和真は面倒くさそうに言い、

「……ここから、恭一に仕掛けたわけね?」

「……その格好じゃ油断するだろうな」

友香は和真が室外機を修理している姿に全てが納得したようで顔を引きつらせるとトオルは苦笑いを浮かべる。

「それで、カズはこれから何をする気?」

「何を？ つてなんだ？」

「とぼけるな。お前の性格を考えればこれじゃあ、終わらないだろ。

『仕返しは最後まで』なんだろ？」

清美はまだ和真が何か企んでいると思つていてるようだ窓から和真に聞くと和真は首を傾げるが一心は和真の仕返しはこんなところで終わらないと言つと、

「……やるわね。間違いなくFクラスに仕返しを」

「……代表も和の性格わかつてきたな」

友香は眉間にしわを寄せて和真がFクラス相手に何かするつもりだと言つと平太はうんうんと頷き、

「……別に何もクラスに迷惑をかける事はするつもりはないよ

「やるんじゃない」

和真はクラスに迷惑をかかる事はしないと云つと友香は肩を落としてため息を吐く。

「やつほー。結城君、勝利おめでとう

「……開始15分つて、どうしたら、こんなに簡単に決着が付くのよ？ つて、結城君、あなたは何をしてるのー？」

「ああ。ありがとう。何を？ つて、見ればわかるだろ」

友香がため息を吐いていると愛子と優子がCクラスの勝利のお祝いにきたのか和真に声をかけると和真は窓の外から返事をすると、

「それで、バカクラスはなんて言いに来た？　Bクラスを倒したCクラスが勢いに乗つてAクラスに攻め込んでくるとでも言つてきたか？」

「……ええ、まったくその通りよ」

和真是Fクラスの考え方を見透かしているようで呆れたように言い、優子は和真の言つた通りにFクラスが試召戦争の話をしに来たと言う。

「……結城君、何をするつもり？」

「いや、どうせ、バカクラスはAクラスに仕掛けるつもりなんだ。それなら、仕返しはAクラスにやって貰えれば良いかな？　とね」

友香は和真と愛子、優子の様子に何をするつもりかと聞くと和真是くすりと笑い、

「それで、どんな条件を出してきたんだ？」

「勝負は5対5の勝負。1、3、5戦目をFクラスが2、4戦目をぼく達Aクラスが選択教科を決める。で、5戦目は代表同士の戦いで3勝した方が勝ちつて条件だよ」

2人にFクラスが勝負を挑んできた条件を聞くと愛子は苦笑いを浮かべながら、Fクラスとの試召戦争の内容を話し、

「……すいぶんとむちゅくちゅな。そんな条件飲んでないよな？」

「……それがね。代表が受けちゃったのよ。これでも5対5まで持つて行つたのよ」

和真は愛子から聞かされた条件に眉間にしわを寄せるが優子はFクラスに乗せられている事に自覚があるのかため息を吐く。

第47問

「まあ、受けたものは仕方ないか、それにAクラスがどんな条件でもバカクラスに負けるわけにもいかないからな。相手が有利でも受けないといけないってのもあるか」

「確かにそれはあるかも」

和真是直ぐにAクラスの事情もあるかと言つと愛子はAクラスの代表には考えがあるのかものと笑い、

「それで、結城君に意見を聞こいつと思ったのよ。戦術とかそう言つのはあたし達より、詳しそうだしね」

「ああ。協力するよ」

優子はFクラス代表の『坂本雄一』の考えが読めないようで和真に意見を聞きに来たと言つと和真是窓から教室内に戻り、

「えーと、まずは5対5だからFクラスが絶対に出していく人間」

「……姫路さんね」

「後は土屋康太」

和真是Fクラスで出場してくる生徒を考えようと言つと優子はFクラス最強のカードである『姫路瑞希』の名前を出し、和真是他に『土屋康太』と言つ生徒の名前を出す。

「土屋康太？ 誰？」

「……和、まさか、その男が」

「ああ、『寡黙なる性職者』だ」

優子は『土屋康太』の名前に心当たりがないようで首を傾げると、心には心当たりがあるようで和真に聞くと和真是頷き、

「ム、ムツツリーーー？」

「ああ。説明は省略するけどな。そいつは保険体育は学年トップだ」

優子は聞き慣れない言葉に首を傾げたまま言うと和真是優子の反応が面白いようでくすくすと笑いながら康太の得意教科を話し、

「それで1勝、姫路さんで教科選択して2勝で最終戦で代表を倒すつもりってわけね……失敗した」

「かもな……でも、バカはAには絶対に勝てない」

優子は和真の話に眉間にしわを寄せると和真是苦笑いを浮かべた後、真面目な表情をすると、

「何、結城君が付いているからとでも言いたいわけ？」

「代表様、少し落ち着いてくれ」

友香は他人を食つてかかる和真が気に入らないようで和真を睨みつけて言うが和真是友香の様子に小さなため息を吐く。

「普通に考えてバカ代表が学年主席に勝てるわけがないだろ。ここまで作戦が上手く行っているから、自分の策を見抜いている人間はいないと思っているはずだ。だから、その油断に付け込む」

「油断？」

和真はAクラスの代表が負けるわけないと言つと雄一は油断していると笑うと愛子は首を傾げ、

「普通に考えたら、今回の5戦勝負で最終戦は決まっている。お前達がFクラス代表なら2枚の最強カードはどうで切る？」

「普通に考えたら、この条件だと1、3戦目しか考えられないな」

和真はFクラス代表になつたつもりで考えててくれと言つとトオルは1、3戦目に使うと言い、周りのメンバーもトオルと同じ意見のようで頷くが、

「だけど、バカ代表は3、4戦目でそのカードを切る」

「ちょっと待つて、カズ、どう言つ事よ？」

和真は雄一はそんな事はしないと言つと清美は和真の考えが理解できぬいよつて直ぐに和真に聞き返す。

「ここにまで上手くきている作戦にバカ代表はすべて自分の手のうちだと思ってるんだよ。最初に1対1を持ちかけられれば断られるのは当たり前、3対3、もしくは5対5までなら自分の作戦に気づいている人間はいなってな」

「……それって、あたしが坂本くんに上手くあしらわれたって事?」

和真はこの状況も雄一の想定内だと呟つと優子は眉間にしわを寄せるが、

「ああ、それでここまで上手く言つてこないと油断……まあ、演出ってのに凝りたくなるのが人間つてな。2連敗からの3連勝つてな」

「……それはぼく達、だいぶ、舐められてるよね」

和真は落ち着いた口調で雄一の真理を見透かしてこようつであり、愛子は少しムツとした口調で言つ。

第47問（後書き）

7位	6位	5位	4位	3位	2位	1位
清美	美春	洋子	宏美	愛子	優子	友香
1票	葵	3票	5票	7票	8票	12票

第48問

「だろうな。でも、だからこそ、対策は立てやすい。まあ、バカクラスに誤算があるとしたら俺達がAじゃなくBクラスに仕掛けた事、俺達をけしかけて少しでも主力の点数を削れていれば儲けものくらいで考えてたろうな」

「……それがCクラスを挑発したわけね」

和真は愛子の反応に気づきながらも話を続けて行くと友香は優子の真似をしてCクラスを挑発しにきた秀吉を思い出したようで眉間にしわを寄せると、

「ああ。で、仕返しの内容だけだ。簡単に言えば姫路を潰す」

「は？ ちょっと待て、和、簡単に言つけど坂本が4戦目にだしていくるって事は勝てる算段があつての事だな」

和真は頷いた後、瑞希を潰す事が仕返しになると言つたがトオルは瑞希を倒すのは難しいと言つたが、

「トオル、普通に考えろよ。俺達Cクラスでなら姫路を倒すのは難しいがAクラスだぞ。総合教科で当たらなければ単体教科で姫路と対等もしくはそれ以上に戦える人間はいる。確かに姫路の成績は良いが全教科トップって事はあり得ない。得手不得手は必ずあるからな」

「……確かにそうね。愛子、4戦目で姫路さんの相手ができる?」

「ほ、ほく？」

和真は瑞希相手に総合教科で戦つのは愚かだと言い、単体教科で勝負するように言つと優子は少し考えるようなしぐさをした後に愛子に瑞希と戦えるかと聞き、愛子は優子に突然、話をふられた事に驚きの声をあげる。

「工藤さんって、得意教科あるの？」

「う、うん。保健体育は得意だよ。噂のムツツリーくんと個人的に戦つてみたい。腕輪も持つてるし」

清美は愛子に得意教科は何かと聞くと愛子は苦笑いを浮かべながら保健体育が得意だと言い、

「そりゃ、心強い……が、何かありそうだな？」

「うそ。今も言つたけどムツツリーくんと戦つてみたいんだよね」

和真は愛子に任せた方が良いと言おうとするが愛子の様子に違和感を覚えて聞き返すと愛子は康太と戦いたいと苦笑いを浮かべると、

「ちょっと、愛子」

「ひ、うん。優子の言いたい事もわかるんだけどね」

「……なら、正攻法はダメか？」これは邪道なんだけどな

優子は愛子の反応に考え直して欲しいと言つが愛子にも引けない部分があるようで苦笑いを浮かべたまま答え、和真は愛子の反応に少

しだけ困ったように頭をかく。

「カズ、他にも手はあるのか？」

「Aクラスだから正攻法が1番なんだと思うんだけど、ダメなら邪道だけどな……まあ、女子生徒が出て限定テストで保健体育の実技『体力判定テスト』とかな。Aクラスには文武両道の生徒も多いだろ」

「……ちょっと待ちなさい。そんなものが良いわけがないでしょ」

一心は愛子が勝負に私情を挟みたいのを見て和真に他に手はないかと聞くと和真は流石に卑怯な事がわかつているため苦笑いを浮かべて言つと友香は和真を睨みつけるが、

「一応、召喚戦争のルールとして成績に関係あるテストであれば問題ないはず、保健体育は筆記だけじゃなく、実技の占める割合もあるんだ。ルール的には問題ない。それに、バカ代表が個人戦にしてきたのは同じように何かに限定してAクラスの代表に勝つ気だから、それなら、Aクラスがやつても問題ないだろ。それで文句をつけてくるなら、最終戦にバカクラスの主張も潰せる。まあ、邪道だし、Aクラスのプライドの関係で使えるかはわからない」

「……確かに結城君の言い分はわかるわ。でも、流石に卑怯よね？」

「ああ。だから、Aクラスなら正攻法で姫路を潰すのがベスト、土屋みたいに単体教科だけば抜けているとは違つて姫路は全体的に点数が良いんだ。去年の教科別の点数で確認取れば単体教科勝負だと勝てるヤツは工藤以外にも出でてくるだろ」

「そうね。確認してみるわ。結城君、ありがとう。参考になつたわ

和真は邪道だと理解しているため、決断はAクラスに任せると云つて優子は和真に礼を云つて、

「愛子、戻るわよ」

「うん。それじゃあ。またね」

「さてと、修理の続きをでもするか」

優子と愛子は自分の教室に戻つて行き、和真は窓の外に戻つて行く。

第49問

「ねえ、結城君」

「何だよ？」

和真が室外機を修理している様子を見て友香が和真に声をかけるが、和真は忙したため、不機嫌そうに返事をするが、

「AクラスはFクラスに勝てると思つ?」

「さあな。Fクラスが勝つたら勝つたで俺達が蹴散らしてから、Bクラスと同じようにDクラスの設備まで突落してやれば良いだけだ」

友香は和真にAクラス対Fクラスの試合戦争の結果が気になるようで和真に聞くと和真からはそつけない言葉が返ってくるだけであり、

「それって冷たくない？ 一応は同盟組んでるのよ」

「冷たくないよ。俺は考えられる限りの戦術を伝えた。戦争なんだから変な意地を張つて負けた場合はそれまでの関係つて事だ。それにBクラスとの同盟を簡単に破つたのは誰だ?」

「……そづね」

友香は和真の態度は冷たいと言つが和真是Bクラスとの同盟を破棄した事を引き合いに出すと友香は黙ってしまい、

「うん。相変わらず、カズはクールだね」

「まつたくだ」

和真と友香の様子に苦笑いを浮かべながら清美とトオルが窓から和
真に声をかける。

「別にクールってわけでもないだろ。俺は現実主義者なんだよ……
これで良いな」

「直つたのか？」

和真は2人の反応にため息を吐きながらも修理はしつかりとしていたようであり、室外機は正常に動き始め、

「ああ。これで大丈夫だと思つ……汗ばむ女子の制服姿が見えなくなるのは残念だけどな」

「……結城君はもう少し言葉を選べないの？」

和真は動きだした室外機を見ながらも微妙に複雑な表情をすると友香は眉間にしわを寄せながら和真の言葉に不快感をあらわにするが、
「……確かに夏場は汗で透けるからな」

「そう考えると冷房のない設備も悪くないかも知れないな」

「「Jの男どもは」

トオルと一心は和真の言葉に頷き、清美は眉間にしわを寄せると、

「まあ、冗談はこれくらいにしてな。Aクラスが仮に負けたら俺達は同盟者としてAクラスに宣戦布告して和平交渉で設備を交換する。その後、俺達は負けてないわけだから刀を返してFクラスの喉元に喰いつく。姫路、土屋の点数は減つてのはずだしな。それでFクラスはFランクの設備に逆戻り、俺達はAランクの設備、AクラスはBランクの設備になる。恩を売るならこの後にまたAクラスと設備を交換すれば良い。実際は、姫路一人で一度に相手できる人数なんて限られてるからな。土屋も誰かに犠牲になつて貰う形になるけど決着がついた瞬間にフィールドを変更、保健体育以外にフィールドを変えてやれば敵じゃない。がくえんのはじ吉井は倒すを前提にしないで数名で囲んで足止めすれば良いんだ。他に島田は数学が得意らしいがBランク相当なら2人ないし3人で当たれば倒せる。倒せなければ土屋と同じ対応をすれば良い」

「……結城君、あなた、どこまで考えて動いているの？」

和真は簡単にAクラスがFクラスに負けてしまった時の事を話すと友香は和真の口から出て言葉にどう反応して良いのかわからないようで顔を引きつらせて言つ。

「まあ、Aクラスが負けたらFクラスの設備までしか落とせないからな。Aクラスが勝てば今より1ランク下がるんだ。仕返しとしてはAクラスに勝つて貰つた方が良いんだよ」

「……和、性格、悪いな」

「いや、俺の場合は当然の権利だからな」

「た、確かにね」

和真はFクラスの設備の事を考えればAクラスに勝つて欲しいと言
い平太は和真の様子に苦笑いを浮かべるが和真は室外機を指差して
当然の事だと言つと清美は顔を引きつらせながら頷き、

「それじゃあ、修理が終わつたから、西村先生のところに報告して
くるな」

「ええ」

和真は周りの反応など気にする事なく室外機修理の終了を西村教諭
に教えるために教室を出て行く。

第50問

「結城君」

「ん？ 中林、試召戦争はどうなった？」

和真が西村教諭に修理の報告を終えて廊下に出た時、宏美が和真を見つけて駆け寄ってくる。

「勝ったわよ。まあ、Bクラスは連敗で精神的に大部、弱つてたし、卑怯な気もするけどね」

「卑怯も勝てば問題なし、それに卑怯な事をしてでも勝てば良いと思つてたヤツらの集まり何だ。返つてきただけだろ。自業自得」

BクラスはFクラス、Cクラスに続き、Dクラス、Eクラスにも仕掛けられて精神的に弱つていたようで簡単に決着がついたようではあるが宏美は体育会系の事もあるのか卑怯な事をしたかなと苦笑いを浮かべるが和真はBクラスの行いを許せないようではっきりと切り捨てるど、

「後はFクラス対Aクラスよね？ 結城君はどうなると思ってるの？」

「どうなるって、バカがAに勝てるわけがないだろ」

宏美は和真の様子に苦笑いを浮かべながら、2学年最初の試召戦争がFクラスとAクラスの試召戦争で一段落つくと思っているようで和真に聞くが和真はくだらない事を聞かないでくれと言いたげにF

クラスは負けると言つ。

「うん。まあ、私もAクラスが負けるわけはないとは思うけど、そ
うやって頭」なしに言われると私達もバカにされてる気がするのよ
ね」

「……ああ、悪い。そんなつもりはないよ。中林を含めて少なくともEクラスの連中は部活を頑張ってるだろ。努力もしないような奴らが何もしないで上に挑むのはどうもな……やっぱり、頑張ってる人見てるせいか。そんな事をされるとな」

宏美は和真に自分達もバカにされている気がすると言つと和真は苦笑いを浮かべて宏美に謝り、

「まあ、でも、Fクラスが上に挑む姿は試合戦争だけじゃなく、他にも何かできそうな気がするから私達は刺激されたけどね」

「まあ、確かに周りを焚きつけるには良いのかも知れないけどな。
巻き込まれる身だと面倒な事この上ないぞ」

宏美は挑戦者の姿勢として何かを感じたものもあるのか真剣な表情をすると和真は彼の性格なのか宏美とは対照的に面倒な事は避けたいとため息を吐くと、

「そう言いながらも、クラスを勝利に導くあたり、結城君よね」

「何だ？ そのわけのわからない納得の仕方は？」

宏美は和真のため息を吐く様子に苦笑いを浮かべながら頷くと和真是宏美が何に納得しているか理解できないようで首を傾げるが、

「まあ、気にしないでよ。あ？ そろそろ、私、教室に戻るね……
そうだ。結城君、この間の約束覚えてるよね？」

「ああ、できれば忘れたいけどな。忘れるといつもここだろ？」

宏美は和真に先日の約束を覚えているかと聞くと和真是時間を取られる事もあるため、肩を落とす。

「覚えてるなら、良し。それじゃあね」

「ああ」

宏美は和真の言葉に笑顔を見せると設備の上がった自分達の教室に向かつて走つて行き、和真是そんな宏美の背中を見送るが、

「……あれ？ よく考えたら、中林達も新校舎になつたんだから、一緒に戻れば良いんじゃないのか？ ……まあ、良いか」

和真は宏美の教室は隣になつたんだから、一緒に戻れば良かつたと思うが別に追いかける必要もないと思ったようで頭をかいた後、教室に戻る。

第51問

「和、おつとめいへんわん」

「ああ」

「カズ、さつき、宏美がきたんだけど」

「聞いてるよ。無事に根本を叩き潰したってな」

和真が教室に戻ると清美はEクラスの勝利を和真に教えようとすると和真は先ほど宏美に会つて直接聞いているため知つていると言つて席に座ると、

「あと、やるか」

「今日は何の再試験?」

「集まるな」

本日の回復試験のために自習を始めようとするといつものメンバーに友香を加えて和真の周りに集まりだし、和真は眉間にしわを寄せるが、

「現代文はボロボロだつたんだ。俺達に協力できる事もあるかも知れないだろ」

「そうね。結城君はうちのクラスの主力もあるわけだし、やれる事は協力しないといけないでしょ」

トオルは和真に協力できる部分はないかと思っているようで声をかけたと言つが本心は冷やかしのようで口元は小さく緩んでいるが友香はクラスの代表として和真の成績アップを重要だと思っているようである。

「で、今日は何？ 少なくとも現代文見たく成績を下げるのは勘弁よ。教えた人間が悪いとも思われるし」

「……悪かったよ」

清美は昨日、和真に現代文を教えたが結果が伴わなかつたため息を吐きながら言つと和真は納得がいかなさそうに清美に謝り、「教えてくれるなら保健体育の実技……いや、実戦を代表様か山下に手取り腰取り教えてくれ」

「……結城君、私は冗談で言つてるわけじゃないのよ」

「……わからない。どうして、和真の周りには女の影が多いのかが

和真は冗談めかして下ネタを言つと友香は真面目な話をしているため、眉間にしわを寄せ、清美は和真の人間関係がわからないとため息を吐くと、

「悪かったよ。まあ、今日は家庭科だから、別にそこまで気を張る必要はないからな」

「お。勝機ありか？」

「ああ。振り分け試験の時は順番に解いて言つたが、今回は被服系を捨てて調理系を重点に行こうと思つ」

和真は今日は割と得意な家庭科であると言つと一心は和真の様子に今日は楽勝だと思ったようであり和真是笑顔でできないものは捨てると言い切る。

「……そ、それで良いの？」

「まあ、前回のテストでも調理系は答えを書いたのは10割に近い回答率だつたからな。それならいつそ制限時間内で解けない問題は捨ててしまおうと誰にだつて得意な分野あるだろ。数学は図形は好きだけどグラフが嫌いとかそれと一緒に

「何と言つか男らしいな」

友香は和真の言葉にこれはダメかも知れないと思つたようだが和真是効率を考えるとその方が良いと言つと平太は苦笑いを浮かべる。

「まあ、後は問題次第。被服系が多ければダメかも知れない」

「だ、ダメかも知れないじゃないでしょ。教科書を出しなさい。そつちも解けるようにするわよ」

和真は最初の問題で調理系が続かなければ点数が下がると言つと友香は慌てて和真の隣に座り、和真に教科書を開くように言つと、

「代表様、被服系できるのか？ 意外だ。実はぬいぐるみを縫うのが趣味とかあるのか？」

「そ、そんな事を言つてゐるヒマがあつたら早く準備しなさい……！」

和真是友香の様子に少し意外そうな表情をしながらも彼女をからかうように言つと友香は和真の言葉を否定するかのように声を張り上げるが、

「……なるほど、実は少女趣味か。部屋の中はぬいぐるみでいっぱい」と

「カズ、やう言つ言い方はダメよ」

「や、そんな事はないわよ！？」

友香の反応は明らかに慌てており、

「まあ、気にするな。姉さんの部屋もそんな感じだから」

「……へ？」

和真是洋子の部屋も変わらないと言つてその言葉に教室全体が凍りつく。

第51問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

勝手に洋子先生像を作つてますが第9・5巻を見るとそんなに外れてない氣もする不思議。（苦笑）

和真「それで何のためのあとがきだ？」

今日は最終確認にしようと思いまして、現在募集している和真のヒロイン決定アンケートと投稿キャラ募集を第55問で締めたいと思います。

和真「投稿もなくなってきたしな」

そうですね。キャラ投稿は1人何名までと言つ明確なものもないので新たに投稿してくれても構いません。

和真「新しいクラスメートは」常識人でありますように俺の邪魔をしないように

まあ、無理でしちゃね。（爆笑）

和真「おい。爆笑つてなんだよ！？」

第52問

「……洋子先生の部屋つてぬいぐるみだらけなの？」

「ん？ ああ、結構な数があるな」

「い、意外ね」

清美は和真の言葉に顔を引きつらせながら洋子の部屋の状況を確認すると和真は家庭科の教科書を開きながらあまり興味無さそうに言うと友香は顔を引きつらせたまま頷き、

「別に個人の趣味だからな。意外と言わ歸ても俺にはビリジョウもない」

「……和、そう言えば、前にゲームセンターのUFOキャッチャーを荒らしてたよな？あの時のぬいぐるみって洋子先生の部屋か？」

「ん？ ああ、姉さんが欲しつて言ったのはやつたぞ。後は清水と中林にも男の俺が持つていても仕方ないからな」

和真は洋子の趣味だから自分には何も言つ事はないと言つがトオルは和真と一緒にゲームセンター巡りをした事を思い出して和真に聞くと和真はそのために取つていたわけではないと言つが、

「……流石、シスコンね」

「ええ、結城君のシスコンパワーは侮れないわ」

友香と清美は和真が改めてシスコンだと納得すると、

「それで結城君、被服系なら私はそれなりに点数を取れるし、わかる範囲なら教える事ができるけど」

「ん。 そうだな。 せつかくだし、教えて貰おつかな。 できれば、手取り腰取り」

「……結城君、いい加減にしないと怒るわよ」

友香は改めて和真に勉強を教えようかと聞くと和真は冗談交じりで答え、友香はこめかみに青筋を浮かべる。

「……冗談です。でも、俺の勉強を見るよりは自分の勉強をした方が良くないか？ 今は自習時間なんだし、俺の勉強に付き合つよりは自分の点数を上げた方が効率は良くないか？」

「確かにそうね。でも、元々、試召戦争に参加する気はないと言つていた結城君を巻き込んだのは渡しなわけだし、それくらいはしないといけないでしょ」

「……代表様、男らしいな」

「結城君、やつぱり、私にケンカ売つてる？」

和真は友香の提案はありがたいが効率的に考えた方が良いと言つと友香は少しだけ照れくさそうに和真から視線を逸らして試召戦争に巻き込んだお詫びと言つと和真は友香の性格を彼なりに讃めたようだが友香にはバカにされているとしか感じなかつたようであり、

「……そんな事はないぞ」

「それじゃあ、どうして、目を逸らすのかしら?」

和真は友香の様子に少し怯んだようで友香から視線を逸らすと友香は笑顔だがこめかみに青筋を浮かべたまま和真の肩をつかみ、

「さてと、私達もそろそろ、自分達の自習に戻ろうか?」

「そうだな。山下、俺、現代文、苦手だから教えてくれ」

「そうね。自習時間だし、それなりにまとまってわからないところは教えあつた方が効率は良いわね」

一心、トオル、平太、清美の4人は友香の様子に和真を見捨てて新しい自分達の席に移動しはじめ、

「ちょ、お前ら、逃げるな!?」

「結城君、逃げるって言つのはどう言つ意味かしら?」

和真は4人に助けを求めるが4人は振り返る事はなく、

「……和、実は俺達もお前の奇襲を一言も聞いてない事に腹を立てたりするんだ」

「そう言つ事だ」

4人は今回の作戦で1人で勝手に動いた和真へのお仕置きだと言つ。

第53問

「……」

「あれ？ 結城くんに何があつたの？」

放課後になると愛子と優子がCクラスの教室に顔を出すが和真の魂は抜けかけており、愛子は首を傾げると、

「工藤さん、木下さん、どうだったの？」と言つたが、負けたりっこに来ないか

「ええ、勝つたわよ」

清美が2人にFクラスとAクラスの試合戦争の結果を聞き、優子は勝利報告をする。

「どんな風に決着がついたの？ 結城君の予想はどう今まで合つてたの？」

「……」

友香は和真の予想の精度を確認しようとした人に聞くと優子は魂の抜けかけている和真に視線を向け、

「えーと、10割かな？」

「……そつ言つても良いくらいの内容だつたわ」

愛子は苦笑いを浮かべながら和真の予想は的中していると言つと優子は和真と言う人物の事が理解できないようで眉間にしわを寄せ、

「10割? って、どうした事?」

「……Fクラスの代表者の順番に選択教科。それに結果も」

友香は首を傾げると優子は肩を落として言うと、

「それじゃあ、普通に勝ったって事で良いんだよね? それなら、どうして、木下さんは納得いかなさそうなの?」

「それは……」

「それはね。Cクラスに結城君みたいな人間がいるなら、ぼく達は結城くんを警戒しないといけないわけでしょ。少なくともここまでこの学年をひっかきまわしたFクラスの坂本くんは成績とは違った頭の良さを持つていてるわけだし、それを見破った結城くんにも対等の評価は付くわけでしょ。そして、結城くんがいるCクラスはFクラスより総合得点は高いわけだし、結城くんがやる気になつたら、もしかしたらぼく達も不味いかなつて」

清美は優子の様子に何かあったのかと聞くと優子は言いたくなさそうな表情をするが愛子は隠す事なく、和真の評価がAクラスでは高くなつていると言いつつ、

「それは私達がAクラスに試験戦争を仕掛ける事を心配してるのである事?」

「同盟は継続中だよ

友香と清美は同盟を続けているから自分達がAクラスに仕掛ける事はないと言つが、

「それでも中にはいるのよ。特に今回のFクラスは奇襲や色々な手段を使つてきたわけだし、Cクラスも結局はBクラス相手に奇襲で勝つたから、同盟もあたし達Aクラスを油断させるためじやないかつて」

「そう言う事なんだよね。実際、ぼくは結城くんがそんな事をするようなタイプじやないって知つてるし」

「それに関してはあたしも愛子と同じ意見なんだけど」

愛子と優子はクラスの中から出てきたCクラスを危険視する声に困つているようであり、

「でも、結城君がAクラスに仕掛ける事は絶対にないわよ。私達も結城君にケンカを売るつもりはないし……結城君にケンカを売るのはクラスをまとめる上で得策じやないし」

「うん。カズだからね。Aクラスに試合戦争を仕掛けると言つたら、Cクラスの情報をすべてAクラスにリークしそうだし」

「……情報リークはないでしょ。結城くんの得にならないし」

友香と清美は未だに魂の戻らない和真に視線を向けて言うと優子は2人の言葉を否定するがCクラスの生徒は今日の和真の様子から間違いなくAクラスとの同盟中に試合戦争を仕掛けた場合は和真が敵に回ると判断しているようでCクラス全員で優子にツッコミを入れ、

「な、何なの？」

優子はこのクラス全員からの言葉に意味がわからず驚きの声をあげる。

第54問

「そんな事があつたんだ」

「……笑い事じゃない」

和真は日曜日の午前中に先田、宏美に約束させられた『ラ・ペディス』での新作クレープを前に試合戦争の話をため息交じりで宏美に話していると宏美はいつも和真にからかわれているせいもあるのか和真の困っている姿を見て楽しそうに笑つていると、

「豚野郎、ずいぶんと良い御身分ですわね」

「……清水、何の用だよ。俺のシフトは午後からなんだ。変ないちやもんを付かないでくれ」

美春は店を手伝っているのか、自分が働いているのに宏美と店で話をしている和真が気に入らないようでケンカを売つてくると和真是美春に因縁をつけられる事はしていないと言い、

「清水さん、お邪魔してるわね。新作、凄く美味しいわよ」

「ありがとウ」ゼニコます。中林さん」

「……お前、誰だよ」

宏美は和真と美春の様子にくすりと笑つた後、美春に新作クレープの感想を言つと美春は和真と話していた時とは異なる笑顔で返事をし、和真は美春の変わりように肩を落とす。

「中林さん、忠告しておきますわ。この豚野郎だけは止めておいた方が良いですわ。無害な顔をして」

「清水さん、割と結城君は有害よ。スケベだし、これで結構、鬼畜だし」

「……なあ。中林、どうして、俺は休日の貴重な時間を潰してまでわざわざバカにされないといけないんだ?」

しかし、美春は和真の様子など気にする事なく、宏美に和真は彼氏にするのは止めた方が良いと言つと宏美は美春の言葉に乗っ掛かり、和真はコーヒーを飲みながらそんな事を言われる意味がわからないと言つた時、

「…………？」

「そうよ。ここ的新作クレープが美味しいって女子の間で評判なのよ」

「はい」

Fクラスの『吉井明久』、『姫路瑞希』、『島田美波』の3人が入店していくと、

「……豚野郎、お姉さまとデートですって、許せませんわ。美春の手でハツ裂きにしてやりますわ！！」

「ちよ、ちよっと、清水さん！？」

「……落ち着け。文月の生徒が殺人とか新聞沙汰になると姉さんに迷惑がかかるだろ。だいたい、あれは『デート』と言うよりは吉井がたかられてるだけだろ」

「そんな事は関係ありませんわ!! 美春はある豚野郎をハツ裂きにすると言う使命があるのです。お姉さまに色目を使う豚野郎はすべて美春の敵です。ハツ裂きにして凍結、粉碎してやりますわ!!」

美春は明久を見た瞬間に背後から黒い殺意をまき散らし、明久に飛びかかる勢いで駆け出そうとすると和真は左手で美春の首根っこをつかみ止めるが美春の殺意はさらに膨れ上がって行き、

「……結城君、清水さんをどうするの?」

「一先ずは奥に連れて行つて更衣室にでも閉じ込めて置く」

宏美は美春の様子に顔を引きつらせるが和真は気にする事なく美春の首根っこをつかんだまま立ち上がった時、

「……ユウキカズマ、キサマ、ワタシノカワイイマイエンジェルヲドウスルツモリダ」

『 ゆ、結城君、マスターが暴走したから逃げて! ?』

美春の父親であり、この店の店主が美春と似た殺意をまき散らしながら和真に向かっており、店員が和真に逃げるように言つが、

「……店長も閉じ込めできます。後、少し早いけどシフトに入りますね。中林、迷惑をかけた。お詫びに今日の分は奢る」

「あ、ありがとうございます。私こそ、迷惑をかけたみたいで『ゴメンね』

『え、ええ。人手が足りなくなりそうだから、キッチンの方、お願
いします』

和真は今度は右手で店長の首根っこをつかむと宏美に謝り、2人を
店の奥まで引きずつて行く。

第55問

「カズ、宏美とのデート、楽しかった？」

「……だから、デートじゃないって言ってるだろ」

和真が登校してきたのを見つけて、清美はニヤニヤと笑いながら宏美とのデートの件を聞くが和真は「デートと認識していないため、ため息を吐くが、

「なあ、実際、どうなんだよ。お前と中林って」

「中林さん？ って、ソフトテニス部の？ 結城君って、中林さんと仲が良いの？」

「……だから、集まるな」

和真と清美の様子にわらわらといつものメンバーが集まり始め、それに便乗するように友香まで集まってきて和真は肩を落とす。

「俺とあいつで進展する事はないだろ。あいつのタイプって知的なクールな男だぞ」

「カズ、あんた、何で、宏美好みの男のタイプを知ってるの？」

「実はすでに玉碎済みとか？」

和真は宏美好みのタイプと自分はタイプが違うと言つがその言葉に清美は何か違和感を覚えたようでニヤニヤと笑い、トオルも清美

に続くが、

「面倒くさこから、もつれで良い」

「これは何もないな。もつと、慌てるとかきよじるとか演技でも良いからしろよ！…」

「そうだ。面白くないぞ！… そんなんじゃ世界を狙えないぞ」

「……世界なんか狙わないし、だいたい、何で俺が怒られないといけないんだ？」

和真はすでにこの話題が面倒になつていて、和真の対応に一心と平太は叫ぶが和真是眉間にしわを寄せて怒られる理由はないと言つと、

「……中林さんのタイプって思いつきり、結城君、被つてるわよね？」

「ただけど、カズはクールに見えるけどそもそもなこところが多い。カズも自分を理解してるし、宏美も去年、カズがクールじゃないてところは見てるからね。それより、だからこそ、危険なのよ。一緒にバカをやつてたはずなのにちょっとした事で印象が変わるから……」

友香は宏美のタイプは和真と被つていると言つが清美は苦笑いを浮かべた後、くすりと笑い、

「……最初の印象は最悪でも、男の子は直ぐに成長していくからね。そう思わない。代表」

「や、山下さん、な、何をいきなり言い出すの！？」

「うん。 ここの反応は自覚ありかな？」

「そ、そんなわけないでしょ！…」

清美は友香の耳元で今の和真はどう見えると聞くと友香は慌てて清美から距離をとり、友香の反応に清美はニヤニヤと笑う。

「山下、代表様、騒いでないで自分の席に戻れよ。俺はゆっくりとしたいんだ。お前らもだ」

「和、冷たい」

「冷たくて結構、俺は眠いんだ。だいたい、へーた、気持ち悪い事をするな」

和真は友香と清美の様子を気にかける事なく、2人を追い払つように手を振ると平太は両手を口元に置き、和真を責めるように言つが和真は平太の様子に眉間にしわを寄せると、

「私は結城君に用があるの。山下さん達とは違うわ」

「代表、和へのデートのお誘いか？ 残念だが和は渡さないぞ」

「……わからぬ事を言つてないで散れ」

友香は和真に用事があつたようだが、トオル達男性陣はすでに悪のりを始めており、和真と友香の間に割り込み和真は意味がわからな

いよいよ大きなため息を吐く。

第55問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

アンケート結果発表です。和真のお相手は友香です。

和真「代表様ね」

不満ですか？

和真「だって、代表様は小者と付き合つてたんだぞ。なんか趣味が悪い代表様に選ばれると考えると微妙？」

それも違うでしょ。後は投稿キャラを今回で締切ます。発表は登場時に。

投稿キャラデータ

北条 新 ホウジョウ アラタ

性別：男

所属：2-C

得意教科：数学、物理（130～140点）、成長後：180点程度

苦手教科：古文、英語（80～90点）

総合得点：1480点、成長後：1560点

備考：和真のバイト仲間。和真と同じく『ラ・ペディス』でバイトをしているため、美春とも顔見知りではあるが和真が美春に絡まっているときは生温かい目で見守っている。（かわり合わないようしている）

和真が洋子先生や鉄人に捕まつてバイトに遅れている間は1人でフロアを回す事も多い。

容姿は細身の長身でぱっと見は貧弱そうだけど筋肉質。（ボクサータイプ？）

性格は特にくせもなく平凡な男の子に見えるが美春に巻き込まれる和真を見捨てるあたり凶太い。

召喚獣：二丁拳銃、カウボーイの服

投稿者：リンクさん

尼崎棗 アマガサキナツメ

所属：2-C

性別：女

得意教科：英語（213点）、世界史（184点）

苦手教科：数学、物理、化学（50～60点）

総合科目：1453点

備考：容姿に目立つものはないが騒ぎが好きな女の子で面白そぐだと判断するとすぐに首を突っ込む。新聞部のエースで、康太には劣

るが強い情報網を持つ。カメラテクもたいしたものでたまに土屋康太が唸るほどのものを撮ることもある。

和真や清美と言ったCクラスの主要メンバーとは1年時に同じクラスだったが和真が苦手であまりグループに接近してこない。

普段からデジカメと小型録音機を懐にしぬせており、スクープを探している。

実は意外と真面目で涙もらい、人情家でもある。

将来は報道関係を目指しており、とくに外国語を熱心に勉強している。そのため、英語と現代社会に伸び代有り。

召喚獣：レザーアーマー、ロングボウ

投稿者：G A Jさん

第5・6問（前書き）

投稿キャラクターが登場します。

第56問

「違うわよ。家庭科の回復試験はどうだったのよ？私は勉強を見たわけだし、気になるでしょ」

「ああ。あれか……見ない方が良いぞ」

友香は和真の家庭科の補給試験がどうなったのかと聞くと和真は友香から視線を逸らし、

「これはやつちやつたかな？」

「……和、お前は良い奴だつたよ

「和真、死にフラグだな……ん？ どうかしたか？」

清美は和真の様子に和真の点数が減少したと思つたようで苦笑いを浮かべると一心は悪のりを始めようとした時、いつもとは違つた声が聞こえその声の主に視線が集まるとそこには同じクラスの『北条新』が立つており、新は視線が集まる意味がわからないようで首を傾げると、

「新、どうかしたか？」

「ん。これ、店長が昨日の暴走のお詫びだつてさ」

「お詫びとか言つ前にあのおかしな暴走を止めて欲しいな。もしくは清水がシフトにいる時間帯だけでも時給を上げてくれるとか」

「まったくだ」

和真は新に何の用だと聞き、新は『ラ・ペディス』の名前が入った箱を和真に渡すと2人で苦笑いを浮かべる。

「カズ、北条くんと知り合いで？」

「ああ。バイト仲間」

「なら、何で、今まで教室で和に話しかけなかつたんだよ？」

「それは和真の周りに行くと厄介事に巻き込まれそつだつたから様子見。現に巻き込まれてたし」

「ひつ言ひつ奴なんだ」

清美は和真と新が話している姿が不思議なようで首を傾げると和真是新は自分と一緒に『ラ・ペディス』でバイトをしていると言つと平太は2年になつてからの新の行動に首を傾げると新は悪気などまつたくないようで笑顔でとばっちらりは『メンだと言つと和真は肩を落とし、

「それで、用件はこれだけか？」

「ああ。後はたいした事じやないんだけど……吉井がラブレターを貰つたと言つ噂が！？」

「ほ、北条くん、それって本当？」

和真是箱を開けながら箱の中身を確認した後、モンブランを取り出

しながら新に聞くと新は和真の天敵である明久がラブレターを貰つたと言う噂があると言つと新の話に興味が湧いたのか1人の女子生徒が新に飛び付き事実を確かめようとするが、

「棗、北条くんの首が絞まつてるよ」

「尼崎、暴れるな。モンブランに埃が舞ひ」

「……結城君、そこじやなくて北条君を心配するべきじやないの？」

和真と清美は女子生徒と知り合いのようであり、女子生徒を呼ぶと友香は和真の言葉にため息を吐くと、

「そ、そうだね。わたしつたら、スクープの匂いについ」

女子生徒『尼崎棗』は舌を出して反省の色を見せる。

「……棗、それは良いから手を離しなよ。北条くんの顔が蒼くなつてるから」

「どうやら、死にフラグは新のだつたようだな」

「和、モンブランを食いながら言つな」

しかし、棗の腕は新の首を絞めたままであり、清美は棗の手を新手から放す様子を和真はモンブランを頬張りながら人事のように言い、

「しかし、バカ相手にラブレターね。代表様と言い、その女と言い、Aクラス代表の霧島と言い、男の趣味が悪いのがそろつてるな」

「結城君、いつたいじつと友香の額にはくつきりと青筋が浮かぶ」

和真は友香を見ながら言つと友香の額にはくつきりと青筋が浮かぶが、

「ああ、そうだ。代表様、家庭科のテストなんだけど助かった。代表様のおかげで大部点数を稼げた」

「……そ、そう。それは良かつたわね」

「「「なんじや」「つや…?」「」」

和真は気にする事なく、家庭科の答案用紙を取り出すと点数は345点と書かれており、友香は予想以上の点数に顔を引きつらせトオル、一心、平太の3人は和真の解答用紙を見て驚きの声をあげると、

「……カズ、あんたはどうして、無意識に他人のプライドを打ち砕くの?」

「いや、そんなつもりはない。今回は代表様が教えてくれたところが出たからな。元々、家庭科は悪いわけじゃないし、感謝してる。お礼に何か選んでくれ」

「ええ、いただくわ」

清美は和真を見てため息を吐くが和真はそんなつもりはないと言つと友香に箱からケーキを取つてくれと言つ

第5・6問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

投稿キャラを出させていただきました。

和真「選考理由は？」

そうですね。まずは新君は和真是勤労少年とさせていただいているのでバイト仲間は欲しいと思っていました。そこを突かれました。性格も話の内容から紛れ込ませやすそうだったからです。

棗さんは和真や他のメンバーとの関係がしっかりしていることです。それに和真を少し苦手に思っているのも面白そうだったからですかね？

和真「尼崎とは去年も同じクラスなんだよな」

はい。その中で和真を苦手だと思つ事がありました。それも考えています。面白くできたらいいなあ。

第57問

「で、北条くん、吉井くんがラブレターを貰つたって言つのは」

「落ち着け、これ以上、首を絞められてたまるか」

棗は和真の補給試験の事より、明久のラブレターの方が気になるようで新につかみかかるように聞くと新は棗の手を外せると、

「北条、ここで吉井の話をするのは和の機嫌が悪くならないか?」

「いや、大丈夫だろ。これはこれで吉井が痛めつけられる流れだし、どうせ、どつちに転んだつて吉井を殺すためにFクラスは暴動が起きるんだから知らないより、知ってる方が心構えができるだろ」

「……全然、納得できないんだけどな。いつそ、本当に死んじまわないかな? いや、ダメだ。そうなると報道陣がきて姉さんの仕事が増える」

トオルが明久のラブレターの話を和真に聞かせるのは危険じゃないかと言うが新はどつちでもあまり変わらないと言つと和真はぶつぶつと黒い殺意ものをまき散らしており、

「……私は結城君がいつか、高橋先生のために人を殺しそうな気がするわ」

「それに関しては大丈夫よ。人殺しなんかになつたら、洋子先生に迷惑がかかるから」

「山下の方が正しそうだな」

友香は和真の様子に顔を引きつらせて言つと清美とトオルは友香の言葉を否定する。

「それより、棗、どうしたのよ。あんたがカズがいるところに突撃してくるなんて、あんた、カズが苦手でしょ」

「……」

「……尼崎さん、どうして隠れるの？」

清美は棗に和真との相性が悪くなかったかと聞くと棗は明久のラブレター事件で和真の事は一の次になっていたようだが少し冷静になつたようで清美の後ろに移動し、友香は首を傾げると、

「いやあ、わたし、1年生の時に今見たく、周りが見えなくなつて突撃して結城君を怒らせたから苦手と言つた」

「ああ、そんな事もあつたな」

棗は苦笑いを浮かべながら和真が苦手だと言つと一心はその時の事を思い出したようで苦笑いを浮かべ、

「結城君を怒らせた？ 高橋先生を怒らせたの？」

「……その思考に行きつくあたり、代表様も和に毒されてるな」

「やつね」

友香は和真が怒る理由に一つしか思いつかなかつたようで苦笑いを浮かべると平太は友香も和真に毒されてしまつてると笑うと清美は頷くが、

「尼崎さんの事情はわかつたわ。でも、人の前から隠れるのは失礼よ。結城君の怒る理由なんてだいたい、予想が付くんだからもう大丈夫でしょ」

「……代表様、俺はバカにされてる氣しかしないんだけど」

友香はため息を吐きながら氣をつけければどうにかなると言つと和真是ため息を吐き、

「別におかしな事をしなければ怒んないよ。俺をなんだと思ってるんだ」

「そうだな。だいたい、女子を怒るよりは今は吉井への殺意で和は動いているからな。安全だ」

和真是棗を怒るような事はしないと言つと平太は棗を怒るよりは和真には殺るべき相手がいると「冗談交じりで言つが、

「正直、最近はそれが一番、笑えないんだけどな」

「……確かにそうだな」

トオルと一心は和真の行動から「冗談で済まなさそうだと苦笑いを浮かべた時、朝のＳＨＲ開始の鐘が鳴り、

「わけのわからない事を言つてないで席に戻れ」

「そうね」

和真と友香は全員に自分の席に座るよつに言つ。

第58問

「……始まつたな」

「そりゃ。結城君、抑えてよ」

S.H.Rが終わると廊下は大騒ぎする声が響き、一心は苦笑いを浮かべると友香は額に青筋が浮かび始めている和真に落ち着くように言うが、

「何を言つてるんだ？ 代表様、俺は落ち着いているよ」

「……シャープ、折れたね」

「……折つたな」

和真は落ち着いた声で言つたが和真の持つていたシャープペンシルは中心から真つ二つに折れ、和真の様子にトオルと清美は顔を引きつらせると、

「しかし、ラブレターを貰つただけで暴動つてのはどうなんだ？」

「あれ？ 北条くん、それって勝ち組の発言っぽくない？」

新はFクラスの行動に苦笑いを浮かべるがその言葉は棗の興味を引いたようで棗は田を輝かせながら新に飛びかかるように聞く。

「そりゃ言つわけじゃないけど、俺と和真のバイト先つてそれなりに有名店だからな。他校の男は良く見えるってヤツだ。まあ、俺より

はあつち

「……うん。確かにバイトの衣装をきつちりときてるカズは見た目は悪くないしね。何より、洋子先生が関わってこないから理性的な感じする」

「後はウチの店の名物変態父娘を軽くいなすからな」

「……確かに、あの時の和は男でも惚れるかも知れない」

新はバイト先で他校の女子生徒からラブレターを貰った事があると白状しながらも額に青筋を浮かべている和真を指差すと清美は和真のバイト先での姿を思い出したようで苦笑いを浮かべると新は些細な事で人外化を始める清水父娘の暴走も和真がもてる原因だと言うと平太は大きく頷き、

「あれ？ その時つて北条くんつて何してるの？」

「何つて？ 接客、常連客にもなるとあんな暴走でも動じないから」

「……北条くん、図太いつて言われた事ない？」

「ん。和真からよく言われる」

清美は清水父娘が暴走している店の様子を思い出したようでその時的新の事を聞くと新は普通に働いていると答えると清美は新の性格がわかつてきたよつて眉間にしわを寄せて言つと新は特に気にする事なく答え、

「……結城君が他校の女子からもてるのはわかつたけど、その子達

が今の結城君を見たら幻滅するわね

「だらうな

友香は新の事より額に青筋だけでは治まらなくなり、背後から禍々しいくらいの怒りのオーラを吹き出し始めた和真の様子に顔を引きつらせると一心は和真から少し距離を取る。

「……」

「カズ、ちょっと、授業が始まるけど、ビニに行くつもり?」

和真はゆっくりと席から立ち上るとその姿に清美は和真がどうとうブチ切れたと思ったようで顔を引きつらせながら和真の行く先を聞くと、

「ちょっと、『』掃除をしてくる

「さうか。気をつけろよ

「ああ」

和真は怒りを通り越したのか爽やかな笑みを浮かべてFクラスをゴミと言い切り、Cクラスの空気が凍りつくなか新だけが動じる事なく和真を見送り、

『一、二、三、何だ!?』

『ひ、引け!! 撤退だ!! 我らは異端者の吉井をグロテスクに殺すまでは死ねないのだ!?!』

和真が廊下に出て直ぐに廊下からはFクラスの生徒らしい声が途切れ出し、

「……北条君、止めないのね」

「止めるだけ無駄だからな」

友香は顔を引きつらせて新に和真を止めるよつに言つたが新は無駄な事をするつもりはないと言つたげにため息を吐く。

第59問

「……結城、助かるんだが、授業はどうした?」

「気にしないでください。この分はしっかりと補習でも何でも受けますよ」

「や、そつか。まあ、お前の普段の態度から考えれば補習もないだろうな」

「そうですか? それでは西村先生、俺は失礼します」

「あ、ああ。気をつけて行つてくれるんだぞ」

和真は背後に真っ黒なものをまといながら捕まえたFクラスの生徒達を生徒指導室に引き渡すと直ぐにまだ騒ぎを起こしているFクラスを捕まえるために生徒指導室を出て行き、流石の西村教諭も和真の様子に和真の背中を見送る事しかできない。

「アンタのせいだ『彼女にしたくない女子ランキング』の3位になつてるんだからああつ!!--」

「さりばだつ!!--」

『吉井明久』はラブレターをクラスメート達から守るために逃走をしているなか、同じクラスである『島田美波』に見つかり、彼女の様子に生命の危険を感じたようで全力で逃げ出そうとするが、

「ゆ、結城君!--?」

「……前に言つたよな。他人の迷惑を考えて動けって」

明久は美波から逃げ出そうと振り返った瞬間に和真にぶつかり、床に腰を付くと和真の顔を見上げて顔を引きつらせるが和真是気にする事なく明久の胸倉をつかんで無理やり立ちあがらせると、

「あんた、よくやつたわ。さあ、アキ、観念しなさい」

「ちょ、ちょ、と、結城君、放して！？　このままじゃ、僕は美波に殺されちゃうよーーー？」

「……こい」

美波は和真に明久を引き渡すように言つが和真是美波の言葉を聞くきなどなく、明久を引きずつて歩きだそつとする。

「ちょっと、アンタ、アキを渡しなさいよーーー！　ウチはアキのせいで『彼女にしたくない女子ランキング』の3位になつてるんだから、それなのにあき一人だけ幸せをつかむなんて許せないのよーーー！」

「……知るか。そんな事で青筋を立てているから、『彼女にしたくない女子ランキング』とかくだらないものの上位になるんだる。だいたい、他人のラブレターを破り捨てようとするような奴に彼氏なんかできるかよ。話は終わりだ。さつさとこい。クズ」

「ちよ、ちよ、と、放してよーーー！　ボクは何もしてないよーーー！」

美波は和真が自分の話を聞かずに明久を連れて行こうとする姿に和真の腕をつかむが和真是美波の手を払うと彼女の言葉を斬り捨て明

久の首をつかんだまま進んで行くが、

「ちょっと、あんた、ウチにケンカを売つてるわけ？」

「勘違いするな。ケンカを売つてるのはお前だ。俺はお前にこのクズを引き渡せと脅しをかけられる覚えもない」

美波は和真の態度に和真を睨みつけるが和真には言いがかりでしかないため、彼女の言葉に従うわけはなく、

「ちょっと、結城君！？ ほ、僕は僕の幸せを妬むクズで最低なクラスマートから逃げないといけないんだ！？ そうしないと僕はグロテスクに殺されちゃうんだよ！！」

「知るか。お前が死のうが俺の知った事じゃ……いや、お前みたいなクズでも学内でウチの生徒に殺されると姉さんの迷惑になるな」

明久は和真に引きずられながら自分はこんなところにいると殺されてしまうと叫ぶと和真は最初は明久がどうなると知った事でないと言いながらも洋子に迷惑がかかると考え始め、

「そ、そうだよ。学内で殺人とかは不味いから、僕を助けると思つて」

「それとこれとは別だ。お前が逃走の途中で外したサッカーネットや倒した古書保管庫の本棚、カッターが突き刺さつて廊下の壁、割れた蛍光灯。やる事は他にもあるんだからな」

明久は和真に自分を逃がして欲しいと言つが和真は明久の言葉を聞きいれる事なく明久を引きずつて行く。

第60問

「何で僕がこんな事を?」

「何で? 誰が見たつてお前が当事者だ。お前らがバカな事をやつて壊したんだからな」

和真と明久は被害の1番大きい古書保管庫で散乱した本を片付けていると明久は和真から逃げる事を諦めたようだが自分が壊れた学校の備品の修理をさせられているのが納得が行つてないようであり、ため息を吐くと不機嫌そうな表情の和真が良くそんな事を言えるなと言つ。

「だからと云つて、僕は被害者なのに僕は僕の幸せを守りつとしただけなのに……結城君、先にラブレター読んでも良いかな?」

「そんなもの、後に決まってるだろ。だいたい、被害者? 勘違いするなよ。少なくともお前らバカクラス以外から見ればお前も加害者に決まってるだろ。バカ騒ぎをして学園の備品を壊して、それを使う人間から見たらお前もバカクラスも一緒だ。現にお前のせいで俺は本来やらなくて良い。備品の修理をしてるんだからな。ぐだらない事を言つてないで手を動かせよ」

明久は自分は悪くないと云うが和真はその言葉を斬り捨てるに明久に早く作業を続けるように言い、

「でもさ。これだって僕と結城君でやるのはそれこそ違うじゃないか?」

「……本来ならお前らバカクラス全体でやつて貰いたいところだけどな。それをやると被害が拡大するだけだろ。後、片づけが嫌ならお前も西村先生のところに行つてこいよ。一応はお前は追いかけられてる方だったから、補習はなしつて事で話が付いてるんだ。お前の言う幸せを壊したいつて奴らの中で殺意を向けられながら補習を受けたいってなら別だけどな。補習が終わればまた、地獄の追いかけっこだろうがな」

「……そあ、やううか。結城君」

明久は散乱した本を見てため息を吐くと和真はそれなら補習室に行つて来いと言つと明久は先ほどから自分の命を狙つてきたFクラス生徒を撃退している和真がそばにいる方が安心だと思つたようで作業を再開させる。

「ねえ。これなら召喚獣を使つてやううよ。僕は観察処分者なんだから、いつ言つ時にこそ、使わないと誰かヒマそうな先生を！？」

「……お前、ふざけてるのか？　この学園にヒマな教師がいると思つてるのか？」

明久は作業を再開してしばりへすると良い事を思いついたと言つたげに教師を呼んで召喚獣を使おうとするがその言葉の途中で和真が明久の胸倉をつかみ、

「な、何でだよ。僕は観察処分者なんだから、それくらい」

「観察処分者の役割を履き違えるなよ。観察処分者はあくまで教師や学園の雑用をするのが役割だ。学園や教師の都合で仕事を与えられるつて事だ。この件はお前らがバカ騒ぎをした結果であり、お前

らが責任を持つてやらないといけない事だ。それを自分の都合の良いようにとらえるなよ！－ ヒマな教師がいる？ お前はどれだけ教師の仕事を知っている？ 勤務時間を終えた後に教師が家に持ち帰った仕事を何時までやつてるか知ってるのか！－

明久は和真が怒っている理由がわからないようであり、その態度はさらに和真の怒りに油を注ぐ事になる。

「だつて、それが先生の仕事だろ」

「てめえ」

「結城君、ストップ！－」

明久はそれをやるのが教師の仕事だと言い、その言葉に和真はそれでも手をあげる事は抑えていたのだが明久を殴り飛ばそうとした時、友香が和真の腕をつかみ、

「……古書保管庫の本、大丈夫か？」

「流石にこれはダメになつた本もあるんじゃないかな？」

「カズ、先生から西村先生から許可貰つて手伝いにきたよ

友香以外にもいつものメンバーに新と棗を追加したクラスの生徒達が古書保管庫に入つてくる。

第61問

「和真、少し頭を冷やしてこい。西村先生からこれを預かってるから、購買で飲み物でも買って来い」

「……ああ。悪い」

「代表、人数が多いから、カズについて行って」

「わ、私？ 山下さんの方が良くない？ ……わかったわ」

新は明久の胸倉から和真の手を離さると購買で買い物をしてくるように言うと和真は少し頭が冷えてきたようで古書保管庫を出て行き、清美は和真の様子を見て友香に付いて行って欲しいと言うと友香は自分よりは清美の方が良いと言うが清美達の表情を見て何かを察したようであり、和真を追いかけて古書保管庫を出て行き、

「……吉井、ずいぶんと勝手な事を言つてくれたよな」

「な、何だよ？ だ、だつて、それが先生の仕事だろ」

トオルは和真と明久の話が聞こえていたようであり、去年から和真との付き合いもあるメンバーは明久の言葉にかなり腹を立てているように見え明久は顔を引きつらせながら言い返すと、

「……吉井くん、その言葉、君の家族が先生でも同じ事を言える？
君の家族が家に帰つてから、毎日、日が変わるまで仕事して、朝も同じように早く起きて学校に行く姿を見てたら、同じ事を言える？」

「そ、それは、言えないかも知れないけど、あ、あのさ。結城君の家族に先生がいるの？」

清美は落ち着いた声で明久の家族に先生がいた時、明久は同じ事を言えるかと聞くと明久は和真が怒った意味を察したようで聞き返す。

「……学年主任の洋子先生だ。まあ、関係で言えば従姉弟だけどな。和は家で洋子先生が夜遅くまで仕事しているのを見て、洋子先生のフォローをしようといろいろやつてるわけだしな。これや西村先生の手伝いもその一つだ。先生達だつてお前達バカと一緒に各自の生活があるんだ。それを無視して迷惑をかけてそれを仕事だからか？ ずいぶんと勝手な言い草だな」

「事の発端は吉井くんがラブレターを貰つた事なのかも知れないとさ。吉井くんはクラスのみんなにラブレター見るのを邪魔されて文句を言いたいかも知れないけど、結城くんも一緒にだよ。まあ、わたくしも吉井くんと一緒に結城くんを怒らせた事のある身としては強く言えないんだけどね」

一心はどこかで明久に言つても無駄だと思つているのか本を片付けながら言い、棗は苦笑いを浮かべると、

「それで棗は反省したでしょ」

「吉井、お前はどうするつもりだ？ また、同じような事をして和を怒らせるなら、俺達はお前達バカクラスを許さない。実際、俺達は何の努力もしていないお前らバカクラスにバカや豚扱いされてしまうわたくし返つて奴らもいるんだからな。この後、試合戦争でFクラスを叩きのめしたって良いんだ。悪いけど、そっちの自慢の

代表様の軍略程度、和は見破る

「そ、それは困るよ。これ以上、設備が落としたら、姫路さんの体調が……」

清美は棗は反省しているから和真はその後に彼女を責めるような事を言つていないと言うと平太はFクラスがCクラスを罵倒した事を盾にしてFクラスに攻め込んでも良い言い、明久はこれ以上の設備の劣化はクラスメートの『姫路瑞希』の体調に関わると表情を曇らせる。

「吉井くん、わたしは新聞部なんだけどそれなりにFクラスが試験戦争を仕掛けた理由も調べさせて貰つたから、言わせて貰うけどいきなり試験戦争を仕掛けたけど本当にやるべき事はそれだったの？君は姫路さんの体調を気にしたのかも知れないけど他のクラスに姫路さんと同じくりいに身体の弱い生徒がいたらどうするの？」

「ど、どひ言ひ事？」

「ここは教育機関なんだ。設備で体調を崩す生徒が出てくるなら、それを改善するのは当然の要求だろ。死人なんか出たらスポンサー収入で成り立つてる試験校は終わりなんだからな」

「……北条くん、ずいぶんと冷めた言い方ね」

棗は明久のやりたい事には共感する部分はあるが前提が間違つていると言うと明久は首を傾げると新は文月学園の弱みを逆手に取れと言い、清美は苦笑いを浮かべるが、

「はつきりと言えばFクラスが取つた行動は考へが短絡的、Aクラ

スの木下や上藤から試召戦争の話は聞いたが姫路が言つた『Fクラスが好き。人のために頑張れるFクラスが好き』って言葉、お前、その言葉に顔向けてできるのか？ 少なくともお前達がやつてる行動は人のためじやないだろ。ただ、自分達のために動いてる。それは優しいじやない。甘いだけだ。そんな人間ばかりだから、お前はラブレター貰つただけで命が狙われる。和だつて、洋子先生のために動いてるが面倒だと言いながらも泥をかぶるような事をしてるから、自分達で言うのもなんだが自分達に得はないのに俺達みたいにこんな面倒な事を手伝いにくる人間もいる。お前らはお互いに足を引っ張るだけだろ？』

「トオルが恥ずかしい事を言つてゐー？」

「……山下、茶化すな」

トオルは真面目な表情で明久に言つと清美はトオルをからかい、一
心は清美の行動にため息を吐き、

「……そうかも知れないね」

「少し考え方を改めなよ。だつて、吉井くんは『姫路さんのため』に試召戦争を頑張つたんでしょ。少なくとも誰がくれたかわからないラブレターに浮かれて良いのかな？」

「な、な、何を言つてゐのー？」

「わかりやすいな」

「やうね。姫路さん、可愛いしね。守つてあげたくなるし」

「ちよ、ちよっとー？　お、おかしな勘違いをしないで！？」

明久は和真を助けにきたCクラスメンバーとFクラスの違いに小さく頷くと棗は明久をからかうように言い、その言葉に明久は顔を真っ赤にして慌て出し、そんな明久の慌てよう古書保管庫には笑い声が響く。

第62問

「……代表様、悪かつた」

「謝るならあんな事は止めてよね。吉井くんを感情に任せて殴つたらFクラスと変わらないでしょ。それに結城君が停学にでもなつたら、それこそ、高橋先生に迷惑がかかるわよ」

「……そうだな」

和真の隣に友香が並び、2人で購買へ向かって歩いていると和真は友香が止めてくれなければ明久を殴りつけていた事を自覚しているようで友香に謝ると友香は怒っているようで少し語尾を強くして言うと和真も自覚があるため、弁明するような事はしない。

「ねえ。結城君、ちょっと込み入った事を聞いて良いかな?」

「……何だ?」

「いや、まだ、私は結城君と同じクラスになつて1週間だし、聞いて良いのかな? とは思うんだけどね。結城君と高橋先生の中に何があつたのかな? って、結城君の高橋先生第一主義つて……」

「異常だつて言つんだろ?」

「う、うん」

友香は和真の行動が理解できない部分もあるため、和真に洋子との話を聞こうとすると和真は少し困つたように笑い、

「……ちょっとくらいなら遅れても文句は言われないかな？」

「う、うん。たぶん、結城君の頭が冷えるまで戻つて行かない方がよさそうだし」

「それもやうだな。なら、屋上にでも行くか？ 廊下で話し込んでたら怒られそうだから」

「やうね

和真は何故か友香に話す気になつたようで友香を屋上に誘つと友香は頷き、2人で屋上に向かつて歩き出す。

「……天気良いな。何で、こんな中、授業や設備修理をしなきゃいけないんだ？」

「文句を言わない。学生の本分は勉強でしょ」

和真と友香が屋上のドアを開けると空は青く春の日差しが少し強く、和真は目を細めて学校をサボりたいと言つと友香はため息を吐き、「あ、

「わかつてるよ。さてと、何から話したら良いかな？ って、まあ、あまり話す事もないか」

和真は苦笑いを浮かべると友香に話す内容を少し整理し、

「俺が今、姉さんと一緒に住んでるって事は知ってるよな？」

「ええ。どうしてかは知らないけど」

「2年前、俺の両親が事故で死んだんだ。それから、姉さんは俺の保護者になつてゐる。親戚連中も冷たいもんで誰も食いぶちを増やしたがらなかつたからな」

「えつー!? ちよ、ちよつと待つてよー? 何で、そんな事をあいつと話しかやうのよ?」

「何で? ゆくある話だろ? たまたま、それが俺に起きただけ、それだけだ」

友香に洋子と自分が一緒に住んでいる事を確認した後、自分の両親が事故で死んだと聞いて友香は聞かされた事実にどう反応して良いのかわからないようで慌てるが和真は対照的に酷く冷静に見える。

「で、でも

「普通に考えてみる。良い年の娘が結婚もしていないのにおかしなこぶを付けた。収入もない生きる術も知らない無駄な食いぶちを抱え込んだんだぞ。親戚からはおかしな事を言うのも出てきた。それでも姉さんは俺に手を伸ばしてくれたんだ」

「……」

「俺に返せるもの何て何もない。だから、本当は進学しないで就職して生きる術を探そうと思つた。姉さんにこれ以上の迷惑はかけられない……かけちゃいけないと思つたから、でも、『姉さんは笑つて『家族』なんだからそんな事は気にしないで良い。弟がお姉ちゃんに氣を使うのは生意氣です。甘えなさい』と言つてくれたんだ。」

その言葉は俺の中でかけがえのないものだから

「……そつなんだ」

和真は自分が1人になつた時、洋子が手を伸ばしてくれた事で自分にとつて大切なものだと言うと友香は和真が洋子を大切に思つてゐ事を理解したようで頷き、

「それじゃあ、高橋先生に迷惑をかけないよつにしないといけないわね。結城君、高橋先生の事になると周りが見えなくなるから、そこのせいで騒ぎになつても困るからね」

「ああ。気を付けるよ……そろそろ、帰らないと不味いな」

「そうね。野口君辺りが面倒だとか言つてそつだし」

友香は和真に少し冷静になるよつに言つと和真是苦笑いを浮かべて買い物を済ませて古書保管庫に戻るよつと言つと友香は和真の言葉に頷くと、

「それじゃあ、行きますか?」

「ええ……恩人か? 敵わないかな?」

「ん? 代表様、何か言つたか?」

「何も?」

和真是購買に向かつて歩き始めると友香は和真の話に何か思つた事があるのか小さな声で呟く。

第63問

「悪いな。遅れた」

「ただいま」

購買で飲み物を買ってきました和真と友香が古書保管庫のドアを開けると、

「……えーと、何があつたんだ?」

「あ、ああ?」

なぜか明久は床に膝を付いて涙を流しており、その前にはFクラス代表の『坂本雄一』と『姫路瑞希』が立つており、状況について行けない和真と友香は首を傾げる。

「えーと……簡単に言うとね。ラブレターを書いたのは姫路さんで落としちゃつたのを拾ってくれた人が気を利かせて吉井くんの靴箱に入れてくれたみたいなんだけど」

「……姫路本人にまだ渡す勇気がなかつたわけか？ それで吉井に名乗らずにラブレターを処分したと」

「それで、ラブレターは?」

「あれ」

清美は和真と友香の耳元で今の状況を説明すると和真と友香は全て

を察したようで苦笑いを浮かべてラブレターの結末を聞くと細かく
破かれ修復不可能なラブレターだったものが明久の膝を付いた床の
前に散らばっており、

「……まあ、何と言つたら良いかわからないが、吉井、作業続ける
ぞ。遊んでる時間はないんだ。ここを終わらせたらカッターの刺さ
った壁の修理もあるからな」

「ちよっと、何か優しい言葉をかけてくれるとか無いの！？」

「いや、それ、俺のせいじゃないし」

和真は明久のダメージより、作業を優先すると明久は血涙を流しな
がら和真に向かい叫ぶが和真の反応は冷たく、

「姫路さんとバカクラス代表、あんた達は邪魔しにきたのか？ 手
伝う気がないなら消えてくれ。邪魔でしかないから」

「い、いえ、お手伝いさせていただきます。私のせいですし」

和真は雄一と瑞希に邪魔するなら出て行けと言つと瑞希は古書保管
庫の整理を手伝つと言つが、

「それじゃあ、俺はクラスに戻るか。せいぜい、頑張れよ」

雄一は自分には関係ないと言つて古書保管庫を出て行つとする。

「待て。雄一、元をたどれば、雄一が僕がラブレターを貰つた事を
クラスにばらしたからこんな騒ぎになつたんじゃないか！！ 責任
とつて手伝えよ！！」

「は？ 知らねえよ。それに良いか。俺は明久、お前の幸せがム力つくんだ」

明久はそんな雄二の態度にラブレターを失った恨みもあるため、雄二に責任を取れと言うが雄二是明久の言葉を鼻で笑つて古書保管庫を出て行こうとするが、

「……そつか。この騒ぎの原因はバカクラス代表。お前か？」

「……スイッチ入ったね」

「そうね。姫路さん、危険だから避難しましょうか？」

「え？ え？ 何があつたんですか？」

明久と雄二のやり取りは目覚めさせてはいけない和真の『システム力』を覺醒させる事になり、和真の背後には禍々しいくらいの漆黒の殺意が浮かび上がり、友香と清美は免疫のない瑞希を両脇から抱えて彼女を後ろに下がらせると、

「雄二、かかつたな。今の言葉で貴様は終わりだ！！」

「は？ バカ久、お前は何を言つてるんだ！？」

「……バカクラス代表、今から放課後まで西村先生の補習授業か作業を手伝うかを選べ」

明久は口元を緩ませて雄二に向かい言い、雄二是明久の言葉の意味がわからず明久をバカにした瞬間、和真の右手が雄二の胸倉をつ

かむと雄一の身体は勢いよく壁に押し付けられ、

「それともお前を嫁に渡して嫁に手伝わせるか？　ダメ亭主の責任を取るのは嫁の役目だしな」

「て、手伝わせていただきます」

雄一は和真の様子に今まで生きていて感じた事のない恐怖を感じたよつで顔を引きつらせながら作業を手伝うと頷き、

「システム最凶説」

「……期待はしたけど雄一って、昔、悪鬼羅刹とか言われて恐れられてたんじゃなかつたかな？」

「まあ、今更だな。あの状態の和は西村先生とも対等に戦いそうだ」

和真と雄一の姿に明久は顔を引きつらせたがこのクラスの生徒達は今更と言いたげに作業を再開して行く。

第64問

「しかし……」

「どうかしましたか？」

「何々、カズ、今度は姫路さんにて魔の手を?..」

和真は作業を手伝っている瑞希を見て何か言いたげな表情をすると
清美は和真をからかうように笑うが、

「……山下、俺が見境ないみたいに言つた。確かに姫路さんはかわ
いいけどな。そんなつもりはないよ」

「は、はわわ」

「そう言つながら、もう少し言葉を選んだりじつにかしら

和真は清美の言葉を否定しながらも瑞希にかわいいと言い、瑞希は
面と向かって言われる事もあまりないようで顔を真っ赤にすると友
香は少し不機嫌そうに和真に言葉を選ぶように言つと、

「それは悪かつた。気を付けるよ。代表様」

「あ、あの。それで私に何か御用ですか?」

和真は友香の様子に首を傾げると瑞希は和真に自分に声をかけた理
由を聞き返す。

「いや、ラブレターを破るのは姫路さんのものだつたから、俺が言うのはおかしいのかも知れないけど、吉井が好きならそのまま読ませるのがベストだつたんじやないのか？」

「カズ、あんた、わかつてないわね。乙女心は複雑なのよ」

「そ、そうですよ」

和真は明久へのラブレターで間違いないならそのままにした方が良かったんじやないかと言つと瑞希と清美は男の和真にはわからないと言いたげに言うが、

「いや、自分が貰つたラブレターを破く女子に好意つて持てるのか？」

「た、確かにそうかもな」

和真は純粋に思つた疑問を言つとトオルは苦笑いを浮かべながら頷き、

「あつ！？ そ、それじゃあ、あ、あの」

「それに姫路さんつて最後の踏ん切りがつかなくてラブレターを持ち歩いていたんだろ。自分では渡せなさそうだし、むしろ、チャンスだつた気がして」

「そう言われると結城君の言つ通り、チャンスを潰した気がしなくもないわね」

和真とトオル、2人の男の子の言葉に瑞希は驚きの声を上げると和

真は瑞希の性格が何となく理解出来たようで瑞希は自分のチャンスを潰した気がすると呟つと友香は和真の言葉に頷く。

「で、ですけど、あんな形だと」

「いや……あのさ。聞いて良いかわからないんだけど、姫路さんはFクラスが試召戦争を仕掛けた意味って知ってる?」

「は、はい。吉井くんが私の体調を心配してくれて」

瑞希はそれでも事故のような告白は嫌だと言いたげであり、和真はそんな瑞希の様子に彼女との距離を縮めると瑞希にFクラスが試召戦争を仕掛けた理由を聞き、瑞希は顔を真っ赤にして頷くと、

「男から言わせて貰えれば、吉井には下心がある。姫路さんと仲良くなりたいとかその先とかな。ラブレターの内容は知らないけど上手く行く確率は高かったと思うんだけどな」

「確かに、しかし、学園1、2を争う知的美少女2人がよりにもよつてバカクラス相手かよ」

「いろいろとやる気が失せる結果だ」

和真はそのままラブレターを明久に読んで貰えれば上手く行つたと言つが瑞希が明久の事が好きだと言う事に納得がいかなさそうにため息を吐くとトオルは和真の言葉に同意を示し、

「あ、あの。結城君、黒崎君、それって、吉井くんもあの」

「どうかな? タイミングつてのはあると思うからな。少なくとも

今さつきラブレターを破り捨てた相手から告白されて頷けるかはわからん」

「それならこの方法は……『吉井くんが他の女の子からラブレターを貰つて浮かれてたのが許せなかつたの。吉井くんは私のもの。誰にも渡さない。渡さない。ワタサナイ。ワタサナイ』とか清水さん風に」

「いや、それ、確実に逆効果だろ」

瑞希は明久に告白しても大丈夫だと思ったようだが和真は未だにラブレターを失い打ちひしがれている明久に視線を送つた後、今はタイミングが最悪だと言うと棗が楽しそうに美春の人外化を真似して言うが和真は大きく肩を落とす。

第64問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

オリジナルファンタジーの小説を投稿しました。『性悪魔術師と白銀の歌い手』と

言う作品です。相変わらず、主人公の性格はよくないですがあが作る新たな世界を楽しんでいただければ幸いです。

興味がある方は作者のページから探してみてください。

第65問

「つむ。よくやつてくれた。大変だつただろつ」

「ホントだよ」

「……吉井、何度も言わせるな。お前は自業自得なんだからな」

作業をすべて終了せると西村教諭が顔を出し、差し入れの飲み物を持つてくれると明久は余程、疲れたようで床に腰をおろして疲れたと言うが和真は明久の態度にため息を吐くと、

「まつたくだ。吉井、お前がどれほど結城達に迷惑をかけていたかも理解できただな」

「うー？　は、はい」

西村教諭はため息を吐きながら明久にペットボトルを手渡しながら、先日、明久に話した事のある和真に礼を言つておけと言つた理由がわかつたかと聞き、明久は西村教諭の言葉に珍しく素直に頷き、

「あ、あのさ。結城君、この間は適当に謝つて終わらせようとしてごめん。僕は何もわかつたよ」

「ん？　ああ、わかつてくれれば良いんだけど……」

「あ、カズが珍しい反応をしている」

明久は和真に向かい頭を下げるとき和真是明久の行動に少し驚いたよ

うな表情をすると清美は和真をからかうよつて言つ。

「山下、黙つてろ……まあ、氣にするな。あの時は俺にもいろいろあつたし、お前に当たつたつて部分もあるしな。悪かったよ」

「ひ、うん」

和真は学園長である『藤堂カラル』から物理干渉のできる召喚獣にするために総合得点をあげると言われた翌日であつたため、自分も冷静になりきれていなかつたと自覚もあり、明久に謝ると明久は戸惑つたような表情をすると、

「それに今回の件で吉井だけが原因じゃないって事がよくわかつた。と云つたが、原因の6から7割は他にあるつて気がする」

「……そうだな」

和真は自分がらしくない事を言つているため苦笑いを浮かべた後、原因是雄二にあるんじゃないかと雄二に視線を向けると西村教諭は和真の意見に賛成なのか大きく肩を落とすが、

「あ？ 何を言つてるんだ？」

「少なくとも今日の原因はお前だろ」

「は？ 知らねえよ」

雄二は和真に巻き込まれて修理をさせられた事が面白くないようでは自分は悪くないと言いたげに言つた。

「吉井、言つておく、こいつと縁を切れ。その方が安全な生活が遅れるぞ」

「やつぱり、そう思うかな？ それなら、結城君はどうしたらいいの」「コラと縁を切ると思つて」

「そうだな。一先ずは嫁に引き渡すか？ 人の邪魔をできないくらい徹底的に」

和真は雄二の態度に反省の色が見えないため、明久に雄二と縁を切った方が良いと言つと明久も何度も何度も思つた事があるようで和真に意見を求め、和真是表情を変える事なく、Aクラス代表でもあり、雄二の幼なじみである『霧島翔子』に雄二を任せると言つと、

「おい。何で、翔子の名前が出てくんだけよ！？」

「何で？ つて、Aクラスとの試召戦争でそう決まつたんだろ。ずいぶんと完敗だつたみたいじゃないか。3連勝の勝ちを演出して4戦目で負け決定。とか無様な事をした代表様。それどころか大将戦でも完敗も良いところだつたしな。アドバイスする必要もなかつたな」

「そろそろ、坂本くん、今度、新聞部で試召戦争をきっかけに付き合い始めたカッフルを特集しようと思うんだけど、2学年最初のカッフルとして取材に行くからよろしくね」

「雄二は和真を怒鳴りつけるが和真是Aクラスの試召戦争で決まった事だつと言つと棗が雄二に更なる追い討ちをかけ、

「止めるー？ お前らは俺に何の恨みがあるー？」

「いや、普通に考えて俺達はお前方にバカ扱いされてるんだ。恨みも辛みもだいぶ溜まってるだ」

雄一は自分が不利になつてゐる事に声を上げるが和真は雄一の言葉を斬り捨てる。

「姫路さん、秀吉がお姉さんから雄一の作戦を見破つた人がじクラスにいるつて言つてたけど、あれって結城君かな？」

「そ、そりゃないでしょ？ でも、試召戦争で体力テストなんて」

「木下さん、運動神経も良かつたしね」

明久は瑞希に雄一が考へた試召戦争の作戦を見破つたのは和真じゃないかと聞くとAクラスは和真のアドバイス通りに瑞希を倒しており、瑞希は力になれなかつた事に肩を落とし、

「自分を責めない。それに吉井くん、今は姫路さんをフォローするといつよ」

「そりゃそう。そんなのだから、『嫉妬されて』ラブレターを破かれることになるんだよ」

明久と瑞希の様子に友香と清美は2人をからかいつゝに言つて、

「な、何を言つてるんですか！？ 友香ひやんも清美ちゃんも！？」

「何か、姫路さん、木下さんと木下さんと仲良くなつたね」

瑞希は慌てて友香と清美に言うが明久は2人の言葉の意味を全く理解しておらず、

「……姫路さん、大変ね」

「そうだね」

友香と清美は明久を見て大きく肩を落とす。

第66問

和真は単体教科の補給試験を続けており、目標であった2500点を超えた日の昼休みに学園長室に呼び出されてカヲルの前に立っている。

「やればできるじゃないか。まったく、できないうのはやりたくないだけじゃないか」

「……そうですね」

カヲルは和真の点数に少しだけ満足そうに笑うがその言葉にはどこかとげがあり、言われた和真は面白くなぞうな表情をするが、

「それじゃあ、今日の放課後は調整に入るから、帰るんじゃないよ」

「てめえ、ばばあー！　いい加減にしろよー！　俺はあくまでも手伝いと言つ事でここにいるんだー！　俺の予定を勝手に決めんなー！」

「……結城、少しは落ち着け」

「何だい？　予定があるって言つのかい？」

カヲルは和真の召喚獣の調整をすると和真の予定を聞く事なく、放課後に作業を行うと言つと和真はカヲルの態度がかなり頭にきているようでカヲルを怒鳴りつけると同行していた西村教諭が和真を抑えつけながら落ち着くように言うとカヲルは和真と西村教諭の様子にそこで初めて和真の予定を聞く気になつたようで和真に予定の

内容を話せと言つ。

「バイトが入つてゐるんですよ」

「バイト? 何だい。デートとかじゃないのかい? 悲しいね」

「ばばあ!.. ぶち殺!..」

「……まったく、少し冷静になれるのか?」

和真は西村教諭に取り押さえられて少し冷静になつたようで今日はバイトの予定が入つてゐる事を告げるにカヲルは和真をバカにするように小さくため息を吐き、その態度が和真の怒りにさらに火を点けるが西村教諭の拳骨が和真の頭に振り下ろされ和真は頭を押さえて床をのたうちまわり、

「学園長、結城の言う事ももつともです。ただでさえ、結城は毎日のように補給試験を行うためにバイトを終えた後も家に帰つて遅くまで自習をしていたのです。もう少し、結城の意見も聞くべきだと思います。結城の召喚獣を教師と同じ仕様にするのはあくまでも学園の都合であつて、結城本人には得になるような事でもないのですから」

「……そうさね。しかし、西村先生、あたしが言う事じゃ無いかも知れないけど、やり過ぎじゃないかね?」

西村教諭は床をのたうちまわつてゐる和真の事を気にする事なく、カヲルにもう少し和真の意見を聞いて欲しいと言うがカヲルは西村教諭の言葉の割に扱いの悪い和真をかわいそうなものでも見るような視線で見て頷くと、

「結城はこれくらいしても問題ありません。頑丈さで言えば、ウチのクラスのバカどもと大差ありませんので」

「そうかい。それじゃあ、結城和真、バイトの休みの日を教えな。調整はその日の放課後にしてやるさね」

「……それじゃあ、明日の放課後でお願いします」

和真に1撃を加えた西村教諭は和真相手ならこれくらいは問題ないと言い切り、カヲルは苦笑いを浮かべながら和真の予定を聞くと和真はまだ頭が痛むようで頭を押さえながら明日の放課後にして欲しいと言い、

「わかつたよ。あなたの予定に合わせてやつたんだ。時間に遅れるんじゃないよ」

「わかりました。それでは失礼します」

カヲルもそれなりに忙しいようで時間の調節が必要なのか少し考えるような素振りをした後に和真に遅れるなと言うと和真は言いたい事はあるが言つても無駄と判断している部分もあるようで頭を下げて学園長室を出て行く。

第6・7問

「カズ、お帰り」

「……だから、どうして、俺の席を囲んでるんだ?」

和真が教室に戻ると和真の席はいつもメンバーで囲まれており、和真は頭を抑えるが、

「結城君、どうだったの?」

「……なぜ、吉井と姫路までいるんだ?」

なぜか、和真の席を囲んでいるメンバーには明久と瑞希も紛れ込んでおり、和真は大きなため息を吐くと、

「……このクラスが一番、安全なんだよ」

「和真がFクラスをいろんな意味でぶちのめしだろ。それで吉井が追われる羽目になってるんだと」

「あの後、結城くんが事ある事に坂本くんを霧島さんに引き渡すから、その嫌がらせを吉井くんにしてるんだって」

明久は和真から視線を逸らして言うと新と棗が原因はこの間の明久のラブレター事件だと言い、

「……いや、俺、関係ないだろ。元々、坂本が勝手に墓穴掘つて勝手に墓穴に落ちて勝手に墓穴に生き埋めになっただけだろ。逆恨み

も良いところだ

「……その通りなのよね。でも」

「……それがFクラスなんだよ」

和真は原因は雄一にあると言つが友香は眉間にしわを寄せると明久は力なく笑う。

「……予想以上のバカクラスだな」

「……うん。何か、ごめん」

和真はFクラスのバカさ加減に大きなため息を吐くと明久は和真から目を逸らして謝り、

「まあ、とりあえずはここに居れば設備が壊れないならそれで良い。楽だから」

「結局はそこに落ち着くのよね」

和真は明久が設備を壊してまで逃げ回る事を選択しなかつた事を評価したようで席に座つて弁当箱を取り出すと和真の様子に清美は苦笑いを浮かべ、

「当然だ。お前らだつて、また、あの片付けをしたいのか?」

「いや、遠慮したいけど」

「そうですね」

和真はこの間の設備の修理がかなり大変だったため、また同じ事をしたいかと聞くと友香と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それで、吉井……なぜ、俺の弁当をそんな田で見てるんだ？」

「いや、いや、結城君のお弁当、美味しそうだと思つて」

「吉井くん、違つよ。カズのお弁当は美味しそうじゃなくて美味しいんだよ」

和真はカヲルとの話し合いで時間をとってしまったため、急いで昼食を食べようとすると明久が自分の弁当を覗いている事に気づき、明久に声をかけると明久は気まずそうに目を逸らし、清美は明久の言葉に和真の料理の腕は確かだと呟つと、

「そ、そりなんだ」

「……ホントよ。はつきり言つて自信なくすわ」

「確かにね。洋子先生のために作つてゐるから栄養面もカロリー計算も問題なし……結城くん、調理師免許や栄養士の資格も取れるよね」

「システムの鏡だな」

明久は物欲しそうに和真の弁当を見て頷き、友香は肩を落とすと棗は和真なら調理師や栄養士の資格も取れそうだと言い、トオルはうんうんと頷きながら和真がシステムだと言う事を再確認しているようであり、

「……どうして、俺が責められる流れなんだ？」

「えーと、わかりません」

「まあ、こいつらに言つても無駄だな。吉井、お前は何故、そんなに俺の弁当を見つめる。飯食つたんじゃないのかよ？」

「た、食べたよ。ソルトウォーターを」

和真はため息を吐くと瑞希は和真の様子に苦笑いを浮かべると和真是いつも事だと割り切つたようで弁当の続きを食べようとするが明久の視線が気になるため、明久に食いにくいくと言つと明久は昼食を食べたと言うがその内容はおかしく

「……それは食べたとは言わないだろ」

「結城くん、吉井くんがお昼ご飯を食べられないのは有名な話だよ」

「……」

和真是肩を落として明久の食生活がおかしいと言つと棗は明久の食生活がおかしいのは有名な話だと笑う。

第68問

「は？ 昼飯が食べられない？ ……あまりにバカだから、両親に虐待でも受けてるのか？」

「……確かに、吉井のバカさならそれくらいしても問題なさそうだ」

「……それはスクープの匂いだね」

和真は棗から聞いた話に首を傾げながらも和真は一つの推測をはじき出し、トオルと棗は和真の意見に頷くと、

「違うからね！？ 虐待なんか受けてないからね！？」

「なら、何で、昼飯も食えないんだよ？」

「そ、それは僕は一人暮らしをしてるんだけど……仕送りが少ないんだよ」

明久は虐待と言う事実はないと声を上げると和真は昼食を食べられないような状況はあまり考えられないようで純粋な疑問をぶつけると明久は一人暮らしをしているのだが仕送りが少ないため、昼食に回せないと言つたが、

「嘘だな」

「嘘ね」

「な、何で！？ どうして疑うんだよ」

和真と友香は一言で明久の言葉を斬り捨て、明久は驚きの声を上げて疑われる理由がわからないと言つ。

「いや、普通に考える。いくら仕送りが少ないと言つたつて昼飯は食つだろ。むしろ、抜かすなら朝だろ。それなのに昼飯を抜いてくるなんて何かあるに決まってるだろ」

「そうね。それに本当に仕送りが少ないならご両親に話をするべきでしょ」

しかし、和真と友香は常識的であり得ないと明久の言葉を斬り捨てると、

「そ、それは……」

「……やつぱり、他に何かあるんじゃない」

「それで、吉井くんがお昼を抜いてる理由は？」

明久は口を泳がせ、友香はため息を吐くと清美は何か面白い事があると思ったようで明久に聞く。

「そ、それは……世の中には僕を誘惑するものが多くいるんだよ」

「……用は無駄使いして食費に回す金がないと……バカすぎや」

「……呆れてものも言えないわ」

明久は目を泳がせたまま言葉を濁らせると和真是明久が無駄使いを

している気つき、眉間にしわを寄せると友香も同じ意見のようで呆れたように肩を落とすと、

「だ、だつて、仕方ないじゃないか！！ 趣味にはお金がかかるんだよ」

「趣味にお金がかかるってのは賛成なんだけどね。私もこれに大部、お金をかけてるし」

「……いや、何を趣味にしてるかはわからないけど、まずは何をやるにも身体が資本だろ。飯くらいは食えよ」

明久は自分は悪くないと言いたげに言つと棗は愛用のデジカメを手に明久の意見には賛成できると言つが和真はあり得ないと言い、

「仮に趣味に金がかかるって言つなら、他の出費を抑えるべきだろ。今、光熱費つてどれくらいだよ。1人暮らしなら無駄な事をしてるんじやないのか？」

「そ、それは……」

「吉井くん、カズは主夫だから、節約術は相談した方が良いよ」

和真は明久に無駄な出費を抑える事を進めるが明久の反応は悪く、清美は明久が和真の言う事を信じられないせいでと思つたようで和真に節約術を聞くのは有効な手段だと言うが、

「……ガスはこの間から止められてるから節約はする必要はないよ」

「よ、吉井くん、それってどういつ言う事ですか？」

明久の言葉は話を聞いていた人間は誰一人も予想しておらず、瑞希は顔を引きつらせて明久に聞き返すが和真達はどう反応して良いかわからないようである。

第69問

「……とつあえず、要点をまとめると仕送りはマンガやゲームに使つて食費や公共料金に回す余裕はない」と。

「う、うん」

和真達のクラスのメンバーは明久の仕送りの使い方を一度では信じられなかつたようでは3度、確認すると明久はすでにいろいろと申し訳なくなつてきて、いよいよ身体を小さくして言つと、

「……悪い。あまりの事にびっくりして良いかわからない」

「そうね」

和真は明久の常識から大幅にずれている明久の様子にため息を吐くと、このクラスの生徒は大きく頷き、

「吉井、お前、生活を改める。そのままだといつか死ぬぞ。生活費まで削つてそれで入院や通院、最悪、死んだら、ゲームもマンガもないだろ」

「だ、だけど」

「いや、そこで悩む理由がわからない。俺はゲームもやらないし、マンガも読まないからー!？」

「結城君、君は何を生きがいに生きてるんだよーーー!」

和真は明久に生活態度を改めるように言つが明久は難色を示し、和真は明久がそこまでゲームやマンガに命をかける理由がわからないと言つた時、明久は和真に向かい吠え、

「あ？ 突然なんだ？」

「10の年まで生きていてゲームもやらない、マンガも読まない。君は絶対に人生を損している！！ 君も生活を改めるべきだ！！」

和真是いきなりの明久の様子に少し驚いたような表情で聞き返すと明久にも譲れないものがあるようで和真にも生活を改めるべきだと言つてゲームやマンガの素晴らしさを和真に向かい話し始める。

「……これは俺が怒られる流れなのか？」

「……いや、違うと思つ」

和真是明久が熱く語つているが意味がわからないよう眉間にしわを寄せると新は苦笑いを浮かべる隣りで、

「姫路さん、チャンスよ。吉井くんは食費にお金を回す余裕がない。ここは胃袋をつかむべきよ。毎日、手作りお弁当攻撃とかしなよ」

「やっぱり、そうでしょうか？」

「吉田さん、流石に毎日は無理でしょう。材料費だってバカにならないし、でも、毎日は無理でもそういうのは有効な手かもね」

友香と清美は瑞希に手作り弁当で明久を落としに行くよアドバイスをしており、

「よ、吉井くん」

「何？ 姫路さん？」

瑞希は2人から背中を押されたせいもあるのか勇気を出して明久を呼び、明久が瑞希の方を振り向くと、

「わ、私が吉井くんのお弁当を『毎日』作ってきます」

「へえ、良かつたじゃないか。吉井？」

「ひ、姫路さん、そ、そんなの悪いよー！ 僕の事は気にしなくても良いからーー！」

瑞希は明久の弁当を毎日作つてくると言い、和真は明久を見てニヤニヤと笑おうとするがなぜか明久の顔は一気に血の気が引いて行き、全力で瑞希の弁当の提案を遠慮し始め、

「……代表様、山下、吉井のあの反応を見ると姫路の料理は不味いと思つんだけど」

「……うん。そんな感じがするね」

「な、なんか意外ね。姫路さんって料理とか女の子らしい事つて似合いうるな気がするのに」

和真は明久の様子に瑞希の料理の腕が悪い事を察して友香と清美に話を振ると2人は和真と同じ事を思つたようであり、苦笑いを浮かべ、

「だ、大丈夫だよ。姫路さん、僕の事は気にしなくて良いから！
それに結城君の言つ通りに生活を改めようとも思つていいから！」

「……撤回する。不味いじゃなく生死に関わりそうだ」

明久は瑞希の料理に余程の恐怖があるのか土下座をして生活を改める事を約束し、明久の行動に瑞希以外の人間が彼女の料理の酷さのレベルを察したようで顔を引きつらせる。

第70問

「……どうしよう。一先ずは来週、買つ予定だつたゲーム代を「……ゲーム一つで血涙を流すなよ」

明久は一先ずは自分の命を優先したようであり、なけなしのゲーム代を食費に回すと言つと一心は呆れたようなため息を吐き、

「吉井、節約するなら自炊の方が良いと思つけど料理はできるのか？」

「う、うん。料理は割と得意だよ。昔はよくやつてたし、今は時間がないからやつてないけど」

「へえ、意外」

和真は流石にこれ以上、明久を責めるのは良心が痛むのか明久の生活改善に協力しようとしており、料理ができるかと聞くと明久は料理は得意と答え、清美は意外そうな表情をすると、

「だつて、料理は家の中で一番立場の弱い人間がするものでしょ？」

「……」

明久は首を傾げながら吉井の方針なのか料理ができるようになつた理由を話すが和真を含めた誰一人として明久の言葉の意味がわからずには顔を引きつらせ、

「……吉井がバカなのは吉井家の教育方針にある気がするんだ」

「……結城君、はつきりと言わない」

和真は思つた事を口に出すと友香は和真の言葉にため息を吐き、

「え？ な、何で、みんなは僕をそんなかわいそうな人を見るよつ
な優しい目で見るの？」

「吉井くん、君はそんな事を気にしなくて良いんだよ。純粋なままでいればきっと良い事があるよ。そんな君が好きだつて言ってくれる女の子が絶対にいるから」

「なるほど、吉井がゲームやマンガに走ったのは1人暮らしになつて自由になつた反動か」

和真と友香の意見に全員が納得したようで明久を優しい眼で見守る
ように言うと明久は自分の家族が世間一般からずれている事は理解
できていよいよあり、首を傾げると棗は明久に優しい言葉をかけ、新は大きなため息を吐く。

「それより、吉井、ゲームを諦めるとして仕送りまで金は足りるのか？ 自炊をするとともに公共料金を払えなければ料理もできないから結局は無駄な出費になるだろ？」

「う……」

「そうね。そうなるとバイトとか？ でも即日払つて最近はある
の？」

「吉井くん、やつぱり、私が」

「だ、大丈夫だから！？ 姫路さんは心配しなくて良いから！？」

和真は明久に仕送りまで手持ちのお金でどうにかなるかと聞くと明久は困ったような表情をし、友香は明久の生活費をどう稼ぐかを考え始めると瑞希は諦めていなかつたようで再度、明久のお弁当作りに立候補するが明久は全力で遠慮し、

「即日払いか？ 和真、俺とお前が口添えすれば何とかなるんじゃないか？」

「そうだな。今日は2人ともバイトだし、店長に掛け合ってみるか？」

明久の様子に和真と新は自分達がバイトをしている清水美春の実家でもある『ラ・ペティス』で明久を短期で雇えないかと言うと、

「あ、あのさ。結城君も北条君もみんなもどうしてそんなに親身になってくれるの？」

「あ？ どうしてって、普通だろ？」

「ああ。別におかしな事をやつてるつもりはないぞ」

明久は和真達が明久の事を真剣に考えてている事にどうしたら良いのかわからないようで戸惑ったような表情をするが和真と新は別に特別な事をしているつもりはないと言い、

「そ、そうなのかな？」

「吉井、言つて置くぞ。Fクラスと一緒にするなよ。少なくともあいつらは世間一般的な常識から外れてるからな」

「まったくね」

明久は居心地が悪そうに苦笑いを浮かべるがトオルはFクラスがかしいと言い切ると清美は苦笑いを浮かべ、

「それで、吉井、どうする？ バイトのあてがないなら」

「うん。お願ひできるかな」

和真は明久にバイトの件を確認すると明久は頷く。

第71問

「吉井、行く……酷いな」

「今まで知りあいもないから、Fの教室には来なかつたけど、これは酷い」

和真と新が明久を迎えてFクラスの教室のドアを開けると2人はFクラスの設備状況を見て顔を引きつらせると、

「結城君、北条君、座つて待つてよ。すぐに行くから」

「ん。明久、どこに行くつもりなのじや？」

「うん。ちょっとね」

明久は2人に気づき、少し待つていて欲しいと言いつと優子にそつくりな男子生徒の制服を着た生徒が明久に声をかけ、明久は少し頬を染め、

「……新、あれは性別『男』で合つているんだよな？」

「和真、知らないのか。この学園は男子と女子、秀吉の3つの性別があるんだぞ」

「…………わかった。気にしない事にしておく」

和真は明久と話をしている相手が優子の双子の『弟』である『木下秀吉』だと気づいたようで明久の反応に眉間にしわを寄せるが新は

気にする事はなく、和真は自分の理解できない事から目を逸らす。

「ゴメン。待つた

「いや。それじゃあ、行くか？」

明久が帰る準備を終えて和真と新のそばまで駆け寄ると3人は教室を出ようとした時、

「あー？ あんた、この間の……アキをどこに連れて行くつもりよー！」

「和真、知り合いか？」

「ん？ まったく関係ない」

先日の明久のラブレター事件で明久を追いかけ回していた『島田美波』が和真を見つけて威嚇するように吠えるが和真は美波の相手をする気はなく、教室を出て行き、

「えーと？」

「吉井、行くぞ。約束の時間に遅れる」

「ごめん。美波、僕達急ぐから」

明久は美波の様子に苦笑いを浮かべるが新も和真に続くように教室を出て行き、明久は美波に謝った後、2人を追いかけて教室を出て行こうとすると、

「吉井くん、結城くん、北条くん、待ってください」

「ん？ 姫路？ どうかしたか？」

瑞希が3人の名前を呼び、瑞希の声が聞こえたため、和真は教室を覗き込む。

「あ、あの。私も」「一緒にしてもよろしいでしょうか？」「

「」「一緒に？」姫路はバイトする必要あるのか？」「

「そ、それは」

瑞希は明久と一緒にいる時間が欲しいのか和真と新に自分もバイトの口利きをして欲しそうであり、新はそんな彼女の様子に少しだけ意地悪をすると瑞希の顔を耳まで赤く染まりはじめ、
「新、からかうな。まあ、吉井の家庭状況は説明してあるから本人のやる気次第って事になつてるけど、姫路は数口だとしてもやるなら親に許可を貰えよ」

「はい。絶対に説得します！..」

和真は瑞希が何を考えているのか理解しているようで新をいさめる
と瑞希に両親は自分で説得するように言い、瑞希は大きく頷くと、

「姫路さん、何か欲しいものがあるの？」

「よ、吉井くん！？ そ、そうなんです。あ、あの。今月、少しお小遣いが厳しくて」

「……鈍いな」

「そうだな

明久は瑞希がどうしてバイトをやりたいかまったくわかつていよいようで首を傾げ、瑞希は顔を真っ赤にしたまま慌てて明久にバイトがしたい本当の理由を隠しながら言い訳をしており、和真と新が2人の様子にため息を吐いた時、

「あ、あんた達、どうして、ウチを無視するのよ！？」

「し、島田、いきなり、声を張り上げるでない。驚くであろう」

美波は自分が無視されている事に声を上げ、秀吉は火の付いた美波の様子に美波に落ち着くように言つ。

第7-1問（後書き）

どうも作者です。

今更ですが……これって面白いんですかね？

バカテスって明久がひどい目に遭うのが面白こと思っている中で和真達のクラスの常識的な行動。

たまに書いててこの方向は合っているのかと思います。

まあ、原作に沿える人間でないのでどうしようもありませんが。（苦笑）

後はお気に入り登録が400件を超えた登録してくれた皆様ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるようにがんばりますので引き続きよろしくお願いします。

第72問

「ん。吉井、そろそろ行かないと不味いな」

「ホント?」

「……お主達は完全に島田は無視なのじゃのう」

美波の様子を気にする事なく、和真は時間を確認すると明久に急げと言い、和真と新は先に出て行こうとする姿に秀吉はため息を吐くと、

「よくわからん人間に因縁をつけられるほどヒマじゃない。それも自分が他人に迷惑をかけているのに自覚もないような迷惑な奴らにはな」

「まつたくだ」

和真と新は美波だけでなく、秀吉にも話しかけるなど言いたげであり、

「あ、明久、なぜ、ワシはこの2人にこのように冷たくされるのじやるうか?」

「そ、それは」

「吉井、行くぞ。本当に時間がないんだ」

「う、うん。秀吉、明日、説明するから、じゃあね」

秀吉は初見の和真と新にここまで冷たくされる意味がわからないようで首を傾げると明久は2人を含めたこのクラスの言い分も聞いていため、少し困ったように笑うと和真は時間がないと言い、明久は秀吉に謝ると4人で教室を出て行こうとするが、

「あんた、この間から何なのよ……ウチに文句もあるの……」

「み、美波ちゃん!…?」

美波は先日からの和真の態度に腹を立てているようで和真を怒鳴りつけて彼の胸倉をつかむ。

「……この間も今日も言ったが、何で関係ないお前に俺が命令されないといけない」

「な、何でって、あんたが悪いんだから、当然でしょ……」

「……話も通じないのか、F^{バカ}はみんなこんなのはっかりかよ。嫌になるな」

和真は美波の態度に呆れたようなため息を吐くが彼女は本当に自分が悪いと思っていないようであり、和真は彼女の言葉を聞いて美波だけではなく、教室に残っているFクラスの生徒全員に聞こえるようになり、「あ」と、

「ゆ、結城君、い、いきなり、何を言い出すの?」

「何? 当然の事を言つてるだろ」

明久は和真の言葉に騒ぎが拡大すると思つたようで和真を止めようとするが和真は場を収める気はなく、

「他人を責める事しか知らない、人の気持ちを考える事の知らない自分本位のバカ。そんな人間に何で俺が因縁を付けられなきやいけない？この間、お前に従う義理はない事は話しただろ。こつちは吉井との間で約束をしているから迎えにきてるんだ。それを関係ないくせに因縁を付けられているんだ。それに『ちょっと、アンタ、アキを渡しなさいよ！！』ウチはアキのせいで彼女にしたくない女子ランギングの3位になってるんだから、それなのにアキ一人だけ幸せをつかむなんて許せないのよ！！』だつたか？こんな事を平然と言う、人の気持ちを考えない奴に話す事なんかあると思つか？」

「あ、あんただつてウチの気持ちを考えてないでしょ！！ それなら、あんたこそ、ウチに謝りなさいよ！！」

「何度も言わせるな。俺はお前にわけのわからない因縁を付けられて文句を言われてるんだ。そんな人間と仲良くできる人間はよっぽどのバカだ。言つて置くぞ。吉井がお前達のくだらない嫉妬で壊したものこれを壊したのは吉井だけじゃなく、お前らも同罪だ。それも理解してないだろ。それを関係ないのに片付けた人間にお前らはわびの1つでも入れたか？ そんな常識も知らない人間に俺が謝る義理も義務もない」

「まあな。少なくとも吉井と姫路は自分達が迷惑をかけた事は理解して謝ったのに未だに自分は悪くないって言つているバカがいる事が信じられない」

和真は美波には話す事はないと言うと美波は和真もやつていい事は変わらないと言うが和真には先に因縁を付けてきたのは美波なのだ

から従つつもりも謝るつもりもなく、新は和真の言葉に頷くと、

「行くぞ。時間もあるのにこんな言葉も通じないバカの相手をして時間に遅れたら、印象が悪くなるのは吉井だ」

「吉井、姫路、行くぞ。時間をかけても無駄だ」

「で、でも、結城君、北条君」

「因縁だけ吹っ掛けで話し合いをする気もないんだ。知らん」

和真と新は明久と瑞希に行くぞと言うと2人は美波の事も心配しているようであり、どうしたら良いかわからないようであるが、和真と新は歩きはじめ、

「ゴメン。美波、時間がないから僕と姫路さんも行くね」

「あ、あの。美波ちゃん、私と吉井くんが2人と話をしてみますから」

明久と瑞希は和真達のクラスの言い分も聞いているためか美波も理解して欲しい部分もあるため、美波に声をかけると2人の後を追いかけて行く。

第73問

「あ、あのぞ。結城君」

「言つておくぞ。俺はある煩い女と木下に謝る事はない」

『ラ・ペディス』に向かう途中で明久は先ほどのFクラスでの様子に言いたい事があるようだが和真は美波と秀吉の事以外なら聞いてやると言つと、

「あ、あの。そんな事を言わないでください。美波ちゃんも木下くんもそれにFクラスのみんなもとても優しくて良い人達なんですかいら」

「……姫路、悪いがその考えは捨てる。名前も知らない相手を怒鳴り付ける奴も、作戦だとしても人をバカにした後に謝罪にもこないような奴は良い人とは言わない。俺達はFクラスの被害者だと言つ事は前に話しただろ？」

「あつ

「そうだけど……」

瑞希はそれでも美波も秀吉も友達のため、和真や新にもわかつて欲しいと言いたげに言うが和真はFクラスの自分勝手な態度に腹を立てているようで瑞希の言葉を否定すると明久と瑞希は和真を含めたCクラスの人間から言われた事が正論だと理解出来るようでバツが悪そうな表情をする。

「Fクラスは自分勝手すぎるんだよ。自分本位で他人の事を考えない。その上、努力だつてしないクセに文句だけは人一倍に言つて他人を責める。吉井、お前は俺があいつにからまれるきっかけがあるラブレター事件だとして、俺はある煩い女に怒鳴られる理由はあったか？」

「そ、それは」

「元々、自分達の勝手な都合で騒ぎを大きくしたわけだろ。俺はその原因としてお前を捕まえて壊した設備の修理をさせた。俺の理由は正当だ。あいつはどうだ？ 本来、お前がラブレターを貰おうがあいつには関係ないだろ。お前のせいで彼女にしたくない女子ランキングが上がった？ 違つだろ。いくら容姿がよからうが少なくとも名前も知らない相手を怒鳴りつけるような礼儀知らずを好きになるようなバカはいない。お前が何かしたのかも知れないが元々の原因はあいつにあるんだ。それをお前に押し付けているだけだ。それをわからうとしないで俺を責めるのは筋違いだろ。言つておくぞ。仮に吉井や姫路があいつに俺に謝った方が良いと言つてもあいつは絶対に謝らない。自分が悪いと思つていらないんだからな。木下も一緒だ」

和真はFクラスの教室に顔を出した事でFクラスの態度にかなり腹を立てているようであり、自分が美波や秀吉に謝る理由がない事を話すと、

「そ、そんな事はないよ。秀吉はCクラスに行く時に気分が乗らな
いって言つてたし」

「じゃあ、聞いて良いか？ 木下はCクラスから出て行つた後はどんな様子だった？ 僕が思うに木下さんを演じきつた事で満足そう

にしていただけだろ

「た、確かに」

「普通なら、そこで罪悪感が生まれるんだよ。他人を騙した事にな。だけど、木下はそうは思わなかつた。演劇部だから、自分の演技に満足した？ 仮にそうだとしても俺達は木下の演技を観に行つた観客じやない。1人の考えを持つた人なんだ。それをだましてバカにしておいて、その後に責任は持たない。仮に木下の演技が素晴らしいものだとしても俺は自己満足で人の心を知ろうとも考え方よりもしない木下の演技では心は動かないし、そんな演技をする人間を信じる気はない」

明久は秀吉にだけでも謝つて欲しいと言うが和真は今日まで謝りにもこない秀吉の様子から彼がCクラスから出て行つた時の満足げな表情を思い浮かべたようで唾を吐き捨てるように言つ。

「Fクラスは基本的に人の善意、良心つてものが欠落してるんだよ。なら、相手をする上でこっちがとる行動も一緒だ。あいつらを人として扱わない。同じ事をやつているんだ。文句を言われる筋合いはない。それが吉井や姫路の友人だろうとな。俺はお前ら2人を友人だとは思つてているが、他のバカどもとは何でもない。そんな人間に

「氣を使う氣はない」

「悪いな。俺も和真と同意見だ。Fに何人か去年のクラスメートもいたけど、去年も同じだ。自分本位で他人の事は考えるような事はしない奴らだつたし、そいつらとも俺は友人じやないし、和真やCクラスの方を味方するよ。別に2人にFクラスと縁を切れとは言わなけれど、俺達からFクラスに歩み寄る事はないと思つて欲しい」

「で、でも、結城くんも北条くんも私や吉井くんには話をしてくれました。それなのに他のみなさんは話してくれないんですか？」

和真と新は明久と瑞希以外のFクラスとは友人になないと言うと瑞希は自分や明久には自分達の考えを話してくれたのに他の人には話してくれないのかと言うと、

「少なくとも2人とも話せばわかつてくれそうだったからな。他は無理だ。自分達がやつた事に罪悪感を持つていてる奴は誰一人としていない。Fクラスの代表を見ればわかるだろ？」
バカ

「そ、そんな事はないよ。雄二は悪気なんてないと思うけど、秀吉とかわかってくれる人はFクラスにもいるよ」

「まあ、バカ代表には期待なんかしてないけどな。他に関しては説得力がないから無理。話はここまで到着だ」

和真は苦笑いを浮かべて明久と瑞希には話が通じそうだと思つたと言ひ、明久は和真の言葉に少しだけ驚いたような表情をした後、和真に言い返すが和真は明久の言葉に説得力がないと言つた時に目的地に到着したようで和真は店を指差し、

「あれ？ ここって、この間、来たよね？」

「は、はい。クレープ、とっても美味しかったです」

明久と瑞希は試召戦争が終わつた後の休日にこの店を訪れた事があると言い、

「知つてる。俺はその日、店にいたしな。吉井が姫路とあの煩い女

にたかれている姿も見てる」

「やうなの？」

「た、たかってなんていません…？」

「まあ。姫路はあの煩い女に影響されてるところもあるのかも知れないが付き合つてもいない人間に無理やり縁らせるのは常識的に考えるとあまり良い事じやないからな。そう言つのはしつかりと順序を守れよ」

「やう言ひ事だ」

和真はその時の明久達の姿を見ていたと言つと瑞希は明久にたかっていたわけではないと言つが和真と新は瑞希の様子に苦笑いを浮かべる。

第74問

「しかし、いきなり、今日からで大丈夫なのか？」

「うん。家に帰つてもゲームをするだけだし、それに公共料金の話になつて思つたんだけど、電気を止められてゲームができなくなるのは困るからね」

「……そこでゲームが1番初めに出てくるのが凄いよ」

和真と新が明久と瑞希を店長に会わせると和真と新の紹介と言う事も関係しているのか明久と瑞希はたいした面接も受けずに合格になり、明久は和真と新と一緒に男子更衣室でバイトの衣装に着替えている。

「そ、そうかな？」

「まあ、それでもどこかで線を引かないと面倒な事になるぞ。頼むぞ。しばらく、学校に来ないと思つたら栄養失調で動けなくなつてるとかは洒落にならないからな」

「うん。気をつけるよ……」

和真は明久の生活を心配していよいよ苦笑いを浮かべると明久もつられるように苦笑いを浮かべた時、

「結城和真、北条新、ゆつくりと話していいで早くしなさい。姫路さんはすでに準備ができますわ。家畜以下の分際で美春を待たせるなんて、生意氣ですわ！！」

「あ、あの。清水さん、それは言こ過ぎじゃないでしょうか？」

「いいえ。あの豚野郎どもには充分ですわ……」

「ああ。待つてくれ。すぐに行く」

「美春？」

「店長の娘、気をつけろよ。いろいろと面倒だから」

ドアを一枚はさんだ廊下から美春の声が聞こえ、美春の隣で瑞希はどうしたら良いかわからぬようであり、和真は瑞希の気苦労が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべて返事を返すと明久は首を傾げ、新は苦笑いを浮かべながら美春が店長の娘だと話し、

「やうなんだ。機嫌を損ねないようにしないとね」

「……まあ、無理だらつけどな」

「やうだな」

明久は和真や新の顔をつぶすわけにもいかないと思っているのか真面目な表情をするが対照的に和真と新は困ったように笑うと、

「いつまで、待たせるんですか！－－早くしなさい－－」

「……ドアを開けるな。まあ、着替え終わつたところだから良いけどな」

「あれ？ 君はロクラスの清水さん？ えーと、確か、美波を狙つていたよね？」

美春は限界がきたようで勢いよくドアを開け、和真は美春の行動にため息を吐くと明久は美春の事を知っているのか名前を思い出す。

「豚野郎！！」

「え！？ ちょっと、何！？」

「……フォークとナイフを投げるな。それで破壊された備品の修理費も洒落にならないんだからな。純利益が上がらないと俺達の時給が上がらないだろ」

美春は明久の顔を見た瞬間におかしなスイッチが入ったようで明久に向けてフォークとナイフを投げつけようとすると和真は美春の腕をつかみ、

「……ここでおかしな事をすると店長が暴走するぞ。それはお前に
とっても歓迎する事じゃないだろ」

「……確かに、そうですわ。結城和真、仕方ありませんわ。今日は
あなたの言葉に従いますわ。しかし、次はありませんわ。店の外で
出会ったら、あなた事、美春の手でハツ裂きにしてあげますわ」

「……会つただけで殺されてたまるかよ」

美春に耳打ちをすると美春も和真の言葉に納得する部分もあるよう
で憎々しい視線を明久に向けながら頷き、

「あ、あのや。北条君、僕はどうして清水さんに睨まれてるのかな？」

「まあ、気にするな。いつもの事だから」

明久は美春に命を狙われる理由に心当たりがないため、顔を引きつらせながら新に聞くが新は苦笑いを浮かべるだけである。

第75問

「それじゃあ、始めますわよ」

「待て。清水」

「何ですか？」

美春は明久と瑞希に仕事の説明をしようとすると和真が美春を止め、美春は不機嫌そうな表情で振り返ると、

「それは俺がやるよ。お前が、吉井と一緒に居て、店長が暴走する」と困る

「……確かにそうですね。あの変態が騒ぎだすと仕事にならませんわ」

和真は美春がやううとしていた仕事を変わると言い、美春は和真の言葉に少し何か裏があるのかと考えるが和真の言い分にも納得するところが多いよう頷き、

「美春は仕事に戻りますわ。姫路さん、この豚野郎どもがおかしな事をしたら遠慮なく言つてください。美春の手でハツ裂きにしますから」

「えーと、ハツ裂きはやつさまだと思こますけど」

「良いのですわ。この豚野郎どもは当然の報いですわ」

「……まだ、何もしていないぞ」

仕事に戻ると言つと瑞希に何かあつたら自分を呼ぶように言つがその言葉は酷くおかしく瑞希は顔を引きつらせて言つが美春は瑞希の言葉を斬り捨て、和真はため息を吐く。

「まだ？ とは何かをするつもりですか？」これだから、豚野郎は

「……清水、勘違いするな。俺も新も姫路に何かするつもりはない」

「と、言つ事はこの豚野郎ですか！？ お姉さまにも色田を使つている上に」

「な、何をおかしな事を言つてるの！？ ぼ、僕は何もしていないよ！？」

美春は和真の言葉に目つきを鋭くすると和真は自分も新も瑞希には何もしないと言い、その言葉で美春への明久への殺意が一気に跳ね上がり、明久は美春の怒りが理解できないため声を裏返すと、

「……清水、その件なんだが」

「何ですか？」

和真は美春を手招きすると美春は和真を疑いながらも話を聞くようで和真に近づき、

「……良いか。お前がお姉さまと言つているのが誰かはわからんが、吉井と姫路は本人達が恥ずかしがり屋だから言わないが両想いだ。だから、この2人を早めにくつつければ、そのお姉さまと言つのは

完全にフリーになるんじゃないのか？」

「……それは姫路さんにはあの不細工で頭の悪い家畜以下の豚野郎を押し付ける形になつて申し訳ありませんが美春にとつては有益な情報ですわ」

「……どうしてだらう。僕にはあまり嬉しくない話がされている気がするよ」

「大丈夫だる。それより、他の奴らから2人のバイト着姿を見せてくれつてメールがきてたから寄つてくれ」

和真は店の中で無駄な争いを起こさないためか美春におかしな事を吹き込み、美春が大きく頷く姿に明久はおかしな不安を感じたようであり、顔を引きつらせるが新は気にするなど言つと携帯電話で写真を撮りたいようで明久と瑞希に並ぶよつて言つ。

「しゃ、[写真]? よ、吉井くんですか?」

「ああ。2人並んでいるのと1人ずつの撮りたいんだけどダメか?」

「僕はかまわないけど」

「わ、私もかまいません……後で北条くんに[写真]を貰おう」

瑞希は声を裏返すと新は彼女が何を考えているか予想が付いているようで苦笑いを浮かべて3枚の写真を撮りたいと言つと明久は何も考えずに頷き、瑞希は顔を赤らめながら頷くと明久の隣に並び、新は携帯電話で写真を撮ると、

「吉井と姫路にも送るな

「は、はー。ありがとう」「やれこまか」

「うさ。ありがとう」

新は2人にも写真を送ると言つた時、

「わかりましたわ。その件に関しては美春は全面的に協力しますわ」

「取引成立だな」

和真と美春の間にはおかしな同盟が成立している。

第76問

「……」

「役立たずですか」

「そう言つな。初めてなんだし、仕方ないだろ」

和真が明久と瑞希にバイトの説明をした後に2人は接客の実践に移つたのだが瑞希はぎこちないながらも何とか接客を行つているが明久は注文を取りに行くと舌をかんだり失敗を続け、精神的なダメージが重なつて行つているようでカウンターの近くで落ち込んでおり、

「よ、吉井くん、落ち着けばきっとできますよ。私でもできているんですから」

「う、うん」

「いや、もう少ししたら忙しくなつてくるし、それなら、キッチンを手伝うか？ 洗い物とか、短期の予定なんだし、そっちの方が効率が良いだろ。どうせ、こっちもやつて貰うんだしな。店長も良いですよね？」

『ああ。 かまわないよ』

瑞希は明久に声をかけると明久は情けない姿を見せられないと思つたようで気合いを入れて立ち上がるが和真はカウンターの中から苦笑いを浮かべると明久にキッチンの仕事をしないかと言い、美春の父親である店長に確認し、店長はまだ今日は調子が良いようで和真

の意見に賛同すると、

「確かに。吉井は家事ができるって言つてたし、そっちの方が良いかもな。」こつちは任せておけよ

「美春はどうちでもかまいませんわ。ただ、この店の事を考えれば役立たずに払うお金はありませんわ」

新は和真の意見に賛成なようで接客は任せておけと言つと美春は今の状況で明久に払うバイト料はない」と言つ。

「うん。 そうするよ。そつちの方が向いていると思つ」

「それなら、私もキッチンに」

「いや、姫路は接客で頼む。そろそろ込み合つてくるから、慣れていない人間が集まると店が回らなくなるかも知れないからな」

明久は洗い物くらいならどうにかなると思つたようで頷き、瑞希は明久と一緒にキッチンに移動しようとするが和真は明久の反応から瑞希をキッチンに踏み入れさせてはいけないと思つたようで彼女の行動を制限し、

「グッジョブ、結城君。助かつたよ……この後に店にくるお客様さん
が」

「ああ。吉井の反応から、姫路はキッチンに入れてはいけない存在だと言つ事は理解できた」

明久は和真の行動を大手を振つて讃めるわけにはいかないため、小

さな声で礼を言つと和真は苦笑いを浮かべ、

「店長、ちょっと良いですか？」

『わかつてゐよ。吉井くん、姫路さん、忙しくなる前にこれ、美春も北条くんも』

和真は何かあるのか店長に声をかけると店長は明久と瑞希以外に新と美春の名前を呼び、4人分のケーキをカウンターに置く。

「良いんですか？」

「お、美味しそうです」

『今度の新作の試食だよ。素直な感想を教えてくれるかい？』

明久と瑞希は目を輝かせると店長は2人の喜んでいる姿に少し頬を緩ませるが、

「……」

「清水、警戒するな……いろいろと問題はあるが料理の腕だけは確かだろ？」

「……そうですね。それより、これが出来たら、また、中林さんや工藤さんにたかれますわね？」

「……言つな」

美春は何かを警戒しているようであり、直ぐにはカウンターに近づ

く事はせず、和真はそんな美春の様子に苦笑いを浮かべると美春は新作が出る度に愛子や宏美にたかられている和真を小バカにするよに笑つた時、

『……ワタシノカワイイマイエンジユルーヨロメヲツカウナブタヤロウ』

「え？ 店長さん？」

「どうかしたんですか？」

和真と美春の様子に店長のおかしなスイッチが入り、人外化が始まりだし、明久と瑞希は何が起きたかわからないようで首を傾げ、

「……ちょっと、閉じ込めてくる」

「任せたぞ」

和真は2人に事情を説明する事なく、店長の首をつかむと店長を引きずつて行く。

第77問

「姫路さん、今日はありがとうございました」

「い、いえ。無理なお願いを聞いて頂きありがとうございます」

店長の人外化が治まらず、明久と瑞希は即日払いとの約束でバイトをしていたため、美春が2人分のバイト料を持つてくると瑞希には手渡しでバイト料を渡し、彼女を労うが、

「役立たず、受け取りなさい」

「……おかしな事をするな。金をなんだと思つている

「何をするのですか！？」

美春は明久のバイト料を床に落とすと彼を見下してバイト料を受け取れと言うは和真は持っていたシルバートレイで美春の頭を叩くと明久のバイト料を拾い上げ、美春は和真につかみかかるとする

「当たり前だろ。吉井はきちんと働いたんだ。これは正当な報酬だ。だいたい、店長が暴走して手が足りない時に吉井はしっかりと働いていただろ。吉井がいなかつたら今日は回せたかわからないぞ」

「まったくだ。吉井も姫路も今日は助かつた」

「そ、そんな事はないよ。僕なんてあまり役に立てなかつたし」

和真は美春の頭を左手で押さえると明久を労い右手で明久にバイト

料を渡すと新も和真の言葉に頷く。

「そんな事はない。少なくともキッチンはかなり助かったしな。正直、店長の暴走を考えたら短期じゃなくて続けて欲しいくらいだ。これは事実、清水も認めろ」

「イヤですわ……」

「……イヤだつて、おい」

和真は明久のキッチンでの働きぶりに大部、助かつたと言うと和真達以外のスタッフも明久の働きぶりを評価しているようで頷くなが、美春だけは明久を評価する事などあり得ないと言い、和真は美春の言葉に大きなため息を吐くと、

「吉井は一人暮らしだからまだしも姫路は遅くなると不味いだろ」

「ん？ それもそうだな。吉井、姫路、今日は後片付けは良いから先に着替えてあがれ」

「え？ 良いの？」

スタッフ達から慣れない仕事をした明久と瑞希を今日は帰してやれという声が聞こえ和真と新は2人に着替えるように言うと明久は驚いたような表情をするが、

「……その代わり、ちゃんと姫路を家まで送つてこいよ」

「遅いんだから、男のお前がそれくらいするべきだ。良いか。2人つきりなんだ。しっかりとやれよ」

和真と新は明久を捕まえて引き寄せ、明久に瑞希をしつかりと家まで送り届けるよつに言つ。

「ほ、僕が！？」

「当たり前だろ。だいたい、他の男どもに任せて姫路を奪われても良いなら別だけどな」

「ほ、僕は別に」

明久は和真と新の言葉に顔を赤くして慌てるがその様子を見れば明久が瑞希に好意を抱いているのは明らかであり、和真是明久をからかうように笑うと、

「姫路もお疲れ。今日はゆつくり休めよ。後、一人で帰るのは危ないから、吉井に送つて貰うんだぞ」

「は、はい。今日はありがとうございました。吉井くん、すいませんがよろしくお願ひします」

「う、うん」

和真是明久が逃げないように瑞希に明久に送つて貰えと言つと瑞希は顔を赤くしながら明久を見上げ、明久は恥ずかしいのか瑞希から視線を逸らして頷き、2人は着替えるために更衣室に歩いて行き、

「きつかけがあればすぐにでも上手く行きそつなんだけどな」

「まあ、タイミングつてのもあるんだろ。それより、片づけるぞ。

清水、遊んでないで働け

「あなたに言われる筋合いはありませんわ！－」

新は明久と瑞希の背中を見ながらため息を吐くと和真は苦笑いを浮かべながら、捕まえたままの美春に言つと美春は和真を怒鳴りつける。

第7・8問

「おはよう。姫路さん」

「おはようございます。吉井くん、昨日は家まで送つていただいた
ありがとうございました」

バイトの次の日に明久は教室に着いて、カバンを机がわりのミカン
箱においてた後、瑞希に朝の挨拶をすると瑞希は明久に家に送つて貰
つたお礼を言つと、

「明久、昨日は姫路と一緒にだつたのか？」

「うん。昨日は結城君に頼んで短期のバイトを紹介して貰つたんだ
よ。それでしばらくは放課後はバイト。姫路さんも一緒に」

「はい。それで、昨日は吉井くんに家まで送つて貰つたのでお礼を
雄一は明久と瑞希が一緒にいた事にこの2人、ひょっとして进展で
もあつたのかと感じた感じで声をかけると明久と瑞希は昨日のバイ
トの事を話す、

「アキと瑞希が一緒にいた事にこの2人、ひょっとして进展で
やつぱり、あの男はウチの敵ね」

「昨日は時間も押しておつたと言つのはバイトの時間じゃつたと言
うわけじやな」

明久達の話に聞き耳を立てていた美波は和真を自分の敵だと再確認

したようで教室にはいない和真に殺氣を飛ばし始め、秀吉はそんな美波には気づかないふりをしているのか明久に昨日の放課後に急いでいた理由はバイトのためかと聞く。

「うん。結城君が僕の生活を聞いたら、それじゃ、いつか死ぬぞと言つて色々と相談に乗つてくれたんだ」

「ほう。やうなのか？ そのような男には見えんかったのじゃがのう」

明久は和真が自分の事を心配してくれた事を話すが秀吉はFクラスの教室にきた時の和真の態度に少なからず腹を立てているようで和真はそんな人間には見えなかつたと言つと、

「ひ、秀吉、あのさ。その事なんだけど」

「木下くん、私と吉井くんのお話を聞いていただけませんか？ 美波ちゃんも」

明久と瑞希は和真達Cクラスの生徒に自分達の友人である秀吉と美波が誤解されたまままでいる事をどうにかしたいようであり、元はと言えば自分達の行動からきた事だと言つ事を説明したいようで秀吉と美波に声をかける。

「何じや？」

「何よ？ あいつの事？」

秀吉は2人の表情に何かあつたとは思ったようで首を傾げながら聞き返すが美波は和真是自分の敵だと判断しているようで不機嫌そう

な表情をすると、

「あのね。結城君達がFクラスに対して怒っている事があるんだよ。原因は試召戦争の時に秀吉がCクラスに行つた時の事」

「は？ 戰争なんだ？ 怒られる事はしないだろ。だいたい、あいつらだって、根本と組んで俺達をはめやがつたんだ。報復は必要だつた」

明久は秀吉にCクラスの生徒がFクラスに持つていて不満の説明をしようとすると雄一も和真の事が気に入らないためか、こつちは当然の事をしていると話しに割つて入つてくるが、

「僕も最初はそう思つたよ。だけどさ。本当にそれで良いのかな？ つて、試召戦争とは言つても、僕は結城君を含めたCクラスの生徒に恨みもなかつたし、よく知らない人ばかりだつたし、あの時は罪悪感もなかつた。でもさ。姫路さん以外は努力もしなかつたから、Fクラスになつたわけだろ？ そんな僕らがきちんと勉強をして、中には部活やバイトと勉強を両立している人達をバカにして良かつたのかな？ つて、結城君達から見れば、僕らは自分達を豚扱いされたわけだし、そんな人間に話しかけられるのは不快だつて言うのは当然なんだと思う」

「……明久はワシが悪いと言つのか？」

「正直、わからないよ。でも、秀吉はAクラス戦の時にその事をお姉さんから聞いていたよね？ お姉さんにも反省するように言われてたのに何もしなくて良いのか？ 1人で行けないなら、僕と姫路さんも一緒に行くよ。だからさ」

明久は和真達が言つてゐる事もわかると言うが秀吉は謝る必要がないと思つてゐるようであり、明久は和真の言つていた秀吉は悪い事をしたとも思つていいと言つた事を信じたくないようで秀吉に謝りに行こうと言つ。

第79問

「……なぜじや。なぜ、明久はワシらではなく、結城と言つたCクラスの味方をするのじや」

「秀吉？」

秀吉は明久の言葉に小さな声で疑問の声をあげると明久は秀吉の名前を呼ぶと、

「なぜ、ワシが謝らぬといけないのじや！ 確かにバカにした事は悪いと思つてはある。雄一の言つ通り、あれは作戦だつたのじや！…」

「……だから、言つただろ。悪氣なんてないつてな」

「結城君？ ディッシュ、ヒーリング？」

秀吉は明久が付き合いの長い自分より、和真達Cクラスの味方をしているのも気に入らないようであり、意地になつているのか声を張り上げてCクラスには謝らないと言つた時、廊下まで秀吉の声が聞こえたのかFクラスの教室のドアを開けて和真がFクラスの教室に現れると秀吉と美波はだけではなく明久と瑞希を抜かしたFクラスの生徒は和真を睨みつける。

「いや、昨日の今日じや、買い物も公共料金の支払いも終わってないと思つてな。こいつを届けに来た。今日は吉井は罪悪感を持つ事もできないバカどもを説得するから昼はこないつて言つてたからな」

「あ、ありがとうございます。結城君」

和真是Fクラスの反応に不機嫌そうな表情をしながらも明久に小包を手渡すと明久は和真が自分にお弁当を作つてきてくれた事を理解したようで和真に礼を言つがその表情は凄く気まずそうであるが、

「別に無理して謝る必要はないし、そんな納得がいかない面で謝られたつてこっちがムカつくだけだしな。だから、吉井と姫路には伝えたが俺も同じ態度を取らせて貰うだけだ」

「あ？ どう言つ事だ？」

和真是Fクラスに向かい自分の事は気にするなと言つと雄一はこの間、和真に良いようにやられた事もあるため、完全に彼にとつては和真は敵であり、和真に喰つてかかるつとすると、

「話しかけるな。豚。変な臭いが移るだろ」

「てめえ」

和真是雄一の事に話しかけるなどとい、雄一の怒りは和真の一言でさらに1段階上がる。

「何だ？ お前達が俺達を挑発した時に言つた言葉だろ。同じ事を言つて何が悪い」

「結城君」

和真是雄一だけでは無くFクラスには「ちらを非難する資格などない」と言つと、明久と瑞希はクラスメートと和真の間に挟まれて気ま

ずそつであり、

「あとな。お前らがバカをやつて壊した学園の設備の修理費はお前らに請求するようになるからな」

「あ？　お前になんの権利があるんだよ？」

和真はこれ以上はここにいると明久と瑞希に迷惑がかかる事も理解しているようで教室を出て行こうとするが思い出したかのように設備の修理費は問題を起こしたFクラスの生徒に請求すると言い、雄一はその言葉にかみつくと、

「決まってるだろ。お前らのクラスの設備は最低ランクなんだ。お前らが壊した物の修理費に回す予算なんかあるかよ。Fクラスは必要なものは各自で用意するのが規則だろ。そこから考えても当然だろ。それをさつき、西村教諭と学園長にも提案してきた。こっちはお前らが壊した設備を無償で直すのを手伝う羽目になつたんだ。当然のことだろ。勝手にバカ騒ぎしたんだ。その責任を取るのが人として当然の事？　ん？　豚だからできないか。言い返してもかまわないぞ。その代わり、無責任な言い訳や言葉を並べてみろ。本気でぶちのめしてやる」

和真はFクラスに文句を言う資格などないと言い切ると完全にFクラスを見下した様子で言い切るが常識のないFクラスの生徒達は和真に向かい罵声を浴びせ始めるが、

「悪いな。豚に人間の言葉が通じるわけがなかつたな」

和真は本気で自分達が悪い事をしているとも思っていないFクラスの生徒達の様子に呆れたようで大きくため息を吐いて教室を出て行

も、

「明久、なぜ、あのような人間の味方をするのじゃ……」

「そうよ!! あいつ、ウチらの事をバカにして許せないわ!!
瑞希もアキもあんな最低の人間に関わるのは止めなさいよ!!」

「み、皆さん、落ち着いてください。美波ちゃんも木下くんも、結
城くんは最低な人じゃないです」

「そ、そうだよ。みんな落ち着いてよ」

和真が教室から出て行く姿に秀吉と美波は和真を完全に敵だとみな
したようであり、口早に和真を非難し始め、明久と瑞希はクラスメ
ート達に落ち着くように言つが治まるわけもなく、

「……」クラス代表はあの小山だったな。それなら、結城、俺をバ
力にした事を思い知らせてやる

そんなんか、雄一だけは和真に仕返しをする方法を思いついたよ
うで小さく口元を緩ませている。

第7・9問（後書き）

いつも、作者と

和真「主人公です」

和真、悪役。（爆笑）

和真「人に言つたことを返されただけで、よくここまで怒れるよな。本当にバカしかいないな」

まあ、Fクラスですしね。和真に対する批判や非難もくるかも知れませんが気にしない方向でこの作品はFクラスの常識のなさについて書いてますしね。

和真「別に痛くもないけどな。こつちは当然のことと言つているんだ」

まあ、そういう事です。Fクラス養護ではないからこそその物語。だからこそ、挟まるる明久と瑞希。

そして、何かを企む雄二。

まあ、ろくでもない事でしょう。

第80問

「結城君、あなた、Fクラスと何か揉めなかつた！！」

昼休み、久しぶりに回復試験から解放されてまどろんでいた和真の平和をぶち壊すように友香の声が響き、

「……代表様。何かあつたか？」

「何かあつたかじやないわよ！！」

和真は欠伸をしながら、友香に聞くと友香の怒りはすでに臨界点を超えているようであり、彼女の額にはくつきりとした青筋が浮かんでおり、和真の胸倉につかみかかりそうな勢いである。

「Fクラスと揉めなかつたかと言わると吉井と姫路以外は豚扱いすると言つたくらいか？」

「当然の事だな。それがどうかしたのか？ 代表様？」

和真は友香の手を交わすと今朝、Fクラスの教室で起きた事をもの凄く簡単に話すといつものメンバーが騒ぎを嗅ぎつけぞろぞろと和真の席に集まり始め、

「散れ」

「散れ。じゃないわよ！－ それがどんな騒ぎになつてゐるか。わかつてるの？」

和真はメンバーを追い払うように言うが友香の怒りは収まる事はなく、和真を睨みつけると、

「バカどもがまた責任転嫁して俺やCクラスを非難し始めたくらいだろ。俺達を挑発して、Fクラスに試召戦争を仕掛けさせるように」

「……まったく、その通りよ」

「……カズ、今更だけど、あんた、予知能力とかない？」

和真は友香が怒っている理由に心当たりがあるようで欠伸をしながら、Fクラスが何をしているか言い当て、友香と清美は納得がいかなさそうに眉間にしわを寄せせる。

「和、どうするんだ？ 乗つてやるのか？」

「乗る必要はないだろ。非はこっちにはない。Fクラスのやつた事を信じる人間が2学年いると思うか？ DクラスはFクラスのやり口を理解してるし、Aクラスも同じ、Eクラスは体育会系だからな。今までの試召戦争での卑怯なやり取りをしてきたFクラスに不快感は表わしても同調はしない」

「……確かにね。でも、正論が効かないFクラスだよ。何をしてくるかわからないよ」

一心はFクラスの挑発に乗るのかと言つが和真是こちらには非がないと言い切り、Bクラスを旧校舎まで落としいれた時に取つた連携やFクラスの今までの行動から信じる生徒はいないと言つと棗は頷きながらもFクラスの行動は常識では測りきれないと言つと、

「まあな。でも、乗ると吉井や姫路の立場がなくなるからな。せつかく、俺達以外にもウチのクラスの奴らとも仲良くなつてきたわけだろ？ 試召戦争をするとあいつらの居場所がなくならないか？ それに姫路の体調を考えると設備はこれ以上は落とせないだろ？」

「……そうね。今でも最低の設備なのにこれ以上、設備が落ちると姫路さんは不味いわよね」

「……いや、どっちにしろ。クラスには居づらいだろ。それなら、挑発に乗つてFクラスをぶちのめした方が良くないか？ あの2人^{バカ}はFクラスの行動に反対しているだろうし、設備に関しては最終的に和平交渉で終わらせたとすれば設備は落とさなくて良いだろ？」

和真は明久と瑞希の事を考えるとムカついても試召戦争は仕掛けられないと言つと友香は頷くがトオルはFクラスを黙らせるためにも挑発に乗つた方が良いのではないかと言つ。

第81問

「……確かにトオルの言い分もあるな」

「なら、どうするつもり？　このままじゃ、吉井君と姫路さんはかわいそうよ。私達とクラスメートの間で板ばさみなわけだし」

和真はトオルの言う事も一理あると云つと清美は明久と瑞希が心配なようで和真にどうにかしると言つたげに言つて、

「何か考えるよ。代表様、しばらく時間をくれ。3日……いや、2日で良い」

「2日も？　その間に2人に耐えて貰えつて云つの？」

「今、こっちから仕掛けるのは上策じゃないんだよ。Fクラスは俺達Cクラスを悪役にした挑発をしてこっちの怒りを誘うつもりだ。だけど、それに乗つてしまふと周りからの印象は最悪だ。だからFクラスはこっちが反応しなければ勝手に自分達が正義だと言い始めて理不尽な事を仕掛けてくる。これはバカクラスの代表は計算に入れていいはずだ。そしたら俺達はクラスでそれを訴えて攻撃をすれば良い。勝った時にこっちの正当性を盾にできるからな。何より、吉井と姫路の事を考えれば俺達はしばらくは我慢しないといけない。すぐに仕掛けるとバカ代表に俺達は吉井や姫路を直ぐに裏切るとか吹き込みかねない」

和真は感情で走ってしまった事で明久と瑞希に迷惑をかけた事を自覚しているようで乱暴に頭をかくと2日時間をくれと言うが友香はそれはできないと言うが和真は雄一が考へてもい無い事を計算に入

れているようだつであり、

「……今更だけど、カズを敵に回したくないわ」

「でも、和真、どうするんだ? Fクラスと戦うとして勝機はあるのか? FクラスがBクラス戦で見せた土屋の奇襲とか、それこそ、姫路の点数とか」

「坂本くんの性格を考えると姫路さんの体調を盾に吉井くんに戦えつて絶対に言ひよ」

清美は和真の考えを聞いてため息を吐くと新と棗はFクラスが仕掛けてくるであろう強力なカードをどう対処するかと言ひ。

「土屋の対処は簡単だ。保健体育のフィールドに入らなければ良い。Fクラスがいなくたつてフィールドは展開できるんだ。代表様の周りを無難に総合教科のフィールドを開いておく、干渉を起こして消される可能性もあるからもう一人予備の教師を用意しておいて直ぐに対応できるようにしておく、まあ、その前に大島先生を押さえておくから問題ない」

「……良く、ポンポンと策が出てくるな」

「こんなもんは考えれば誰だつて出でてくる。姫路は無理に倒す必要ないと言いたいけど、あいつの性格を考えると倒してやらないと自分を責めるだろうからな。俺がやるよ。だから、誰か吉井を頼んで良いか? 姫路は倒さないといけないけどな。あいつはフィードバックがあるんだ。なるべく、ダメージを『えず』に終わらせてやりたい

い

「……ああ。吉井は任せろ。その代わり、姫路は任せるぞ。元々、お前くらいしか倒せる奴はいないんだ」

和真は保健体育を使った時の最大攻撃力を誇る土屋康太の対処法を話すと一心は感心を通り越して呆れたようなため息を吐くが和真是Fクラスに取り残された明久と瑞希の事を考えて少しだけ困ったよう苦笑いを浮かべると新はこの中で言えば自分が明久の相手をするべきだと言い、

「……後は人の気持ちも聞かないでこんなくだらない事を仕掛けてきたバカに思い知らせてやるよ」

和真是Fクラス代表の雄二の立てた作戦が気に入らないようで吐き捨てるように言うと、和真の話を聞いていたメンバーは同じ意見のようで和真の言葉に同意するように大きく頷く。

第82問

「どうだい。体に違和感はないかい？」

「……学園長が俺にそんな事を聞くのに違和感を覚えます」

「……あんた、本当に可愛げのないガキだね」

放課後になり、和真は学園長室で和真の召喚獣を教師仕様と同等にするための調節を行つているとカヲルは和真に体調を聞くが和真是自分を心配するカヲルが気持ち悪いと言い、カヲルは和真の返事に眉間にしわを寄せると、

「そりやあ、俺の都合も考えずに勝手にこんな事を決められれば文句くさい言いたくなります」

「それに関しては謝るよ。すまなかつたね」

「……熱でもあるんですか？ それとも何か裏があるんですか？」

「……本当に口の減らないくそじやりだね」

和真は自分が文句を言つるのは正当であると言つとカヲルも和真に悪い事をしていると言う自覚はあるようで作業の手を止めて和真に頭を下げるが和真はカヲルの態度に違和感しか覚えないようで疑うような視線をカヲルに向け、カヲルは和真の視線に大きくため息を吐き、

「あたしだって、常識くらいはわきまえているさね。それでも、あ

たしの方も忙しくて手一杯だったんだよ。そんな中に教師陣から觀察処分者が働くからどうにかして欲しい？ 正直、あたしが文句を言いたいよ、そんなものは自分でやりなってね

「まあ、確かに」

自分も忙しくて和真に気を使つてやる余裕はなかつたと言つと和真も納得する部分もあるよう頷く。

「それにこれだつて本当に信頼できる生徒かも見極めないとけないんだ。教師の仕事を手伝つて事は他の生徒の個人情報だつて知る可能性がある。ただ、教師に外面だけいい生徒に任せせるわけにはいかないんだよ。あんたは考えもしつかりとしてるしね」

「……評価をされたみたいだけど、嬉しくないんだけど、それに今 の話だとホントは成績を無理に上げる必要もなかつた気がするんですけど」

「まあね。成績に関して言えば、実際はそのままだつて動いたよ：…ん？ 文句は言わないのかい？」

「1000点をあげるために動く過程を見られていたつて事ですよね。納得はいきませんがそのおかげで出来る事もあるんで押さえておきます。それに途中から何となくですが気づいていましたしね」

カヲルは生徒の召喚獣を教師仕様にするのに和真の事を見極めさせて貰つたと言うと和真はため息を吐き、

「一先ずは学園長先生のオメガネにかかつた事を喜んでおけば良いんですか？」

「口の減らないガキだね。あたしのメガネにかかつたかと言つと一
先ずは保留だね。ただ、あんたを信じるって言つのが教師陣には多
くてね。その中にいた。あんたの姉と西村先生を信じただけさ。別
にあたしからの信頼より、あんたはあの2人から信頼されている方
が嬉しいだろ?」

「……まあ、そうかも知れませんね」

カラルは和真を信じたのではなく、洋子と西村教諭を信じたから、
2人の期待を裏切るなと言うと和真は少しだけ照れくさそうに苦笑
いを浮かべて頭をかき、

「あたしが言いたい事はそれだけだよ……これで完成だね。ご苦労
だつたね」

「あ、はい……って、終わりなら帰つても良いんですか?」

「ああ……ん? そう言えれば肩書なんだけどまだ考え方付いてないか
ら、後にして貰うよ」

「わかりました。失礼します」

カラルは和真が照れる様子に小さく表情を和らげると肩書は後回し
だと言い、和真に労いの言葉をかけると和真はカラルに頭を下げた
後、学園長室を後にする。

第83問

「あれ？ 結城くん、こんな時間に何をしているの？」

「ん？ 代表様。部活は終わったのか？」

和真がカバンを取りに教室に戻ると友香が教室には残つており、和真は時計を確認するとすでに部活も終わりの時間になつており、友香に部活は終わったのかと聞くと、

「ええ。今日は茶道部の方だったからカバンを教室に置いて行つたのよ」

「茶道部の方？ あれ？ 代表様はかけもちをしてるのか？」

友香は和真と同じように教室にカバンを取りに来たと苦笑いを浮かべると和真は友香の言葉に彼女が複数の部活に所属していると思つたようで聞き返す。

「そうよ。もう一つはバレー部」

「バレー部か？ 試合の時は教えてくれ」

「あれ？ 応援にきてくれるの？」

友香はバレー部と茶道部に所属していると言い、和真は友香に試合がある時は教えてくれと言うと友香は和真がバレーに興味があるとは思わなかつたようで驚いたような表情をするが、

「いや、代表様の太ももと揺れる2つのボールがみたい。後は茶道部の時は帯を引っ張りたい」

「……結城くん、ふざけないでくれるかしら?」

「いや、割と本気だ」

和真の目的は男の子特有のものであり、友香は眉間にしわを寄せて冗談はやめて欲しいと言つたが和真は笑顔で言い切り、友香は呆れたようなため息を吐くと、

「代表様、俺は帰るけど、代表様はどうするんだ? 場所しだいでは送るぞ」

「……」

「警戒しないでくれ。流石に合意じゃない相手は押し倒さないから」

和真は教室に居ても仕方ないと思つたよつて友香に帰らうつと言つたが友香は和真の発言から彼を警戒しているようで和真をジト目で睨むと和真是苦笑いを浮かべ、

「行くよ」

「ええ」

2人並んで教室を出て行く。

「しかし、実は近所だつたんだな」

「やつね

和真と友香は学園を出た後、2人で話をしながら歩いていると2人の家は近いようで顔を合せて苦笑いを浮かべた時、

「ないです」

「ん？」

「結城くん、どうかしたの？」

「ああ……あの子、何かあったのかな？」

和真の耳に小さな女の子の声が聞こえ、その声は落ち込んでいるようでいるような声であり、和真は気づいてしまった事もあるため、声の主を見つけると、

「何か落としたのかい？」

「は、はいです。ノインちゃんのキー ホルダを落としてしまったです」

和真は近づいて声をかけると女の子は悲しそうに目を伏せる。

「ノインちゃんキー ホルダ？」

「如月ハイラングのマスコットよ。もう少ししたらオープンする遊園地。確かに、オープン前に販促の一環で応募者にプレゼントしたとか

和真は女の子が落とした物に心当たりがなく首を傾げると友香は知つてゐるようで和真に説明すると、

「そうか？ 悪いな。代表様、俺はこの子に付き合つから」

「結城くん、私も手伝つわよ。辺りも暗くなつてきたし、早く見つけましょ」

「良いですか？ お兄さんと彼女さん、ありがとうございます」

和真は友香に自分はこの女の子の落とし物を探す手伝いをすると言つと友香は自分も手伝つと言い、2人の言葉が嬉しかつたようで女の子は表情を輝かせて2人に頭を下げるが女の子は和真と友香の関係を勘違つてゐるようであり、

「ち、ちがー？」

「子供の言つ事だから荒てるなよ。それじゃあ、どこで落としたか、知りたいからどうやつてここに来たか教えてくれるかい？」

友香は慌てて女の子の言葉を否定しそうだが和真是気にするなと言つと女の子にここまで見た道順を聞く。

第84問

「ないな」

「はいです」

「葉月ちゃん、泣かないで」

和真と友香は女の子と一緒に彼女が歩いた道を探しているがキー・ホルダは見つからず、女の子『島田葉月』の瞳にはうつすらと涙が浮かび始めた時、

「あれ？ 結城くん、何をしているの？ 小山さん以外にこんな小さな女の子にまで手を出してるの？」

「……愛子、おかしな事を言わないで」

優子と愛子が3人を見かけて声をかけてくる。

「工藤、おかしな事を言つた。流石に俺は特殊な趣味はない。ただ、この娘は美人になるとと思つ」

「……結城くん、あれ？ 木下さん、それ、どうしたの？」

和真は愛子の言葉を否定すると友香は和真の様子にため息を吐いた時に優子の手にキー・ホルダがある事に気づく、

「これ？ セツキ、そこで拾つたのよ。あたしは知らなかつたんだけど、何か、愛子が言つには限定物みたいだから、交番に届けよう

と思つて……何?」

「木下さん、タイミングが良いな」

優子は横断歩道の真ん中を指差しながら言つと和真はあまりのタイミングの良さに苦笑いを浮かべると和真達がキー・ホルダを探していた事を知らない優子は眉間にしわを寄せると、

「今、まさにそれを探していたんだよ」

「これ?」

「ハイです。お兄さんと彼女さんは葉月が落としたノインちゃんのキー・ホルダを捜すのを手伝つてくれてました」

和真はキー・ホルダを探していたと言い、優子が首を傾げると葉月は和真と友香が自分が落としてしまったキー・ホルダを探してくれていたと言つ。

「わづなの? はい。今度は落とれなこよつて気を付けるのよ」

「ハイです」

優子は足もとから見上げている葉月を見て、しゃがみ込んで葉月と目線を合わせて葉月にキー・ホルダを渡すと葉月は大きく頷くと、

「あつがとうございましたです」

「氣を付けて帰るんだぞ」

葉月は嬉しそうな表情で4人に頭を下げるとき、4人は葉月の背中を見送り、

「木下さん、助かったよ。正直、葉月ちゃんも泣きそうになつてたし、見つからなかつた時の事も考えてたんだ」

「良いの。良いの。気にしないでよ。お礼は決まつてるわけだしね」

「……いや、俺、家に帰つて姉さんの夕飯を作らないといけないし」

和真は優子に礼を言つとなぜか、愛子が和真にお礼は言葉でなく態度で示せと言い、和真は愛子にまたかられている事を感じ取り、洋子の夕飯を作らないといけないと黙つて逃げ出そうとするが、

「結城くん、携帯なつてるわよ」

「ん？ ホントだ……うん。飯はいら……わかつたよ」

友香は和真の制服の中で携帯電話が鳴つている事に気づき、和真に声をかけると和真は慌てて携帯電話を出ると洋子からの電話のようであり、和真が話を終えて電話を切ると、

「洋子先生、夕飯、いらないみたいだね」

「……いや、だからと言つて、この流れで俺が奢るのはおかしいだろ？」

「何を言つてゐるの？ 女の子に囲まれてゐる幸せ者なんだから、それくらいいはするべきだよ」

愛子は和真の様子から夕飯の準備がなくなつた事に気づき、笑顔で和真の腕に抱きつき、和真の逃げ道を塞ぎ、和真を引きずつて行き、

「……えーと、

「……愛子」

「何やつてるの？ 愛子も小山さんも行くよ

「ちょっと待て！？ どうしてこうなるんだ！？」

友香と優子は愛子の行動に苦笑いを浮かべるなか、和真の声が悲痛な声が響く。

第85問

「……豚野郎、ずいぶんと良い身分ですわね?」

「……俺はたかられてるんだぞ。この状態で良い身分なわけあるか」

和真は愛子に捕まえられて4人でバイト先の『ラ・ペディス』に着くなり、美春に睨みつけられる。

「清水さん、お邪魔するよ」

「ええ、今、席に案内しますわ。豚野郎、さつやと歩きなさい。6番テーブルが空いてますわ」

「……何か、酷く納得がいかないんだ」

美春は和真の足を蹴りながら席まで歩くように言い、和真はため息を吐きながら、3人を席まで案内すると、

「ん? 和真、代表、良いところにきた」

「北条くん、どうかしたの?」

「ああ。ちょっとな。Fクラスとの事があるだろ。それで吉井と姫路が落ち込んでてさ。俺は気になくて良いと言つてるんだけど」

和真達を見つけた新が駆け寄ってきて、明久と瑞希が落ち込んでいるからどうとかして欲しいと言つた。

「やつぱりか？ 気にはなってたから後でメールでも出しちゃおいつ
と思ってたんだけどな」

「あれ？ 吉井くんと姫路さん、ここにバイトしてるの？」

「へえ、秀吉はそんな事を言つてなかつたけど」

和真は苦笑いを浮かべると愛子と優子は2人がバイトを始めたと事
に意外そうな表情をする。

「まあ、昨日からの短期のバイトだ。工藤、吉井にたかるなよ」

「わかつてるよ。吉井くんの場合は生活に関係しそうだし」

「……俺だつて生活に関係してくるよ。新、2人は？」

「休憩室にいる。ちよつと、失敗が多いから、清水と店長が気を使
つてくれた」

「そつか。ちよつと行つてくる」

和真は2人が短期のバイトだと言う事を説明すると新に明久と瑞希
の居場所を聞いて2人のいる休憩室に向かって行き、

「小山さん、どう言つた事？」

「FクラスがCクラスを同盟を組んでたBクラスを平氣な顔して裏
切る卑怯者軍団つて言つてると関係あるの？」

「……ええ、そうね」

優子と愛子は和真の様子に今日、学園で騒ぎになつてゐるCクラスをバカにしている騒ぎと関係あるのかと聞くと友香はFクラスの挑発が頭にきているが明久や瑞希の事もあるため、感情で怒れない事もあり、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をする。

「別に気にする事はありませんわ。ただの豚野郎どもの戯言ですか
ら、小山さんが気にする事ではありませんわ」

「清水さん、ありがとうございます。でも、今回の騒ぎは私が結城くんの忠告を聞かずに何も考えないでBクラスと同盟を組んだ事にあるわけだし

美春は4人分のお冷をテーブルに置くと彼女もFクラスの言動に腹を立てているようだが、友香はFクラスとCクラスの軋轢の原因が自分にある事を理解しているため、うつむいてしまう。

「責任は全部、あの豚野郎になすりつけば良いのですわ。あの豚野郎が小山さんにきちんとした説明もしないから、こうなつたのであつてあなたはまったく悪くないですわ」

「……いや、流石にそれは横暴だ。まあ、代表も和真に任せてくれよ。あいつは基本的に面倒だと言うけどな。人が落ち込んでいる姿を見ると手を伸ばしたくなるお人好しだからな。そう言う時の和真はいつも以上に頼りになる」

「そうですね。それくらいしか、役に立たない豚野郎なんですから、命が擦り切れるまで働かせたら良いのです」

美春は友香を励ますつもりなのか和真に責任を全てなすりつけるよ

うに言ひ、新は美春の様子に苦笑いを浮かべる。

第86問

「 「……」 」

(は、入りづらいなあ)

和真は休憩室のドアを少し開けて中を覗き込むが明久と瑞希の間に会話もなく休憩室の中は重苦しい空気になつており、和真是困ったように苦笑いを浮かべた後、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をすると、

「吉井、姫路、何、落ち込んでるんだ？」

「ゆ、結城君ー!？」

「ど、どひしたんですか？ 今日はお休みだつて！？」

和真是勢いよくドアを開けると和真の登場に2人は驚きの声をあげる。

「いや。ちゅうと、色々とあつて▲クラスの上藤に拉致された

「ドナドナ
拉致？」

「な、何があつたんですか？」

和真是苦笑いを浮かべて自分が『ラ・ペディス』にきた理由を簡単には話すと2人は無理して笑おうとしているのがわかるくらいのぎこちない笑顔を見せ、

「……悪い。もう少し、お前達の事を考えてやれば良かった」

「ま、待つて。どうして、結城君が謝るんだよー!？」

「や、そうです。頭をあげてください」

和真は2人の様子にいたたまれなくなつたようで頭を下げるときと瑞希は和真が謝る事はないと思つていてるようで和真に頭をあげるように言つ。

「いや、俺が感情的になり過ぎたんだ。お前らの事を考えれば何も言わなければ良かつたんだ。この間の吉井のラブレター騒ぎで俺も反省したはずだつたんだけどな」

「……で、でも、結城君の言つ通りだつたよ。誰も僕と姫路さんの話を聞いてくれなかつた。雄一は諦めてたけど、美波や秀吉はわかつてくれると思つてたんだ」

「はい。それどころか、Cクラスの人達をバカにするような事まで言い始めて、結城くん達の事を何も知らないのに」

和真は自分の感情を抑えきれなかつた事を反省しているようで苦笑いを浮かべるが明久と瑞希は和真が反省しているのを見て、和真とFクラスを比較してしまつたようではさらに表情が暗くなつて行き、

(……参つた。話が続かない)

和真は2人の様子にどうして良いかわからないようであり、頭を乱暴にかき、

「もうダメだ。吉井、姫路、気にするな。少なくとも今回、悪いのはお前らじゃない。俺とFクラスのバカどもだ。お前らが気にするな」

「で、でも」

「でもじゃない。少なくともお前らは俺とFクラスを和解させようとしたわけだ。なら、お前らが自分を責めるな。それをされると俺は責められてる気がするんだ。だから、俺を助けると思つて笑つてくれ」

和真は「」の重苦しい空氣に耐え切れなくなり、語尾を強くしてしまふと

「えーと、姫路さん、吉井くん、私からもお願いできないかしら」

「小山さん？」

「どうして」「」

友香は美春に頼み「」んできたよつて氣まずそつにジニアから顔を出す。

「ゴメンなさい。元は私が悪いのよ。結城君や山下さん達は私がBクラスと同盟を組むつて言つたのも反対してたの。だけど、私が何も考えずにFクラスをはめるよつた事をしたから」

「……ねえ。小山さん、結城君、結局、原因つて、ウチの秀吉がじクラスに言つた事？」

友香は明久と瑞希に頭を下げた時、優子と愛子も友香に付いてきた
ようで優子は今の状況を確認するように聞くが、そんな彼女の様子
は周りの人間が後ずさりしたくなるような怒りに満ちている。

第87問

「ひ、一先ず、落ち着いて。木下さん」

「そ、そ、そ、う、だ。一度、大きく深呼吸をするべきだ」

「……結城君、吉井君、何を言つてゐのかしら、あたしは落ち着いているわ」

優子の様子に和真と明久は自然に友香と瑞希を立つて立つて声を裏返しながら、優子に落ち着かせようとすると優子の表情は清々しくらいの笑顔にはなつてゐるが対称的に背後には真っ黒な殺意をまとつてゐる。

「あ、あの。木下さん、できれば私達との試合戦争の前に木下くんにしたよつな事は」

「姫路さん、何を言つてゐるの？　あの時、私は秀吉と話をしただけよ。そうよね？」

「は、はいー？　その通りですー？」

「……結城君、悪いんだけど、今日はあたし帰るわ。奢りのお誘いはまた今度でね」

「つよ、了解しましたー？」

優子は秀吉にお仕置きをするために早く家に帰りたいようであり、和真に謝ると和真は優子の言葉に頷く事しかできず、

「それじゃあ、また明日、学園でね。愛子もあまり、結城君に無茶を言わないようにね」

「うん。わかったよ」

「木下さん、また明日ね」

優子はこの場にいる全員に頭を下げるところの場を後にし、

「……優子を怒らせるのは止めよ!」

「……今の木下さんはシスコンモードの結城くんに匹敵するわ」

「……うん。僕もそう思つ」

愛子は顔を引いたりせるなか、友香と明久は優子と同じ殺意を和真にも感じた事があるようで顔を見合せて頷き、

「……いや、あれはないだろ? ……俺、あんなのなのか?」

和真は今の優子と同列扱いはしないで欲しいと言うが友香と明久は和真の肩に手を置き、和真はちょっとだけ傷ついたようで肩を落とす。

「あ、あの。木下くんは大丈夫なんでしょうか?」

「……姫路、良いか。俺達はこの後に木下に何が起きるかは知らない。」それを心に留めておくんだ。それじゃないときっと、心が壊れてしまうから」

「……木下くん、安らかに眠つてちょうだい。私達を恨まないでね」

瑞希は秀吉に起きたであろう虐殺シーンに秀吉の事を心配するが和真と友香はすでに現実から目をそらす事に力を注いでおり、

「だ、大丈夫だつて、試召戦争の時も弟くんは生きてたし」

「……そう願おう。木下の自業自得の部分もあるけど殺人の片棒を担いだとなると後味が悪すぎる」

「そうね」

愛子は流石に優子も手加減はすると苦笑いを浮かべると和真と友香は殺人事件にならない事に希望を託す。

「それで、結城くんと小山さんは吉井くんと姫路さんを励ませたの？」

「いや、全部、吹っ飛んだ」

「た、確かに」

和真と明久は優子の怒りで暗い空気が完全に吹き飛んでしまった事に顔を合せて苦笑いを浮かべると、

「結城くん、小山さん、雄一はCクラスを挑発してCクラスから試召戦争を仕掛けさせるつもりなんだ。だから、挑発に乗らないで欲しい。僕と姫路さんで秀吉や美波、話が通じそうな人間に……」

「言つてゐそばから挫折するなよ」

明久はFクラスの説得を続けようとするがラブレター程度で自分を追いかけ回すクラスメートが説得に応じてくれる姿が思い浮かばなかつたようで膝を付く。

第88問

「そ、そうだね。結城くん、一先ずは挑発にのらないでお願いだよ」

「お願いします」

明久と瑞希は和真と友香に頭を下げるが和真は2人の様子に考へている事があるようで眉間にしわを寄せると、

「……吉井、姫路、お前達には悪いと思うけど、きっと近いうち、いや、2、3日中にはじクラスはFクラスに試召戦争を仕掛ける事になるとと思つ」

「ど、どひして！？」

「落ち着け。俺も代表様も好き好んで試召戦争は起こしたくない。起きちまつと2人は居場所がなくなるしな」

和真は言つにくそうに明久と瑞希に近づいてじクラスとFクラスのござりざは試召戦争に発展すると告げる。

「……待つてよ。試召戦争なんかしたら」

「吉井の言いたい事もわかる。だから、もう少し話を聞いてくれ」

「吉井くん、結城くんの話を聞きましょう。結城くんにはきっと考え方があるはずです」

明久は和真の口から出た言葉に瑞希の体調を考えてしまつたようだ

和真に裏切られたと思ったようで和真へ向ける視線には敵意の色が混じり始めるが和真是明久に頭を下げ、瑞希は明久を落ち着かせ、

「CクラスにはFクラスの挑発にならないように話を通しているわ。最近は吉井くんと姫路さんがウチのクラスにくる事も多いから、みんな、2人に迷惑をかけたくないから、納得はしてくれたの。だけど……」

「うちのクラスが挑発にのらないとFクラスは自分達が正しいと言いい始めて、ウチに理不尽な暴力を仕掛けてくると思うんだ。流石に暴力に出られると抑えきれなくなるんだ」

和真と友香はFクラスの人間が起こす行動を予想しているようでの先に起きたFクラスの暴挙を伝えると、

「……うん。言われると本気で起こつそうだから怖いよ」

「そうですね」

明久と瑞希はクラスメート達がおかしな覆面を被り、Cクラスの生徒を追いかけ回している姿が田に浮かんだようで顔を引きつらせた。

「そうなると」「くらなんでも無理だ。その場合は試合戦争になると思つ」

「……そうだね」

雄一が考へている事を話すと明久と瑞希は真剣な表情になつてきており、

「まあ、暴力に出ちまつと正当性を訴えられないって事に気づかないと坂本の抜けてるところなんだけどな。あいつ、自分が元神童だからって言って現実を見れないガキだろ」

「……結城君が現実的すぎる氣もするんだけど」

「そ、そうですね」

和真はFクラスの代表である雄一を『ガキ』だと言い切ると友香と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、結城くん、試召戦争は避けられないって事だよね？」

「そうだな。まあ、実力行使できた奴らは普通に処罰対象になるから、それでも良いんだけどバカ代表の作戦に乗つてやらないと反省もしないだろうしな」

「……そうだね」

和真はFクラスに反省させないとけないと明久は試召戦争後の瑞希の体調を心配しているようで目を伏せると、

「大丈夫よ。吉井くん、私達は勝つてもFクラスの設備は落とさないから安心して」

「ああ。後な。姫路、試召戦争になつたら、手加減するな。戦い難くても全力で戦え」

「で、ですけど」

「心配するな。お前が戦い難いって事もわかるけどな。下手に手加減をするとお前のFクラスの居場所がなくなるからな」

和真は瑞希に試召戦争は全力を出せと言い、瑞希は不安そうな表情をするが和真是彼女を安心させるように優しい笑みを浮かべる。

第89問

「まあ、俺達が勝つ事を前提で話しているけどな」

「確かにね。姫路さんに勝てるかはわからないのよね」

和真と友香は試召戦争になるとは言え、実際に瑞希に勝てるかわからないと苦笑いを浮かべると、

「ちょ、ちょっと待つてよ。それなら、何で試召戦争を起こすつて言つんだよ。結城くん達にメリットつてないんでしょ。試召戦争をする必要なんてないだろ?」

「そうです。私と吉井くんなら大丈夫です。ですから、落ち着いてください」

「ん? 2人ならどうにかなるつて事か? 羨ましい限りだ」

「ホントだよ」

明久と瑞希は2人の様子に慌てて考え方直すように説得しようとする
と和真は明久と瑞希を交互に見た後にからかうように笑い、愛子も
和真と同じ意見なようでうんうんと頷き、

「な、何を突然言い出すんだよー?」

「そ、そりですよー?」

「……結城君、工藤さん、あまり、2人をからかわない」

明久と瑞希は顔を真っ赤にして否定する姿に友香はため息を吐く。

「代表様からの」命令だから、従いますか。後な。吉井、姫路」

「な、何？」

「メリットとかのデメリットの問題じゃいんだよ。お前ら2人が困つてゐるのに自分の我だけ押し付けてる奴、それを利用しようとする奴がいる事が許せないんだ。少なくとも俺が知る限り、坂本と木下弟、島田は去年からのお前の仲間なんだろ。それなのに誰一人としてお前の言葉を聞かないんだからな」

和真の怒りはすでに収まらないところまでているようであり、声の調子は落ち着いているが背中の後ろには真っ黒な何かが漂つているように見え、

「……これはこれで危ないかな？」

「大丈夫だと思いたいわね」

和真の様子に友香と愛子は苦笑いを浮かべる。

「まあ、そう言つ事だから、吉井も姫路もあまり気にするな。正直、なるよしにしかならないからな」

「そんな感じで良いのかな？」

「良いんだよ。仮に失敗してもたかだか3ヶ月だ」

和真は試合戦争に負けても設備が落ちるのは3ヶ月だけだと言い切り、

「……そう思つてるのは結城君だけよ。私は仮に負けた時にクラスメートから何を言われるかと思つと胃が痛くなるわよ」

「わう言つといひ、結城君つて強いよね」

「就職希望だからな」

友香は代表として立場があるから苦笑いを浮かべるが和真是進級した時から就職希望だから設備は関係ないと言い続けているため、迷いすらないようであり、

「な、何か、結城君を見ると考へてるのがおかしくなつてくるかな？」

「そ、そうですね」

明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、その表情は和真達が休憩室にきた時は確実に変わっている。

「それは生活費を使い込んで、極貧生活をしてくる吉井には言われたくないな」

「確かにそうかも」

明久と瑞希の様子に小さく口元を緩ませると明久をからかい、明久は和真の言葉に笑顔で返した時、

「姫路さん、豚野郎、そろそろ、戻つてください。結城和真、邪魔をするなら手伝いなさい…！」

「和真、ちょっと手が足りないから出でくれ」

美春の怒声が休憩室まで響き、新が苦笑いを浮かべながら休憩室に顔を出し、

「わかつたよ。代表様、工藤。俺はバイトに入るから、会計の時は俺にツケといてくれ」

「おつけー。小山さん、行こう」

和真は洋子も遅くなると言っていた事もあり、バイトを了承する。

第90問

「……一日も我慢できないのかよ」

「……呆れてものも言えないわね」

和真はFクラスがCクラスを挑発し始めた翌日に登校すると教室は昨日の下校時間に友人の女子と話をしていたCクラスの男子生徒数名がおかしな覆面をかぶった生徒に襲撃を受けたと言つ話を聞いて大きくため息を吐く。

「カズ、どうするの？ 仕掛ける？」

「待て。落ち着け。昨日も言つただろ。昨日の今日じゃ、俺達の印象が悪い。なにより、吉井や姫路の立場がない」

清美は和真にFクラスへの試召戦争を仕掛けるかと聞くが和真は首を横に振り、

「しばらくは待機だ。悪いんだけど、あまり、学内は一人で動くな。いくらなんでもこれ以上は」

「和、さつき、おかしな覆面をかぶった奴らが」

和真はいくらFクラスでも短慮な人間ばかりではないと言おうとするが次から次と教室にはCクラスの生徒がFクラスに暴力を受けたと言う話が伝えられ、

「……ここまでバカなのか？」

「……なんて言つたら良いのかしら」

和真と友香は眉間にしわを寄せた。

「結城くんの言い分もわかるんだけど、これ以上はこのクラスの怒りを収まらないよ」

「確かに。いくらなんでもやりすぎだわ」

新と棗はクラスメートから聞こえる不満の声にビックリした良いのかわからないようであり、

「……とりあえず、今の状況をバカクラスの代表に止めされると云つてくる。その後は相手の出方次第」

「結城くん、私も行くわ」

「代表様も？ 危ないから」

「良いから、行くわよ。結城君がキレたら元も子もないんだからね」

和真はFクラスの教室に行つてみると席を立つと友香は和真の隣に並び、

「山下さん、しばらくお願い」

「了解。その代わり、2人ともキレるつてのは無にしてね」

「ああ。気を付けるよ」

清美は頭に血が昇りやすい2人がFクラスに向かう事に不安な所があるようで落ち着けと言つて2人を見送る。

「さてと、行きますか？」

「そうね」

和真と友香は中央階段を挟んだ旧校舎にあるFクラスの教室に向かつて歩き始め、

「流石の結城君の予想も外れたわね」

「予想なんて当たるか外れるかなんてわかんないって、A対F^{バカ}が出来過ぎだつたんだよ」

和真はFクラスの行動が予想以上に斜め上を爆走しているため、頭が理解する事を拒絶していいるようで表情は険しく、友香は和真を落ち着かせようと苦笑いを浮かべて声をかけると和真は友香が氣を使つてくれている事に表情を少し緩めるが、

『裏切り者には死の制裁を！…』

『殺せ！…』

その姿を何か勘違いしたようでおかしな覆面をかぶったマント姿の3名の生徒が和真と友香に向かつて巨大な鎌を振りまわして襲つてくる。

「ちょ、ちょっと、何よ！？」

「何？ つて、 Fクラスだろ？ 」

友香はとつたの事で顔を引きつらせ、逃げる事もできずいるが対照的に和真は落ち着いており、ため息を吐くと、

「暴力反対と」

「え！？ ちょっと、 結城君！？」

慌てる事なく、最初の鎌の攻撃を避けると3人の足を引っ掛け、3人は前のめりに廊下に大部し、

「…… Fクラス3名確保。 校内暴力は何日間の停学処分かな？」

覆面をはぎ取ると3名の生徒はやはりFクラスの生徒であり、笑顔で停学は免れないと言うが、

『バカじやないのか？ 僕達の行動は乙女を守る正義の行動だ』

『結城和真、貴様に制限される覚えはない！？』

Fクラスの生徒は自分達の行動は正義だと言いきった時に頭に拳が振り下ろされ、

「…… そんなわけないだろ。 結城、 小山、 迷惑をかけたな」

「に、 西村先生」

「別に良いですよ。 その代わり、 こつちは被害者なんで現行犯です

しね。その3人の処罰はきつちりとお願いします」

「ああ。当然だ。お前ら生徒指導室で詳しい話を聞かせて貰うぞ」

眉間にしわを寄せた西村教諭は和真と友香に頭を下げる。和真是3名の生徒をきつちりと処罰して欲しいと頭を下げ、西村教諭は3名の生徒を引きずつて歩いて行く。

第91問

「行くか？」

「う、うん……」

「ん？ 代表様、どうかしたか？」

和真是Fクラスの教室に行こうと友香に声をかけると友香は和真の様子に何かあるようであり、和真是首を傾げる。

「結城君は、どうして、あんなわけのわからない人達相手に直ぐに対応できるの？」

「いや、あれ以上に関わってるからな。店長……清水の親父さんの相手をすると考えたらあの程度の殺意は何ともない」

友香は先ほどの和真的様子を疑問に思つたようであり、不思議そうな表情をすると和真是苦笑いを浮かべながら、上には上がいると言いい切り、

「……清水さんのお父さんがおかしい日には店に行かないようにしないとね」

「そうしろ。それが命を守るために必要な作業だ」

友香は清美達からも美春の父親の異常性は聞いているため、身の安全を守るために心に誓い、和真是大きく頷き、

「まあ、話も落ち着いたし、行くか？　ここで遊んでても仕方ないしな」

「そうね」

2人は再度、Fクラスの教室に向かつて足を進める。

「雄一、どう言つ事だよ！　いくらなんでも暴力はやりすぎだろ！」

「そうです」

Fクラスでは明久と瑞希がクラスメート達の行動はやりすぎだとFクラスを挑発すると言いだした張本人でもある雄一に詰め寄ると、

「つるせえな。わかつてるよ。俺だつてこんな直ぐに行くとは思つてなかつたんだよ。それを」

「雄一はクラスメート達が始めた理不尽な制裁は考えていなかつたようで乱暴に頭をかくが、

『正義は我らにある。結城和真の首を我らに奉げるのだ！』

『あの男は先日、Eクラス代表の中林宏美と喫茶店でデートをしていた。それなのにFクラス代表の小山友香にも手を出している。乙女の味方と言う崇高な理想を掲げている我らには絶対に始末しなければいけない男だ！』

Fクラスの生徒達は和真を殺す事だけを考えているようで和真の写真をかかげて嫉妬のこもった声で叫びながら和真の写真にカッター

を突きたてている。

「何が不味いのよ？ あんな、人の話も聞かない最低な男に制裁を加えるのは当然でしょ」

「悪いけど、あんたら豚に制裁を受ける義務はないよ

美波は和真を余程毛嫌いしているようで憎しみのこもった声で和真を倒すと言つた時、和真と友香が「クラスの教室のドアを開ける。

「ゆ、結城君に小山さん」

「どうしたんですか？」

「2人ともおはよう。ちょっとな。バカ代表に話があつたんだよ。一応は俺と代表様は正式なクラスの使者だからな。話くらいは聞けよ。ん。豚相手に話さないといけないから語尾に『ぶひぶひ』とでも付けてやろうか？」

明久と瑞希は和真と友香の登場に驚きの声をあげるが和真是気にする事なく、2人に朝の挨拶をすると雄二を挑発するように呼び出し、

「……なんだよ。豚になんか話しかけたくなかつたんじゃねえのか？」

「ああ。別に話しかける気もなかつたがな。お前らの行動があまりに程度が低くてな。自分達の行動を考え直す事なく、暴力に出るなんて、言つた通り、違うな。家畜以下が正しいか？」

「何ですつて……」

雄一はこれから和真が言つ事は理解しているようであり、Fクラスの行動は不味かつたがそれでも自分の思い通りに進んでいると思つてゐるようで周りが気付かないように小さく口元を緩ませるが和真是ため息交じりでFクラスをバカにすると美波が和真の胸倉をつかむ。

第92問

「結城君、落ち着いて！？ 美波も！？」

「そうです。美波ちゃん、暴力はダメです！？」

「吉井、姫路、心配するな。俺は落ち着いている」

和真と美波の一触即発の空氣に明久と瑞希は慌てて声をかけるが和真は苦笑いを浮かべて美波の手をつかみ、

「俺は話し合いに来たと言つてるのにそれも聞けないから家畜以下つて言われるんだ。それも気づかないのか？」

落ち着いた口調で美波の腕を引き剥がし、

「家畜代表、こっちからの話は昨日と今日、ウチのクラスに理不尽な暴力を仕掛けたバカ達を引き渡せ。それだけだ。それで平和的に解決しようじゃないか」

「あ？ そんなものに応える義理はねえよ」

「それもそつだな。クラスメートもまとめる事も試合戦争も勝つ事もできない無能な代表だしな」

和真は暴力に走った生徒を見つけて引き渡すように言うが雄一は和真の言葉を鼻で笑い、和真は想定内なようで雄一をバカにする。

「そりゃそつだろ。簡単に同盟を組んだクラスを裏切るようなクラ

スを信じる事なんてできねえよ

「……坂本くん、言つておくわ。簡単に裏切った覚えもないわよ。Bクラスは同盟を続けるほどの価値のないクラスだった。それだけでしょ」

雄一はあくまでも原因はCクラスにあると自分達を正当化したいようだが、その言葉を聞いて友香が口を開く、

「は？ よく言つたな。流石は卑怯者をまとめる代表様だ

「まあ、同盟を取りやめた時にキチンと話もしたし、部外者のあなた方に避難される筋合はないわよ。だいたい、あなたはこっちに不利にしかならない条件を渡された時にクラスをまとめるため、守るために代表としてその同盟を続けてられるの？ クラスマートを簡単に売るクラスよ。同盟クラスなんてもっと簡単に売られるでしょ」

「代表様、言つても無駄だぞ。こいつもある小者と同じ事をするだろうからな。相手のクラスの備品を壊す。やつてる事は変わらないし、小者はそれをクラスの実行犯に押し付けてこいつはDクラスに押し付けた。それだけだろ。自分達の非を認める事もできないんだ。それも小者はそれでも代表としてお前らのくだらない提案であんな惨めな格好をしたのにこの家畜代表はAクラスとの条件も守っていない。そんな卑怯な人間が代表なんだ」

和真と友香は卑怯と罵られる理由はこちりで何もないと言い切り、和真は雄一をさりに挑発する。

「……」

「何だ？ 何か反論でもあるのか？ クラス代表として責任も果たしていない。卑怯者以下の代表様。家畜クラス、思い出せよ。今、最初の設備以下になつているのは誰のせいだ？ それも理解できないのか？ さすがは家畜以下の知能しかない奴らの集まりだ」

雄一は和真の敵意に視線が鋭くなるが和真は気にする事なく、Fクラスを挑発すると自分の感情で走る人間の集まりであるFクラスの生徒の敵意は和真と雄一に集中し始め、

「てめえ、何が目的だ？」

「何が目的？ 最初から言つてるだろ。ウチのクラスに理不尽な暴力をふるつた生徒を引き渡せ」

「制裁でもするつもりか？」

雄一はこの挑発の裏にまだ和真の考えがある事を感じ取り、和真の作戦の底を見ようとしているようである。

第93問

「バカか？ 何で同じ事をしないといけないんだ？ 僕達はお前ら家畜以下と違つてルールを守るつて事を知つてているんだ。処分は学園に任せるに決まってるだり」

「……そういう事か？」

和真は当然、学園に処罰を任せると言つと雄一は和真が何を考えているか理解したようで苦虫を噛み潰したような表情をするが、

「その答えはノーだ」

「そうだな。だいたい、無能な代表様にあの家畜以下をまとめる事はできないんだ。それにクラスを売る事になるからな。俺達を卑怯者扱いしてまとめたクラスに亀裂を入れるわけにはいかないからな」

雄一は和真の提案に乗る事はないと首を横に振ると和真はため息を吐き、雄一の心境を読み当てる、

「そうだな。それができないなら、俺達が提案するのはお前らを少しでも反省させるために」

和真は小さく口元を緩ませると、

「模擬試合戦争を申し込む」

「も、模擬だと？ 本番ならまだしも模擬なんて受けるわけがないだろ」

本番の試合戦争ではなく模擬試合戦争を宣言し、雄一は自分達に有利なものではないため和真からの提案を跳ねのけようとするが、

「受けてやるわよ！！ 結城和真、あんたに西村先生の鬼の補習を受けさせてあげるわ！！！ あんたをぶちのめして、ウチの前でウチが正しげって土下座させてあげるわ！！」

美波は和真からの挑発にかなり頭にきているため、和真を完全に敵と見なして吠えるとFクラスの生徒も同様に和真の挑発が効いていたようで模擬試合戦争を受けると騒ぎ始める。

「ま、待て。模擬試合戦争はダメだ！！ 勝つても俺達に何もないんだぞ」

『「つるせえ。坂本！！ 無能な代表の話なんか聞くわけがないだろ！！ 俺達はあの男をグロテスクに殺せればそれで良いんだ！！ 設備なんか知るか！！』

雄一は完全に開戦の空気になっているFクラスの生徒を抑え込もうとするが和真の打ち込んだ楔はしっかりと最初から存在していたかわからないFクラスの絆を打ち碎くには充分すぎるものであり、誰も雄一の説得に耳を傾ける者はいない。

「結城君、これが目的だったの？」

「ああ。これだと設備を落とす必要もないからな。それに勝手にCクラスに暴力をふるつた家畜以下と俺達被害者の私闘になるわけだから、吉井と姫路が参加する義理はない」

友香は和真相手に向けられる罵倒や殺意に居心地が悪そうに和真の制服を引っ張ると和真はFクラスの生徒の罵倒も殺意もどうでも良さそうであり、つまらなさそうに欠伸をした時、

「お、おはようなのじや」

「ひ、秀吉、どうしたのー?」

ボロボロになつた秀吉が登校してきたようで弱々しく朝の挨拶をし、秀吉の様子に明久は慌てて彼に駆け寄ると、

「……ああ。木下さん、人殺しにならなくて良かったな」

「……それでも充分、やりすぎよ」

「そ、そうですね」

昨日の『ラ・ペディス』のやり取りを見ていたメンバーは秀吉に何があつたかを理解したようであり、

「結城和真、お主、姉上に何を吹き込んだのじやー! そのせいでのシはいわれのない暴力を受けたのじやー!」

「……お前、木下さんが説教した意味も人のせいにするのかよ。最低だな」

秀吉は和真を見るなり、優子からの暴力を和真のせいだと叫び、和真は話の通じない秀吉の様子に大きく肩を落とす。

「何じやとー!」

「つるせえな。言葉も通じない家畜……秀吉だつたし、サルで良いか？ サル相手に話す事なんてないね。家畜以下代表。開戦はHR後だ。代表様、帰るぞ」

「ええ

秀吉は和真にバカにされているため、声を張り上げるが和真は気にする事なく、模擬試召戦争の開戦時間を告げると友香と一緒にFクラスの教室を出て行く。

第94問

「……カズ、あんた、ずいぶんと挑発してきたみたいね」

「挑発？ 何を言つてるんだ？ 僕は事実しか言つてないぞ」

「核心を突かれた人間は反省するか責任転嫁するつて相場は決まつてるだろ」

「……Fクラスは全員が後者なわけね」

模擬試験戦争が開戦されるとCクラスは和真、新、清美を中心に戦闘を開始するがFクラスの生徒の8割は和真に向かつて突撃してきており、作戦も何もないため簡単にCクラスに返討ちにあつて行く。

「さてと、そろそろ。坂本が何かを仕掛けてくるかな？」

「仕掛けてくるって、坂本くんは完全にFクラスからの信頼を失つてるんでしょ。それなら、仕掛けてなんかこないでしょ」

「まあ、普通はそなんだけどな。Fクラスはバカで責任転嫁が得意な家畜以下の奴らばかりだからな。ここまでやられると次は代表の坂本のせいにして作戦の1つでも出せと言い始めてる頃だろ」

「……どうしようもないわね」

和真はFクラスの戦力低下になりふりなどかまつていられなくなつた人間が先ほど罵倒していた雄一に作戦を聞くと予想した時、

「見つけたわよ。結城和真！！」

「和真にまた女の影が！？」

「……違う。だいたい、俺にだつて選ぶ権利がある。あんな感情任せで動く猪女は願い下げだ」

美波が和真を見つけて吠え、その様子に清美は和真をからかうように笑うが和真是大きく肩を落とすが、

「いや、カズの周りって、代表、宏美、清水さんって、感情で動くタイプが多いでしょ？」

「……否定できないのが痛いな」

清美はニヤニヤと笑いながら和真の周りにいる女の子は美波に似たタイプが多いと言つと和真是眉間にしわを寄せる。

「ウ、ウチをバカにするな！！ ウチだつてあんたみたいな。性悪、お断りよ！――」

「カズ、今更だけど、あんた、島田さんに何をしたの？」

「別に何もしてない。こっちが因縁を吹つかれられたから正論で返しあだけ」

「……こっちも後者なのね」

美波は和真と清美の話に和真を威嚇するように叫ぶが和真は相変わらず、美波の相手をする気はないようであり、

「許さないわ。結城和真、絶対にウチに土下座で謝らせてあげるわ！… Fクラス島田美波がCクラス結城和真に数学勝負を挑むわ！
！ 試験召喚！…」

「はいはい。受けますよ。試験召喚」

美波は和真を指名して数学のフィールドを開催すると美波の前の床には機械的な魔法陣が浮かび上がり、美波を2頭身にしたような召喚獣が呼び出され、彼女の召喚獣は和真に向けて武器であるサーベルを構え、和真は美波の相手をするために1歩前に出て召喚獣を呼び出すと美波の時と同様に床に魔法陣が浮かび上がり、白いブレードアーマーに大剣を装備した和真の召喚獣が呼び出される。

「島田さんの数学、Bクラスくらいあるね」

「そうだな。でも」

「新と清美は美波の数学の点数が200点近い事に感心したように言うと、

「数学は得意なのよ。さあ、結城和真、あんたは西村先生の補習でも受けてなさいよ…」

「バカな事を言つなん」

美波はよっぽど自分の数学の点数に自信があるようで和真の召喚獣に向かって駆け出してくるとサーベルを振り下ろすが和真の召喚獣は大剣でサーベルを弾き飛ばし、

「……でも、和真は理数は得意なんだよな」

「あいつのシスコン力は凄まじいよな」

和真の点数は300点には届かないもののそれでも200点代後半まで上がっているため、新と清美はため息を吐く。

第95問

「あんた、何なのよ！？ ウチはBクラスにも数学は負けでないのよ！？」

「……いや、普通、上位クラスが相手なんだから、自分より点数が高い前提で仕掛けでこいよ」

美波は数学にはAクラス以外には負けないとと思っていたようで和真の召喚獣の上に表示されている数学の点数に声をあげるが和真は彼女の反応に眉間にしわを寄せると、

「……島田さんって本当に猪みたいね？」

「いや、Fクラスの9割がそうだろ」

新と清美は美波の反応に大きく肩を落とし、

「猪女、自分の非を説ぎるなら補習室に送らないでやるけど、どうする？」

「誰が猪女よ！？ だいたい、何でウチが謝らないといけないのよ！？ ウチがあんたに謝る事なんて何一つとしてないわ！？」

「……いや、俺、胸倉捕まれて罵倒されてるんだけど、他にも脅迫されてるじ

和真は明久と瑞希の話もあるため、それでも美波には話が通じるか確認しようと降伏勧告をするが美波は自分は何も悪くないと和真の

提案を跳ねのけ、和真は美波の様子に大きくため息を吐くと、

「まあ、猪に話が通じるわけないか。品種改良も終わってないからな」

「ウチをバカにするな…！」

美波は和真の態度が気に入らないため、彼女の召喚獣は怒りに任せて和真の召喚獣に襲いかかるが、

「ふーん。教師仕様つて、去年の召喚獣実習とかより、召喚獣と深く繋がっている気がするな」

和真は落ち着いた様子で美波の召喚獣のサーベルを弾き飛ばす。

「な、何で、あんたは召喚獣の操作まで上手いのよ…？」

「……これもお前らの被害を受けた結果だ」

美波は和真の召喚獣が特別仕様の事を知らないため、驚きの声をあげるが和真はその言葉に怒りがこみ上げてきたようで背後に真っ黒な殺意をまとい始め、

「……改めて聞くと、和真がFクラスを恨むのは当然なんだよな」

「……調べてみると観察処分者の仕事の6割つて生徒が壊した備品の移動みたいよ。それもウチの学年が壊した備品。和真がFクラスを嫌うのって正当な理由だよね」

「その原因は誰一人として自分は悪くないって言うわけだしな」

新と清美を中心としたCクラスの面々は和真の様子に巻き込まれたくないよつで和真から離れるよつに陣取り、

「ちょ、ちょっと、あんた達、何で逃げるのよ！？」

「だつて、私達はこの件に關しては悪くないしね。元々、島田さんに関しては和真の話を聞く限りは吉井くんのラブレター事件の事をカズに謝れば終わつたわけだし、それを自分を省みずに和真が悪いって言つてるんだから、助ける義理も正当性もないよ」

美波は和真の様子に背筋に冷たい物が伝つたようで和真以外にはCクラスに恨みもないと言つ事もあるのか、Cクラスにまで助けを求めるが当然、誰も彼女を助けるわけもなく、

「ま、待ちなさい。まずは落ち着きなさい。ウチは人間なの話し合いを提案するわ」

「……その段階はとつぐに過ぎているだろ。それくらいも理解できないのか？」

美波はなりふりはかまつていられなくなつたよつで先ほどまでは憎悪の対象としか見ていなかつた和真に話し合ひを提案するが和真是当然、跳ねのけると同時に和真の召喚獣の大剣は美波の召喚獣の頭上から振り下ろされ、彼女の召喚獣の点数は一気に『0』になり、

「戦死者は補習つう！――！」

「補習は嫌ああああ！――？？ ゆ、結城和真、覚えておきなさいよ――！」

美波は西村教諭に抱えられて退場して行くが和真への恨みは色濃くなつて行くのが誰の目からも明らかであり、

「……カズ、あんたはそう言つ星の下に生まれたのよ」

「……いや、そつ言つのは止めてくれ」

清美は和真を労うように彼の肩を叩くが和真は美波を補習室送りにした事で少し冷静になつたようで大きくため息を吐く。

第96問

『坂本、お前のせいなんだから、どうにかしろよ』

『あの。生意気な結城和真を血祭りにあげる手を考えろよ』

「……」

Fクラスの教室では和真の言った通り、雄二に責任を押し付けて彼を攻め立てており、雄二は自分の指示を無視して勝手にCクラスへの暴力を開始し、和真の挑発に乗ったクラスメート達の行動に眉間にしわを寄せている。

「雄二、諦めなよ。今回は確実に先に手を出したFクラスが悪いわけだし」

「……黙つてろよ。あいつの思い通りになつてゐるこの状況が俺は気に入らねえんだよ。そんな事を言つてないでお前も戦つてこいよ」

「イヤだよ。僕も姫路さんも結城君達Cクラスに恨みも何もないし」

「そうですね。それにそれをしてしまつと結城くんが私達を気づかつて模擬試験戦争を提案してくれたのを裏切つてしましますから」

明久は今回の模擬試験戦争はFクラスに全面的に悪いと思っており、雄二に諦めるように言うが雄二は和真の事が気に入らないため、和真に頭を下げる事など論外だと吐き捨てるに明久と瑞希を見て、Cクラスと戦つて来るよう指示を出すが明久と瑞希は雄二の指示には従えないと首を振り、

「何で、わかんねえんだよ。あいつはお前達の事なんか気にかけてねえよ。自分達の有利に事が進むようにしてただけだ」

「そりなのじや。あの男は卑怯者なのじや！！」

雄一は戦う気がない明久と瑞希の様子に舌打ちをして和真が強力な戦力である瑞希を戦線に出さないための作戦だと決めつけ、秀吉は優子が自分への暴力をふるつた事を和真のせいと決めつけている事もあるため、和真を卑怯者だと叫ぶ。

「秀吉……どうして、わかつてくれないの？」

「わかつてないのは明久、お主じや！！」

「木下くん」

明久は秀吉の様子に悲しそうな表情をするが秀吉はすでに明久の言葉を聞く気はないようで明久に当たると教室を出て行ってしまう、

「……結城の弱点でもわかれれば良いんだけどな。何か無いか？ 情報を集めに行つたムツツリーはまだ戻つてこないか？」

「…………今、戻つた」

雄一は秀吉と明久の様子を気にする事なく、和真を倒す算段を付けるためには情報が足りないようで乱暴に頭をかいた時、Cクラスの情報を集めに動き回つていた康太が教室に戻つてくる。

「ムツツリー、あの男の弱点は何かわかつたか？」

「…………男になど興味はない。ただ、結城和真と高橋先生が従姉弟で一緒に住んでいると言う殺したいほど嫉ましい情報を手に入れた」

雄一は康太に駆け寄り、和真の情報を聞くが康太は和真の情報で洋子と和真が同棲している事を調べ上げ、和真に対する殺意をあげる

と、「高橋先生と一緒に住んでいる？ なるほど、これは使えるか？」

雄一は康太の様子を見て、Eクラス特有の能力に目を付けたようでニヤリと笑い、

「良いか。お前ら、よく聞け。結城和真は代表の小山友香やEクラス代表の中林宏美以外にもAクラス担任の高橋先生に手を出していくそうだ」

『『『何！？』』』

『結城和真、許さん』

『あいつの贋物を我らが高貴な魂を持つ異端審問会に奉げるのだ』

和真を女たらしだとクラスメートに話すとクラスメート達はおかしな覆面をかぶり手には大鎌を持って教室を駆け出して行き、

「結城和真、俺をバカにした事を後悔しろよ」

「…………雄一、お前は結城君の事を何もわかつてないよ」

雄一はFクラスの生徒に血祭りにあげられる和真の姿を思い浮かべたようでニヤリと口元を緩ませるが明久は雄一の考えた策が和真相手では愚策でしかない事を理解しており、雄一を哀れむような視線を送る。

第97問

「……感情任せで策も無しか？」

「……カズ、あんたは本当に敵を作るのが上手いわね。聞いた話じゃ、木下くんって、落ち着いた感じの子つて話なのに」

和真は作戦もなく、和真に向かつてきた秀吉を補習室送りにすると西村教諭に担がれながらも和真に敵意を向けている秀吉の様子にため息を吐くと清美は完全にFクラスを敵に回した和真を見て苦笑いを浮かべた時、

「……和真、何か、おかしな連中が出てきたぞ」

「そうみたいだな」

おかしな覆面をかぶり手には巨大な鎌を持つたFクラスの生徒20名が廊下の先からこちらに向かつて駆け出してきており、その様子にCクラスの生徒達は氣落とされたようで後ろに後退して行くなか、和真と新の2人は下がる事なく呆れたようにため息を吐いており、

「結城君、北条君、余裕そうだけど大丈夫なの？」

「まあ、あの程度の殺意、店長に比べれば余裕だな」

「まったくだ」

Cクラスの増援に来たはずの棗は和真と新の様子に自分がきた意味があるのかと聞くと2人は美春の父親の方が恐ろしいと言い切る。

「それじゃあ、2人に任せた」

「いや、だからと言つて、この人数差は無理だろ」「

「大丈夫。骨は拾つてあげるから」

「……いや、それは大丈夫じゃないからな」

棗はあまり今のFクラスの生徒に関わり合いたくないようで和真と新に任せようとするとが流石に2人では20人の相手はできないと和真がため息を吐いた時、

『居たぞ。結城和真だ！！』

『高橋先生にまで手を出す色欲魔人を我らの手で八つ裂きに！！』

Fクラスの生徒達は絶対に触れてはいけないものに手を出し、

『総員、撤退！！ 結城君から離れます！！』

「撤退よ！！ Cにして巻き添えを喰らうわけにはいかないわ！」

棗と清美は和真の背後からおかしな殺意があふれ始めた様子にCクラスに撤収命令を出し始め、Cクラスは蜘蛛の子を散らしたかのように撤退を開始し始め、

『クラスメートにも見捨てられるとはな。これで終わりだ。結城和真！！』

『『『死ねええええええ！－！－！－』』』

1人で廊下の中心に立つ、和真に向かい5人のFクラスの生徒が召喚獸を呼び出す事なく、巨大な鎌を振り下ろす。

「……お前ら、覚悟は良いな？ これからは虐殺だ」

しかし、巨大な鎌を振り下ろした先には和真はすでにおらず、洋子の名前が出た事で和真の怒りは限界を超えており、目の焦点は合っていない。

「……誰だよ。和真相手にこんな愚策を取ったのは？」

「坂本君だと思つよ。結城君相手にずいぶんと辛酸をなめさせられたみたいだし、結城君を血祭りにあげられるとか考えたんじゃないですか？」

「……それが触れてはいけないものだと知らずにとは坂本君もバカよね」

新は和真の逆鱗を触れるような作戦を考えた相手の間抜けさに大きくなため息を吐くと棗と清美はこの後に起るであろう惨劇に顔を引きつらせた時、

「……Cクラス結城和真が家畜共に物理勝負を挑む。試獣召喚^{サモン}

和真は背後に真っ黒な殺意をまとつたまま、彼が持つ最強の剣である物理を惜しげもなく使って召喚フィールドを開けると和真の召喚獸の頭の上には437点と表示され、右手には漆黒に輝く腕輪が

装備されており、

「……大暴走」
「オーバードライブ

和真は腕輪を発動させると和真の召喚獣の点数は点数を上げ始め、単体教科の点数であつた点数が彼の現在の総合得点である267.8点まで上昇して行き、

「これが結城君の腕輪の能力ですか？」

「……単体教科で総合得点で戦えるのは反則だろ？」

「だけど、酷くカズらしい気がするは何でだらうね」

和真の腕輪の能力を見たじクラスの生徒達は顔を引きつらせながらも和真らしい腕輪の能力だと頷き、

『ちょっと待て！？ ほ、暴力はどうかと思つんだ！…』

『せ、先生、見てください。この男は暴力をふるっています。停学に、いや、退学に！…』

和真は腕輪の力でFクラスの召喚獣とともにFクラスの生徒まで蹴散らして行く姿にFクラスの生徒は自分の身の危険を感じたよう自分達が和真を本気で殺そうとしていた事など忘れてそばにいる教師陣にみじめにも助けを求めるが、

『……今回は巨大な鎌を振りまわしていた事もありますし、結城君の正当防衛と判断します』

『そりですね』

『『『お前ら、それでも教師か！？』』』

『すいません。私達も人間ですので』

教師陣も人間のため、自分達の手伝いを良くしてくれた和真と問題ばかり起こすFクラスを天秤にかけたようで全員が和真の味方をし、

「お前で最後だな？」

『ま、待て。我々は人間だ。話し合いを！？』

「……ここまで話し合いを提案していたのに聞きいれなかつたのはお前達家畜以下だろ」

和真は一人でFクラスを全滅させ、氣絶をしたFクラスの生徒は西村教諭に担がれて行く。

「……次は家畜以下代表だな」

「と、とりあえず、追いかけるか？」

「そうだね。その前に……霧島さんを呼んでこない？ 坂本くんの罰のために」

「そうですね」

和真は点数を減らす事なく物理のフィールドを開いたまま、Fクラスに向かって行き、残されたCクラスの生徒達は雄一への制裁を

彼の幼なじみの『霧島翔子』に任せると決めたようで数名が翔子を呼びにAクラスの教室に向かつて行く。

第97問（後書き）

どうも、作者と、

和真「主人公です」

和真の腕輪はお披露目です。

和真「反則っぽい。能力だな」

まあ、そうですね。でも、和真らしい。

和真「……否定できないな」

怒りに任せた大暴走の和真。

Fクラスを殲滅して次は雄一を血祭りにあげにFクラスに向かいます。

雄一の運命はいかに？（爆笑）

第98問

「……家畜以下代表。居るか？」

「ゆ、結城和真！？ な、なんで、お前がここに？ あいつらを抜けてきたって言うのか！？」

「……いや、正式に言えば皆殺しにしてきたが正しいか？」

「そうですね」

和真是Fクラスの教室のドアを蹴破ると雄一は嫉妬にまみれたFクラスの生徒の間を和真が抜けてこれるとは思つていなかつたようで驚きの声をあげると和真の後を付けてきた新と棗は苦笑いを浮かべ、「……やつぱりね。雄一、お前は触れてはいけないものに手を出しあんだよ」

「えーと、坂本くん、死なないでくださいね。結城くんも人殺しにならな」ように頑張つてください」

明久は巻き添えを喰らうわけにはいかないとつたようで瑞希を背に守るように後ろに後退すると瑞希は立場的には片方だけ応援するのはおかしいと思つたのか明久の背中に隠れたまま2人を応援するがその応援の言葉はおかしく、

「ちょっと待て！？ 姫路、その応援の仕方はおかしいだろ！？」

「……結城和真が家畜以下代表の霧島雄一に物理勝負を挑む。試験モジ

召喚

「誰が霧島雄一だ！？　だいたい、模擬でも試召戦争だろー？　手を出すんじゃねえよ！？」

雄一は瑞希の応援に声を上げた時、和真の右ストレートが雄一の顔面を襲うが雄一はその攻撃を何とか交わして教師陣に和真の反則負けを宣言しろと言いたげに吠えるが、

『西村先生から結城君の件は田をつぶる様に指示が出でると学園長の許可も出でます』

「どんな理由だ！？」

教師陣は雄一から田を逸らすばかりかすでに雄一処刑の件は学園の許可が下りてていると言い切り、雄一はあり得ない状況に声をあげる。

「さつさと、召喚獣を呼べよ。家畜以下代表の霧島雄一」

「う、うるせえな。今、呼んでやるよ……なんだ、その点数は！？」

和真は雄一の本体と召喚獣をぶちのめすつもりのため、雄一に声を召喚獣を呼べと言つと雄一は逃げ場所がないため、舌打ちをして召喚獣を呼び出そうとした時に和真の召喚獣の頭の上に表示される単体教科ではあり得ない点数を見て驚きの声をあげると、

「霧島君、わたしが知る限り、今は結城君が物理の単体教科はトップだよ。それで腕輪の能力も付加済みで総合得点で単体教科で戦えるんですよ」

「反則じゃねえかよ！？」って言つが、こんな点数なのが何でCクラスにいるんだよ！？」

「……それはお前らの責任だろ」

棗は何も知らずに負けるのは流石にかわいそつだと判断したのか雄一に声をかけ、雄一は反則だと叫ぶが新は和真の点数がここまで上がった原因はFクラスにあるため、大きくため息を吐く。

「わっやとしる。家畜以下の相手をしてるほど、ヒマじゃないんだよ」

「あぶねえな。お前、暴力で俺に勝てると思ってるのか？ 知つてるか？ 俺は中学時代はそれなりに名前が売れてたんだぜ」

和真はいつまでも召喚獣を呼び出さない雄一への挑発なのか雄一にボディブローを放つと雄一はそれを腕でガードし、試召戦争よりケンカの方が得意だと聞いたげに笑みを浮かべるが、

「……坂本、良い事を教えてやる。たぶん、その状態の和真は西村先生と対等に戦うぞ」

和真はボディブローが防がれた事など気にする事なく、雄一の鼻つ柱をストレートで打ち抜き、和真の逆鱗に触れていると言つ最悪の状況に気づいていない雄一を哀れむ。

第99問

「ちょっと待て！？ こいつは何なんだよ！？」

「何って、シスコンですね」

「それ以外に言葉がないよね」

雄一は中学時代は『悪鬼羅刹』と呼ばれてこの界隈を騒がせていたため、多少はなまつているにしても反応すらできなくくらいの攻撃を仕掛けた和真に声をあげると棗と明久は和真を『シスコン』と言い、新と瑞希は大きく頷く。

「意味が分かんねえよ！？」

「坂本、良いか。世の中なんて意味がわからないものばかりだ。人外化する父娘とかな」

「……うん。清水さんと店長も意味がわからないよね。後は秀吉のお姉さんも」

雄一は4人の反応に理解できないと叫ぶが新は首を振り、明久は最近、見た常識で測つてはいけない人間の顔を思い出して顔を引きつらせると、

「家畜以下代表、早く、召喚獣を呼べ、今なら補習室送りと右腕以外全部の関節を外すだけで許してやる」

「ちょっと待て！？ 許した対応じゃねえよ！？」

「……そつか。なら、全部、折る」

和真は改めて雄一に召喚獣を呼べと言つが、雄一は召喚獣操作では勝ちようがないため声を上げるだけで召喚獣を呼び出さない様子に怒りのボルテージはさらにあがつて行く。

「雄一、早く。グロテスクに倒されろよ

「坂本、俺達もお前らの変な意地に付き合つてゐるほどではないんだ」

「待て！？ 模擬試^{じぐれ}戦争を始めたのはあいつらであつて、俺じゃねえよ！！」

すでに教室には雄一の味方はいない状況であり、雄一はクラスメート達の暴走により、自分の作戦から外れた事もあるためか自分がCクラスを悪者にした噂を流したと言つ事実を否定し始めた時、

「……坂本君、それは流石に情けなくない？」

「……雄一、男らしくない」

友香がAクラス代表であり、雄一の幼なじみの『霧島翔子』を連れてFクラスの教室に入つてくる。

「しょ、翔子、お前、何しにきた！？」

「……夫が粗相したのを謝るのは妻の役目。結城、雄一が迷惑をかけて」めんなさい。雄一を許して欲しい」

雄一は翔子が現れた事に驚きの声を上がるが翔子は和真に深々と頭を下げ、

「……わかった。両田を潰すだけで許してやる」

「だから、それは許した。行動じゃーー？」

「……これで良い？」

和真は翔子に妥協点を話すがその妥協点はやはりおかしく声を上げた時、翔子の指は流れるように雄一の両田に吸い込まれて行き、雄一は畠の上でのたうちまわっている。

「……結城君、こんな決着で良いのかしり？」

「さあな。とりあえず、霧島さん

「……何？」

友香は模擬試合戦争の決着の仕方が意味がわからぬいよう眉間にしわを寄せるが和真の怒りは一先ず、落ち着いたようであり、翔子を呼ぶと、

「これからも旦那が粗相をしたら、調教……しつけを頼んで良いか？」

「……そつとも言つた。夫の粗相を正すのは妻の役目」

「流石、霧島さん、頼りにさせて貰う」

翔子に雄二のしつけを頼み、翔子の返事に笑顔を見せ、

「吉井に姫路、他は補習室だけど授業つてどうなるんだ?」

「さ、さあ」

新は模擬試験戦争が授業の一環ではないため、補習室から帰つてこないクラスで明久と瑞希はどうするのかと聞くが、

「野暮な事は聞いたらダメですよ。後は若い2人に任せます」

「だな。吉井、姫路と2人で自習でもしてろよ」

「一応は学校だからね。あの2人みたいに保健体育の実技は止めてよ」

棗は新の背中を押すと和真と友香は翔子に押し倒されかけている雄二に視線を向けた後に2人をからかうように笑い、

「ちょ、ちょっと、結城君もみんなも何を言つんだよ」

「そ、そうです!?」

明久と瑞希は顔を真っ赤にするが和真達は2人から逃げるよう自分達の教室に戻つて行く。

第100問

「一度、休憩を入れるか?」

「ホント……疲れたよ。まだ、半分くらい?」

「そうだな。それくらいか?」

CクラスとFクラスの模擬試験戦争を終えてから、2週間が過ぎた頃、文月学園は学園祭である清涼祭の準備期間に入り、教師仕様の召喚獣になつた和真と観察処分者の明久は教師達から頼まれた材料をト運んでいると西村教諭は2人の疲労具合を確認して休憩をするように言い、2人は額ににじむ汗を拭つた時、

「和くんに吉井くん、お疲れ様です」

「高橋先生、ですから、学園内では結城と呼んでください」

「す、すいません。どうしてもなれなくて」

洋子が3人に差し入れを持って来てくれたようで購買で売つているスポーツドリンクを3本持つて駆け寄つてくる。

「まあ、結城も落ち着け。今は他に誰もいないし、良いだろ」

「ですけど」

「そうです。それより、差し入れを持つてきましたので、どうぞ。吉井くんも

西村教諭は和真をいさめるが和真は苦笑いを浮かべ、洋子は西村教諭の助けに和真から逃げるよう明久にスポートドリンクを渡し、

「あ、ありがとうございます」

「まったく、高橋先生、」ちやうわまです

明久は喉が渴いているようで洋子から渡されたスポートドリンクに口をつけると和真は苦笑いを浮かべたまま、スポートドリンクを受け取り、

「しかし、吉井が眞面目に手伝いをするとはな」

「な、何？ せっかく、眞面目に観察処分者の仕事をしているのに」

西村教諭は明久が眞面目に観察処分者の仕事をしている事に何かを疑っているような視線を向けると明久は文句がありそうな表情をする。

「まあ、結城達と知り合って少しあは成長したと言つことか……あいつらは、遊んでいるのに、高橋先生、ここを頼めますか？ 僕はあのバカどもを教室に戻してきます」

「はい」

西村教諭は和真達と知り合つて、明久が少しあは眞面目に教師達の話を聞くよになつた明久を見て少しだけ嬉しそうに笑つた後、グラウンドに集まり、野球を始め出したFクラスの生徒達を見て大きくなめ息を吐くと西村教諭は洋子に和真と明久を任せてグラウンドに

向かつて行くと、

「……野球か。周りがお祭りムードのなか、あんな事をやつてるから、女にも縁がないんじゃないか？」

「やうなの？」

「そりゃあ、普通に考えたら、準備をほつたらかして遊んでいる奴らと眞面目に手伝ってくれる男の方が評価が上がるだろ。あいつらは自分勝手すぎるから、女が近づいてこなつて事に気づかないかな？」

和真はFクラスの男子生徒がもてない理由がわかると頷き、明久は首を傾げ、

「それじゃあ、高橋先生、続きをやつましちつか？」

「そうですね。吉井くんも良いですか？」

「は、はい……ねえ。結城君」

休憩を終えて作業の続きを移ろつとすると明久が和真を呼び、

「何だ？」

「結城君はファイードバックがなくて良いなと思つてさ。僕は材料を足に落としたら、痛いし、結城君の召喚獣の方が性能が良くてうらやましいと思つてさ。僕のもどつにかならないかなつて」

「吉井くんの召喚獣ですか？　すぐにはビックもなりませんが、1

年間、きちんと観察処分者の仕事をして、成績の向上が見られれば
変更もあるかも知れませんよ。それに1年間、真面目に観察処分者
の仕事をしてくれれば先生達からの印象も変わってきますから」

明久は和真との召喚獣の性能の違いが羨ましいとつぶやくと洋子は
明久の成長次第では観察処分者からの格上げも考えられると言いつ。

第101問

「そ、そなんですか？」

「はい。元々は学習意欲に欠けた生徒の更生プログラムの一環なわけですし、吉井くんしだいでは観察処分者は返還する事は可能ですが」

明久は洋子の言葉を確認すると洋子は頷き、

「そりなのかな？ 吉井が観察処分者じゃなくなると手伝いは俺だけか？ 1人で召喚獣を呼び出して先生と2人つきりって状況が悪くなくてもなんか悪さしたみたいに感じるんだよな」

「だよね。1人だとなんか、本当に罰を受けてるって感じがするし」

「まあ、吉井は本当に罰なんだけどな」

「まあ、そただけどな」

和真と明久は教師陣の手伝いは面倒な事もあるがそれ以外にも手伝い難い事があると苦笑いを浮かべる。

「そうですか？ そりがつ事なら、和くんと同じ立場の生徒をもう少し増やせないか、学園長先生に提案してみましょっ」

「……高橋先生、既に俺を結城と呼ぶ気もないですね」

「西村先生も良いと言つてしまひたし、私と和くんが従姉弟と言つ事は先生達も知つてゐるわけですし、問題ありません」

洋子は和真と明久の本音の意見が参考になつたようで学園長への提案を考えてみると、西村教諭から許可を貰つた事を自分の都合の良いように受け止めており、和真はため息を吐くと、

「実際は教師の手伝いなんかしたくないのが本音だしな。俺と同じ立場を増やすよりは観察処分者を……ダメだ。Fクラスの姫路以外が観察処分者になると先生達の仕事が『絶対』に増ええる」

「…………うん、否定する要素が見つからないね」

和真は観察処分者を増やす事が簡単だと言いかけるが惨劇しか目に浮かばなかつたようであり、眉間にしわを寄せると明久は大きく頷き、

「まあ、とりあえずは吉井が観察処分者を返還できるかはこの後の成績しだいか？……難しいか」

「ちよ、ちょっと、そこで落とすわけ！？」

和真はくすりと笑うと明久をからかい、明久も雄一達に比べるとバ力にするだけではなく、きちんと自分の事を考えてくれる和真には好感が持てるようになつて、声をあげるがからかわれてはいるが顔は笑つていて。

「和くん、吉井くん、そろそろ、作業に戻つてください。授業中にこちらの都合で手伝つて貰つているのですけど、あまり時間をかけると清涼祭の準備に影響が出てしましますから」

「そうですね。CクラスはまだしもFクラスはまとまらないだろ？」

からな。まともなのが姫路くらいじゃ 大変だからな」

「そうだね。流石に姫路さんと美波は野球には参加してなかつたみたいだけど、2人じや話し合いにもならないだらうからね」

洋子は作業に戻ろうと言つたわりには作業が始まらないため、2人に声をかけるとFクラスの清涼祭の準備に不安しか感じないようで作業に戻り始めた時、

「……吉井、今更だけど、西村先生って人間か？」

「……僕は人間じゃないと思つんだ」

西村教諭が野球をしていたFクラスの生徒を担いで校舎に入つて行く姿が目に映り、2人は顔を引きつらせるが、

「2人とも召喚フィールドを張りますよ。準備してください」

洋子は気にする事なく総合教科の召喚フィールドを展開する。

第102問

「結城君、お疲れさま」

「……この帯は引っ張つても良いのか?」

「和真、その気持ちはわかるが止めておけ」

和真は作業を終えて教室に戻ると、クラスは出し物は喫茶店にするつもりのようだが、衣装の事を話し合っているのか、茶道部である友香は着物に着替えている。

「カズ、作業は終わったの?」

「ああ。終わつたんだが……」

「何があつたのか?」

「……素手で召喚獣と同じくらいの量の材料を一気に運ぶ、西村先生は人間じゃないと思つんだ」

清美は和真にまだ作業の途中かと聞くと、和真は作業をしていた時に納得がいかない事があつたようで、眉間にしわを寄せて西村教諭が本当に人間か悩んでいるようつであり、

「……結城君は何を言つてるのでよ

「待て。それだけじゃないんだ。バカFクラスがグラウンドで野球をしていたんだが、巴ども全てを担いで校舎に消えて行つたんだ」

「……もつ西村先生は『鉄人』って言つ生物で良いだろ」

友香はため息を吐くが和真は眉間にしわを寄せて衝撃的だった光景を思い出していると一心は西村教諭を人間ではないと言い切り、周りにいた男子生徒は全員納得したようで大きく頷くが、

「そんな事を言つてるとみんなもFクラスと同じように西村先生に捕まるのですよ」

「まつたくね

女子生徒達は言い過ぎだとため息を吐く。

「それより、カズ、Fクラスは野球をしてたつて言つてたけど、準備は余裕なの？」

「いや、吉井から話を聞く限りでは何一つとして決まってないらしい

「本当にバカばっかりね」

清美はFクラスが遊んでいたと聞き、Fクラスが清涼祭の準備がかなり進んでいると思ったようだが和真はそんなわけないと首を横に振り、友香は呆れたように肩を落とすと、

「……いつもの事だけど西村先生も大変だな

「と言づか、西村先生じゃ無ければ、下手したらひきこもるか学園に来なくなるぞ」

「……そつ考えると本当に害にしかならない人達よね。学校をなんだと思つてゐるのかしら」

改めて西村教諭の凄さとFクラスのバカさ加減を再認識したようであり、微妙な空気が広がる。

「まあ、仕方ないだろ。それより、和、吉井は姫路を清涼祭の休憩時間に誘つたと思うか？」

「いや、まだだろ。バイトの件で距離は縮んだとは思うんだけどな」

「吉井より、姫路が誘う確率の方が高そうだな」

トオルは教室全体に広がっている微妙な空気を振り払つように和真に明久と瑞希の進展具合を確認すると和真と新は明久ではなく、瑞希の方が行動に出そうだと話し出すと、

「吉井くんと姫路さんの事もだけど、カズは自分の事は考えないのかな？ ねえ、代表」

「代表は結城君からお誘いはないのですか？ もしくは自分から誘つたとかはないのですか？」

「な、山下さんも尼崎さんも何を言つてゐるのよー？」

清美と棗は友香に清涼祭で和真を誘つつもりなのかと詰め寄り、友香は驚きの声をあげるが、

「もう、そんな事を言つてるとカズを他の女子にかっせられると」

「そうです。あれで結城君は競争率高いですか？」

「そ、それはそうかも知れないけど」

清美と棟は友香を引き寄せると友香に和真を清涼祭に誘いつよいよ吹き込み始める。

第103問

「そんな代表に朗報です」

「朗報？……召喚大会？」

棗は力バンから清涼祭で行われる2人1組で参加するトーナメント形式の召喚大会のポスターを取り出す。

「そう。」「見て」

「優勝賞品は白金の腕輪？」

「じゃなくて、優勝者と準優勝者の副賞」

棗はポスターの賞品が書かれたと個所を指差すと友香は優勝賞品の『白金の腕輪』の名前を見て首を傾げるが棗は見て欲しいのはそこではないと友香の顔の前にポスターを近づけると、

「如月ハイランドのフレオーブンペアチケット！？」

「そうです。これを獲るために結城君を誘えば良いんです。そして、獲得できれば『デートに誘えます』

「と言つて代表、カズを誘つてみよつか？」

「で、でも、私、恭一を振つてすぐなわけだし」

友香はもう直ぐオープンするテーマパークの優待チケットを見て驚

きの声をあげると清美と棗は友香を引き寄せて和真を召喚大会に誘うようにそそのかす。

「そんな事を言つてゐる場合じゃないでしょ。さつきも言つたけど、カズは倍率が高いのよ」

「豚野郎、出て来なさいーー！」

清美は踏ん切りが付けられない友香の背中を押そうとした時、教室のドアを美春が勢いよく開け、

「清水、お前は男をすべて豚野郎と言つから、誰か、わからん。せめて、大勢いる時は名前で呼べ」

「……いや、和、お前は清水に豚野郎と言われる事になれすぎだろべ、
和真は美春が乱入してきた事にため息を吐くが一心は苦笑いを浮かべ、

「美春が豚野郎と言つたら、直ぐに返事をするのが豚野郎の役目のはずですわ！！ 生意気ですわ！！」

「和真、どうやら、お前に用みたいだぞ」

「みたいだな」

美春は和真の見つけると我が物顔のように教室に入つてくるため、その様子に和真と新は苦笑いを浮かべる。

「それで、何かよつか？」

「豚野郎、美春がお姉さまとデートするため協力しなさい。拒否権は認めませんわー！」

和真は美春の様子にあまりろくでもない事だと思つており、関わり合いたくはないようだがここで跳ね返すとさらに面倒になる事もわかつているため、彼女が自分の元を訪れた理由を聞くと美春は召喚大会のポスターを和真の目の前に出して呟えるが、

「却下、面倒くさい」

「なぜですかー？」

和真は興味がないため、直ぐに拒否をし、美春は自分の言つ事を聞かない和真の態度に驚きの声をあげると、

「いやだね。それに参加して仮に賞品が取れたとしてもそれは清水に搾取されるわけだろ。俺に意味も何もないだろ。だいたい、それなら、そのお姉さまを誘えよ」

「お姉さまは姫路さんと参加登録を終わらせていたのですわ」

「姫路ど？……なあ。清水、今更だけど、お前のお姉さまって」

「島田美波お姉さまですわー！」 豚野郎、お姉さまに色目を使ったら、直ぐにはらわたを引き裂きますわー！」

和真は美春に「デートに誘いたい人間を相手に選べと言つが何かが引っかかり、美春にお姉さまの事を尋ねると美春の想い人は美波であり、和真がおかしな事をした場合は和真に命はないものだと思えと

吠える。

「……世界が滅びるその日になつてもあのバカだけは襲わねえよ。あいつを襲つなら、清水を押し倒す」

「和真是店長も倒せるからな」

「その前にもつと言葉を選べよ。後ろからの視線が痛いから」

和真是美波だけはあり得ないと言い切り、新は和真的様子に苦笑いを浮かべるがトオルは背後から突き刺さる友香の視線に背中に冷たい物を感じているようだが、

「美春は豚野郎など興味はありませんわ。だいたい、お姉さまをバカにする事は許しません」

「いや、あいつは充分にバカにされるに値するだけのバカだ」

「和、この状況でお前は良く清水を挑発できるな」

それ以上に前方に立っていた美春の殺意が上昇して行き、平太は顔を引きつらせる。

「悪いな。これをロクラスに帰していくる」

「ああ、行つて來い」

和真是これ以上は関わつていられないと思つたようで美春の首根っこをつかむと美春を教室の外に引きずつて行き、クラスメート達全員が顔を引きつらせているなか、新だけが和真と美春を見送る。

第104問

「姫路が転校？」

「ちょ、ちょっと、結城君、声が大きいよー!？」

和真が美春をロクラスに送り届けたと和真を見つけた明久が誰にも聞かれたくない話があつたようで和真を屋上まで引っ張つて行き、瑞希の両親が彼女を転校させる事を考えていると言つ話をする。

「悪い。でも、考えられない事でもないか」

「ど、どうして?」

和真は明久に謝った後に瑞希の両親が転校を勧める理由もわかると頭をかくと明久は声をあげるが、

「落ち着け。姫路は身体が弱いだろ。方針とはいえ、あんなボロボロの校舎にして身体を壊すことになつたらと思つと仕方ないだろ」

「それはそなんだけど」

「それにそれ以外にも大きな問題が2つある」

「ど、どう言つ事?」

和真は瑞希の両親が考へている事に予想が点いているようであり、子供の事を心配する両親がいる事に羨ましい気持ちもあるのか少し寂しそうに笑つが明久は瑞希の転校の事で頭がいっぱいのよう

であり、和真の表情の変化には気づく事はない。

「一つはFクラスがバカすぎる事、もう一つは教室の設備、ミカン箱が机がわりって現代社会じゃあり得ないだろ?」

「そうだね。問題が多くすぎるよ」

和真は明久の様子に直ぐに表情を戻すと明久は瑞希の転校を防ぐ手立てがないのか考えたいようだが頭の弱い彼には良い考えが浮かぶわけもなく大きく肩を落とすと、

「まあ、悪い方向にだけ考えるな。転校先を女子高にして貰えば姫路に悪い虫が付く確率は減るわけだし、どうせ、学内ではお前のクラスのバカどものせいでいちゃつけないんだ。あまり変わらないだろ。何より、他の女子高とつながりができるとするとメリットもある」

「女子高との繋がり? ……ダ、ダメだよ。確かにそれも良いのか
も知れないけど」

和真は明久と瑞希の事を考えると瑞希の転校も悪い案ではないと言ふと明久は和真の言葉に一瞬、考え込むがそれでも瑞希と一緒に居たいようであり、

「吉井、姫路と同じ高校生活を送りたいなら送りたいと素直に言え」

「な、何を言つてゐんだよ!?」

和真は明久の反応にニヤニヤと笑うと明久は顔を真っ赤にして慌てて否定しようとする。

「別に慌てて否定する必要はないだろ。だけど……」

「結城君、協力してくれないかな？」

和真は慌てる明久の様子に苦笑いを浮かべつつも何かあるのか困ったように頭をかき、明久は和真の様子に和真が協力してくれないと思つたようで不安そうな表情をすると、

「できる事はもちろん協力するけどな。問題はFクラスの設備だろ？ 学生にできる事なんてたかが知れてるぞ」

「それなんだけど売上で設備を向上させても良いっては言われたんだけど、良い案が見つからなくて」

「それにFクラスのメンバーを考えるとそれに協力できる人間って何人いるんだ？」

和真は協力は惜しむ気はないが自分だけではどうにもできない事もあるため、他にも協力を仰ぎたいようだがFクラスで瑞希の転校阻止に動いてくれる生徒がいるとは思えないようで眉間にしわを寄せる。

第105問

「えーと、僕と美波と秀吉の3人かな？ 雄一は清涼祭に興味無さそうだし」

「……もぞ凄く、不安なメンバーだな。まあ、他のバカどもに比べると吉井や姫路と距離が近いみたいだし、使えるかは置いておいて無難なメンバーか？」

明久は秀吉と美波は協力的だが雄一はわからないと首を横に振ると和真は「クラスが自分勝手な人間ばかりのため、ため息を吐くと、

「とりあえず、家畜以下代表は使えそうなのか？」

「使えるって考えると使えると思つよ。頭は回る」

「そうだな。他人を見下してからつめが甘いけど、頭は回るな」

和真は雄一が使える事だけは認めているようで頷き、

「それじゃあ、雄一を巻き込んだ方が良いんだよね？」

「信用しきりなればな。とりあえずは味方に引き込むようになじら

和真は明久に雄一は味方に引き込んでおくように言つて

「この話はウチのメンバーにも話は伝えておくぞ。協力できる事は協力してくれるだろうな。後は少し不安だけど、清水にも話をすることぞ

「う、うん。お願ひ」

和真は明久に他にも協力者はいないか確認すると告げると明久は大きく頷き、和真は教室に向かつて歩き始める。

「さてと、やれる事つてなんだ？……見なかつた事にするか？それとも嫁に連絡するかどつちが良い？」

「ゆ、結城、てめえ、俺になんの恨みがあるんだよーー！」

和真は教室に戻る途中で翔子から逃げているのか周囲を警戒している雄一を見つけて徐に携帯電話を取り出すと雄一は翔子に自分の居場所を知らせられる事は避けたいため、和真に考え直すように声を張り上げると、

「恨みならいくらでもあるぞ。何なら、この後、お前らがさつき、無断で野球部部室から道具類を持ち出した時に破壊した部室のドアとかロッカーの移動とかその他の修理に駆り出される予定になつているんだけど、手伝うか？　お前らが壊したものだろ？」

「は。そんなもの知ら！？　ま、待て。携帯をしまえ！！」

和真はFクラスになら恨みならいくらでもあると話し、雄一は和真の言葉を鼻で笑うと和真是携帯電話のアドレスから翔子のな間を探し始め、雄一は和真に携帯電話をしまつように叫ぶが和真是気にする事なく明久に電話をかけ、

「……逃げるな。別におかしな事をしなければ嫁に引き渡さないでやる。吉井か？　家畜以下代表を見つけたんだけど、居るか？　…」

…ああ。それなら、仕方ないからこのクラスにいるからな」「ちよ、ちよっと待て！？ 結城、お前、どこに行くつもりだ！？」

「うるせえな。ちつちつとよ。嫁に引き渡すぞ」

和真は雄一の首をつかむと雄一を引きずりつてこのクラスの教室に引きずつて歩きだす。

「見つけましたわ。豚野郎！…」

「……良」とこひこひきた。一度手間は面倒だからな

「ふ、豚野郎！？ ビーに行く気ですか！？」

和真が教室に向かって歩いていると美春が現れるが和真是美春の首をもつかみ、右手には雄一の首を、左手には美春の首をつかみ歩きはじめ、

「び、びしおう、今の結城君には近寄りたくないよ

「明久、見てないで助けるよ！？」

明久は和真的呼び出しに急いできたようで和真的様子に顔を引きつらせ、明久の姿を見た雄一は明久に助けを求める。

第106問

「……姫路さんの転校？」

「そりなんだよ。それでどうにかできないかな？」

和真と明久は雄一と美春を連れてじクラスの教室に戻ると瑞希の転校の話をじクラスのメンバーに話し、協力を仰げないかと聞く。

「……なんだ？」

「いや、どうして、俺をお前が連れてきたのかと思ってな。お前は俺達Fクラスが嫌いだろ」

「ああ。吉井と姫路以外には嫌悪感しかない。だけど、姫路は友人だしな。あいつの意思が固まってるなら協力したい。それがお前みたいな家畜以下の人間に頭を下げる事になつてもな」

雄一は和真が自分を教室に招き入れた理由は理解したようだが自分と和真に協力はあり得ないと思つてはいるようで和真を睨みつけると和真は雄一の視線を気にする事なく、必要だからと言い切り、

「ほう。頭を下げるね。なら、下げるよ。土下座でも何でもしようよ。そしたら、協力してやるよ」

「ああ。それくらいで良いならな」

「ちよ、ちよっと、カズ！？」

「豚野郎、何をしているのですか！？」

「雄一は和真の言葉にできもしない事を言つたに和真に土下座をするように命令すると和真は迷う事無く、床に頭を擦りつけた姿に清美と美春は声をあげるが、

「別にさつきも言つたけどな。姫路や吉井が頑張りうとしてる事に比べたら頭を下げるくらいなんでもない。それに自分で言つた事に責任を持てない人間になるくらいなら、プライドなんかいるか」

「…………ちつ

和真は自分のプライドよりも瑞希の考えを応援したいようであり、雄一は自分の出した条件をあつたりと飲んだ和真の様子に思々しきうに舌打ちをする。

「坂本は完全に和に負けてるな」

「まあ、結城君だからね。仕方ないわよ」

一心は雄一の様子に彼の底の浅さが見えたようだため息を吐くと友香は和真と洋子の関係も知っているため、和真の行動は当然だと少しだけ寂しそうに笑うと、

「それで、どうするの？ 私達も姫路さんの転校は阻止してあげたいけど……Fクラスの代表がこれじゃあね」

「そうだね……僕も雄一がここまで見苦しいとかは思つてなかつたよ」

友香は話を元に戻し、明久は雄一が和真に取った行動に情けなくなつてきただようで肩を落とし、

「う、うるせえな。ちゃんとやつてやるよ。明久、行くぞ」

「行くぞ。つてど！」にだよ」

「決まつてゐるだろ。学園長に直談判だ。ここは教育機関なんだ。その状況で生徒が死んだら洒落になんかならないんだからな」

「う、うん。ちょっと行つてくるよ」

雄一はこれ以上、文句を言つても立場が悪くなる事は理解しているため、旧校舎の改修を直談判すると言つて明久と一緒に教室を出て行き、

「まあ、元神童だし、Fクラスとしては動いて貰わないといけないけど、よく動く気になつたな？」

「そりや、動くだろ。坂本は姫路にいなくなられると困るからな。姫路がいなくなると3カ月後にAクラスに試合戦争を仕掛ける事も俺達をぶちのめす事もできなくなるからな」

「……それは何と言つたら良いかわからないと言つか

新は雄一が協力する気になつた理由がわからずには首を傾げると和真是雄一には雄一の瑞希の転校を防ぐ理由があると言いつ切り、和真の一言に教室内は微妙な空気が漂つ。

第107問

「とりあえず、協力つて言つても何をするんだ？ 正直、クラスが違うと何もできないだろ？」

「売上でクラスの設備を向上させる事は西村先生が許可してくれたつて言うからな。密として行くのは」

一心は瑞希の転校阻止に自分達で協力できる事を話し合おうとする
と直ぐに売上の向上には協力できそうだと言つ話にはなるが、

「……中華喫茶とは吉井に聞いたけどFクラスの設備で飲食店は怖いよな？」

「や、そうよね」

Fクラスの設備で飲食店をやっても良いのかと言つ根本的な原因に
メンバーは大きく頷く。

「カズ、どうにかならないか？ 西村先生や洋子先生に話してさ。
空き教室を使えるようにして貰つとか」

「そうだな。最近は吉井も真面目に觀察処分者の仕事をするようになつたから先生達への印象も変わってきてるし、味方してくれる先生達もいるかも知れないな。後は姫路の体調の件は姉さんに職員会議でも話題に上がつたってのは聞いた事があるし」

「そうね。学校の設備の影響で生徒が病気になると大変だし、少し
卑怯かも知れないと有効な手段かも知れないわね」

「坂本と同じ作戦になつてるのが正直、微妙だけどな」

和真はFクラスの設備では飲食店として最初の段階で負けていると考え、教師陣に情で訴えるのは有りだと考えたようであり、友香も和真の考えに頷くが和真自身は少しだけ卑怯だと考えているようで苦笑いを浮かべるが、

「手段なんて選んでいる場合じゃありませんわ」

「清水、お前がそこまで協力する気になるのは意外だな」

「何ですか？ 文句があるのですか？」

美春は手段を選ぶ必要などないと叫ぶと美春の反応に新は少し驚いたような表情をする。

「新、気にするな。清水は姫路がいなくなると困るんだよ。清水の愛しい愛しいお姉さまの猪女は吉井に好意を抱いているからな。姫路がいなくなつてそこにフラグが立つと面倒だからな」

「その通りですわー！」

「……カズも清水さんももう少し言い方を選ばない？」

和真は美春の考へてゐる事などお見通しのようであり、和真と美春の言葉に清美は大きく肩を落とすと、

「結城君、それなら」

「ああ。先生方には話を誤魔化しながら話してみる。空き教室を貸して貰えれば儲けものだしな」

和真は教師陣に根回しをしてみると頷き、

「お願い。後は……結城君、木下さんと工藤さんに手伝って貰えれば良いんだけど、頼めないかな?」

「ん? 代表様、何か考え付いたのか?」

友香は何か考え付いたようだが今、集まっているメンバーでは自分の思いついた事は実行できないと思つてているようで優子と愛子の2人に協力して貰えないかと和真の制服を引っ張る。

「ええ、問題の1つにFクラスのクラスメートじゃ、姫路さんの成績の向上につながらないかも知れないって心配してる部分もあるから、姫路さんにAクラスの友達がいる事をご両親に見せるもの有効だとは思つんだけど」

「確かに私達だと姫路さんの成績には釣り合わないしね。木下さんはわからないけど工藤さんなら協力してくれるんじゃないかな?」

友香は問題の1つのクラスメートの学力を学年として考え、他にも競い合える友人がいると瑞希の両親に見せれば良いと考えたようであり、その考えは使えるとメンバーは話し始めるが、

「結城君、何か不味いですか?」

「いや、悪い手ではないとは思つんだ。……でも、姫路の性格じや、ボロが出るだろ? 今の状況で姫路の口から転校すると聞かされた

のは猪女だけなわけだし、俺達がその手に出ても姫路からボロが出そうだ」

「それなら、私達が姫路さんから転校したくない事を聞けば問題ないわけですね」

和真は瑞希本人からの助けを受けないとそこは表立つて協力できないと首を振ると棗は和真に聞き返し、

「せうだな。そうすると俺達も表立つて協力しやすくなる」

「了解です。新聞部のエースの名にかけてそこは私が受け持つのです」

「ちょ、ちょっと、棗！？ カズ、私は棗が暴走したら困るから」

「和真、俺も行つてくる。あの2人じや心配だ」

「ああ。任せたぞ」

棗は瑞希から直接、協力要請を貰つて教室を出て行き、新と清美は棗の後を追いかけて行く。

第108問

「さてと、一先ずは俺達ができる事は……直ぐには考え付かないな？」

「そうね。後は3人が戻ってきてから、また、考えましょうか」

教室に残ったメンバーは瑞希に協力できる事を探そつとするが直ぐには思いつかないようであり、

「一先ずは、俺達は俺達で清涼祭の準備でもするか？」

「そうだな」

和真達は自分達の準備に移りつつとするが、

「待ちなさい。豚野郎」

「清水、俺の用件は終わつたから、帰つても良いぞ」

美春は和真を召喚大会の相棒にしようと思つてゐるため、和真の肩をつかみ、和真は美春を追い払つて手を振る。

「まだ、美春の用件は終わつていませんわ……」

「召喚大会の事なら、断つただろ。それに俺は当田はそんな事をやつてるヒマはないぞ」

「ヒマはない？ 何を言つてゐるんですか。美春のためにそれくら

いの時間を作りなさい！！」

和真は話しにならないと言つが美春は相変わらず、和真の話を聞く気もなく高圧的に和真に言つ事を聞くように怒鳴りつけていると、

「カズ、当日、何があるのか？」

「まさか、女か？」

「そんな色氣のあるものじゃないよ。去年もだつたんだけどな。バカがはしゃいで設備を壊してその修理に駆り出される。今年はバカが集まつてゐるから、より一層、忙しくなるだろ」

和真の清涼祭の予定に平太と一心が食いつくが和真の予定は2人が期待しているような展開ではなく、

「つまんないな」

「そう言つた。それはそれで良い情報だつたみたいだしな」

一心はつまらなさそうにため息を吐くとトオルは和真に見えないようく小さくガツッポーズをしている友香を見て苦笑いを浮かべ、

「人の心配するより、自分達の心配をしろよ

「友香……代表を呼んでくれないか？」

和真はこれと黙つて予定のない事をバカにされていると思ったようで、他のメンバーにも予定を聞こうとするがそんな中、教室のドアの方から恭一の声が聞こえ、友香に用事があるようで教室を見回し

ている。

「根本？ 代表様、呼んでるみたいだぞ」

「……根本くん、また、来たの？ いい加減にしてくれない」

和真は恭一を指差しながら友香に相手をするよつと云つが友香は恭一の顔を見て肩を落とすと、

「友香、頼む。もう一度、チャンスをくれ」

「何度も断つてるでしょ。いや」

恭一は友香を見つけるなり、教室に遠慮する事無く入ってきて友香に何かを頼むが友香の答えは決まっているようで恭一を拒否しており、

「チャンス？」

「何があつたのか？」

「ああ。何か、根本が代表様とよりを戻したいらしくて、一緒に召喚大会に出てくれって言つてるみたいなんだよ」

和真と美春は恭一の言葉に首を傾げるとトオルは2人に簡単に友香と恭一の状況を説明し、

「女らしいですわ」

「まったくだな」

和真と美春は恭一の行動に呆れたようにため息を吐いた時、

「しつこいわよ。何度も言つてゐるけど、私は恭一とは召喚大会に参加しないわ」

「なぜだ？ 誰かと一緒に出場するのか？」

友香はしつこい恭一に腹を立ててゐるようで恭一を怒鳴りつけるが、恭一は友香が自分以外の人間と召喚大会に出ると思ったようであり、

「そ、そつよ。私は結城君と召喚大会に出場するのよーー！」

「へ？」

友香は恭一を追つ払うために和真の名前を上げ、和真是まったく気にしていなかつたところからの不意打ちに間の抜けたような声をあげる。

第109問

「ちょ、ちょっとー?」

「……」「……」

和真は一瞬、呆気にとられるが直ぐに友香と一緒に召喚大会に出場する予定などないと言おうとするがトオル、一心、平太の3人に口を塞がれ、

「わかつたら、2度と来ないでくれる」

「結城、てめえ、覚えていろよー!」

友香は恭一を突き放すように言つと恭一はその敵意を和真にぶつけたいようで和真を睨みつけると捨て台詞を吐いて教室を出て行き、

「豚野郎、美春に刃向かいましたわね。ハツ裂きにしますわ」

「ちょ、ちょっと待て!! 清水、落ち着け。代表様、どう言つ事だ。俺は召喚大会になんか出ないって言つてるだろ」

自分の命令を聞かずに友香と召喚大会に出場する事になってしまった和真に向けて、美春は殺意を溢れ出し、和真はこの原因を作った友香に聞くが、

「仕方ないでしょ。ああでも言わないと恭一が納得しないんだから」

「……なら、他の人間にしりよ。ただでさえ、いつちは面倒な事に

なつてゐるのに

「……その割には和は余裕そうだよな」

友香は仕方なかつたと自分のせいではないと言い、和真は美春からの攻撃を交わしながら大きくため息を吐く。

「……結城君、何してゐの？」

「これははどう言う状況だ？」

「ん？ 帰つてきたか？ 清水、遊びの時間は終わりだ。それで、どう言う事になつたんだ？」

和真が美春の攻撃を交わしてしばらくしていると学園長室に行つていた明久と雄一が顔を出し、和真是2人の話がどうなつたか知りたいようで美春の首根っこをつかみ、

「放しなさい！？」 豚野郎！…」

「……こつもあつさりと」

美春は和真に捕まりながらも殺意をまき散らしているがすでに周りは美春では和真に敵わないと言つ事は周知されており、顔をしかめるが、

「それで、そつちは上手く行つたのか？」

「ああ。それが面倒な事になつてな」

和真は気にする事無く、明久と雄一に学園長との話はどうなったかと聞くと雄一は面倒そうに頭をかく。

「面倒な事?」

「うん。ちょっとね」

友香は首を傾げると明久は苦笑いを浮かべ、

「簡単に言つと俺と明久で召喚大会に出場して、優勝をしないといけなくなつた」

「後は協力者を見つけて準優勝者も出さないといけなくなつたんだ」

「……簡単に言われ過ぎてまつたくわかんないだが」

「そうね」

明久と雄一の説明では誰も状況を理解する事ができず、和真と友香は眉間にしわを寄せせるが、

「ちよつど良いじゃないか。協力者がここにいるわけだし」

「……待て。どうしてそうなる?」

「ちゃんと召喚大会に出ないと根本がまた代表様に言い寄つてくるだろ。それくらいしてやれよ」

トオルは和真に友香と召喚大会に出場するよつにと肩を叩くが和真是眉間にしわを寄せ、一心は恭一から友香を守るのには必要だと言

い切り、

「そうだね。結城君は召喚獣の操作も上手いし、総合得点ならAクラス並みだし、僕達に協力してくれそうな人だと小山さんが一番得点も高いから雄一の狡い頭を使えば決勝には上がつて来れるし、お願い。結城君」

「結城、協力するんだよな？」

「……ああ。その前に簡単じゃなく、しつかりと説明してくれ」

明久は和真と友香なら問題ないと大きく頷き、雄一は困り顔の和真の様子にニヤニヤと笑う。

「ウエーディング体験ね」

「ああ。今更、賞品を取り消すわけにもいかないらしくてな」

「しかし、ジンクス作りとは言え、そのチケットを使ったカップルを無理やり結婚までは乱暴だろ」

雄一がFクラスの設備向上の代わりに出された条件は明久と雄一に召喚大会の優勝及び準優勝ペアに送られる如月ハイランドのペアチケットには問題があるようであり、男性陣は苦笑いを浮かべるが、

「……結城君と学園長先生に返さないといけないとは言つても、お願いすればどうにかできないかしら」

「お、お姉さまと結婚まで？ そ、それは美春の手に入れなければ行けませんわ」

友香と美春は何かおかしな事を考へていろいろぶつぶつと何かを呟いている。

「しかし、そうなると正直、きついだろ。まともに優勝狙える成績つて、このメンバーじゃ、和だけだろ」

「確かに。工藤さんとか木下さんに協力して貰わないか？ それなら、優勝も狙えるだろ」

「ダメだ！！」

トオルと一心は和真の成績ならどうにかなりそうだけど他の3人は心もないと言い始めるが雄一は何かあるのかAクラスの人間に

は召喚大会での協力は仰げないと叫び、

「何でだ？」

「よく考へても見る。Aクラスの人間があんな禍々しいものを獲つたら、絶対に翔子の手に渡る。そうなると俺は終わりだ！！」

「……いや、回収しないといけないって事をきちんと話せよ

雄一は翔子にチケットを渡る事に恐怖しか感じていな「ようですでに冷静な判断はできなくなつており、和真は呆れたようなため息を吐くが、

「結城君、雄一は自分の身を守るためになら、どんな汚い作戦でも使って優勝と準優勝できるようにするから、この状態の方が良いんだよ」

「……それはそれでどうかと思つんだけどな」

明久は召喚大会の決勝まで勝ち上がるには今の雄一が良いと言つと和真は頭をかき、

「まあ、和がそこをフォローすれば良いんじゃないのか？」

「実際、坂本の作戦立案能力は高いわけだしな。穴は和真が埋めればちょうど良いだろ」

「うん。僕もそう思つよ。雄一だけだと不安だけど、結城君がそこを補つてくれるから、僕は心強いよ」

「……いや、だから、あんまり、過大評価をされても困るんだけど」
雄一がチケットが翔子の手に渡ると言つ最悪の状況を考えて頭を抱えている隣で男性陣は和真ならどうにかできると丸投げし、和真是大きく肩を落とす。

「そ、それじゃあ、結城君のパートナーは私で良いわね。現状で言えば、この中では成績が一番良いわけだし」

「そうなるか?」

「待ちなさい。納得がいきませんわ。最初から美春がその豚野郎を召喚大会に誘っていたのですわ。美春と一緒に出場しなさい。豚野郎」

友香と美春はすでにチケットを自分で使う事しか頭にないようであり、和真と一緒に召喚大会に出場しようとするが、

「……2人とも、チケットは返すって話を聞いてるか?」

「「それはそれよー!」」

「……確實に聞いてないな」

「そ、そうだね」

男性陣は2人の様子に大きく肩を落とす。

第111問

和真は放課後になり、バイト先の『ラ・ペディス』で休憩時間に召喚大会に参加する事になった話をすると、

「そ、それは大変でしたね」

「ああ。俺は悪くないのにその後からこんな状況だ」

最終的に和真の召喚大会のパートナー友香と美春の真剣勝負で勝負を決めたようであり、美春は和真の火力に期待していたためか機嫌が悪く和真を威嚇しており、瑞希は美春の視線に苦笑いを浮かべ、

「それより、姫路、新達から聞いたんだけど、転校の話なんだけど、ちょっと良いか?」

「は、はい。あ、あの。結城くん、できれば吉井くんには秘密にしておいて欲しいんですけど」

新、棗、清美の3人は上手く瑞希から転校の話を聞き出せたようであり、和真は瑞希に話を振ると瑞希は明久には秘密にして欲しいと目を伏せ、

「なあ。俺はちゃんと吉井や他の奴らに話した方が良いと思つぞ」

「で、でも、吉井くんやみんなに迷惑が」

和真是瑞希の返事が予想通りであつたためか苦笑いを浮かべて明久達にも話すべきだと言うが瑞希は友人達に迷惑になると思っている

よつであり、

「姫路、おかしな事を言つと怒るや。お前が好きになつた奴はそれくらいを迷惑だと言う奴か？俺は吉井と知り合つて日が浅いけど吉井はそんな奴ぢやないだろ。それはお前の方が詳しいんぢやないのか？」

「そうですね」

和真は少しだけ声の音量を上げて明久は迷惑だと思わないと話すと瑞希も和真の言葉に笑顔を見せる。

「あいつの場合は他から聞くと勝手に暴走しそうだからな。帰りにでも話してやれ……なんだ？」

「いえ、結城くん、ずいぶんと吉井くんと仲良くなつたなあつて、少し、羨ましいです」

和真是瑞希の表情が元に戻つた事に安心したようで、休憩時間がずれている明久に帰りに話す事を進めた時、瑞希がじつと自分の顔を見ている事に首を傾げると瑞希は和真と明久の距離が羨ましいと言つが、

「あのな。羨ましいって言つたつて、姫路が望んでるのはこの距離じゃないだろ。おかしな事を言つなよ」

「で、でも、結城くんは吉井くんと話をするよつになつたのは最近なのにずるいです」

「するいって……それを言つたら、お前だつて、清水やウチの代表

様、山下、棗と直ぐに仲良くなつただろ？ 同姓同士なんてそんなもんだる。俺達男どもは姫路が何か悩んでるとか気がつかなかつたけど、あいつらはお前が何かを悩んでると気づいたから、話を聞きたわけだろ？」

「やうやうなんでしょやうか？」

「やうやう」

和真は瑞希の反応にびっくりのよつて対応して良いのかわからないよつてあり、口から適当に言葉を選んで瑞希を黙らせると、

「……」

「今度は何だ？」

「いえ、何か、お兄さんがいたらこんな感じなのかと思いました」

「……姫路、俺とお前は同じ年だからな」

瑞希は何かあるのか和真の顔を見た後、何を血迷つたか和真をお兄ちゃんみたいだと言い、和真は大きく肩を落とし、

「で、でも、頼りになりますし、今も吉井くんとの事をきちんとアドバイスしてくれましたし」

「アドバイスくらいはする。それに……仮に俺が姫路の兄貴だつたら、Fクラスにいるよりは転校を薦める。俺やウチのクラスの奴らは姫路を友人だと思つてるから、協力するんだ。それはお前がやつてきた結果だ」

瑞希は和真をお兄ちゃんだと思った理由を話し始めるが和真是眉間にしわを寄せる。

第112問

「吉井、姫路、上がって良いぞ」

「え？ でも、まだ片づけが終わっていないよ」

営業時間終えると和真是瑞希に明久に話をさせたいようで2人を追い払うように言つが明久は片付けが終わつていなためか首を傾げるが、

「さつさと上がりなさい。豚野郎！！ 豚野郎が帰りに何かあつてハツ裂きに遭おうがかまいませんが姫路さんに何かあつたら困るのですわ！！ きちんと家まで送り届けなさい。それと書いておきますわ。帰り道に姫路さんにおかしなマネをしたら美春の手でハツ裂きにしますわ！…！」

「……清水、お前はもう少し言い方がないのか？」

美春は明久を追い出すように罵倒し、和真是美春の態度に呆れたようため息を吐くと、

「そうだな。最近は学祭が近いせいか、彼女を作ろうと街を徘徊しているバカがいるみたいだしな。清水は店長と一緒に帰れば良いけど、女性スタッフは危険だしな」

「……そんな事もしているのか？ 本当に迷惑な奴らだな」

「……美春としてはあの変態と一緒に帰る方が危険なような気がするのですが」

新は和真の意図を理解している事もあり、Fクラスのおかしな動向もあるためか瑞希を守るためにも早く帰るように言つと和真と美春は自分達が知る変態達の行動に眉間にしわを寄せた。

「良いですよね？ チーフ？」

『そりだね。女性スタッフも早めに返すから、吉井くんも姫路さんも先にあがってくれ』

和真は本日も店長が暴走して一室に閉じ込めてあるため、チーフに確認するとチーフは大きく頷き、

「うん。姫路さん、それなら、みんなに甘えようが？」

「は、はい」

明久と瑞希は頷くとスタッフ達に頭を下げた後に更衣室に向かって歩き出し、

「姫路はちゃんと吉井に伝えると思つか？」

「それより、俺としては吉井が姫路から転校の話を直接、聞いた時に俺達が最初から知っていた事がばれないかの方が気になるよ」

「……まったくですわ。バレたら美春達がやつてきた事の意味がなくなりますわ」

新は瑞希が明久に転校の事を伝えられるかが心配のようで苦笑いを浮かべると和真と美春は明久の対応の方が気になつてゐるようであ

り、大きくため息を吐いた時、

「あ、あの。結城くん、北条くん、美春ちゃん、私はちゃんと言いますから、心配しないでください。吉井くんも最初から知ってるのに知らないふりをしてくれてるんですね」

「ひ、姫路、知つているつて何の事だ？」

瑞希は更衣室から着替える前に戻ってきて3人に頭を深々と下げ、和真は一先ずは誤魔化そうとするが、

「結城くんが言つてました。これは私がやつてきた事の結果だって、それなら、みんなが私の転校の話を知つていてる上で知らないふりをしながら私の背中を押してくれてるのも、吉井くんや結城くん、皆さん行動の結果です」

「和真、1本、取られたな」

瑞希は笑顔で和真や明久の行動から、気が付いたと笑い、そんな瑞希の様子に新は苦笑いを浮かべながら和真の肩を叩く。

「……そうだな。まあ、そう思つなら、俺達の出した結果が間違つてないって事を証明するためにお互に頑張りましょうか?」

「はい。あの。私は転校したくないんです。結城くん、北条くん、美春ちゃん、力を貸してください」

和真は悪い気はしていないようであり、苦笑いを浮かべると瑞希は改めて3人の協力して欲しいと頭を下げようとすると、

「姫路さん、頭を下げる必要などありませんわ」

「まあ。やつ・言・つ事・だ」

「当然」

美春は頭を下げる事ではないと言い切り、和真と新は頷き、瑞希を更衣室の方へ向けると、

「行つて來い。姫路」

「はい」

和真と新は瑞希の背中を押し、瑞希は明久に協力を仰ぐために更衣室に戻つて行く。

第1-1-3問

「しかし、あれだな」

「雄一、どうかした?」

「いや、まあ、本当に協力するんだと思つてな

旧校舎での喫茶店は衛生上問題があると職員会議で問題に上がり、2年Fクラスだけではなく全学年の旧校舎で飲食店を考えていたクラスは一時的に新校舎の空き教室が与えられ、明久と雄一は担任である西村教諭から和真達Cクラスからの説得があつた事を聞かされ、雄一はまだ和真達の動きが信じられないのか頭をかくと、

「何を言つてるんだよ。結城君達は雄一と違つから言つた事は守つてくれるよ

「やうです」

明久と瑞希はCクラスのメンバーは言つた事は守つが、

「それが信じられないのよ。あの性悪男の事だから、きっと何か企んでいるはずよ」

「まったくなのじゅ

秀吉と美波は和真に良い印象がないためか和真が協力する事に何か裏がありそだだと思っていいようである。

「秀吉も美波も落ち着いてよ。結城君は……」

「いや、別に何も企んでないし、強いて言うならその猪女は俺や吉井の平和のために清水との間を取り持とうと思つていろいろだ」

「止めてよー?」

明久は秀吉と美波に和真の事を理解して欲しいと言おうとした時、タイミングが良いのか悪いのかわからない和真がFクラスの仮教室に顔を出して美波を挑発すると美波は和真の言葉に直ぐに声を上げ、

「結城、何のようだ?」

「ウチも喫茶店をやるから、そっちの仕入れはどうしてるかの思つてな。店長に頼んだり、俺の昔のバイトのつても使って仕入れを値切らうと思うんだよ。他にもテーブルとか食器系を格安でレンタルしてくれるから、それでそっちの調理系の人間とも打ち合わせをしようと思つてな」

「ああ。それなら……須川は結城と相性が悪そうだからな。ムツツリーーと明久、結城との打ち合わせはお前が担当してくれ。他の奴に任せると揉めそうだ。俺もそっちに入る事もあるが基本的にこっちをまとめないといけないからな」

「うん。ムツツリーー、ここだと話し合いにならないかも知れないから、他に行こう。雄一、僕達は図書室に行ってるから」

「…………わかつた」

和真につかみかかりそうな美波を無視し、和真は雄一と打ち合わせ

をしたいと言うと雄一は和真が入ってきた事で美波以外でも和真を睨みつけているため、雄一は明久と康太に和真と打ち合わせ担当に指名すると明久は大きく頷くとFクラスから和真に向ける視線に居心地の悪さを感じたようで2人を連れて仮教室を出て行き、

「ちょっと待ちなさいよー！　ウチの話は終わってないわよー！」

「み、美波ちゃん、落ち着いて下さいー？」

美波は和真を怒鳴りつけながら3人を追いかけて行こうとするが瑞希は慌てて美波を抱きついて彼女を引き止め、

「島田、遊んでいるヒマがあつたら働け。お前は清涼祭の実行委員だろ」「

「放しなさいよ。坂本、やっぱり、あの男はウチの敵よー！　このままでいたら、ウチの身が危険なのよー？」

「そう思つなら、もっと冷静になれ。お前が行くと確実に逆効果だ」

雄一は美波の首を引っ張ると美波は和真に美春をけしかけてくると思つているようで和真の息の根を止めに行こうとするが雄一は美波が和真に突つかかると絶対に美波の首を自分で絞める事になるため、美波を引き止める。

第114問

「さてと、問題はビリヤードで姫路にチャイナドレスを着せるかだな」

「…………準備は任せろ」

「カズ、あんた、他に言つ事はないの？」

和真、明久、康太が図書室に移動するところクラスはトオルと清美が合流し、和真の「冗談に清美は大きくため息を吐くが、

「吉井が姫路のチャイナドレス姿がみたいくて言えばすぐだら」

「それもそうだな」

「…………殺したいほど嫉ましい」

トオルは瑞希にチャイナドレスを着せるのは簡単だと言い切り、和真と康太の視線は明久に集中する。

「ちよ、ちよっと、ムツツリーーーー? ビリして、僕に殺氣を向けるんだよーー?」

「そうだぞ。最近は工藤と仲良くなってる土屋が吉井を責める資格はないと思つぞ」

「死ね!! ムツツリーーーー!」

明久は康太の視線に慌てるが和真が康太と愛子が仲が良い事を告げ

ると明久は勢いよく康太に向かって拳を振り下ろすが、

「暴れるな。時間がなくなるだろ」

「放して。結城君、僕はあの裏切り者の異端者をグロテスクに殺さないといけないんだ！！」

和真は暴れる明久を取り押さえ、明久は康太に対する嫉妬をまき散らし始め、

「吉井くんもやつぱりFクラスだね」

「そうみたいだな」

明久の様子にトオルと清美は苦笑いを浮かべる、

「それで、土屋くんは工藤さんをビームまで行つてるんですか？」

「…………そんな事実はない」

いつの間にか図書室には棗が現れて康太にマイクを向けている。

「……尼崎、お前、どこから湧いて出た？」

「スクープの匂いがした気がしたのですよ。結城君、気にしたら行けないのでですよ」

和真は棗の登場に眉間にしわを寄せると棗は苦笑いを浮かべ、

「カズ、吉井くん、土屋くんも遊んでないで始めるわよ。だいたい、

Fクラスは時間がないんでしょ。Cクラスはレンタルするものも発注する材料もある程度、決まつてるんだから」

「そりだな。土屋、中華喫茶のメニューは決まつてるのか?」

「…………」「れだ」

清美はFクラスの喫茶店の進み具合が心配なようであり、再開するよつに言つと和真は康太にFクラスが出すメニューを確認し始め、

「これで良いわね……何、吉井くん?」

「いや、結城君はFクラスに良い印象がないはずなのにムツツリー一とケンカする事なく、ちゃんと仕事をしてるから……逆に不安になるんだけど」

和真と康太がおかしな争いを始める事なく、自分達の仕事を全うしている様子に明久は苦笑いを浮かべると、

「和はバイト歴が長いからな。必要ならそれくらいは割り切るぞ。今の和の優先事項は姫路に協力する事だからな。Fクラスと揉めるのは後回し」

「ある意味才能なのです」

トオルと棗は今は揉めている場合ではないと言い切り、

「だからこそ。問題はFクラス、坂本くんは和真の態度に清涼祭までは協力するつて言つたけど、Fクラスはどんな感じ?」

「うん。結城君達の他の教室を書いて貰えたのは結城君やみんなの協力があつたからだけど、それをクラスのみんなに話すとまた揉めそうだつて雄一が言つから伏せてはいるんだけど」

「…………俺は知つてゐる。だから、俺も雄一と同じで清涼祭の間は協力する。姫路が転校すると売り上げにも響くからな」

清美は明久にFクラスの様子を聞くと明久はやはり、Fクラスと和真は敵対関係にあると首を振るが康太には彼なりの考えがあるようで清涼祭は全面的に協力関係で良いと告げる。

第115問

「まあ、こんなものか?」

「……………そうだな」

「……………僕、いる意味が有つたのかな?」

和真と康太は眞面目に打ち合わせを始めたようであり、明久は途中から話しに付いていけなくなつたため、肩を落とすと、

「まあ、意味はあつたんぢやない。實際、吉井くんがいないとカズはFクラスとまともに話すかが怪しいし」

「だいたい、俺達もいる意味があつたかわからぬいしな」

トオルと清美は明久だけじやないと苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、何かあつたら、メールくれ。土屋、アドレス交換するぞ」

「……………俺は携帯を持っていない」

「え? 土屋くん、携帯、持つてないと不便じやない?」

和真は康太との連絡を取るために康太と連絡先を交換しておきたいと言つが康太は携帯電話を持っていないようで首を横に振ると清美は首を傾げ、

「…………おかしな時に鳴ると困る」

「……土屋、お前は何をやつてるんだ」

康太は持たない意味を短く答えるが和真は眉間にしわを寄せた。

「おかしな時って、電源切つておけば良いでしょ」

「いや、その前に俺はおかしな時が何か気になるんだけど」

「土屋、携帯を持つてないと女子とのアドレス交換はどうするんだ？」

康太が携帯電話を持つていない理由が信じられないようで和真、トオル、清美がため息を吐くと、

「…………明久、帰りに少し付き合ってくれ」

「おい。下心が透けすぎだぞ」

「…………そんな事実はない」

康太は何か一つ心に残ったようであり、今日の帰りに携帯ショッピングに寄らうとする和真からツツ「ミミが入り、直ぐに凄い勢いで首を横に振るが、

「確かに携帯持つてないと面倒だよね。その場でメモ取るのもなんだし。でも、アドレス交換は必要だし」

「そう言えば、吉井くんのアドレスで私達はどんなグループ分けに

なつてゐるのかな?」

「そうだな。それより、姫路はどうなつてゐんだ? 清涼祭、誘つたのか?」

明久はCクラスの生徒と知り合つた事で増えた女子生徒のアドレスが増えた事に苦笑いを浮かべると清美は明久に携帯電話を見せると手を伸ばし、トオルは明久に瑞希と進展があつたのかと聞く。

「な、何を言つてるんだよ! ? 山下さんも黒崎君も! ? ム、ムツツリーーー! ? 力、カッターをどうするつもりだよ! ?」

「…………裏切り者には死の制裁を」

「土屋、止める。だいたい、お前だつて工藤を誘つてやれば良いだろ。あいつ、結構、運動部で人気あるから素直にならないと後で困るぞ」

明久は2人の言葉に慌てはじめると康太は懐から、カッターを取り出すとゆっくりと刃を出し始めるが和真は大きくため息を吐き、他人の事より、自分の心配をするように言つと、

「…………そんな事実はない」

「吉井くんも殺意を出さない……ほう。姫路さんとのメールは受信ボックスからフォルダに移動ですか?」

「割とマメだな」

「ちょ、ちょっと、いつの間に僕の携帯を抜き取つたの?」

康太が大きく首を振る姿に今度は明久が殺意を漏らし始めるがその間にできたスキに清美は明久の制服から携帯電話を抜き取り、明久が瑞希とのメールを大切に取っている事にニヤニヤと笑い、明久は慌てて清美から携帯電話を取り戻そうとするが、

「カズ、バス」

「ん。はいよ。『清涼祭、一緒に回らない?』送信と」

「ゆ、結城君、な、何をしてるのぞー?」

清美は和真に明久の携帯電話をバスするとトオルと一緒に明久を押さえ、そのスキに和真は瑞希にメールを送信し、

「吉井、おつけだつて」

「返信、早いな」

瑞希からは直ぐに返事が返ってくる。

第116問

「良かつたね。吉井くん」

「…………殺したいほど嫉ましい」

明久と瑞希の清涼祭のデートが成立した事で清美はニヤニヤと笑い、対照的に康太は嫉妬を通り越した殺意を込めた視線で明久を睨みつけるが、

「それなら、次は土屋だな。どうする、自分で誘つか？」

「…………そんな必要はない」

和真は自分の携帯電話を制服から取り出し、愛子の電話番号を表示すると康太は目の前で明久がはめられている事もあるため、大きく首を振ると、

「ゆ、結城君、何をしてるんだよ！？ 僕なんかと清涼祭を回った
ら姫路さんに迷惑がかかるだろ！！ す、直ぐに姫路さんに今のメ
ールは間違いだって連絡をしないと」

「…………今更だけど、吉井くん、本当にそんな事を言つてるの？」

明久は和真の手から携帯電話を取り戻すと直ぐに瑞希にメールを出そうとするが清美は明久から携帯電話を取り上げる。

「だ、だって、そうでしょ」

「なあ。吉井、お前は姫路と清涼祭で『デート』をしたくないのか？」

「そ、それはしたいけど……」

明久は瑞希と『デート』はしたいと言つが何か引っかかるものがあるのかつづむいてしまい、

「あのなあ。吉井、ダメだつたら、おつけーつて返信はくれないだろ。お前も姫路も召喚大会もあるし、忙しいんだ。それなのに直ぐに返事をくれたんだ。姫路の気持ちも察してやれよ」

「察してやれつて言つても、結城君の言つている意味が僕にはわからないよ。姫路さんと僕じゃ……いふあい、いふあい。ゆうふいくん、何をすりゅこよ！？」

和真は明久の煮え切らない態度にため息を吐くが明久は本当に瑞希の気持ちに気づいていないようであり、和真は弱音を吐く明久の頬をつねると明久は和真を非難するような視線を向けるが、

「吉井、お前がどうしてそこまで自分に自信を持てないかは俺は知らないけどな。自分に自信が持てないってのは自分じゃなく、周りの仲間に對して失礼だ」

「だな。俺や和、山下、他の奴ら、当然、姫路もお前が本当にムカつく奴ならここまで世話も焼かないし、こんな事も言わない

「少なくとも、私達は吉井くんが好きだよ。友達としてね。君は自分を見下す傾向があるみたいだけどもう少し自信を持つても良いと思うな。吉井くんには吉井くんの良いところがあるんだからね」

明久の態度は間違っていると言いたい切ると、

「僕の良いことこのへ……365度、どこから見ても美少年のところ？」

「……取りあえず、頭が悪いのは田をつぶつて貰うしかないな」

「やうだね。『微』少年の吉井くん」

明久はしばりく自分の良いところを考えるが3人の視線は取つて返したよに冷たくなる。

「ど、どうしたのー？」

「吉井、良い事を教えてやる。一般的には360度、どこから見てもと言うんだ」

「それだと実質、5度だからな」

明久は3人の態度の変化に驚きの声をあげると和真とトオルは明久の間違いを正し、

「良いか。このメールを出して芽がなかつたら、姫路はおつけをくれないだろ。おつけで返信がきたんだ。少しは自信を持てよ。頭が悪くたつてお前にはお前の良いところがあるんだ」

「やうだよ。吉井くんは頭が悪いけど、結構、素直だし。料理も上手いし、男の子としてはポイント高いよ」

「……ねえ。僕は今、讃められてるの？ 貶されてるの？」

「半々だろ」

和真と清美は明久の良さで勝負しろと言つが明久はバカにされてい
るような気がしたのか眉間にしわを寄せ、トオルは明久の様子に苦
笑いを浮かべる。

第117問

「姫路、何があったのか？」

「な、何もないです！？」

瑞希は和真が出した明久のメールを見て、嬉しそうに表情を緩めるとそんな瑞希の様子に雄一が気づいたようで声をかけると瑞希は慌てて何もないと言った時、

「あつ！？ も、坂本くん、返してくださいーーー。」

「へえ、明久がね……『お願いします』返信と」

瑞希は慌てたせいか携帯電話を落とし、雄一は携帯電話を拾いつとメールの内容を確認して明久に返信し、

「も、坂本くん、何をしているんですか！？」

「騒ぐな。騒ぐと他の奴らにばれるぞ！」

瑞希は雄一の行動に声をあげるが雄一はニヤニヤと笑う。

「坂本、瑞希、遊んでないで手伝ってよ。まともられないんだから」「

「そうだな。姫路、少しでも接客の指導を頼む。姫路がバイトを始めたのは儲けものだな。うちの奴らは接客の基本ができるとは思えないからな。姫路の言つ事なら多少は聞くからな」

「やつでしょ、うか？」

美波はまともらないクラスメート達にため息を吐くと雄一は瑞希に接客指導を任せると言い、瑞希が首を傾げた時、

「お姉さまーー！」

「み、美春ー？ な、何しにきたのよーー？」

仮教室のドアを勢いよく開けて美春が美波に飛び付く。

「……清水、落ち着け」

「北条くん？ デリしたんですか？」

「接客指導のマニュアル、ラ・ペディスの接客方法を基にして俺と清水で作ったのを持つてきただよ。一応はこれを基にして指導した方がしやすいと思つたんだ。姫路はこう言つのを人に教えるのは苦手だと思ったのと他に接客指導できそうな人間もいないだろうしな」

美春の後ろから新が仮教室に入つてくると瑞希は首を傾げるが新はパソコンでプリントアウトした接客マニュアルを瑞希に手渡し、

「あ、ありがと、びざこます。北条くん、清水さん」

「助かる……なんだ？」

「いや、坂本が礼を言つるのは意外だと思ってな」

瑞希は深々と頭を下げる。瑞希は雄一から接客指導を任せられたためか真剣な表情でマーコアルに目を移し、雄一は必要なものを新が持つて来てくれたためか素直に礼を言い、そんな雄一の態度に驚いたような表情をすると、

「実際、助かるんだよ。料理はムツツリーーーや須川が作ったものを試食させて貰つてかなり美味かつたんだが接客はウチの奴らに向いてるかはわからない」

「まあ……女子生徒をナンパした奴がいるって事だけでも接客をほつたらかして暴動騒ぎを起こしそうだからな」

「……その光景が目に浮かび過ぎてため息しかでねえよ」

雄一はクラスメート達の接客が不安なようで大きく肩を落とし、

「それでも、吉井と姫路がいる分、マシだろ」

「ああ。経験者がいるのはありがたい……なんだ?」

「ん? ちょっとな。坂本と和真は本質的に似てるのかな? と思つてな」

「あ? なんだよ。それ?」

雄一が真剣にクラスの喫茶店で悩んでいる姿に新は雄一を讃めるが雄一は顔をしかめる。

「まあ、気にするな。戯言だ。姫路、何かわからない事があつたら、言つてくれ。後は一人で抱えるなよ」

「は、はい」

新は雄一の様子に苦笑いを浮かべて、瑞希に声をかけると、
清水……

「ちょっと、あんた、ウチを見捨てようとしてるわね！？ 助けな
さいよ……！」

「悪いな。俺には清水を引き離す能力はない」

美春に声をかけて自分の教室に戻りつとするが自分では美春を制御
しきれないと判断したようで美波を見捨てて仮教室を出て行く。

第1-18問

「順調だな」

「そうだね……」

清涼祭を2日後に控えた中、雄一はCクラスの協力もあり、順調すぎる清涼祭の準備に苦笑いを浮かべるが明久は和真が瑞希に出したメールの事で頭が一杯なようでどこか上の空であり、

「明久、お前、話を聞いているのか？」

「う、うん。聞いてるよ」

「まったく、そんな風にしてるなら、お前が姫路に出したメールをクラスの奴らに言つて回るぞ」

「な、何を言つてるんだよ！？　そ、それになんで、雄一がそれを知つてるんだよ！？」

「雄一は明久の弱みを突くと明久は見るからに動搖を隠せておらず、

「何で？　決まってるだろ。返信したのが俺だからだ」

「へ？　……どう言つ事だ！？」

「お前のメールで姫路が浮かれて作業にならなかつたから、俺が代わりに出しといただけだ」

明久は知らされた事実に雄一につかみかかるが雄一は平然と言い放つ。

「だ、だからと言つて！？」

「その後、姫路が何も言つてこないんだ。問題ないだろ。それより、わざわざと働けよ。順調だと言つても時間がねえんだよ」

明久は知らされた事実に顔を真っ青にするが雄一は明久の手を振り払うと作業に戻れと言い、自分も作業に移るつとした時、

「……戻つたのじや」

「木下？ どうかしたの？ 演劇部の練習があるんじやなかつたの

演劇部の出し物の練習をしにいつていたはずの秀吉が肩を落として仮教室に戻り、美波は秀吉の様子に何かあつたと思ったようで声をかけると、

「演劇部の公演で使つはずだつた機材が……壊れてしまつたのじや」

「やうなの？ 修理は当口までに間に合つのよね？」

「それが、壊したのが……Fクラスなのじや。修理費が出ぬのじや。演劇部でどうにか修理費を出そつとしたのじやが、業者も直ぐに来れるかはわからぬのじや」

「それつて最悪じやない

秀吉は機材の修理が間に合つそうもないため、かなり落ち込んでい

るよつて大きく肩を落とし、機材を壊した生徒なのはFクラスの生徒3人が秀吉に頭を下げている。

「最悪なのじや」

「ひ、秀吉、落ち込まないでよ……そ、そうだ。結城君なら何とかできないかな?」この間、室外機も直してたし、一緒に先生達の仕事を手伝つてゐるけど、結城君はなんかいろいろと資格を持つていて、みたいだから、どうにかしてくれるよ」

「そ、そうです。美春ちゃんから聞いたんですけど、お店の方で店長さんが壊した電気系統も結城くんが直してると聞いてます」

秀吉の落ち込む様子に明久と瑞希は慌てて和真なら機材の修理ができるのではないかと言つたが、

「イヤなのじや……」

「ひ、秀吉?」

「ワシはあの男だけには絶対に頭を下げたくないのじや……」

秀吉は和真に対する憎しみしかなつよつて和真にだけは修理を頼みたくないと言つたが、

「で、でも、機材が直らなければせつかく練習してきたものを講演できなくなるんでしょ」

「やつだぞ。秀吉、落ち着けよ」

「あの男はワシが頼みに言つても鼻で笑うだけなのじや」

秀吉の様子に雄一ですら慌て始め、秀吉を落ち着かせようとするが秀吉はまるで子供が駄々をこねるように和真を拒絶する。

第1-19問

「つて事なんだけど、結城君、どうにかできないかな？」

「演劇部で使う機材の修理ねえ……」

明久、雄一、瑞希の3人は何とか秀吉を説得すると秀吉と和真が断つた時に攻撃をするつもりの美波を連れてこのクラスを訪ねて今の演劇部の状況を説明するが和真是眉間にしわを寄せており、

「あ、あの。結城くん、ダメでしょうか？」

「そりだな。正直、無理」

瑞希は和真の様子に遠慮がちに聞くと和真是ため息を吐きながら、難しいと首を横に振り、

「やはりそうなのじゃ。この男はいつの男なのじゃ……」

「ちょ、ちょっと待て。秀吉！？ 明久、結城、悪いな」

「う、うん。雄一、秀吉は任せゆ」

秀吉は和真の答えに和真を睨みつけるとこのクラスの教室を出て行き、雄一は慌てて秀吉の後を追いかけて行く。

「結城くん、どうしてですか？」

「瑞希、この男はいつの男なの。木下の事が気に入らないから」

て協力もしないような最低な男なのよ」

瑞希は和真が断つた事に何か理由があると思ったようで和真に聞くが、美波は和真を怒鳴りつけるが、

「黙れ。猪女。関係ない奴が入ってくるなよ。邪魔だ」

「誰が猪女よ！？」

和真は美波と話をする気はないようで美波を追い払うように手を振ると美波は和真に敵意を向けて叫び、

「み、美波も落ち着いてよ。それで、結城君、どうして、演劇部の機材は直せないの？」

「まあ、本人が頭を下げるのもあるけどな。単純に時間が足りない。何でもできると言わても困るんだよ。ただでさえ、演劇部の機材以外にもお前らF^{バカ}クラスが壊した物の修理を頼まれてるんだ。クラスの方は代表様が仕切るから、修理に時間を割いて良いとは言われたんだけど、今日と明日はバイトのシフトを入れてるし、今日と明日でできる事で重要な所から修理しないといけないだろ……ちなみにこれが修理予定のものな」

「……結城君、本当にごめん」

明久は美波を落ち着かせると和真にもう一度、無理な理由を聞き、和真はノートの見開き一杯に書かれた修理予定と重要度、機材が壊れた理由が書かれており、その理由の9割はFクラスが原因であり、明久は顔を引きつらせながら和真に頭を下げる。

「結城くん、あ、あの。これはこれで大丈夫なんですか？」

「正直、微妙。これ以上は無理、バカどもに迷惑をかけられたクラスでFクラスが関わっているのは自業自得だしな。被害者の方から修理に動くのは当然の事だろ」

瑞希は和真の状況に顔を引きつらせると流石に美波も和真の今の状況が信じられないようで顔を引きつらせており、和真はFクラスが被害者にいるものは後回しだと言い切ると席を立ち、

「今まで頑張つてきた演劇部の人達には悪いけどな。悪いな。これ以上は遊んでられないんだ」

「う、うん。時間を取らせちゃって、ごめん

和真是自分で持つてきたのか工具箱を手に取ると教室を出て行き、明久は今の和真の状況ではこれ以上の頼み事もできないため、和真の背中を見送ると、

「どうしよう。せつかく、秀吉が頑張つてきたのに、このままじゃ、でも、結城君は明らかにオーバーワークだし」

「そうですね」

明久と瑞希は和真が疲れきっているのも目に見えてわかつているようでどうしたら良いかわからないようで顔を見合せた時、

「結城はいるか？」

「西村先生、カズなら壊れた機材の修理に駆り出されてしまいますけど、

また、修理するものが増えたんですか?」

「ああ。また、ウチのクラスのバカどもが他のクラスの展示物を壊してな。それで結城なら直せないかと思つたんだが」

「西村先生、それなら、このノートに破損した状況とか書いて下さい」

西村教諭が和真にさらに仕事を持つて来ており、

「……これは本当に無理かも知れないわね」

「う、うん」

演劇部の機材修理は絶望的になつて行く。

第120問

「雄一、秀吉は？」

「ああ。正直、説得は無理だな。話を聞く気がない」

明久、瑞希、美波の3人が教室に戻ると秀吉は和真の態度に腹を立てているのが目に見えてわかり、雄一はしばらく話をしていたようだが途中で諦めるしかなくなつたようである。

「……今更だが、結城と秀吉の関係がここまでねじれるとは思つてなかつたな」

「うん。秀吉はあまり人を嫌うようなタイプじゃないしね」

雄一は普段の秀吉からは考えられない和真への対応に大きくため息を吐くと明久も同じ意見なようであるが、

「仕方ないでしょ。あの男がムカつくんだから」

「美波ちゃんも落ち着いて下下さい。それより、このままだと演劇部の公演が失敗してしまいます。せっかく、木下くんや演劇部のみなさんが頑張つて練習していたのに」

美波は秀吉と同じように和真に良い印象がないため、和真の性格が悪いのが問題だと言い、瑞希は美波に落ち着くように声をかけると秀吉を助けてあげたいようで何か力になりたいようで表情を曇らせている。

「結城の事だから秀吉の事が嫌いだからって言つても演劇部の事を考えればやつてくれなくもないだる。どう転つ理由で断つたんだ」

「うん。問題は時間だから、今の結城君の予定を見せて貰つたんだけど……」

「貴様り、じうじて、眞面目に準備をできないんだ！！ 遊ぶだけならまだしも他のクラスの展示物を壊すな！！」

「…………」

雄一は和真が断つた理由を明久に確認すると廊下からは西村教諭がFクラスの生徒達を追いかけ回している声が響いており、明久はまた和真の修理するものが増えている事に顔を引きつらせると、

「…………どうしようもねえな」

「うそ。時間が経つ度に結城君の仕事が増えてて、これ以上は手が回らなって」

雄一は西村教諭とクラスメート達の声に全てが納得できたようであり、明久は大きくため息を吐く。

「つて事は結城は時間があれば演劇部の機材を修理できるつて事か？」

「いや、修理できるかもまだ確認していないから見ないとわからないと思つけど」

「なら、一先ずは確認にして貰うか？ 後は結城の事で俺達が手伝

える事はないかだな

「雄一、それってどういふ事?」

雄一は和真に必要なのは時間だと思ったようであり、眉間にしわを寄せると明久は雄一が何を考えているかわからないようで首をかしげ、

「結城は時間がないんだろ。なら、結城が抱えている仕事で俺達が手伝える事があるなら、それをしてやれば良いわけだ」

「……ねえ。坂本、何で、あんたは結城が時間が木下を助けてくれると思うのよ? あいつはそんな奴だと思えないわよ」

美波の目には雄一が和真の味方をしようとしているように見えるているようであり、雄一に和真は時間ができても秀吉を助けてくれる事はないと言いつ切るが、

「それなら、僕、結城君の手伝いをしてくるよ。荷物を運ぶ手伝いとかなら、僕だってできるから」

「吉井くん、私も行きます」

明久と瑞希は雄一の言葉で和真の手伝いをすると決めたようで仮教室を出て行き、

「ちよっと、アキ、瑞希!？」

「島田、待て。お前はこっちの仕事だ。これ以上、人員を割けるほど余裕はないんだよ。お前はウチのクラスの実行委員だろ」

美波は2人を追いかけようとするが雄一は美波の首をつかむ。

第121問

「……しかし、お前らも物好きだよな」

「だつて、秀吉は頑張つてたし、友達ならやつぱり助けたいよ」

「はい。それに結城くんは時間がないと言つてました。結城くんだったて時間があれば協力してくれるつもりだつたはずです」

明久と瑞希は秀吉の頼みを聞いて欲しいため、和真の手伝いを始め出すと和真は2人の行動に大きく肩を落とすが明久と瑞希は真剣な表情をして和真は手伝つてくれると言い、

「あのなあ。言つておくけど、お前ら2人が協力してくれたから、修理に行けるつて問題でもないんだ」

「……うん。本当にゴメン」

和真はため息を吐くと修理依頼が書かれているノートを明久の前に出すとノートは少しの間で2冊目に突入しており、明久は和真から視線を逸らして謝ると、

「ん? 何だ。吉井と姫路も手伝いにきたのか?」

「結城くん、めどが立つたから、割ける人数、総出で手伝いにきたのですよ」

「一先ずは壊れたものとか運ぶのは人数がいる……さあ、吉井、行って來い」

「ほ、僕！？」

新、一心、棗が数名のじクラスの生徒を引きつれて和真の手伝いをしに来たと言い、一心は明久を見つけるなり、明久に指示を出す。

「一心、何を言つてるんだ」

「そうだよ。僕だけじゃ」

「とりあえず、手伝ってくれる先生を捕まえないとダメだろ」

「つて、思いつきり、召喚獣を使わせる気だね！？」

和真は明久に協力させるつもりなら教師に手伝つて貰えと言い、明久は声をあげると、

「当然だ。立つてるのは一族郎党使い回せと言つだら」

「……カズ、拡大しそすぎだから」

「結城君、文系ダメなのにどうして一族郎党とか言つ言葉は知つてるのよ」

和真は表情を変える事なく言い切り、和真の言葉に西村教諭を呼びに行つっていたようで遅れてきた友香と清美は大きくため息を吐き、

「結城、すまんな。遅れた。俺は壊れた機材の移動を行う。結城は移動できない電気関係の機材の破損状況の確認、修理を頼めるか？」

「おっけーです。後、西村先生、すいません。今日と明日、すいませんけど放課後、残れるまで良いんで時間外の許可をください」「ゆ、結城君、それって、鉄人、僕にも許可を僕も結城君の手伝いを！？」

「……西村先生と呼べ」

西村教諭は和真に指示を出すと和真は頷いた後に放課後に修理のために残る許可が欲しいと頼み、和真の言葉に明久は自分も和真の手伝いをしたいと手をあげるが明久の頭には西村教諭の拳骨が落ち、

「……今は別に拳骨を落とさなくても良かつたんじやないかな？」

「そうね」

友香と清美は明久が悶えて床をのたうちまわる姿に苦笑いを浮かべると、

「吉井は放課後になつたら、バイトに行け。今日はキッチンで臨時のバイトに入るから指示を頼む」

「結城君、臨時のバイトですか？」

「まあ、調理としては即戦力だと思つけど……問題は失血死しないかだな」

「ああ。ウチの女子スタッフの制服に直ぐに倒しそうだ」

和真は明久に手伝いは必要ないと言い、新と自分の代わりに入る人

間の事の生き死にが心配なのか顔を見合せて肩を落とす。

第122問

「あ、あの。結城くん、北条くん、臨時のバイトって土屋くんですか？」

「ああ。お前達より前にな。本人は欲しいデジカメがあるから、臨時のバイト掛け合つて欲しいと言つてたけどな……まったく、バカばっかりだ」

瑞希は和真と新の言葉に臨時のバイトが康太だと理解したようで2人に確認すると和真是康太が明久と瑞希と同じように秀吉のために動いたと思っているようでくすりと笑い、

「まあ、土屋の場合は木下の講演で着る衣装の写真が撮れなくなると売上に響くからだろうけどな」

「それもそうだな」

一心は苦笑いを浮かべて康太には康太で演劇部の公演が中止になつたら困る理由があると言い、新はその言葉に頷くと、

「まあ、そういう事だから、吉井、姫路、店の方は任せせるからな」

「うん。じゃちは任せよ」

「はい。キッチンでも頑張ります」

和真是改めて、明久と瑞希に康太の事を頼むと2人は大きく頷くが瑞希の言葉に彼女の料理の酷さを聞いた事のあるメンバーは凍りつ

や、

「……いや、姫路はフロアで頼む。姫路が近くにいたら土屋が失血死する確率が高くなるから」

「そ、そうだね。ムツツリーニが死んじゃうと結城君がいないと人手が足りなくなるし」

「姫路、慣れない人間が2人もキッチンにいるとおかしくなる可能性もあるから、姫路はフロアで」

和真、明久、新の3人は瑞希に思いどどまるように説得に入り、

「実際、姫路さんの料理つてビームまで酷いのかしら?」

「……代表、知らない方が身のためですよ。聞くとしばらぐ、姫路さんの近くで」飯を食べたくなくなるから

「わ、わかつたったわ。これ以上は詮索しないわ」

友香は3人が慌てて、瑞希を説得している姿に首を傾げると棗は瑞希の料理の事を調べ上げているのか顔を青くすると鬼気迫る表情で首をを横に振り、友香は棗の様子に身の危険を感じたようで大きく頷く。

「……残念です」

「で、でも、結城君、いつの間にムツツリーニと仲良くなつたの?
前までは嫌つてただろ?」

瑞希は3人の説得に納得できてはいないようだが頷くと明久は瑞希が話を蒸し返そうとする前に和真に康太との事を聞くと、

「ん？まあ、打ち合わせをする間にな……」

「カズは基本的に洋子先生がからまないと普通だからね。相手が話をする態度でくるなら大丈夫でしょ」

「素足とストッキングの話で5時間ほど盛り上がりとな」

清美は今回は康太が協力の意思を見せている事もあると言つが和真と康太が仲良くなつた理由はおかしく、

「あの討論は熱かつたな。特に終了間際のストッキングの色について語っている時は」

「……結城くん、野口くん、あなた達は準備期間中に何をしているのかしら？」

一心と数名の男子生徒達はその場にいたようで大きく頷くとあまりのばかげた話に友香は眉間にしわを寄せるが、

「代表様、勘違いをしないでくれ。俺は素足派だ」

「そんな事を言つてるんじゃないわよー！」

「そうだよ。結城君ーー。どうして、そんな重要な時に僕を呼んでくれないんだよー！ムツツリーーも結城君も見損なつたよー！」

和真は笑顔で言い切ると友香は和真を怒鳴りつけ、明久は自分がそ

の場にいなかつた事に和真を非難するように叫ぶ。

第1-2-3問

「結城くん、どうですか？ 修理できたりですか？」

「……できなくもないが、どうやつたら、こんな風に壊せるんだ？ 中の配線がズタズタって故意じゃないと普通はできないぞ」

和真は演劇部の機材の状況を確認していると一緒に来ていた瑞希は心配そうにのぞき込み、和真は破損状況に大きくため息を吐き、

「まあ、こには後回しだな」

「ど、どうしてですか！？」

「時間がかかるから、演劇部はこの機材がなくとも練習はできるだろ。物を修理しないと清涼祭に間に合わないとこもあるんだ」

和真は演劇部の機材を後回しにすると立ち上がり瑞希は直ぐに和真が修理をしてくれると思っていたようで驚きの声をあげるが和真是演劇部の機材は優先度が低いと言い、「で、でも」

「お前らが、あの猿を心配するのもわかるけどな。俺にとつてはあいつの事は優先事項じゃない。時間が限られてるならなおさらだ。だいたい、バカどもの行動を理解して最初から練習をシャットアウトすれば良いんだよ。どうせ、邪魔しかしないんだからな。準備の段階で関わらせるな。ある程度、清涼祭で部活で出し物をする部活は理解してるぞ。ブラバンや軽音はFクラスを完全シャットアウトしてるしな。演劇部がうかつだったんだ。自己防衛もできなかつた

奴らは後回し

瑞希は納得がいかないようであり、和真の腕を掴むが和真は和真の考えがあるため、バツサリと演劇部を斬り捨てて次の修理箇所に向かい歩き出す。

「それでも」

「姫路、何度も言わせるな。俺はFクラスを基本的に信用していい。だいたい、演劇部の機材を壊した奴らは猿に謝つただろうが、形だけだろ」

「そ、そんな事は

「なら、どうして、同じ奴の名前がこんなに並ぶんだ?」

「……」

瑞希は演劇部の機材を優先して欲しいため、慌てて和真の後を追いかけるが和真是Fクラスは何も反省などしていないと言うと修理依頼が来ているノートを瑞希に見せ、そこには演劇部の機材を破壊したメンバーの名前が他の機材も壊している事が一目でわかり、瑞希が悲しそうな顔をした瞬間、

『あの男は我らのオアシス。姫路瑞希を泣かせたぞ』

『許さん』

おかしな覆面をかぶったFクラス生徒2名が和真が瑞希を泣かせたと難癖を付けて襲いかかってくるが、

「いひるさい」

『「じふつーー?』

和真は持っていた工具箱で襲いかかってきた1人を殴打し、和真の反撃を喰らったFクラスの生徒は吹き飛び、

「次はお前だな」

『ま、待て。武器は卑怯だ』

「カッターを手にしてる奴に言われたくないな」

残った1人は和真に向かつて話し合いを要求するが和真は当然、却下をして彼の頭の上に工具箱を振り下ろし、もう1人を沈めると、

「姫路の件があるから、当日、人手が足りなくなるから、今日は許してやる」

「あ、あの。結城くん、それは許してる行動じゃないんじゃないでしょうか?」

和真は2人の覆面をばぎ取ると2人の額に油性マジックでいろいろと書き込み、その情けない姿をデジカメで写すと瑞希は和真の行動に苦笑いを浮かべ、

「まあ、気にするな。それより時間がないから行くぞ。遊んでもと演劇部の機材を直す時間がなくなるからな。別に猿の事は別にして頑張ってる演劇部の先輩達の事は考えないといけないだろ」

「は、はい」

和真は秀吉が嫌いだからと手を抜く気はないと呂づと瑞希は少し安心したのか和真の後を追いかけて行く。

第124問

「結城くん、新作メニュー、奢つて……あれ？ 今日つて、結城くん、いないの？」

「……愛子、それは図々しいわよ」

放課後になり、『ラ・ペティス』で新と瑞希がフロアに出ていると愛子がまた和真にたかりにきたようで勢いよくドアを開けるが和真是文月学園に残つて修理作業を行つており、和真からの返事はなく愛子が首を傾げた時、彼女の後ろから優子のため息を聞こえる。

「いらっしゃい。土藤、木下」

「北条くん、姫路さん、結城くんは今日はキッチン？」

新は入口で話し込むわけにもいかないため、2人を席に案内すると愛子は新作メニューを眺めながら和真の居場所を聞くが、

「結城くんはまだ学園にいます」

「そうなの？」

「ああ。Fクラスが壊した設備の修理に駆り出されてる」
バカ

愛子の疑問に新と瑞希は苦笑いを浮かべながら和真がまだ学園にいる事を話す。

「修理に駆り出されてるって、Fクラスはまた何かをしたの？」

「またと言つてか通常運転っぽくて何も言えないな」

「そ、そうですね」

優子は眉間にしわを寄せるが新はどこかに諦めが入っているようだため息を吐くと瑞希は申し訳なさそうに目を伏せており、

「姫路さんも苦労するわね。正直、姫路さんには悪いけど、あたしとしてはFクラスにいるよりは転校を進めたいわよ。ねえ、考え方ではないの？」

「転校はしたくないです。吉井くんや結城くん、みんなが私のわがままのために協力してくれますし……」

「恋する女の子は頑張つてるから、結城くんや北条くんが巻き込まれてるんだね」

優子はFクラスに良い印象がないためか瑞希に考え方すよつて言つたが瑞希は優子の言葉に小さく肩を落とすがはつきりと転校したくないと言い、愛子は瑞希をからかうように笑うと、

「ああ。まつたく、俺に意味も何もないのにな」

「意味があるのは吉井くんだけと、北条くんや他のFクラスの男の子達は姫路さんに良いところ見せてもフラグは立たないしね」

「ああ。そこはほら、主人公特性があるかどうかだから」

新と愛子はキッチンで働いている明久と瑞希の顔を交互に見てニヤニヤ

「やと笑う。

「な、何を言つてゐんですか！？ 北条くんも工藤さんも」

「まあ。話を聞く限り、吉井くんはおかしなところでフワグを乱発してゐみたいよね……最近じや、坂本くんや秀吉だけじゃなく、結城くんや土屋くんとも噂されてるしでも、あたし的には結城くんは北条くんなのよね」

「……木下、悪い。おかしな想像は止めてくれ。なぜか悪寒しかしないから」

瑞希は新と愛子の言葉に顔を真っ赤にするがその横で優子はおかしな妄想に取りつかれており、新は身の危険を感じたのか優子に声をかけ、

「な、何もあたしはおかしな事は考えてないわよ！？」

「……なら、良いんだけど」

優子は慌てて何もないと答え、新はそんな優子の様子をジト目で見ると、

「だけどさ。結城くんはこんな放課後まで学園の機材の修理に駆り出されるるんだよね。やっぱり、無駄にマルチな才能を持つてるよね。今日は何を修理してるの？……北条くん、結城くんのツケでこれとこれ

「いや、いない人間にツケるなよ。今日は演劇部の機材を修理したから帰るつて言ってたけど、日が変わらなければ良いなとため息を吐

いてたぞ。後、社員割引の値段にしどから普通に頼んでくれ

「まあ、流石にここまで常識外れの事はしないよ」

愛子は和真のツケで済ませようとしていたようだが流石に新は許す
わけもなく、愛子も「冗談だと笑う。

「ん？ 秀吉、何をしてるんだ？」

「雄一、お主じや、こんなところで何をしておるのじや？」

秀吉は演劇部の機材が壊れた事で演劇部の公演ができるかわからなくなってしまった事もあるのか演劇部員は練習する氣にもならなかつたようで本日は早々に部活を切り上げたため、一度、家に帰つたのだが何かをする氣にもならなかつたようで文用学園に戻つてきてしまつた時、手に風呂敷を持った雄一と出くわす。

「俺はちよつと届け物があつてな。秀吉はびつしたんだ？」

「……家に帰つても何もする氣にはならなかつたのじや。それに家にいたら、姉上に追い出されたのじや、何もしていない奴が全てをやつた氣になるなどかわけのわからぬ事を言われたのじや」

雄一は風呂敷を秀吉に見せると秀吉は家でウジウジとしていたのを優子に鬱陶しいと追い出されたようであり大きく肩を落とし、

「あれだよな。家だと男前の姉貴だよな」

「……言わんと欲しこのじや。知れわたるとワシが姉上に殺されてしまつのじや」

雄一は秀吉の様子に苦笑いを浮かべると秀吉は優子の怒りの表情を思い浮かべたよつて顔面蒼白になつており、

「まあ、やうならなこよつて元氣をつまうよ。されじやあ、俺は行くぞ」

「雄一、お主は届け物と言つておつたが、何を届けに来たのじゃ？」

「ん？ 付いてくるか？」

雄一は秀吉が優子に殺されないようになると言つた後、文田学園に入つて行こうとする秀吉は雄一の風呂敷の中身を聞くと雄一は秀吉の顔を見て一緒に来るかと聞く。

「一緒に行くと言つてもどこに行くのじゃ？ だいたい、既に生徒は帰つてある時間なのじゃ」

「まあ、気にするな」

「ま、待つのじゃ。雄一」

秀吉は雄一の質問の意味がわからないようで首を傾げると雄一は苦笑いを浮かべると歩き始め、秀吉は慌てて雄一の後を追いかけて行き、

「鉄人、」苦労だな

「……坂本、木下、いったい、何しにきたんだ？」

「あ？ 俺もクラスの代表として、今回は流石に悪いと思ったから、差し入れで夕飯を持ってきてやつたんだよ」

雄一は壊れた機材を運んでいる西村教諭を見つけると西村教諭は雄

「がおかしな事をしに来たと思つたようで雄一に鋭い視線を向ける
が雄一は苦笑いを浮かべると手に持つた風呂敷を西村教諭に見せて
差し入れだと呟つと、

「……何を企んでいる?」

「あのなあ。少しばかじりよ。今回は結城にかなり迷惑をかけてる
つて事もわかつてゐるしな。それに姫路やムツツリー二、明久のバカ
まで何かしてゐるのに俺だけ何もしなかつたら、明久^{バカ}にバカにされる
だろ。それは俺のプライドが許さねえんだよ」

「……」

西村教諭は何か雄一を疑いの視線を向けて聞き返すと雄一は彼の特
性なのか明久をバカにするように笑うなか、秀吉は雄一が和真に差
し入れを持ってきたと言つ事に不機嫌そうな表情に変わつて行き、

「そうか。それなら、お茶は出すから結城を呼んできてくれるか?」

「ああ。まだ、あそここいつるのか?」

「わかつた。秀吉も行くぞ」

「いやなのじゅー! なぜ、ワシが、ワシは帰るのじゅ

「良いから行くぞ」

西村教諭は秀吉の変化に気づく事なく、和真を呼んでくるよつて言

うと雄一は和真の名前が出た事で不機嫌そうな表情をしている秀吉に声をかけると秀吉は和真に会つ気はないため帰ろうとするが雄一は秀吉を引っ張つて歩き出す。

「……つたぐ、何で、配線も同色のリード線を使つてるんだよ。面倒だな。これがアースだろ。なら、こっちが長さが明らかに足りないところもあるつて事は……ひょっとして、リード線が必要で盗んで行つたのか？ この電線は22番線だる。こっちは26番か……面倒だな。全部、リード線、変更しとくか？ いや、それなら、複合ケーブルを使つて」

「……結城、お前、ずいぶんとマニアックだな

和真はズタズタに切り裂かれた機材の中の配線をつなげながら、既に面倒になつてきたようではぶつぶつと言いながら乱暴に頭をかくと雄二は和真の背後から眉間にしわを寄せて和真に声をかける。

「あ？ ……坂本、何しにきたんだ？」

「……一応は聞いておくけど、秀吉は無視なんだな？」

「言葉も通じない猿に話す事なんてないね」

和真は雄二の言葉に振り返るが秀吉には声をかけるつもりもないようで直ぐに機材の修理に戻るうと視線を機材に戻すと秀吉の顔はさらに険しくなつて行き、

「それで、何の用だ？ 僕はこれ以外にもお前らFクラスバカが壊した物を修理しないといけないんだ……悪い」

和真は本当に忙しそうで雄二の相手をしてこらへんヒマなどないと彼

を追い払つよつに手を振るがその時、盛大に彼の腹の虫が悲鳴を上げ、和真は小さな声で雄二に謝ると、

「なかなか、良い音がしたじえねえか」

「……言ひな。何時に帰れるかもわからんないんだ。考えると余計に腹が減る」

雄二は和真の腹の虫に楽しそうに笑い、和真は少し恥ずかしそうにしながらも本当に忙しいようである。

「そんなお前に朗報だ。俺がお前と鉄人に夕飯を作つてきてやつたんだ。ありがたく思え」

「そうか。寝言は寝て言え。見ての通り、お前と遊んでいるヒマはないんだ」

「……おい。このノート・3つてなんだ」

「見てわかるだろ。修理依頼がノート3冊目になるほど、きてんだよ。少しにどうにかしろよ。お前、代表だろ」

雄二は夕飯を差し入れにきた事で和真より、優位に立つたと言いたげだが和真は雄二が料理をできるとは微塵も思つていないので彼の言葉を鼻で笑うと近くの机にある修理依頼の書いてあるノートを指差すとすでにノートは3冊目に入っているため、雄二は顔を引きつらせ、和真は雄二にFクラスの行動を制限するよつて言つが、

「……無理だな」

「だろうな。未だに物を壊した奴らは『自分は悪くないってお互いに罪をなすりつけあつてるんだ』。他人の迷惑を考えないバカも、事実を事実と認めずに頭も下げる事もできないバカに何を言つても無駄だろ。正直、刑事案件を起こす前に退学になつて貰いたいな。どうせ、数名を除いて社会不適合の人間の集まりなんだ。せめて、他人の邪魔しないくらいにならないもんか」

「何が社会不適合者の集まりじゃ、お主のような性悪に言われる事ではないのじゃ！－ お主はFクラスの事など何も知らぬであろう。それなのにFクラスをバカに！？」

「……キーキー、うるせえんだよ。サル。俺がお前ら家畜以下に文句を言われる筋合いがどこにある？ 僕は1学生であつて、こんなものをこんな時間まで残つて修理をする理由だつて本来ないんだよ。自分が誤つて壊したものなら、まだしも、壊した奴らは放課後になつたら、自分の責任じやないつて逃げかえつてるんだぞ。俺がこれを修理する理由がどこにある？ 答えろ」

雄一は眉間にしわを寄せて一言だけ発すると和真はFクラスの生徒に迷惑をかけられるのが心底、イヤなようで吐き捨てるよう言うと秀吉はFクラスをバカにするなど叫ぶがその一言は当然、和真の怒りを買うつ一言であり、和真は秀吉の胸倉をつかみ、鋭い視線で秀吉を睨みつける。

「そ、それは」

「サルに好かれる気もないし、好きになる気もないけどな。俺が性悪だって言う前にお前ら家畜以下がどれだけの人間なんだよ。勉強もしないでFクラスになつて、自分達は反省せずに文句だけ言って試召戦争。努力や成績が人間の価値を決めるとは思つてないけどな。何もやってない奴に文句を言われる事は俺はやってないぞ。お前だつて同じだ。サル。お前は演劇が好きだから大切だから、それだけやつてれば良い気になつてるんだる。演劇部には部活も勉強も両立している先輩方もいるのにお前は『演劇だけ』やつて良い気になつてるんだ。それもその演劇をおかしなものに使つて、関係ない人間にケンカを売つてな。それなのにケンカを卖つた相手が悪い？ ふざけてるのか？ お前に演劇を教えてくれてる先輩やその道で生きてる本物の人達に顔見せできるのかよ。偉そうに言うわりにはお前が演劇をバカにしてんだよ」

秀吉は和真の様子に重圧を受けたようで言葉に詰まると和真は秀吉に追い打ちをかけ、和真の言葉に秀吉の顔は血の気が引いて行き、

「ま、待て。結城、その件に関しては俺が立案したんだ。悪いのは

「坂本、お前も吉井や姫路、土屋もそつだけど、なんで、このサルに甘いんだ？」

雄一は秀吉の根元にあるものを何の迷いもなく斬り捨てるに雄一はすでに一方的になつてゐる2人の様子に割つて入るが和真は気にすることなく、自分が知つてゐるFクラスのメンバーが秀吉に甘い事

に首を傾げ、

「『男だ。男だ』と言うわりには男らしく自分の非を認める事もない。その上、他人に罪をなすりつける。これだけ見ても明らかに女々しいだろ。それで自分は男だ。笑い話にもならないな」

「……お前、本当にきついな」

「甘い事だけ言うから、バカがつけ上がるんだろ。それに敵意に敵意で返して何が悪い」

和真の追い打ちは止まる事もなく、雄一は顔を引きつらせるが和真是秀吉やFクラスから向けられる敵意を返しただけと言い切る。

「サル、お前はあれを作戦だつたつて言うんだろ。試召戦争だから、相手をバカにしてもケンカを売つても作戦だからってな。だけど、受ける人間は違うんだよ。他人を理解しない人間がうわべだけの役を演じたつて、何も心には響かないな。演劇部期待のサルがその程度なんだ。つたく、眞面目に練習している先輩方に悪いと思つたから、こんな手間のかかる修理をしてるのに、安っぽいものを見せられるんなら、これは別に修理もしなくて良いな」

「……安っぽくなどないのじゃ」

「あ？ 何か言つたか？」

和真是秀吉を演劇部の代表格のように言つと演劇部の機材を修理する価値はないと吐き捨てるがその言葉に秀吉は大切にしていたものをバカにされたためか、怒氣を込めた声でつぶやき、和真是秀吉の言葉が聞き取れなかつたようで聞き返すと、

「安っぽくなどないのじゃ！！ ワシがバカにされるのは納得が言つたのじゃ！！ ジャガ、先輩達をバカにするのは許せんのじゃ！！」

「ひ、秀吉、落ち着け」

「なら、どうするんだ？」

「清涼祭でワシが先輩達がどれだけ真剣にやつてているのかを見せてやるのじゃー！ 何も知らぬお主に本物の演技を見せてやるのじゃー！」

秀吉は清涼祭で和真の考え方を改めさせると叫ぶと時間が惜しいのか和真の返事を聞く事なく出て行つてしまい、

「……お前、他人にケンカを売る才能があるんじゃないのか？」

「知るかよ。正論を言われて激昂する奴らに文句を言われる筋合いはないだけだ。まあ、観に行く時間もあるかはまったくわからんしこ本物を観客に見せるつて吠えてるんだから、舞台くらいは整えるか」

「いや、秀吉があそこまで行つたんだから見に行けよ」

秀吉の様子に置いて行かれた和真と雄一は苦笑いを浮かべる。

第128問

「カズ、生きてる?」

「……山下さん、箸で突くの止めない?」

清涼祭1日目の朝、和真は机に突つ伏してぴくりとも動く事はなく清美は何を思ったのか箸で和真を突き始めるとその様子に友香は大きく肩を落とす。

「結局、昨日は何時まで働いてたんだ?」

「……北条くん、それを聞くのは酷ですよ」

「……尼崎、それは泊まりって事か?」

新は和真が動かない様子に苦笑いを浮かべると棗はそれ以上は聞いてはいけないと新の肩に手を置いて首を振り、Cクラスの教室は微妙な空気が漂うなか、

「おはよっ。結城くん、無事?」

「おはようござります」

遠慮がちに明久と瑞希が教室のドアを開ける。

「2人とも仲良く登場かよ。ラブイベントなら、他でやれよ

「そうよ。」の教室でのラブイベント枠は代表とカズが使うって決

まってるんだから

一心は2人を追い払うように手を振ると清美は友香をからかうように悪のりを始め出し、

「な、何を言つてるのよー?」

「そうだぞ。そつちは清涼祭のデートを取りつけてるのにこつちはそれも終わつてないんだ。スタート地点が違つんだ。ラブイベント枠はここに置いておけ」

友香は和真が目を覚まさないか心配なのか慌てるがすでにクラス内では友香の気持はバレバレなようで誰も何を言う事はなく、

「……クラス全員が気づいてるのにどうして当の本人は気付かないんだろうね」

「まあ、和の場合はあまり興味無さそうだからな。それで、吉井に姫路は何のようだ?」

清美は眉間にしわを寄せるとトオルは苦笑いを浮かべて明久と瑞希が教室を訪れた理由を聞くが、

「……なんかイラつとするな」

「そうですね」

明久と瑞希は改めて今日のデートの事を考えたようで顔を真っ赤にしており、平太と棗はため息を吐く。

「そ、それより、結城君は大丈夫なの？ 結局、朝まで修理をしてたつて鉄人から聞いて」

「そ、それで心配になつて様子を見にきたんですけど……」

「見ての通り、現在は休養中だ。本日中に復活するかはわからない」

明久と瑞希は西村教諭から和真の状態を聞いたようで心配そうに机に突つ伏している和真に視線を向けると一心は和真が復活するかはわからないと首を振り、

「そうなの。そ、そうだ。僕、ムツツリーニから、結城君の状況を見て渡して欲しいって言つてたものがあつたんだ」

「……吉井くん、それは何なの？」

「僕も詳しくは聞いていないんだけど、この間の議事録つて」

明久は康太から預かつたものがあると言い、封筒を取り出すと友香は和真と康太だとあまり良い事ではなさそうな気がしたようで眉間にしわを寄せるが明久の口から出た言葉に和真の身体がびくりと動く。

「反応したけど、中身は何なのかな？」

「この間の議事録つて……あれか？」

「あれだろうな」

和真の身体が反応を示した事に清美は首を傾げるが一心は封筒の中

身に予想が付いたようであり、新は苦笑いを浮かべると、

「黒崎くん、あの封筒の中身ってなんなの？」

「……代表には関係ない事だ」

友香はにっこりと笑いながら一心に封筒の中身の事を聞くがその日は笑つておらず、一心は友香に威圧されたのか少しづつ後ろに下がり始めるなか和真は机から起き上がる事なく明久の持っている封筒に手を伸ばす。

第1-29問

「吉井くん、それ、貸して」

「え？ でも」

和真の手が封筒に伸びてきた様子に清美は明久から封筒を取り上げると和真の手がギリギリ届かないところに封筒を置き、

「どうやら、身体がここの封筒に反応しているだけで起きてはなさそうだな」

「……カズもどこかで人間離れしてるのでよね」

和真の動作が意識がない状態で動いている事にトオルと清美はため息を吐くと、

「あ、あの。無意識な結城くんを何が動かしているんでしょうか？」

「姫路さん、あまり私達が見ない方が良いようなものの気がするのですよ」

瑞希は苦笑いを浮かべながら封筒の中身について聞き、棗は何となく中身に予想が点いているよう瑞希を止めるが、

「こ、これは！？」

「やつぱつ、ここの間のだな」

新と明久は封筒の中身を確認する。その中には先日の和真と康太を中心とした素足とストッキングの討論の内容をまとめたものであり、明久は自分の知らない時に起きた熱い討論の光景を浮かべて涙し、新は苦笑いを浮かべる。

「吉井くん、その封筒を貸してくれる？」

「え？ これは結城君のだし、それに僕もこれはしつかりと読み…ひ、姫路さん、どうして、僕の肩をつかむの！？」

友香は笑顔で明久に封筒を渡すように手を伸ばすがその目は笑つておらず、明久は後ろに下がるうとするが明久の後ろには友香と同じように笑顔だが目が笑っていない瑞希が明久の肩をがつちりとつかみ、明久は逃げ場がない事を感じながらもビコカで封筒の中身を死守しようとしており、

「……代表、姫路、封筒の中身の内容は置いておいて、和真の物を勝手処分したらダメだろ」

「大丈夫よ。結城君にはばれないようにするわ」

「そうです。吉井くんも見る必要はありません」

新は3人の様子に大きくため息を吐くが友香はすでに封筒の中身を処分する事を決め、瑞希も友香の言葉に大きく頷き、

「さあ、吉井くん、それをこっちに渡してくれませんか？」

「ひ、姫路さんも小山さんも落ち着くんだ。これはこの世から消して良いものではないんだよ！！」

「……吠える事でもないだろ。明らかにプリントアウトだし。原本は土屋が持ってるだろ」

瑞希は明久に詰め寄り、明久は絶対に死守すると叫ぶが新は明久が命を賭けるまでのものではないと少し呆れたように言つと、

「北条君、君は何もわかつていない！！ この中にはムツツリー＝や結城君、この討論に参加した男達の情熱がつまっているんだ。口ピードラウとそれを処分して良いわけがない！－！」

「吉井、よく言つた！！ それを持って逃げるんだ！！ ここは俺達が死守する！－！」

明久は再度、吠え、明久の魂の叫び討論に参加した一心を中心にして男子生徒が同調を見せ、

「黒崎君、みんな？ ごめん。ここは任せるよ！－！」

「行け。吉井！－！」

明久は封筒の中身を抱えて駆け出して行き、男子生徒達は明久を守るように友香と瑞希の間に割つて入る。

「……なんだ？ この茶番？」

「わかんないね」

その様子にトオルと清美は大きく肩を落とした時、

「カズくん、いますか？ みなさん、何があつたんですか？」

「洋子先生、おはよひじやります。カズなら、現在、休憩中ですよ」
手に小包を持った洋子が教室をのぞき込み、教室内の騒ぎに首を傾げながらも和真を呼び、清美は机に突っ伏していた和真を指差そうとするが、

「おはよひじやります。高橋先生、どうかしましたか？」

「これ、朝食です。朝、学園に来たら直ぐに渡そうと思つていたんですが、忙しくて今になつてしましました。申し訳ありません」

和真は洋子の声に反応したようで直ぐに洋子の前に移動しており、和真のシスコンぶりに教室は微妙な空気になり、追いかけっこも止まってしまいます。

第130問

「で、結城君は回復したわけ？」

「みたいだな」

「システムに極まりつてヤツね」

和真が洋子から受け取った朝食を食べている姿に友香は眉間にしわを寄せるとトオルと清美は苦笑いを浮かべ、

「結城君、身体は大丈夫なの？」

「ん？ ああ、8時か？ 2時間も寝たし大丈夫だろ」

「去年は30分、寝れたかどうかだしな」

明久は和真に体調の事を確認し、和真是時間を見て苦笑いを浮かべる姿に去年も清涼祭の朝を思い出したのか平太がため息を吐くと去年も和真と同じクラスだったメンバーはため息を吐き、

「……結城君、よく生きてるわね」

「今年はみんなが協力してくれたしな。正直、助かったよ」

「……それでも2時間しか睡眠時間が取れないのね」

和真是苦笑いを浮かべながら協力してくれたクラスメートと明久と瑞希に頭を下げるが友香は和真が抱えた仕事量に大きく肩を落とし、

「そりだな。それなりに技術^{スキル}もあがつてゐるはずなんだけどな」

「一まとめにされたる分、破壊力が上がつてゐるんですよ」

「迷惑な話だね」

和真は1年間で修理技術は向上しているはずなんだと首を傾げるが和真が成長している以上にFクラスの間違つた行動力の方が上昇していたようである。

「……本当に」めん。結城君」

「はい。申し訳ありません」

「吉井、姫路、お前らが頭を下げるな。今回はお前らは何も壊しないし、修理も手伝ってくれたんだからな。むしろ、あのバカどもにお前らが謝らせり」

明久と瑞希はFクラスの行動に責任を感じていつで小さくなりながら和真に謝るが和真は2人を責める事はない、

「それに吉井にはこれを持ち運んで貰つたと言ひ恩もあるしな」

「結城君、その件なんだけど読み終わつてからで良いから僕にも貸して欲しいんだ」

「ん? 土屋に言えればくれるんじゃないかな?」

「……多分、ムツツリ商会の商品になるから無理だと想つ」

「了解」

和真是康太からの封筒の中身を確認すると明久は和真の近くに寄ると女性陣に聞こえないように注意しながら交渉を始め出すが、

「……吉井くん、結城くん、何をしているんですか？」

「ひ、姫路さん？」

「……今の状況でばれないわけがないだろ」

当然、周りには明久が何をしているかばれており、背後に真っ黒な氣配をまとった瑞希に肩をつかまれ、2人の姿に新はため息を吐く。

「まあ、姫路も落ち着け。だいたい……吉井の情報を手に入れるチャンスだぞ」

「そ、それは！？」

「……姫路さんがまたカズに騙されてる気がする」

「……討論内容だとあまり関係ないだろ」

和真是瑞希の耳元で明久の情報を手に入れるチャンスだと吹き込むと瑞希は動きを止めるがその姿は和真が純粋な瑞希を騙しているようにしか見えず、

「それより、吉井、姫路、そろそろH.Rの時間だけど戻らなくて良いのか？」

「え?
もうそんな時間?」

「ほ、本当です。吉井くん、戻りましょ。坂本くんにも早めに帰つて来るよ」と言わられてましたし」

新は苦笑いを浮かべながら時計を指差すと明久と瑞希が慌てて教室を出て行こうとするが、

「そ、そうだ。結城君、演劇部の機材の修理、間に合わせてくれて
ありがとう」「ううん、何うかね？」

「木下くん、凄くやる気になつていきました。後でみんなで見に行きかせんか?」

「ああ……」これ以上、修理がなければ考えておく

振り返ると2人は和真に演劇部の機材の修理のお礼を言ってから教室を出て行く。

第131問

「……どう言う事だ？　1時間経つても何も問題が起きないなんてありえないだろ」

「平和だから良いんじゃないかな？　和は心配し過ぎなんじゃないのか？」

清涼祭開始の時間から小一時間ほど経つが大方の予想に反して騒ぎや設備破壊はなく、和真は信じられないようで眉間にしわを寄せる姿にトオルは苦笑いを浮かべるが、

「いや、絶対にあり得ない。どこかで見落としている何かがあるはずだ」

「……お前は名探偵か何かか」

「考へても見る。あのバカどもだぞ。絶対に何か企んでるに違いない。どうするんだ。よそ様の娘さんを傷物にでもしたら、ウチで責任を取れって言うのか？」

「……どちらかと言えばオカンだな」

和真は真剣な表情でFクラスが企んでいる事を探し当てるかと睨んでおり、平太が呆れたようにため息を吐く。

「代表、今がチャンスよ。『Fクラスがおかしな事をしてないかと見回りに行かない？』って言ってカズをデートに誘うんだよ」

「や、山下さん、な、何を言つてゐるのよ。だいたい、代表である私がここを開けるわけにはいかないでしょ。ただでさえ、召喚大会があつていない時間だつてあるのに」

「そんな事を言つてゐる場合ぢやないですよ。ここ最近の修理の件でどうやら結城君と吉井君は頼りになる先輩と言つ事で一年生からの人気が急上昇中ですよ。持ち前の鈍さで一年生からのアタックを交わしているのが見えないのですか?」

「そ、それは見えてるけど」

清美と棗は友香を煽りに入つてゐるが友香は勇氣が出ないようであり、視線を和真に移すが行動に出る事はできず、

「……決めた。様子を見に行く。あのバカどもが何もしないわけがない」

「待て!? それは危険だ。お前を見たら絶対にFクラスのバカ達は殺氣立つぞ」

和真は何を考えたのかFクラスに顔を出してくると言い始め、トオルは慌てて和真を止めようとすると和真は教室を出て行つてしまい、「……おい。北条、どうするんだよ。何か呼び戻す方法はないか?」「そのうち、帰つてくるだろ。和真は自分でおかしな事をするほどバカじゃないしな」

一心はため息を吐いて新に和真を呼び戻す方法を聞くが新は気にする様子もなく、

「代表、カズを連れ戻してきて、いつまでもうちにかくるからね」

「そうです。行つてくれるのです」

「ちよ、ちよっと、山下さん、尼崎さん！？ もう……」

それに対し清美と梨は友香の背中を押して彼女を教室から追い出し、友香は驚きの声をあげるが教室のドアは閉められ、友香は大きく肩を落とした後、和真が向かつたであろうFクラスの中華喫茶に向かつて歩き出す。

「……行つたね」

「行つたです……さてと、後をつけますか？」

「当然」

清美と梨は和真と友香のラブイベントを期待しているようでカメラを持つて2人の後を追いかけようとするが、

「遊んでないで働け。和と代表様が抜けたんだ。山下、補佐役のお金が遊んで良いわけがないだろ」

トオルに首をつかまれ、追いかける事はできず、

「……ちつ、こうなつたら、姫路さんが吉井くんに連絡して尾行をして貰うしか」

「……止める。あの2人にそんな事ができるわけもないしな」

「そうだね」

清美は明久と瑞希に2人の尾行を任せようとするがトオルは眉間にしわを寄せる。

第132問

「おいおい。どうして、Fクラスみたいなバカが、こんな設備で喫茶店ができるんだよ」

「どんなきたねえ手を使つたんだよ」

(何の騒ぎだ?)

和真がFクラスが中華喫茶している仮教室の近くまで移動すると廊下にはFクラスの恵まれた状況に声を上げている生徒の声が響いており、和真は首を傾げると、

「結城君、待つて。一人で行かないでよ」

「代表様? どうかしたのか?」

「結城君が一人でFクラスに行くとケンカにしかならないでしょ。だから、お目付け役よ。私も一緒に行くわ」

「代表様が? 何を言つてるんだよ」

友香が追いつき、和真の隣に並ぶが和真は友香が一緒に来る理由がわからないと言いたげであり、

「何? 私だと結城君を止めるのに役不足だつて言つの?」

「違う。俺と代表様じゃ、被害が拡大するだけだろ」

「……それがわかつてゐなら、一人でFクラスに向かつて駆け出さないでくれる」

和真は苦笑いを浮かべて自分と友香では騒ぎになるだけだと言い切り、友香はそれを理解していながらもFクラスに向かう和真の事が理解できないようで眉間にしわを寄せると、

「まあ、気にするな。それより、少し急いで。なんか騒ぎ声が聞こえる」

「そうね。でも……なんか、いつもと違つ騒ぎ方よね?」

「そうだな。設備もえたから食中毒問題や衛生上の問題じやないとは思つけどな」

和真はFクラスの様子が気になるようであり、廊下から聞こえる声に少し早足でFクラスの中華喫茶に向かつ。

「なあ。どんなきたねえマネをしたんだよ?」

「バカなFクラスがどんな汚い手を使つたんだ?」

和真と友香がFクラスの中華喫茶のドアを開けると2人組が騒いでおり、その行動にお客達は関わり合いたくないのか足早に中華喫茶を後にしており、

「ゆ、結城君?」

「代表様、俺はあの2人組をぶち殺しても良いよな? こんな騒ぎは姉さんに迷惑がかかるだろうから」

「ちょ、ちょっと押されて、問題を起こしてるのはFクラスじゃな
あやうだし」

「代表様、知ってるか？この学園で騒ぎを起こすバカはFクラス
だろうが、どこのクラスだろうが、俺がぶち殺す」

「ちょ、ちょっと、結城君、ストップ！？」

和真是目の前の騒ぎに怒り心頭のようであり、彼の身体は小刻みに震えて始め、友香は和真の様子に顔を引きつらせて和真に落ち着くよりに言つが和真是勢いよく騒ぎの中心の2人組に駆け出して行き、

「……やつぱり、私じゃ、止められないじゃない」

友香は一直線に騒ぎの中心の2人組に近づくと2人組の頭を両手でつかみ締め上げ始める和真の様子にため息を吐く。

「て、てめえ、何しやがるんだ！？」

「は、放しやがれ！？ て、てめえもFクラスのバカかよ。放せて言つてるのが聞こえないのかよ！？」

「……この学園で騒ぎを起こす奴はFだろうと誰だろうと潰す。バカ姉さんに迷惑がかかるような真似をするバカは誰だろうが潰す」

2人組は突如として現れた和真に声をあげるが和真の背後には真っ黒な殺意が溢れており、

『ゆ、結城和真！？』

『ど、どうして、あの男が！？』

和真の登場にFクラスは殺氣立ち始めるがそれ以上に和真に頭を締め上げられている2人組の悲鳴が中華喫茶には響き渡る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3785s/>

バカとテストと勤労少年

2012年1月5日23時49分発行